椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

—7—

下　巻

山崎遺跡（II）

尾久保屋敷遺跡

日奈古・寺尾遺跡

福岡県築上郡椎田町所在遺跡群の調査

1992

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

—7—

下　巻

山崎遺跡（II）

尾久保屋敷遺跡

日奈古・寺尾遺跡

福岡県築上郡椎田町所在遺跡群の調査

序

福岡県教育委員会は，日本道路公団の委託を受けて，一般国道10号線椎田バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和61年度以降実施してまいりました。

本書は，昭和61年度に発掘調査を行った築上郡椎田町に所在する山崎遺跡，尾久保屋敷遺跡，寺尾遺跡についての調査結果を「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」の第７集として取りまとめたものであります。

発掘調査の報告としては，満足のいくものではありませんが，本書が埋蔵文化財に対する認識と理解，文化財愛護思想の普及，さらには学術研究における活用の一助になれば幸いです。

なお，発掘調査にあたり数々のご協力を頂いた日本道路公団，椎田町教育委員会をはじめ関係各位に，心から感謝申し上げます。

平成４年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　御手洗　　康

例　言

1．本書は，福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて，昭和61年度に発掘調査を行った築上郡椎田町に所在する山崎遺跡，尾久保屋敷遺跡，日奈古・寺尾遺跡についての調査結果を「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」の第7集として取りまとめたものである。

2．山崎遺跡と関連する石町遺跡の資料を併せて収録したが，椎田町教育委員会および調査担当の県文化課の高橋章氏より提供を受けた。

3．遺物整理作業は，九州歴史資料館及び県文化課太宰府事務所において実施したが，土器の接合・復原作業は岩瀬正信氏の指導のもとに行い，鉄器の保存処理は同館参事補佐横田義章氏にお願いした。

4．出土灰の灰像法分析は東京大学総合資料館の松谷暁子研究員に，出土植物種子は名古屋大学文学部の渡辺誠教授に，それぞれ分析を依頼し，分析結果の玉稿を頂いた。

5．遺構の写真撮影は調査担当者がこれを行い，遺物の写真撮影には九州歴史資料館技術主査の石丸洋氏の協力を得た。

6．出土遺物の実測のうち，須恵器・土師器について福島育子氏・原富子氏の助力を得た。

7．挿図製図には豊福弥生氏の助力を得た。

8．挿図に使用した方位のうち，地図は真北，Ⅴを除いた遺構図はすべて座標北である。

9．本書の執筆は，Ⅲ－3－1を松谷暁子，Ⅲ－3－2を渡辺誠，Ⅴを柳田康雄が執筆し，他は小池史哲が執筆した。

10．本書の編集には小池があたった。

本 文 目 次

〈上巻〉

Ⅰ　調査組織と調査経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 7

Ⅲ　山崎遺跡 …… 13

1　はじめに …… 13
2　縄文時代遺構と遺物 …… 18
1　住居跡 …… 18
2　甕棺墓 …… 112
3　その他の遺構と遺物 …… 115
4　石町遺跡の遺構と遺物 …… 152
3　自然科学系の分析 …… 213
1　山崎遺跡出土試料の灰像分析および炭化材の樹種について …… 213
2　大型植物遺体 …… 219
4　小結 …… 223

〈下巻〉

Ⅲ　山崎遺跡（Ⅱ） …… 1

5　古墳時代以降の遺構と遺物 …… 1
1　住居跡 …… 1
2　竪　穴 …… 25
3　掘立柱建物 …… 26
4　土　壙 …… 38
5　溝状遺構 …… 49
6　その他の遺構と遺物 …… 52

7　石町遺跡の遺構と遺物 ……57
6　おわりに ……65

Ⅳ　尾久保屋敷遺跡 ……67

1　はじめに ……67
2　遺構と遺物 ……68
(1)　住居跡 ……68
(2)　溝状遺構 ……70
(3)　柱穴状ピット ……71
(4)　その他の遺物 ……71
3　おわりに ……72

Ⅴ　日奈古・寺尾遺跡……73

1　調査の経過 ……73
2　遺跡の位置と環境 ……73
3　北区の遺構と遺物 ……75
(1)　住居跡 ……76
(2)　不整形土壙 ……81
(3)　その他の遺構と遺物 ……83
4　南区の遺構と遺物 ……84
(1)　不整形土壙と長方形土壙 ……84
(2)　溝状遺構 ……91
5　小結 ……93

図 版 目 次

〈上巻〉

			本文対照頁
巻頭図版 1		山崎遺跡と岩丸川沿いの平野	
巻頭図版 2	(1)	山崎遺跡 2 号住居跡	
	(2)	山崎遺跡 7 号住居跡	
巻頭図版 3	(1)	山崎遺跡出土縄文土器	
	(2)	山崎・石町遺跡の土偶	
巻頭図版 4		石町遺跡出土縄文土器	
図 版 1		山崎遺跡周辺航空写真	
図 版 2	(1)	山崎遺跡と岩丸川扇状地	13
	(2)	山崎遺跡空中写真	13
図 版 3	(1)	山崎遺跡北端調査区	18
	(2)	北端調査区柱穴状ピット	18
	(3)	調査区北部の遺構検出	18
図 版 4	(1)	1 号住居跡	19
	(2)	1 号住居跡石囲炉	19
図 版 5		1 号住居跡出土土器・石器	19
図 版 6		1 号住居跡出土石器・土製品	22
図 版 7	(1)	2 ～ 5 号住居跡	24
	(2)	2 号住居跡	24
図 版 8	(1)	2 号住居跡土器炉	24
	(2)	2 号住居跡炉埋設土器	24
	(3)	2 号住居跡遺物出土状況 1	24
図 版 9	(1)	2 号住居跡遺物出土状況 2	24
	(2)	2 号住居跡遺物出土状況 3	24
	(3)	2 号住居跡遺物出土状況 4	24
	(4)	2 号住居跡遺物出土状況 5	24
図 版 10		2 号住居跡出土土器 1	25
図 版 11		2 号住居跡出土土器 2	25
図 版 12		2 号住居跡出土土器 3	25
図 版 13		2 号住居跡出土土器 4	25
図 版 14		2 号住居跡出土土器 5	25

図 版 15　2号住居跡出土土器6 …… 25
図 版 16　2号住居跡出土石器1 …… 46
図 版 17　2号住居跡出土石器2 …… 46
図 版 18　2号住居跡出土石器・土製品 …… 46
図 版 19 (1) 3号住居跡 …… 52
(2) 3号住居跡石囲炉 …… 52
(3) 3号住居跡遺物出土状況 …… 52
図 版 20　3号住居跡炉跡の切り取り保存 …… 52
図 版 21　3号住居跡出土土器1 …… 53
図 版 22　3号住居跡出土土器2 …… 53
図 版 23　3号住居跡出土石器・土製品 …… 55
図 版 24 (1) 4号住居跡 …… 61
(2) 4号住居跡炉抜き跡 …… 61
(3) 4号住居跡遺物出土状況 …… 61
図 版 25　4号住居跡出土土器1 …… 61
図 版 26　4号住居跡出土土器2・石器 …… 61
図 版 27 (1) 4号住居跡出土石器・土製品 …… 62
(2) 5号住居跡出土土器・石器 …… 69
図 版 28 (1) 6号住居跡 …… 71
(2) 6号住居跡土偶出土状況 …… 71
図 版 29　6号住居跡出土土器1 …… 71
図 版 30　6号住居跡出土土器2 …… 71
図 版 31　6号住居跡出土土器3・石器 …… 79
図 版 32　6号住居跡出土石器・土製品 …… 79
図 版 33 (1) 7号住居跡 …… 86
(2) 7号住居跡石囲炉 …… 86
図 版 34　7号住居跡出土土器1 …… 86
図 版 35　7号住居跡出土土器2 …… 86
図 版 36　7号住居跡出土土器3 …… 86
図 版 37　7号住居跡出土土器4 …… 86
図 版 38　7号住居跡出土土器5 …… 86
図 版 39　7号住居跡出土土器6 …… 86
図 版 40　7号住居跡出土土器7 …… 86
図 版 41　7号住居跡出土土器・石器・土製品 …… 86

図　版　42　(1)　1号甕棺墓……112
(2)　2号甕棺墓……113
図　版　43　(1)　3号甕棺墓……114
(2)　1～3号甕棺使用土器……112
図　版　44　包含層出土土器1……115
図　版　45　包含層出土土器2……115
図　版　46　包含層出土土器3……115
図　版　47　包含層出土土器4……115
図　版　48　(1)　包含層出土石器……115
(2)　縄文時代包含層の調査風景……115
(3)　指導委員の視察……115
図　版　49　(1)　石町遺跡調査区全景……152
(2)　石町1・2号住居跡……152
図　版　50　(1)　石町1号住居跡土器炉……152
(2)　石町3号住居跡……194
図　版　51　(1)　石町4号住居跡……196
(2)　石町石囲炉……200
(3)　石町土偶出土状況……202
図　版　52　石町1号住居跡出土土器1……152
図　版　53　石町1号住居跡出土土器2……152
図　版　54　石町2号住居跡出土土器1……161
図　版　55　石町2号住居跡出土土器2……161
図　版　56　石町2号住居跡出土土器3……161
図　版　57　石町2号住居跡出土土器4……161
図　版　58　石町2号住居跡出土土器5……161
図　版　59　石町2号住居跡出土土器6……161
図　版　60　石町2号住居跡出土土器7……161
図　版　61　石町2号住居跡出土土器8……161
図　版　62　石町2号住居跡出土土器9……161
図　版　63　石町2号住居跡出土土器10・上層出土土器1……178
図　版　64　石町2号住居跡上層出土土器2……178
図　版　65　石町4号住居跡出土土器……196
図　版　66　石町2・3号住居跡他出土土器，土製円板……196
図　版　67　石町1・2号住居跡出土石器……160

図 版 68　石町2・4号住居跡出土石器，土偶……194

〈下巻〉

図 版 69　山崎遺跡全景空中写真……1
図 版 70 (1) 8号住居跡……1
(2) 8号住居跡カマド……2
(3) 8号住居跡出土土器……2
図 版 71 (1) 9号住居跡……2
(2) 9号住居跡カマド……4
図 版 72　9号住居跡出土土器・鉄器……4
図 版 73 (1) 10号住居跡……6
(2) 10号住居跡カマド……6
図 版 74 (1) 12号住居跡……8
(2) 13号住居跡カマド……9
図 版 75 (1) 14号住居跡……10
(2) 14号住居跡カマド……10
図 版 76 (1) 14号住居跡遺物出土状況……10
(2) 10～14号住居跡出土土器・鉄器……7
図 版 77 (1) 15号住居跡……12
(2) 16号住居跡……14
図 版 78 (1) 15・16号住居跡出土土器・土製円板……12
(2) 17・18号住居跡……17
図 版 79 (1) 17号住居跡……17
(2) 17号住居跡カマド……18
(3) 17号住居跡出土土器・鉄器……19
図 版 80 (1) 19号住居跡……20
(2) 19号住居跡カマド……21
図 版 81 (1) 19号住居跡遺物出土状況……21
(2) 19号住居跡出土土器・石製品・鉄器……21
図 版 82 (1) 20号住居跡……24
(2) 1号竪穴……25
(3) 20号住居跡・1号竪穴出土土器……24
図 版 83 (1) 1号建物跡……26
(2) 2号建物跡……27

図　版　84　(1)　3号建物跡……27
(2)　5・9号建物跡……28
図　版　85　(1)　6・7・10～12号建物跡……30
(2)　13・14号建物跡……36
図　版　86　(1)　1号土壙……38
(2)　2号土壙……39
図　版　87　(1)　1・2号土壙出土土器・鉄器……38
(2)　調査風景……—
図　版　88　(1)　3号土壙……40
(2)　4号土壙……42
(3)　6号土壙……43
図　版　89　　3・4号土壙出土土器……40
図　版　90　(1)　7号土壙……45
(2)　7号土壙……45
図　版　91　　5～7号土壙出土土器……45
図　版　92　(1)　8号土壙……47
(2)　9号土壙……48
(3)　F10区遺物出土状況……55
(4)　E12区遺物出土状況……53
図　版　93　　ピット・溝1～6出土土器……31
図　版　94　　包含層等出土土器・石器・土製品・石製品……53
図　版　95　(1)　石町遺跡建物跡と土壙……58
(2)　石町1・2号土壙……58
図　版　96　(1)　石町4号土壙集石状況……62
(2)　石町4号土壙……62
図　版　97　　石町1～3号土壙出土土器……58
図　版　98　　石町4号土壙・ピット等出土土器……63

尾久保屋敷遺跡

図　版　1　(1)　尾久保屋敷遺跡調査区全景……67
(2)　住居跡と柱穴状ピット群……68
図　版　2　(1)　溝状遺構堆積状況……70
(2)　出土土器……69

日奈古・寺尾遺跡

図　版　1　(1)　日奈古・寺尾遺跡北区全景 ……75
　　(2)　北区全景……75
　　(3)　1・2号住居跡・2号不整形土壙……76
図　版　2　(1)　北区1号住居跡……76
　　(2)　1号住居跡カマド……76
　　(3)　カマド下部敷石……76
図　版　3　(1)　北区2号住居跡……80
　　(2)　1号住居跡カマドと柱穴……76
　　(3)　1号不整形土壙……81
図　版　4　(1)　2号不整形土壙……82
　　(2)　日奈古・寺尾遺跡北区出土土器 ……77
図　版　5　(1)　日奈古・寺尾遺跡南区全景 ……84
　　(2)　南区北土壙群……84
　　(3)　南区北土壙群……84
図　版　6　(1)　南区北1号不整形土壙……84
　　(2)　2号不整形土壙……89
図　版　7　(1)　南区北1号長方形土壙……89
　　(2)　2号長方形土壙……91
図　版　8　(1)　日奈古・寺尾遺跡南区北出土土器 ……84
　　(2)　南区南溝群……91

挿 図 目 次

〈上巻〉

第 1 図　国道10号線椎田バイパス路線図 …… 2
第 2 図　遺跡の位置（1/10000） …… 3
第 3 図　周辺の遺跡分布図（1/50000） …… 折込み
第 4 図　山崎遺跡地形図（1/2000） …… 14
第 5 図　山崎遺跡地区割図（1/1500） …… 15
第 6 図　基本土層図（1/30） …… 15
第 7 図　縄文時代の遺構配置図（1/400） …… 17
第 8 図　1号住居跡実測図（1/60） …… 18
第 9 図　1号住居跡炉跡実測図（1/30） …… 19
第 10 図　1号住居跡出土土器拓影1（1/3） …… 20
第 11 図　1号住居跡出土土器拓影2（1/3） …… 21
第 12 図　1号住居跡出土土器拓影3（1/3） …… 22
第 13 図　1号住居跡出土石器実測図（1/2・1/3・1/4） …… 23
第 14 図　1号住居跡出土土製品実測図（1/3） …… 24
第 15 図　2号住居跡炉跡実測図（1/30） …… 24
第 16 図　2・4号住居跡実測図（1/60） …… 折込み
第 17 図　2号住居跡出土土器拓影1（1/3） …… 26
第 18 図　2号住居跡出土土器拓影2（1/3） …… 27
第 19 図　2号住居跡出土土器拓影3（1/4） …… 28
第 20 図　2号住居跡出土土器拓影4（1/3） …… 29
第 21 図　2号住居跡出土土器拓影5（1/3） …… 30
第 22 図　2号住居跡出土土器拓影6（1/3） …… 31
第 23 図　2号住居跡出土土器拓影7（1/3） …… 33
第 24 図　2号住居跡出土土器拓影8（1/3） …… 34
第 25 図　2号住居跡出土土器拓影9（1/3） …… 35
第 26 図　2号住居跡出土土器拓影10（1/3） …… 36
第 27 図　2号住居跡出土土器拓影11（1/3） …… 37
第 28 図　2号住居跡出土土器拓影12（1/3） …… 38
第 29 図　2号住居跡出土土器実測図13（1/3） …… 39
第 30 図　2号住居跡出土土器拓影14（1/3） …… 40

第 31 図　2号住居跡出土土器拓影15（1/3）……41
第 32 図　2号住居跡出土土器拓影16（1/3）……42
第 33 図　2号住居跡出土土器拓影17（1/3）……43
第 34 図　2号住居跡出土土器拓影18（1/3）……44
第 35 図　2号住居跡出土土器拓影19（1/3）……45
第 36 図　2号住居跡出土石器実測図 1（1/3）……47
第 37 図　2号住居跡出土石器実測図 2（1/3）……48
第 38 図　2号住居跡出土石器実測図 3（1/4）……49
第 39 図　2号住居跡出土石器実測図 4（1/2・1/3）……50
第 40 図　2号住居跡出土石器実測図 5（1/3）……51
第 41 図　2号住居跡出土土製品実測図（1/3）……51
第 42 図　3号住居跡実測図（1/60）……52
第 43 図　3号住居跡炉跡実測図（1/30）……52
第 44 図　3号住居跡出土土器拓影 1（1/3）……53
第 45 図　3号住居跡出土土器拓影 2（1/3）……54
第 46 図　3号住居跡出土土器拓影 3（1/3）……56
第 47 図　3号住居跡出土土器拓影 4（1/3）……57
第 48 図　3号住居跡出土土器拓影 5（1/3）……58
第 49 図　3号住居跡出土土器拓影 6（1/3）……59
第 50 図　3号住居跡出土土器拓影 7（1/3）……60
第 51 図　3号住居跡出土石器実測図（1/2・1/3・1/4）……60
第 52 図　3号住居跡出土土製品実測図（1/3）……60
第 53 図　4号住居跡炉跡実測図（1/30）……61
第 54 図　4号住居跡出土土器拓影 1（1/3）……63
第 55 図　4号住居跡出土土器拓影 2（1/3）……64
第 56 図　4号住居跡出土土器拓影 3（1/3）……65
第 57 図　4号住居跡出土土器拓影 4（1/3）……66
第 58 図　4号住居跡出土土器拓影 5（1/3）……67
第 59 図　4号住居跡出土土製品実測図（1/3）……67
第 60 図　4号住居跡出土石器実測図（1/2・1/3・1/4）……68
第 61 図　5号住居跡実測図（1/60）……69
第 62 図　5号住居跡出土土器実測図 1（1/3）……69
第 63 図　5号住居跡出土土器拓影 2（1/3）……70
第 64 図　5号住居跡出土石器実測図（1/2）……71

第 65 図　6号住居跡実測図（1/60）……折込み
第 66 図　6号住居跡土偶出土状況実測図（1/15）……折込み
第 67 図　6号住居跡出土土器拓影1（1/3）……73
第 68 図　6号住居跡出土土器拓影2（1/3）……74
第 69 図　6号住居跡出土土器拓影3（1/3）……75
第 70 図　6号住居跡出土土器拓影4（1/3）……76
第 71 図　6号住居跡出土土器拓影5（1/3）……77
第 72 図　6号住居跡出土土器拓影6（1/3）……78
第 73 図　6号住居跡出土土器拓影7（1/3）……80
第 74 図　6号住居跡出土土器拓影8（1/3）……81
第 75 図　6号住居跡出土土器拓影9（1/3）……82
第 76 図　6号住居跡出土石器実測図1（1/2・1/3）……83
第 77 図　6号住居跡出土石器実測図2（1/3・1/4）……84
第 78 図　6号住居跡出土土製品実測図1（1/3）……85
第 79 図　6号住居跡出土土製品実測図2（1/3）……86
第 80 図　7号住居跡炉跡実測図（1/30）……86
第 81 図　7号住居跡実測図（1/60）……87
第 82 図　7号住居跡出土土器拓影1（1/3）……88
第 83 図　7号住居跡出土土器拓影2（1/3）……89
第 84 図　7号住居跡出土土器実測図3（1/3）……90
第 85 図　7号住居跡出土土器実測図4（1/3）……91
第 86 図　7号住居跡出土土器拓影5（1/3）……92
第 87 図　7号住居跡出土土器拓影6（1/3）……93
第 88 図　7号住居跡出土土器拓影7（1/3）……94
第 89 図　7号住居跡出土土器拓影8（1/3）……95
第 90 図　7号住居跡出土土器拓影9（1/3）……96
第 91 図　7号住居跡出土土器拓影10（1/3）……97
第 92 図　7号住居跡出土土器拓影11（1/3）……98
第 93 図　7号住居跡出土土器拓影12（1/3）……99
第 94 図　7号住居跡出土土器拓影13（1/3）……100
第 95 図　7号住居跡出土土器拓影14（1/3）……101
第 96 図　7号住居跡出土土器拓影15（1/3）……102
第 97 図　7号住居跡出土土器拓影16（1/3）……104
第 98 図　7号住居跡出土土器拓影17（1/3）……105

第 99 図　7 号住居跡出土土器拓影18（1/3）……106
第 100 図　7 号住居跡出土土器拓影19（1/3）……107
第 101 図　7 号住居跡出土土器拓影20（1/3）……108
第 102 図　7 号住居跡出土土器拓影21（1/3）……109
第 103 図　7 号住居跡出土土器拓影22（1/3）……110
第 104 図　7 号住居跡出土石器実測図（1/2・1/3）……111
第 105 図　7 号住居跡出土土製品実測図（1/3）……112
第 106 図　1 ～ 3 号甕棺墓実測図（1/30）……113
第 107 図　1 号甕棺実測図（1/4）……113
第 108 図　2 号甕棺実測図（1/4）……114
第 109 図　3 号甕棺実測図（1/3）……115
第 110 図　包含層出土土器拓影 1（1/3）……117
第 111 図　包含層出土土器拓影 2（1/3）……118
第 112 図　包含層出土土器拓影 3（1/3）……119
第 113 図　包含層出土土器拓影 4（1/3）……120
第 114 図　包含層出土土器拓影 5（1/3）……122
第 115 図　包含層出土土器拓影 6（1/3）……123
第 116 図　包含層出土土器拓影 7（1/3）……124
第 117 図　包含層出土土器拓影 8（1/3）……125
第 118 図　包含層出土土器拓影 9（1/3）……126
第 119 図　包含層出土土器拓影10（1/3）……127
第 120 図　包含層出土土器拓影11（1/3）……128
第 121 図　包含層出土石器の層別分布……129
第 122 図　包含層出土石器実測図（1/3）……130
第 123 図　石町 1 号住居跡炉跡実測図（1/20）……152
第 124 図　石町 1 ・ 2 号住居跡実測図（1/60）……折込み
第 125 図　石町 1 号住居跡出土土器拓影 1（1/3）……153
第 126 図　石町 1 号住居跡出土土器拓影 2（1/3）……154
第 127 図　石町 1 号住居跡出土土器拓影 3（1/3）……156
第 128 図　石町 1 号住居跡出土土器拓影 4（1/3）……157
第 129 図　石町 1 号住居跡出土土器拓影 5（1/3）……158
第 130 図　石町 1 号住居跡出土土器拓影 6（1/3）……159
第 131 図　石町 1 号住居跡出土石器実測図（1/2・1/3）……160
第 132 図　石町 2 号住居跡出土土器拓影 1（1/3）……162

第133図　石町2号住居跡出土土器拓影2（1/3）……164
第134図　石町2号住居跡出土土器拓影3（1/3）……165
第135図　石町2号住居跡出土土器拓影4（1/3）……166
第136図　石町2号住居跡出土土器拓影5（1/3）……167
第137図　石町2号住居跡出土土器拓影6（1/3）……168
第138図　石町2号住居跡出土土器拓影7（1/3）……169
第139図　石町2号住居跡出土土器拓影8（1/3）……170
第140図　石町2号住居跡出土土器拓影9（1/3）……172
第141図　石町2号住居跡出土土器拓影10（1/3）……173
第142図　石町2号住居跡出土土器拓影11（1/3）……174
第143図　石町2号住居跡出土土器拓影12（1/3）……175
第144図　石町2号住居跡出土土器拓影13（1/3）……176
第145図　石町2号住居跡出土土器拓影14（1/3）……177
第146図　石町2号住居跡出土土器拓影15（1/3）……178
第147図　石町2号住居跡出土土器拓影16（1/3）……179
第148図　石町2号住居跡出土土器拓影17（1/3）……180
第149図　石町2号住居跡出土土器拓影18（1/3）……181
第150図　石町2号住居跡出土土器拓影19（1/3）……182
第151図　石町2号住居跡出土土器拓影20（1/3）……183
第152図　石町2号住居跡出土土器拓影21（1/3）……184
第153図　石町2号住居跡出土土器拓影22（1/3）……185
第154図　石町2号住居跡出土土器拓影23（1/3）……186
第155図　石町2号住居跡出土土器拓影24（1/3）……187
第156図　石町2号住居跡上層出土土器拓影1（1/3）……188
第157図　石町2号住居跡上層出土土器拓影2（1/3）……189
第158図　石町2号住居跡上層出土土器拓影3（1/3）……190
第159図　石町2号住居跡上層出土土器拓影4（1/3）……191
第160図　石町2号住居跡出土石器実測図1（1/3）……192
第161図　石町2号住居跡出土石器実測図2（1/2・1/3）……193
第162図　石町2号住居跡出土石器実測図3（1/2）……194
第163図　石町3・4号住居跡実測図（1/60）……195
第164図　石町3号住居跡出土土器拓影（1/3）……196
第165図　石町4号住居跡出土土器拓影1（1/3）……197
第166図　石町4号住居跡出土土器拓影2（1/3）……198

第167図　石町4号住居跡出土石器実測図（1/2・1/3・1/4）……199
第168図　石町石囲炉実測図（1/20）……201
第169図　石町その他の土器拓影（1/3）……201
第170図　石町その他の石器実測図（1/2）……202
第171図　石町出土土偶実測図（1/2）……202

〈下巻〉

第172図　8号住居跡実測図（1/60）……1
第173図　8号住居跡カマド実測図（1/30）……2
第174図　8号住居跡出土土器実測図（1/3）……2
第175図　9号住居跡実測図（1/60）……3
第176図　9号住居跡カマド実測図（1/30）……3
第177図　9号住居跡出土土器実測図1（1/3）……4
第178図　9号住居跡出土土器実測図2（1/3）……5
第179図　9号住居跡出土鉄器実測図（1/2）……6
第180図　10号住居跡実測図（1/60）……7
第181図　10号住居跡カマド実測図（1/30）……7
第182図　10号住居跡出土土器実測図（1/3）……8
第183図　10号住居跡出土鉄器実測図（1/2）……8
第184図　11号住居跡出土土器実測図（1/3）……8
第185図　11・12号住居跡実測図（1/60）……9
第186図　12号住居跡出土土器実測図（1/3）……9
第187図　13号住居跡実測図（1/60）……10
第188図　13号住居跡出土土器実測図（1/3）……10
第189図　14号住居跡実測図（1/60）……11
第190図　14号住居跡カマド実測図（1/30）……11
第191図　14号住居跡出土土器実測図（1/3・1/4）……12
第192図　15号住居跡実測図（1/60）……13
第193図　15号住居跡出土土器実測図（1/3）……13
第194図　16号住居跡実測図（1/60）……15
第195図　16号住居跡カマド実測図（1/30）……15
第196図　16号住居跡出土土器実測図（1/3）……16
第197図　16号住居跡出土土製品実測図（1/2）……16
第198図　17・18号住居跡実測図（1/60）……17

第199図　17号住居跡カマド実測図（1/30）……17
第200図　17号住居跡出土土器実測図（1/3）……18
第201図　17号住居跡出土鉄器実測図（1/2）……18
第202図　19号住居跡実測図（1/60）……20
第203図　19号住居跡カマド実測図（1/30）……21
第204図　19号住居跡出土土器実測図（1/3）……22
第205図　19号住居跡出土土製品実測図（1/2）……23
第206図　19号住居跡出土鉄器実測図（1/2）……23
第207図　20号住居跡実測図（1/60）……24
第208図　20号住居跡出土土器実測図（1/3）……24
第209図　1・2号竪穴実測図（1/60）……25
第210図　1号竪穴出土土器実測図（1/3）……25
第211図　2号竪穴出土土器実測図（1/3）……26
第212図　1・2号建物跡実測図（1/80）……27
第213図　3号建物跡実測図（1/80）……28
第214図　4号建物跡実測図（1/80）……28
第215図　5・6号建物跡実測図（1/80）……29
第216図　5号建物跡出土土器実測図（1/3）……30
第217図　7号建物跡出土土器実測図（1/3）……30
第218図　7号建物跡実測図（1/80）……31
第219図　8・9号建物跡実測図（1/80）……32
第220図　9号建物跡出土土器実測図（1/3）……33
第221図　10号建物跡実測図（1/80）……33
第222図　11号建物跡実測図（1/80）……34
第223図　11号建物跡出土土器実測図（1/3）……34
第224図　12～14号建物跡実測図（1/80）……35
第225図　1・2号土壙実測図（1/30）……38
第226図　1号土壙出土土器実測図（1/3）……38
第227図　2号土壙出土土器実測図（1/3）……39
第228図　2号土壙出土鉄器実測図（1/2）……39
第229図　3～5号土壙実測図（1/30）……40
第230図　3・4号土壙出土土器実測図（1/3）……41
第231図　5号土壙出土土器実測図（1/3）……43
第232図　6号土壙実測図（1/30）……44

第233図　6号土壙出土土器実測図（1/3）……44
第234図　7号土壙実測図（1/60）……44
第235図　7号土壙出土土器実測図1（1/3）……45
第236図　7号土壙出土土器実測図2（1/3）……46
第237図　8・9号土壙実測図（1/30）……48
第238図　1・3～6号溝断面土層図（1/30）……48
第239図　1・2号溝出土土器実測図（1/3）……49
第240図　3～6号溝出土土器実測図（1/3）……51
第241図　柱穴状ピット出土土器実測図（1/3）……53
第242図　包含層出土土器実測図（1/3）……54
第243図　包含層出土土器実測図（1/3・1/5）……55
第244図　包含層出土土器実測図（1/3）……56
第245図　包含層出土土器実測図（1/3）……57
第246図　包含層出土石器実測図（1/3）……57
第247図　表採土器実測図（1/3）……57
第248図　石町1～4号土壙実測図（1/60）……59
第249図　石町1・2号土壙出土土器実測図（1/3）……60
第250図　石町3号土壙出土土器実測図（1/3）……61
第251図　石町4号土壙出土土器実測図（1/3）……62
第252図　石町遺跡その他の土器実測図（1/3）……64

尾久保屋敷遺跡

第1図　尾久保屋敷遺跡周辺地形図（1/2000）……67
第2図　尾久保屋敷遺跡遺構配置図（1/150）……68
第3図　住居跡出土土器実測図（1/3）……69
第4図　溝状遺構断面土層図（1/50）……70
第5図　溝状遺構出土土器実測図（1/3）……71
第6図　その他の土器実測図（1/3）……72

日奈古・寺尾遺跡

第1図　日奈古・寺尾遺跡周辺地形図（1/2000）……74
第2図　日奈古・寺尾遺跡北区遺構配置図（1/200）……75
第3図　1号住居跡実測図（1/60）……76
第4図　1号住居跡カマド実測図（1/20）……77

第 5 図　1号住居跡出土土器実測図（1/3）……78
第 6 図　土錘実測図（1/2）……79
第 7 図　2号住居跡実測図（1/60）……80
第 8 図　2号住居跡カマド実測図（1/20）……80
第 9 図　北区出土土器実測図（1/3）……81
第 10 図　1号不整形土壙実測図（1/60）……82
第 11 図　2号不整形土壙実測図（1/60）……83
第 12 図　日奈古・寺尾遺跡南区北遺構配置図（1/200）……85
第 13 図　1・2号不整形土壙実測図（1/40）……86
第 14 図　1号不整形土壙出土土器実測図（1/3）……87
第 15 図　南区北出土土器実測図（1/3）……88
第 16 図　3号不整形土壙実測図（1/40）……89
第 17 図　1・2号長方形土壙実測図（1/40）……90
第 18 図　日奈古・寺尾遺跡南区南遺構配置図（1/200）……92
第 19 図　南区南出土土器実測図（1/3）……93

表 目 次

〈上巻〉

表 1　10号線椎田バイパス関係遺跡一覧表……4
表 2　山崎遺跡出土土器観察表 1……131
表 3　山崎遺跡出土土器観察表 2……132
表 4　山崎遺跡出土土器観察表 3……133
表 5　山崎遺跡出土土器観察表 4……134
表 6　山崎遺跡出土土器観察表 5……135
表 7　山崎遺跡出土土器観察表 6……136
表 8　山崎遺跡出土土器観察表 7……137
表 9　山崎遺跡出土土器観察表 8……138
表10　山崎遺跡出土土器観察表 9……139
表11　山崎遺跡出土土器観察表10……140
表12　山崎遺跡出土土器観察表11……141
表13　山崎遺跡出土土器観察表12……142
表14　山崎遺跡住居跡出土石器一覧表 1……143
表15　山崎遺跡住居跡出土石器一覧表 2……144

表16　山崎遺跡住居跡出土石器一覧表３……145
表17　山崎遺跡住居跡出土石器一覧表４……146
表18　山崎遺跡住居跡出土石器一覧表５……147
表19　山崎遺跡住居跡出土土製円板一覧表１……148
表20　山崎遺跡住居跡出土土製円板一覧表２……149
表21　山崎遺跡住居跡出土土製円板一覧表３……150
表22　山崎遺跡住居跡出土土製円板一覧表４……151
表23　石町遺跡出土土器観察表１……203
表24　石町遺跡出土土器観察表２……204
表25　石町遺跡出土土器観察表３……205
表26　石町遺跡出土土器観察表４……206
表27　石町遺跡出土土器観察表５……207
表28　石町遺跡出土石器観察表１……208
表29　石町遺跡出土石器一覧表２……209
表30　石町遺跡出土石器一覧表３……210
表31　石町遺跡出土石器一覧表４……211
表32　石町遺跡出土土製円板一覧表１……211
表33　石町遺跡出土土製円板一覧表２……212

〈下巻〉
山崎遺跡
表34　掘立柱建物計測表１……36
表35　掘立柱建物計測表２……37

日奈古・寺尾遺跡
表１　１号住居跡柱穴関係計測表……77

付　図　目　次

付図１　山崎遺跡遺構配置図（1/300）
付図２　山崎・石町遺跡出土縄文土器変遷図

Ⅲ　山崎遺跡

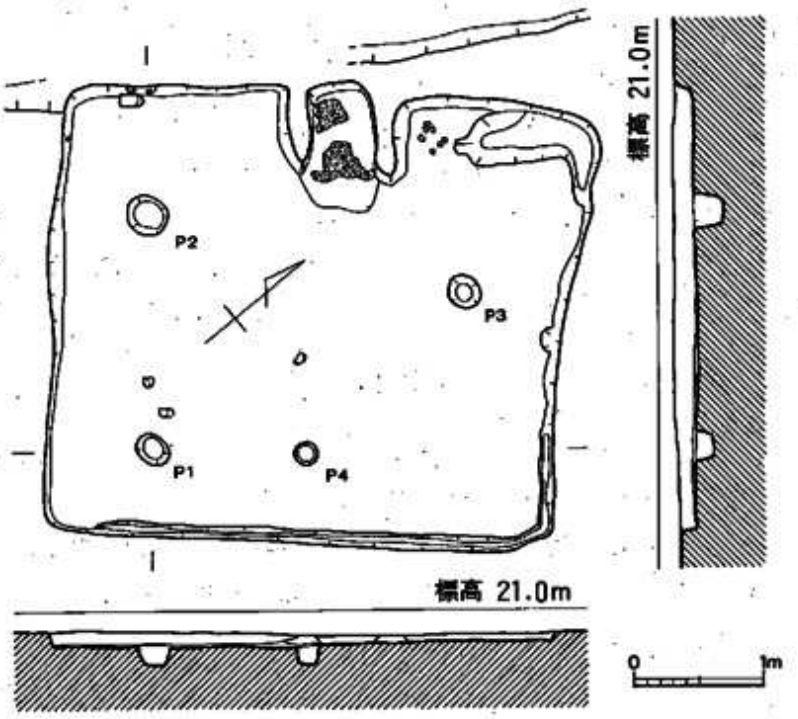
5　古墳時代以降の遺構と遺物

1　住居跡

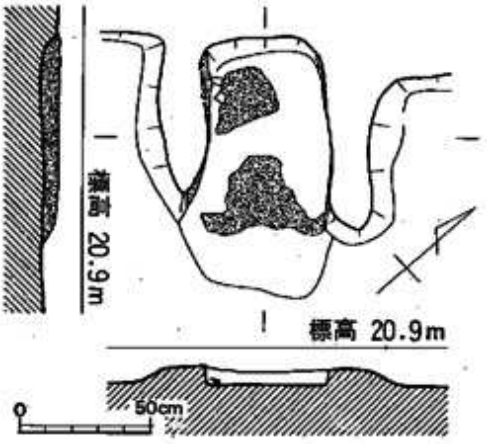
古墳時代以降の住居跡は，13軒検出され，いずれもX＝71625，Y＝3505より北西側の調査区から検出された。13軒のうち，重複関係にあるものは，16号住居跡←と15号住居跡・17号住居跡←と18号住居跡で，どちらも←の付いた方が新出する。なお，1～7号住居跡は縄文時代の住居跡で，16号住居跡・19号住居跡は6号住居跡の上に重複する。

8号住居跡（図版70－1，第172図）

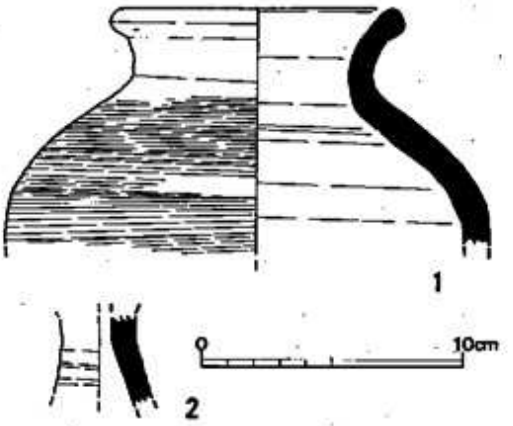
調査区中央部南寄りのA6・Z6区に検出された住居跡で，1号小溝と重複して小溝より後出する。上縁では，短辺3.4m，長辺4.0mのほぼ長方形プランを呈して，長辺の北西辺にカマドが付設される，主軸方向が略N47°Wの住居跡である。後世の削平を受けて深さ0.1m強，やや堅緻な床面は約12.9m²の広さをもち，カマド部分が約0.7m²を占める。床面には，東側半分の周壁に沿って10cm以下の溝があり，柱穴状ピットは4穴ある。P1・2は主柱穴であろうが，他の穴は



第172図　8号住居跡実測図（1/60）



第173図　8号住居跡カマド実測図（1/30）



第174図　8号住居跡出土土器実測図（1/3）

うまく対応しない。径15～30cm，深さ15～25cmの大きさを測る。住居跡内から数点の土器片が出土し，ほぼ床面に接している。

カマド（図版70－2，第173図）　は床面を少し掘り込んだ土坑の縁に，厚み40cm程の壁を築いて，長さ140cm，最大幅5cmの広さの燃焼室を造っている。堅緻に焼けた天井や壁の崩壊した塊が燃焼室にみられ，燃焼部床面の手前側60cmの幅50cm程の部分が堅緻に焼けている。支脚や煙道の施設は検出されなかったが，奥側の壁はほとんど焼けていない。

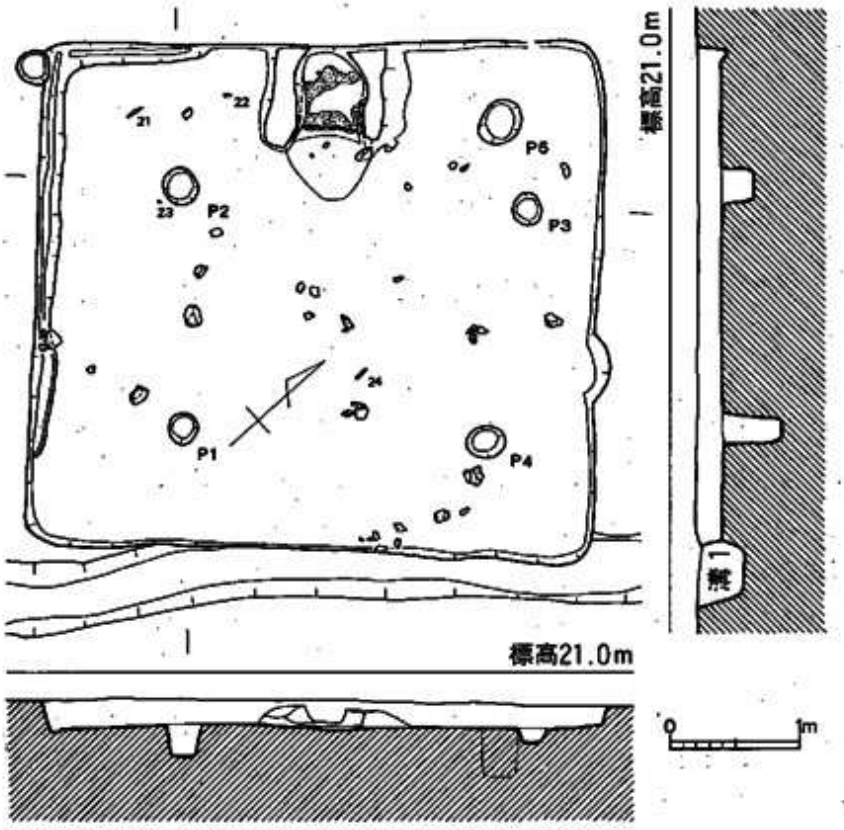
出土遺物（図版70－3，第174図）

須恵器壺（1）　口縁部破片で，P1の近くから出土した。外反する口縁部は端部で肥厚気味に丸くおさまる。丸みをもって膨らむ肩部はカキ目調整される。復原口径11.3cm，残存器高9.0cmの大きさ。精良な胎土で，灰色に焼成される。

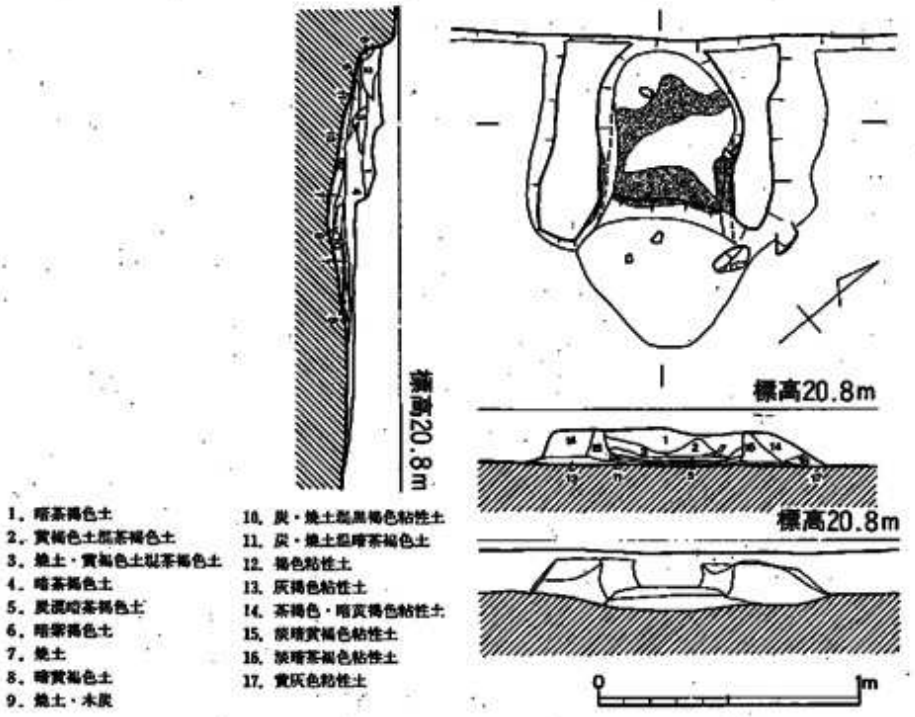
須恵器高杯（2）　柱状部破片で，西隅部から出土した。直径3cm弱まですぼまり，2条の浅い沈線が巡る。細砂粒を少し含む胎土で，暗灰色に焼成されている。

9号住居跡（図版71－1，第175図）

調査区の中央部東寄りのZ8・Z9に検出された住居跡で，1号小溝と重複して小溝より後出する。短辺3.9～4.0m，長辺4.3mの方形に近い不整長方形プランを呈して，長辺の北西辺にカマドが付設される，主軸方向が略N47°Wの住居跡である。後世の削平を受けて深さ約0.2m，やや堅緻な床面は約16.0m²の広さをもち，カマド部分が約1.0m²を占める。床面には，柱穴状ピットが5穴あり，位置関係ではP1～4が主柱穴と判断されるものの，浅いP3に比してP5が深いことからP5の方が主柱穴の可能性がある。径25～30cm，深さ10～40cmの大きさである。住居跡内のあちこちに土器片が散在し，西隅部と中央部で鉄刀子などが出土した。いずれも床面に近い高さである。



第175図　9号住居跡実測図（1/60）



第176図　9号住居跡カマド実測図（1/30）

カマド（図版71－2，第176図）　は地山の黄灰色砂質粘土の上に薄く暗め灰褐色粘性土を挟んで，内側に淡い暗褐色粘性土，外側に茶褐色と暗黄褐色の混じった粘性土を用いて，厚み20cm余りの壁を築き，長さ70cm，最大幅50cmの広さの燃焼室を造っている。堅緻に焼けた天井や壁の塊が燃焼室手前側から掻き出し部に崩れているようである。手前側の燃焼部床面から両側壁は極めて堅く焼けている。壁体内に石が含まれるものの，支脚や煙道の施設は検出されなかった。

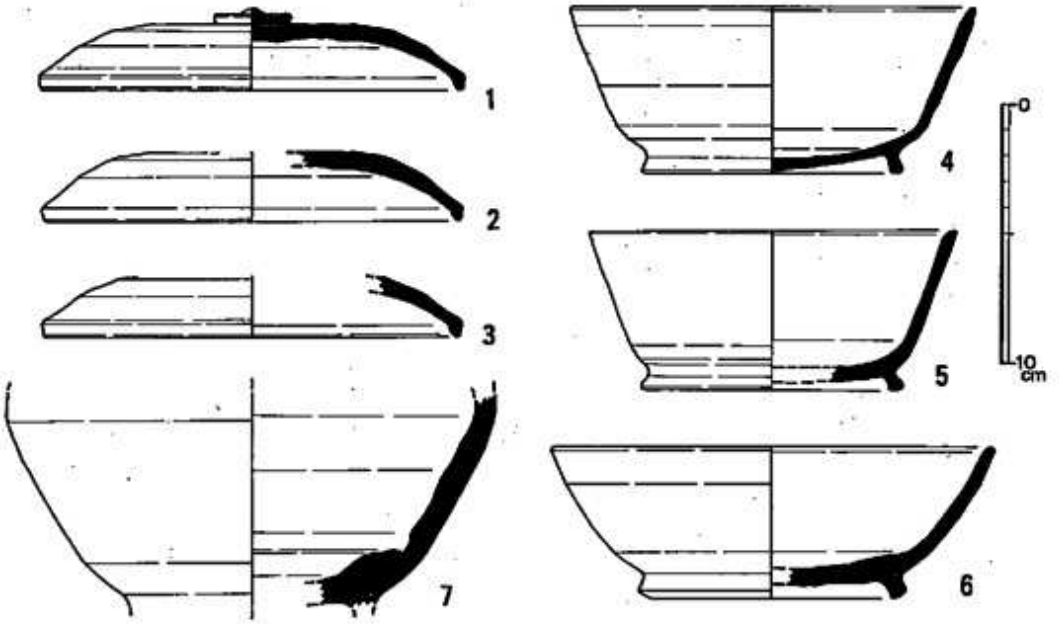
出土遺物（図版72，第177～179図）

須恵器杯蓋（1～3）　鳥嘴状の身受けのかえりをもつ杯蓋で，端部はあまり屈曲しない。回転ヘラケズリされる外天井に扁平な宝珠形つまみが付く。いずれもカマド付近から出土した。

1は復原口径16.3cm，器高3.2cm，つまみの径3.0cmを測る大きさで，胎土に砂粒と若干角閃石を含み灰黄褐色に焼成されている。2・3もほぼ同様の特徴で，わずかに小さく色調が異なる。

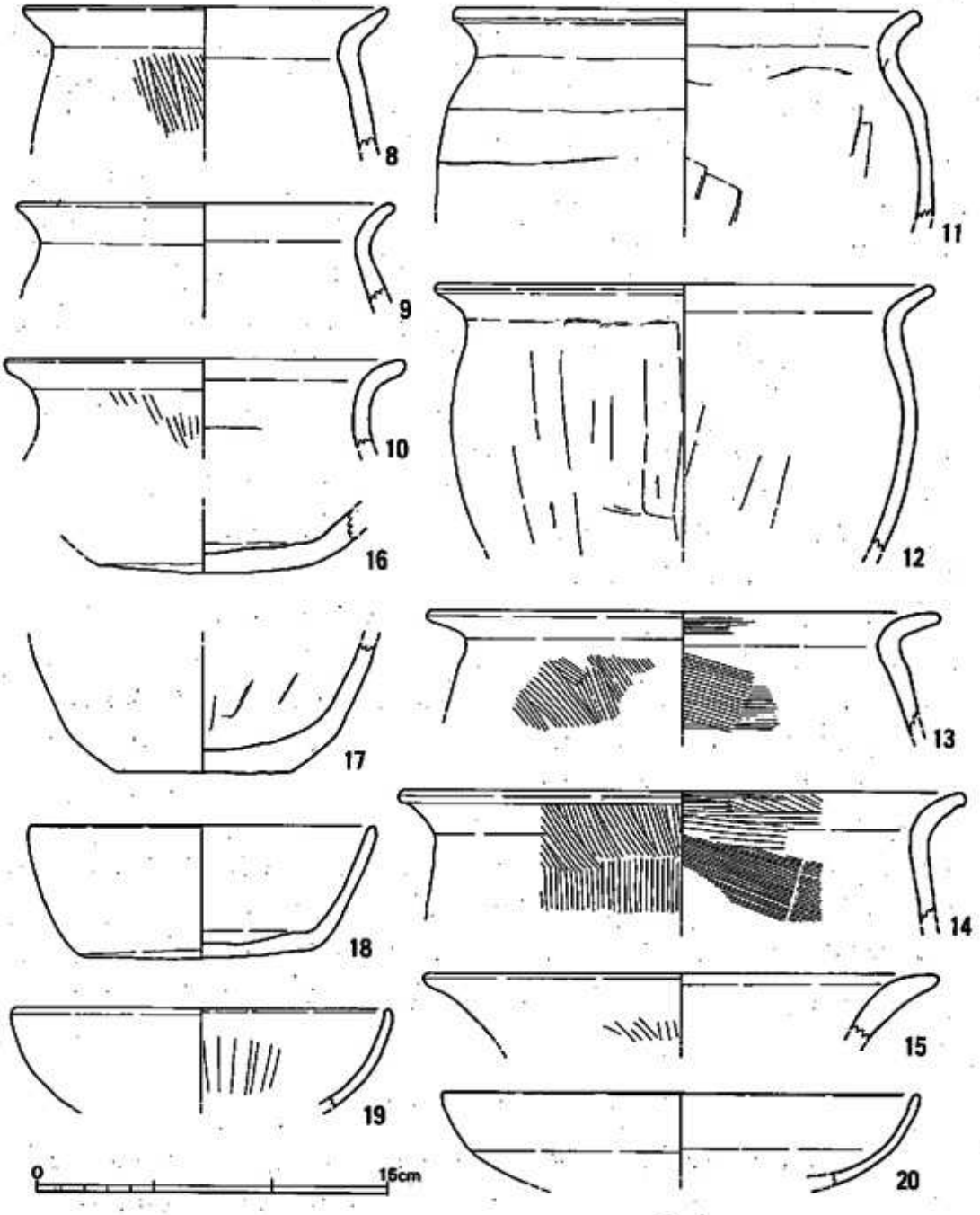
須恵器杯身（4～6）　4・5は高台をもち，底部から口縁部が直線的に立ち上がる杯身で，高台は外方へ踏ん張る。外底面は回転ヘラケズリされている。細砂を胎土に含み，暗灰色を呈している。4は復原口径15.5cm，器高6.4cm，高台径10.0cm，5は復原口径14.1cm，器高6.2cm，高台径10.0cmの大きさ。北隅部などから出土した。

6は高台をもち，底部から口縁部が丸みをもって立ち上がる杯身で，高台は外方へ踏ん張る。復原口径17.0cm，器高5.8cm，高台径10.3cmの大きさ。器面が風化し調整手法は不明。細砂粒・角閃石を胎土に含み，淡茶灰色に焼成されている。P1付近から出土した。



第177図　9号住居跡出土土器実測図1（1/3）

須恵器台付壺（7）　体部下半の破片で，台部分の一部がみられる。復原胴最大径は18.7cmを測る。外面の一部に平行タタキの痕跡がみられる。細砂を胎土に含み暗灰色に焼成されてい

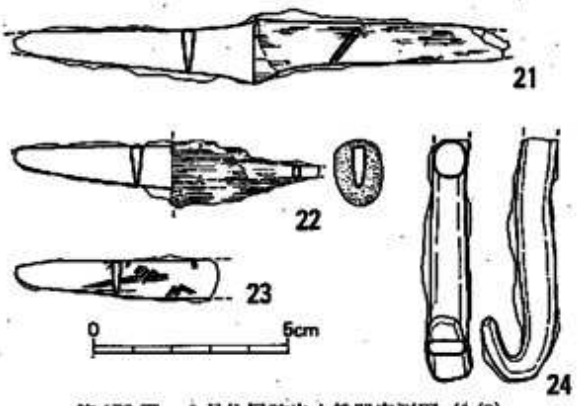


第178図　9号住居跡出土土器実測図2（1/3）

る。東隅部から出土した。

土師器甕（8～17）　8～10は口径15.5～19.0cmの大きさの甕で，口縁部は外反し，8では端部が内彎気味になる。器面が風化するものの胴部外面にハケ目が残る。胎土に砂粒を含み，明褐色に焼成されている。

11～15は口径が20cm以上の大きさの甕で，口縁部は外反する。器面が風化するものの，11・12は胴部内外面に板状工具によるケズリに近いナデ痕が，13・14はハケ目が残る。胎土に砂粒・角閃石や金雲母を含み，明茶褐色に焼成されている。



第179図　9号住居跡出土鉄器実測図（1/2）

16・17は底部破片で，16がレンズ状に膨らむ底面をもち色調・胎土は8に似る。17は底面が平らでナデ調整される。内面には板状工具の小口圧痕がみられる。

土師器杯（18）　P4付近で出土した。平坦な底部から口縁部が直線的に立ち上がる杯で，口径14.8cm，器高5.7cm，底径の10.5cmの大きさ。器面が風化して調整手法は不明。砂粒・角閃石・褐色粒を胎土に含み，淡黄褐色に焼成されている。

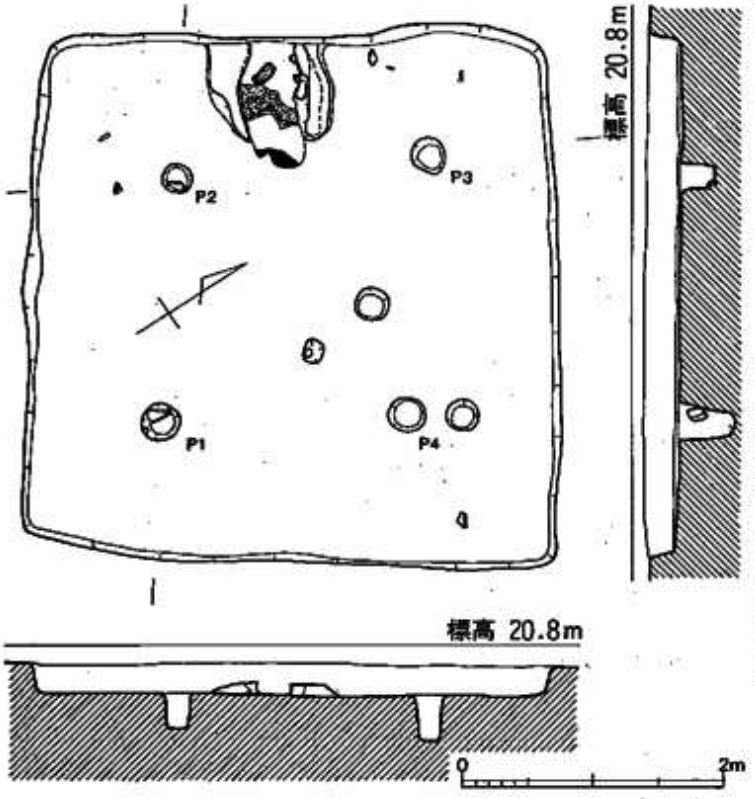
土師器椀（19・20）　底部を欠くが，器壁は薄く，口縁部がやや内彎する。器面が風化して調整手法は不明。19は復原口径16.2cm，20は復原口径20.4cmを測る。

鉄刀子（21～23）　21は先端及び基部端を欠き，残存長18.8cmで，うち刃部の現存長9.2cmを占める。刃部背側の厚みは3mm強，関部の幅は2.3cm，木質の残る茎部は幅1.6cm前後を測る。木質の一部に藁状の植物遺体が銹着している。22は先端及び基部端を欠き，残存長7.9cmで，うち刃部の現存長4.0cmを占める。刃部背側の厚みは3mm，関部の幅は1.1cm。木質の残る茎部は幅3mm，厚さ2mmで，柄は幅1.7cm，厚み1.2cm前後である。23は刃部破片で，現存長5.2cm，幅1.0cm，背の厚み2mmを測る。一部に藁状の植物遺体が銹着している。

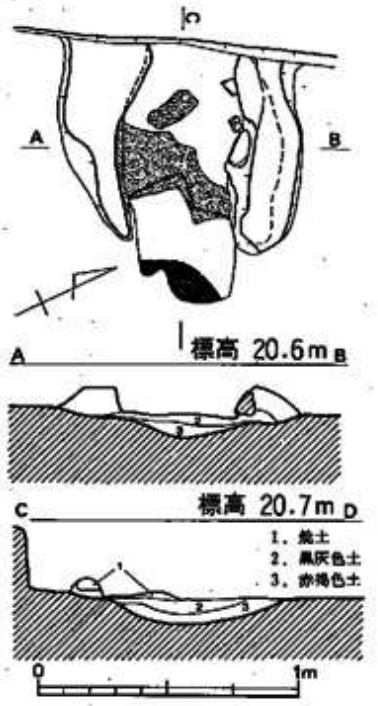
鈎状鉄製品（24）　一方の端部を欠くが，現存長6.2cmで，欠損部分では直径9mmの丸棒状を呈し，先端側では4.5mm程の厚みの板状に変わりながら，約2cm折れ曲がり3mmまで厚みが減じる。

10号住居跡（図版73－1，第180図）

調査区中央部東寄りのA11・Z11区に検出された住居跡で，上縁では一辺3.8～4.0mのほぼ方形プランを呈して，北西辺にカマドが付設される，主軸方向が略N54°Wの住居跡である。後世の削平を受けて深さ約0.2m，やや堅緻な床面は約15.4m²の広さをもち，カマド部分が約0.7m²を



第180図　10号住居跡実測図（1/60）



第181図　10号住居跡カマド実測図（1/30）

占める。床面には，柱穴状ピットが7穴あるが，P1～4が主柱穴であろう。径20～30cm，深さ25～40cmの大きさで，P1には柱を固定させる詰め石が残っている。住居跡内から数点の土器片と，北隅部と西部で鉄器が出土したが，いずれも床面からやや浮いた状態であった。

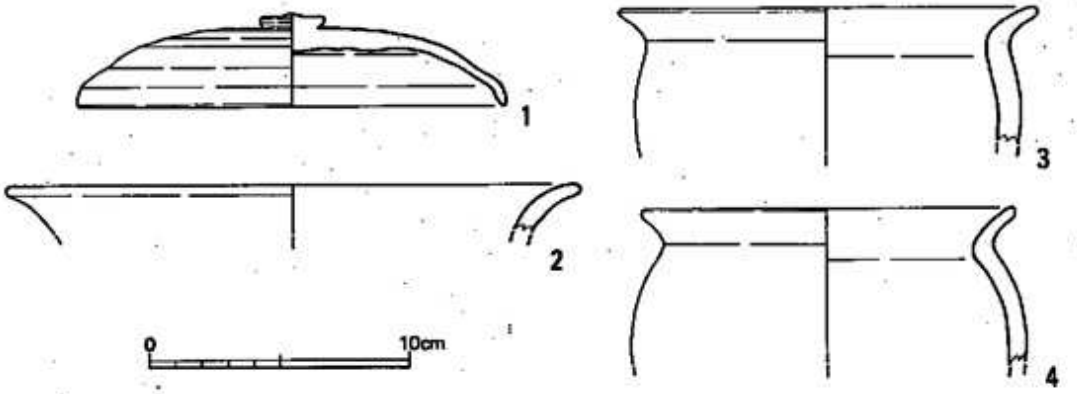
カマドは床面を少し掘り込んで，厚み20cm程の壁を縁に築いて，長さ・最大幅65cm広さの燃焼室を造っている。堅緻に焼けた天井や壁の崩壊した塊が燃焼室内にみられたが，燃焼部床面はさほど堅緻でない。壁体内に石が含まれるものの，支脚や煙道の施設は検出されなかった。

出土遺物（図版76－2；第182図）

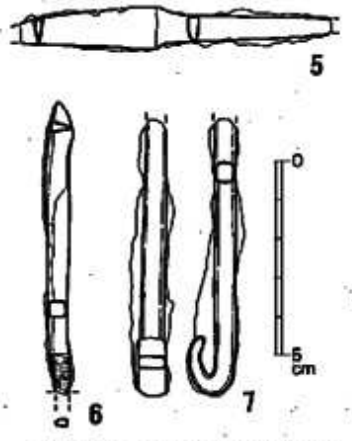
須恵器杯蓋（1）　身受けのかえりをもたない杯蓋で，端部はわずかに内彎する。回転ヘラケズリされる外天井に扁平な宝珠形つまみが付く。復原口径16.4cm，器高3.5cmの大きさ。胎土に砂粒をわずかに含み，茶灰色に焼成される。フク土上部出土。

土師器甕（2～4）　いずれも口縁部破片で，復原口径では2が22cm，3は16cm，4は14cm程の大きさ。口縁部は外反し，3・4の胴部は内外面ともにナデ調整である。胎土に細砂粒を含み淡褐色に焼成されている。2はカマド付近，3は東隅部，4はカマド内から出土した。

鉄刀子（5）　先端部を欠くが，現存長8.0cmで，うち刃部の現存長3.5cmを占める。刃部背



第182図　10号住居跡出土土器実測図（1/3）



第183図　10号住居跡出土鉄器実測図（1/2）

側の厚みは2㎜強，関部の幅は1.1cm，茎部は4㎜～10㎜，厚さ2～3㎜を測る。

鉄鏃（6）　基部端を欠き，現存長7.5cm，篦被部は約1cm残る。身は4～5㎜の角棒状で，先端は短い片刃である。

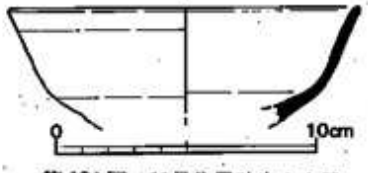
鈎状鉄製品（7）　一方の端部を欠くが，現存長7.1cmで，欠損部分では直径5㎜の丸棒状を呈し，先端側では厚さ4㎜，幅7㎜程の板状に変わりながら，約1.5cm折れ曲がり先端が薄くなる。

11号住居跡（第185図）

調査区中央部南東寄りのB9区に検出された住居跡で，上縁では一辺3.1～3.5mのほぼ方形プランを呈し，主軸方向が略N48°Wの住居跡である。後世の削平を受けて深さ約0.1m，やや堅緻な床面は約9.1m²の広さをもつ。床面には，主柱穴と思われるピットが3穴あるが対応する北側のピットは検出できなかった。径25～45cm，深さ5～20cmの大きさである。住居跡内から若干土器片が出土した。

出土遺物（第184図）

須恵器杯　口縁部がわずかに外反する杯で，底部を欠く。復原口径13.6cm，残存器高6.2cmの大きさ。底部側は回転ヘラケズりされる。砂粒を胎土に含み，灰色に焼成されている。

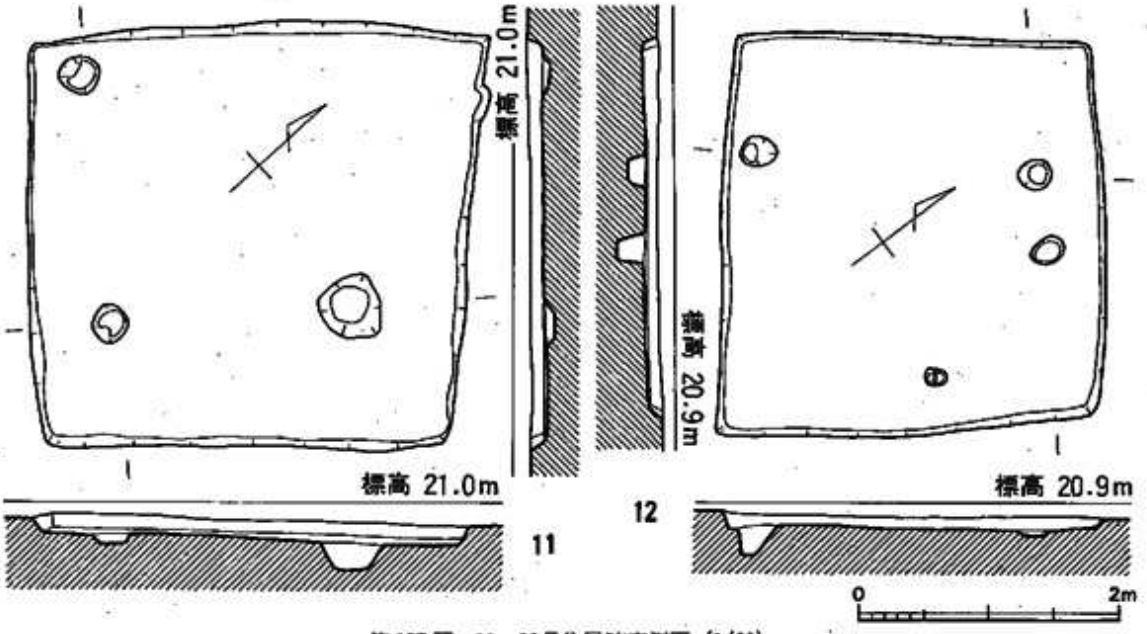


第184図　11号住居跡出土土器実測図（1/3）

この土器には，7世紀後半頃の年代が与えられよう。

12号住居跡（図版74－1，第185図）

調査区中央部南寄りのF9・F10区に検出された住居跡で，上縁では一辺2.7～3.1mのほぼ方形プランを呈し，主



第185図　11・12号住居跡実測図（1/60）

軸方向が略N52°Wの住居跡である。後世の削平を受けて深さ約0.1m，やや堅緻な床面は約8.3m²の広さをもつ。床面には，柱穴状ピットが4穴あるが主柱穴としてはうまく対応しない。径15～25cm，深さ5～20cmの大きさである。住居跡内からは若干土器片が出土したが，住居跡東隅の30cm外側に土師器杯が数点まとまって出土している。

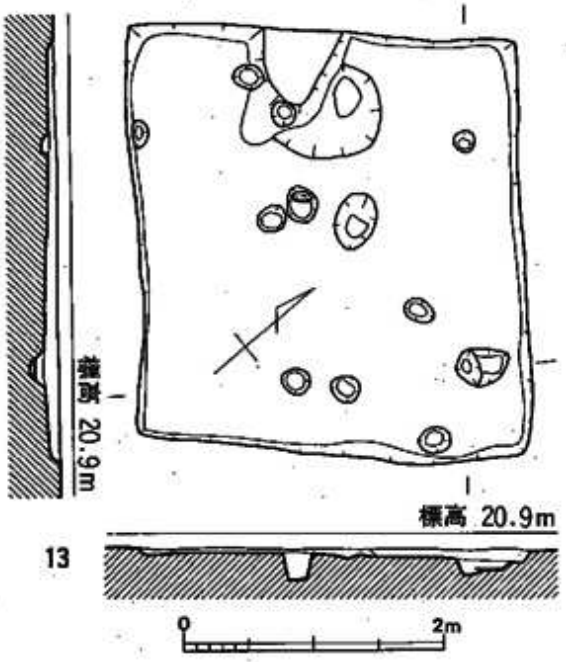
第186図　12号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第186図）

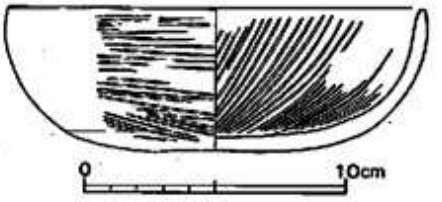
土師器甕　復原口径15cmの，外反する口縁部をもつ甕で，器面が風化して調整手法は不明。胎土に砂粒・金雲母・角閃石を含み，黄褐色に焼成されている。

13号住居跡（図版74－2，第187図）

調査区中央部のF10・F11区を中心に検出された住居跡で，上縁では一辺3.0～3.2mの不整方形プランを呈し，主軸方向が略N49°Wの住居跡である。後世の削平を受けて深さは5～10cm，床面は約8.8m²の広さをもつ。北西側の壁の中ほどに，幅80cm奥行き60cm，高さ5cm程の高まりがあり，カマドを想定して精査したが焼土などの痕跡がみられない。床面には，柱穴状ピットが13穴あるが主柱穴としてはうまく対応しない。径15～40cm，深さ5～20cmの大きさである。住居跡内からは若干土器片が出土した。



第187図　13号住居跡実測図（1/60）



第188図　13号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（図版76－2，第188図）

土師器椀　底部は平坦でそのまま内彎して口縁部に移る器形の椀で，復原口径16.0cm，器高3.9cmの大きさ。内外面ともにヘラミガキされ，内面は暗文になる。胎土に砂粒・金雲母・角閃石を含み，茶褐色に焼成されている。

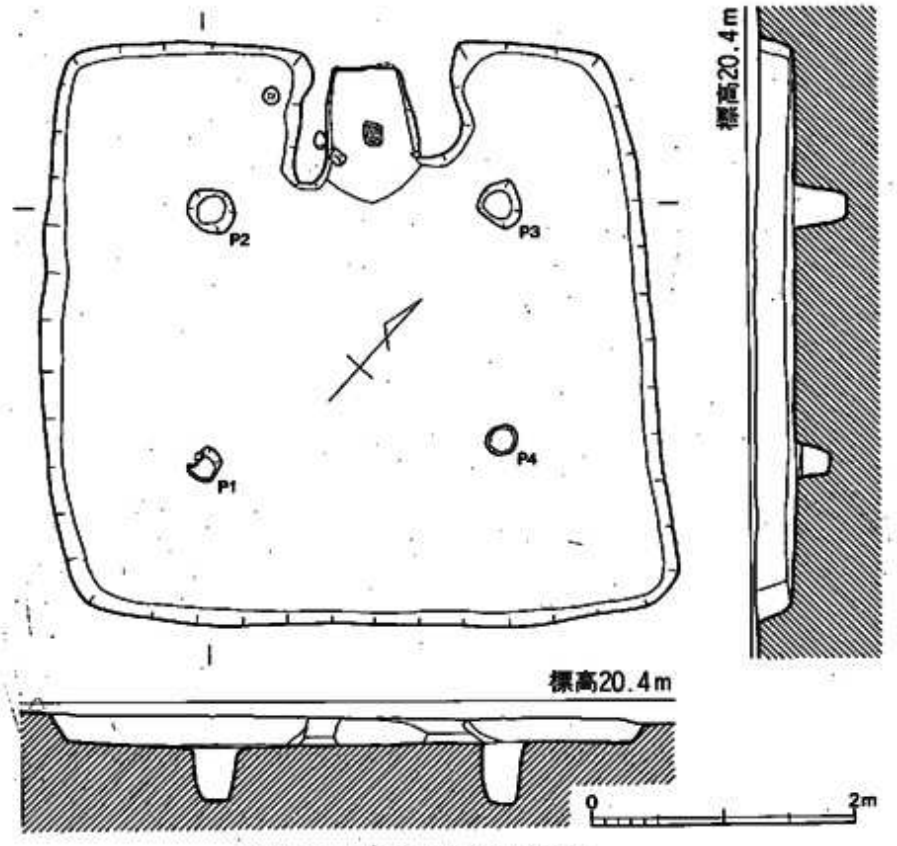
14号住居跡（図版75－1，第189図）

調査区中央部北寄りのB15・B16区を中心に検出された住居跡で，上縁では一辺4.2～4.6mの不整方形プランを呈して，北西辺にカマドが付設されている。主軸方向は略N46°Wである。後世の削平を受けて深さ約0.2～0.3m，やや堅緻な床面は約18.0m²の広さをもち，カマド部分が約1.4m²を占める。床面には，主柱穴と思われるピットが4穴ある。径20～30cm，深さ15～45cmの大きさで，P1には柱を固定させる詰め石が残っている。住居跡内からはカマドの左右から土器が出土し，カマドの西側では床面からやや浮いて，東側ではほぼ床面でP3の上に被るように出土した。

カマド（図版75－2，第190図）　床面を少し掘り込んで，縁に厚み30～50cm程の壁を築き，長さ・最大幅65cm程の広さの燃焼室を造っている。堅緻に焼けた天井や壁の崩壊した塊が燃焼室内にみられたが，燃焼部床面はさほど堅緻ではない。壁体内に石が含まれるものの，支脚や煙道の施設は検出されず，床面中央の焼土塊下に，木炭・焼土の混じる柱状の堆積があり，支脚石の抜け跡の可能性があろう。

出土遺物（図版76－2，第191図）

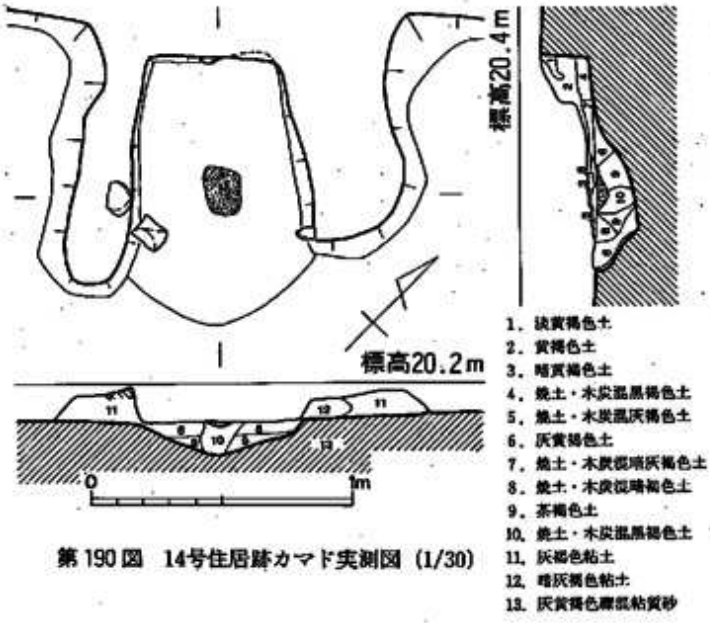
須恵器杯蓋（1）　身受けのかえりをもたない杯蓋で，ヘラ切り離しの後未調整の天井部はやや平坦だが，口縁部へは内彎する。口径13.3cm，器高3.8cmの大きさ。胎土に細砂粒を多く含



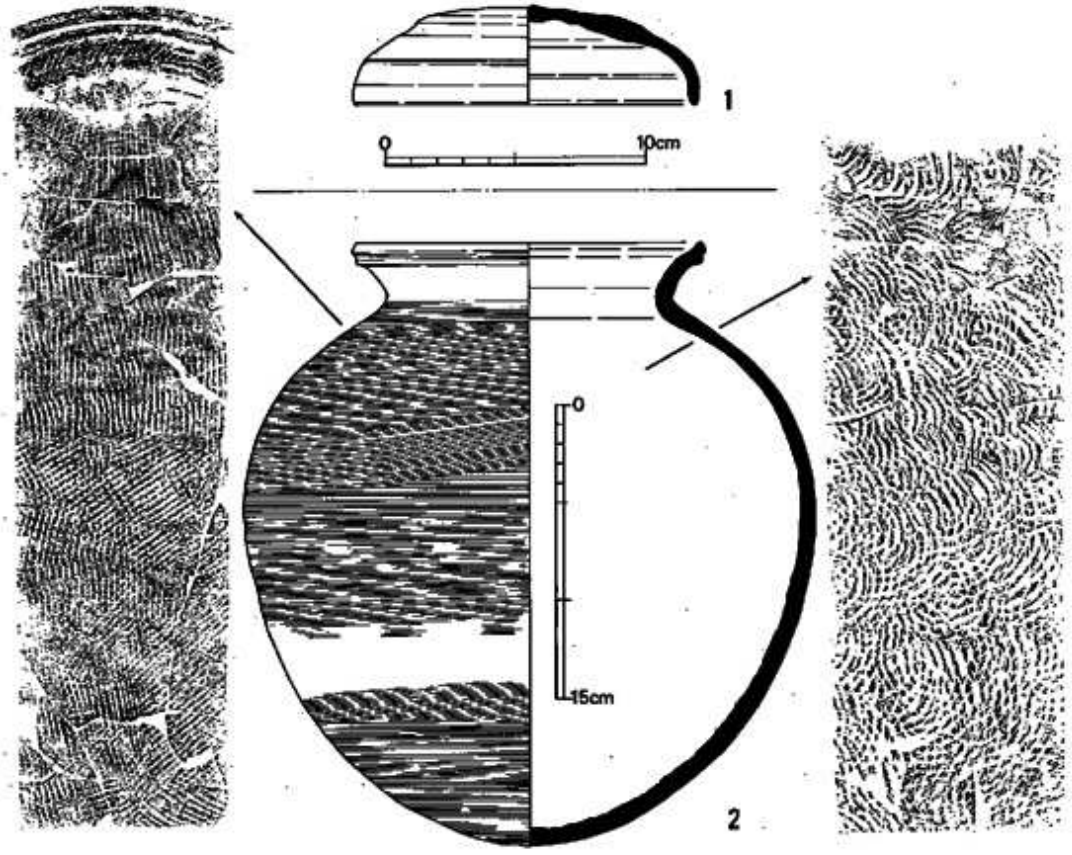
第189図　14号住居跡実測図（1/60）

み，茶灰色に焼成されている。

須恵器甕（2）　倒卵形に膨らむ胴部と口縁部の外反する甕で，復原口径18.3cm，器高31.0cm胴最大径29.1cmの大きさ。口縁端部は内彎気味になり，口唇部下に三角凸帯を巡らせる。胴部外面は平行タタキの後カキ目調整され，内面は同心円当て具痕がみられる。胎土に砂粒を含み，灰色に焼成されるが，胴下半はやや軟質の焼成で灰褐色を呈している。



第190図　14号住居跡カマド実測図（1/30）



第191図　14号住居跡出土土器実測図（1/3・1/4）

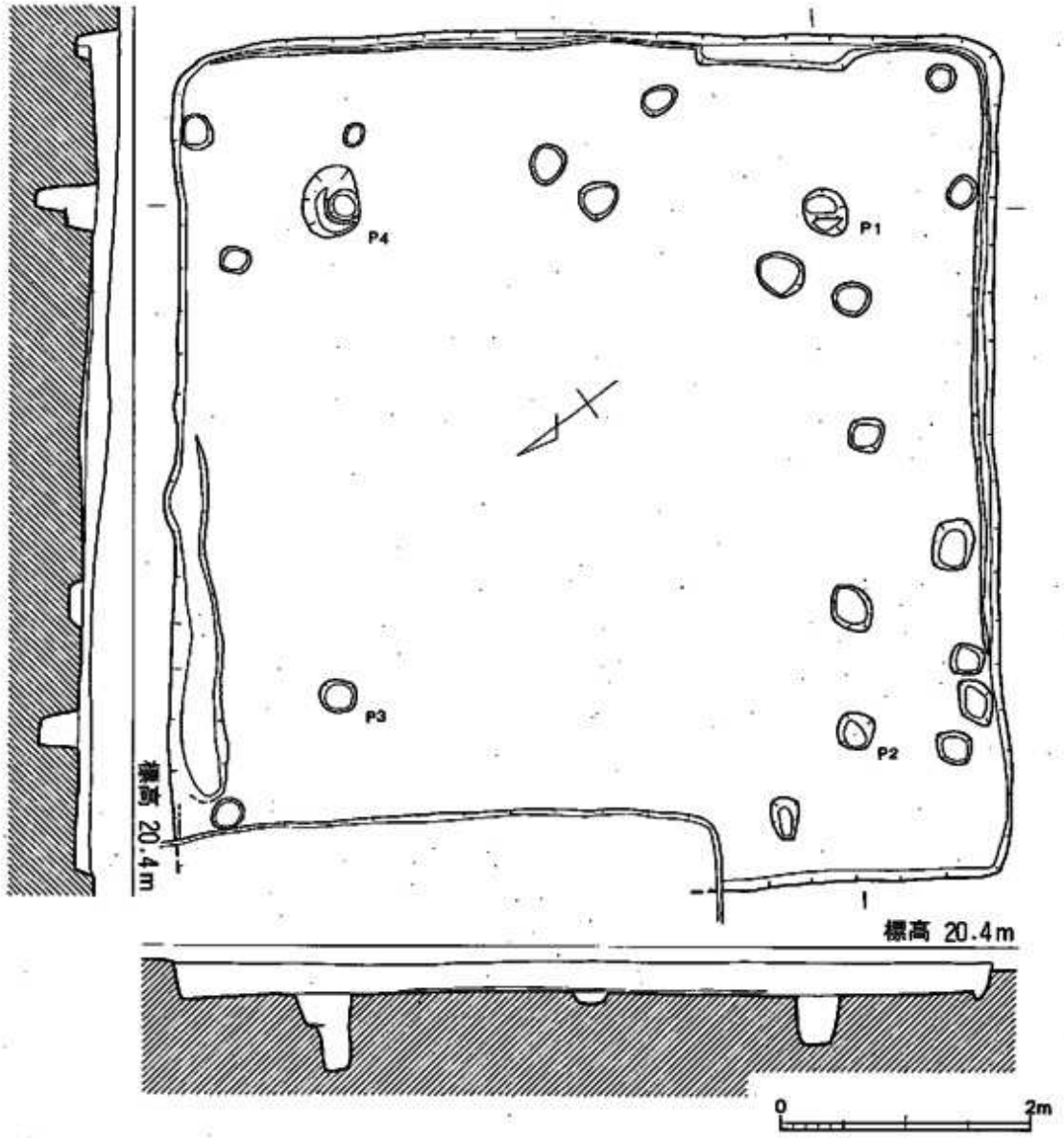
15号住居跡（図版77－1，第192図）

調査区北部のI20・I21区を中心に検出された，上縁で一辺6.6mの方形プランを呈する住居跡で，北西部の一部を16号住居跡によって切られる。主軸方向は略N53°Wである。周壁は南側で深さ約0.25m，やや堅緻な床面は約40m²の広さをもち，本来は約42m²あったものと推定される。カマド及び焼土は検出できなかった。やや堅緻な床面には，柱穴状ピットが22穴あり，P1～4が主柱穴であろう。径25～50cm，深さ30～60cmの大きさである。主柱穴以外のピットは径20～30cm，深さ5～20cm程のもので，住居跡内堆積土中での識別をなし得なかったが，あるいは掘立柱建物に伴うような時期の下るピットも含まれている可能性があろう。

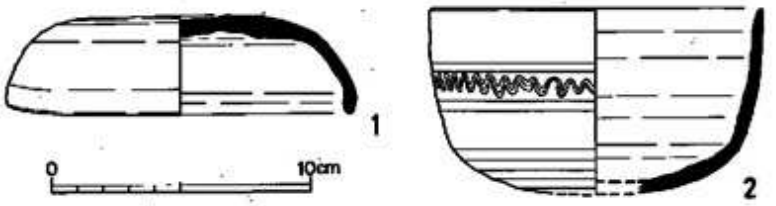
住居跡内から数点の土器片が出土した。堆積土上部のものは包含層として扱ったこともあり，量は少なく，いずれもほぼ床面に近い位置から出土した。

出土遺物（図版78－1，第193図）

須恵器杯蓋（1）　身受けのかえりをもたない杯蓋で，端部はわずかに内彎する。回転ヘラ



第192図　15号住居跡実測図（1/60）



第193図　15号住居跡出土土器実測図（1/3）

ケズりされる天井部は平坦でむしろ少し凹む。口径13.5cm，器高3.8cmの大きさ。細砂粒を胎土に含み，暗灰色に焼成されている。

須恵器椀（2）　丸底の底部からそのまま口縁部に立ち上がる器形の椀。口縁端部は直線的でほとんど反らない。口縁部下に巡る2条の沈線間に波状文描かれ，底部は回転ヘラケズりされている。細砂粒を胎土に多めに含み，灰色に焼成されている。

16号住居跡（図版77－2，第194図）

調査区北部のI20·I21区を中心に検出された住居跡で，15号住居跡と19号住居跡に接して，両方の住居跡を切っている。上縁では短辺4.5～4.6m，長辺5.4mの長方形プランを呈して，短辺の北東辺にカマドが付設される。主軸方向は略N35°Eである。検出面から床面までの深さ約0.1m，やや堅緻な床面は約24.6m²の広さをもち，カマド部分が約1.1m²を占める。やや堅緻な床面では，四隅に主柱穴が穿たれている。径約40cm，深さ10～50cmで，P3・4が浅い。

住居跡内から数点の土器片が出土したものの，1の須恵器杯蓋以外はいずれも床面からやや浮いた状態であった。

カマド（第195図）　は床面を少し掘り込んで，縁に厚み20cm程の壁を築き，長さ70cm，最大幅65cm広さの燃焼室を造っている。燃焼室の部分には濃い暗褐色土が堆積していたが，焼けた壁と中央に若干焼土が確認できたが，この下に木炭を多く含む堆積土があり，焼土は天井の陥没したものと思われたが，床面に焼けた面はなかった。また，支脚や煙道の施設は検出されなかった。燃焼室の左側奥から土製模造鏡が出土した。

出土遺物（図版78－1，第196図）

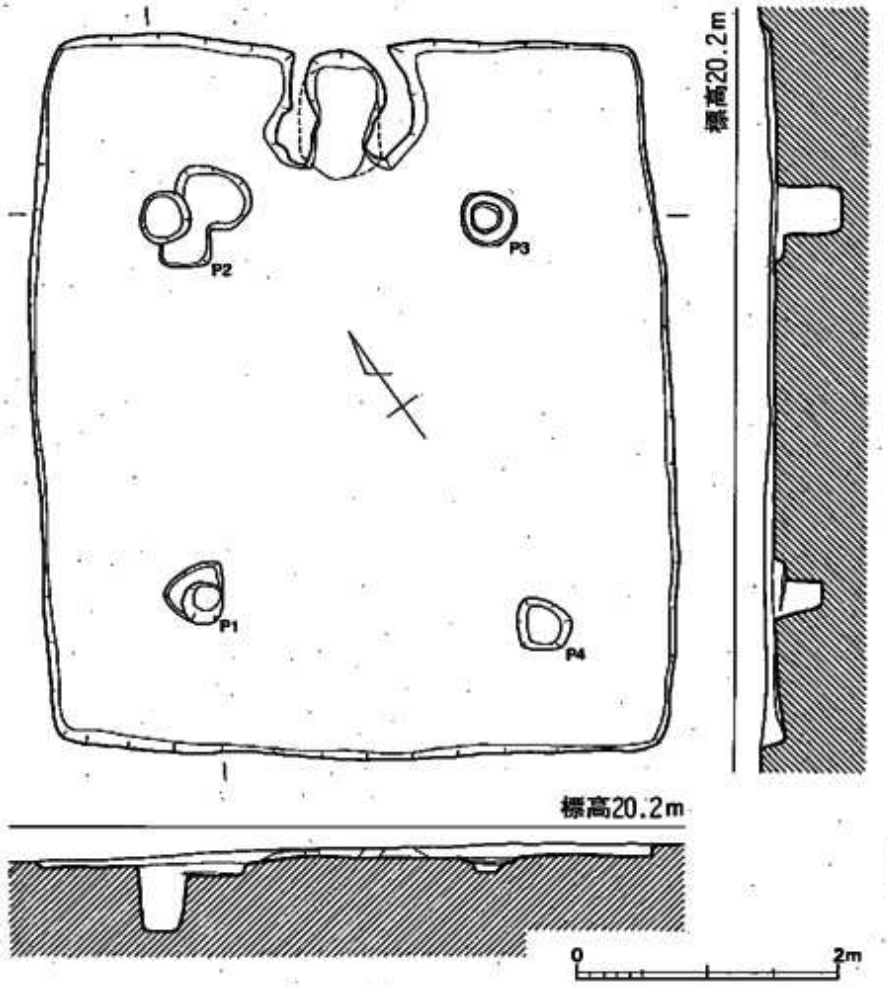
須恵器杯蓋（1）　身受けのかえりをもたない杯蓋で，復原口径13.3cm，器高4.0cmの大きさ。外天井は回転ヘラケズりされる。ヨコナデ調整の口縁部はわずかに内彎する。胎土に細砂粒を含み，灰色に焼成される。

須恵器杯身（2）　蓋受けのかえりをもつ杯身片で，口径は復原し難い。胎土に細砂粒をやや多く含み，灰色に焼成される。

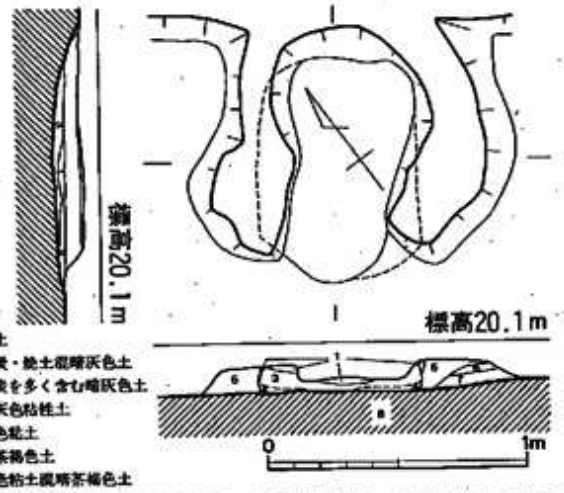
須恵器破片（3・4）　口縁部の破片のみ図示したが，平瓶類か壺の口縁部であろうか。わずかに内彎気味だが，口縁下に浅い沈線状の凹みが巡る。胎土には，3は細砂を多く含むが，4はほとんど含まない。

土師器甕（5・6・8～11）5・6は胴部が大きく膨らむ甕で，口縁部は外反する。5は復原口径15.0cmの大きさで，器面はナデで消されているが，内面の一部にハケ目が残る。細砂粒・角閃石を含み，茶褐色に焼成されている。6は復原口径18.8cmの大きさで，胴部内外面ともにハケ目調整される。細砂粒・金雲母を胎土に含み，淡黄褐色に焼成されている。

8～11は胴部のあまり膨らまない甕で，口縁部は緩く外反する。口径は11.5～14.5cmと小形



第194図
16号住居跡実測図
(1/60)



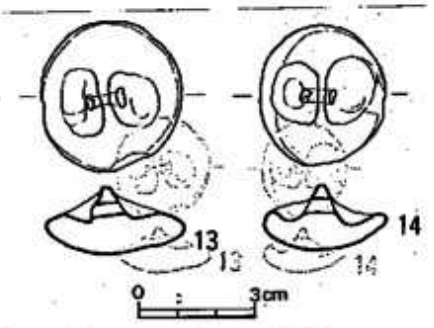
1．焼土
2．木炭・焼土混暗灰色土
3．木炭を多く含む暗灰色土
4．暗灰色粘性土
5．黄色粘土
6．暗茶褐色土
7．黄色粘土混暗茶褐色土
8．暗茶褐色粘性土

第195図　16号住居跡カマド実測図（1/30）

である。8・9・11はナデ調整，10の胴部外面はハケ目調整，内面はヘラケズリされている。細砂粒・角閃石を胎土に含むが，10には褐色粒も含まれる。

土師器甑（7・12）　破片がうまく揃わないが同一個体で，口縁部と底部を図示する。口縁部は復原口径28.4cm，底部の裾径11.5cmの大きさで，30cm弱位の高さであろう。口縁部は少し外反し，肥厚気味で，内外面ともにハケ目調整される。底部は裾にかけてわずかに内彎するが，内外面ともに

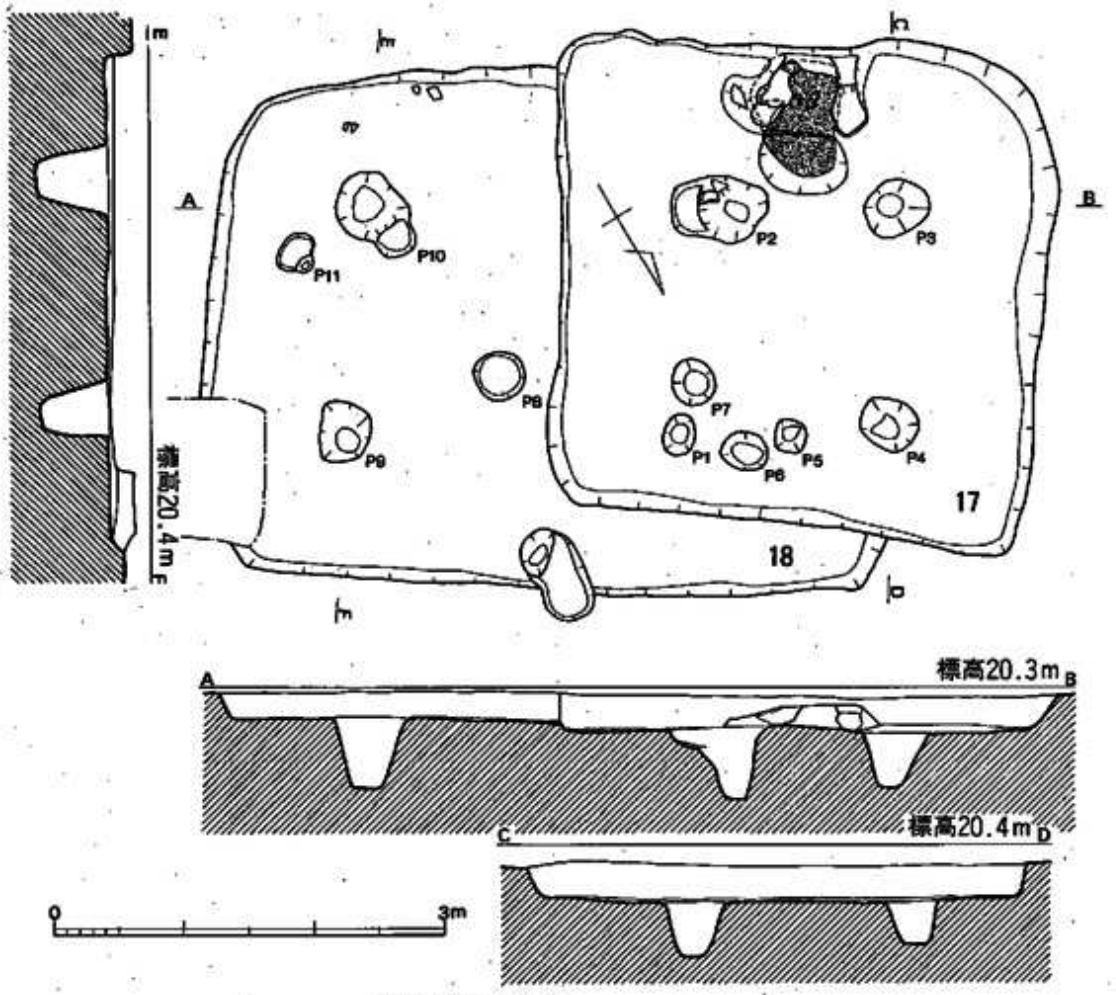
第196図　16号住居跡出土土器実測図（1/3）



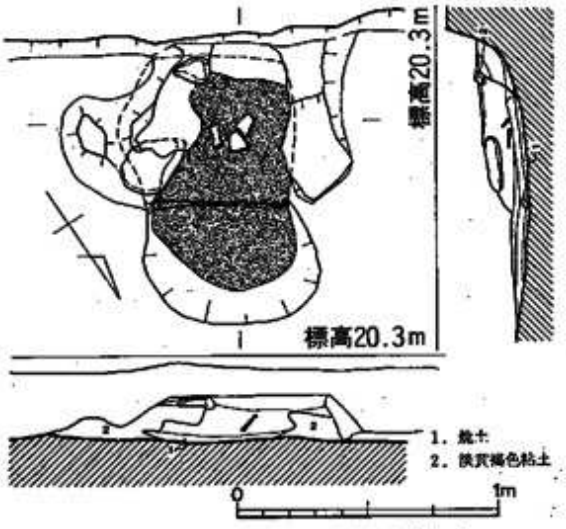
第197図
16号住居跡出土土製品実測図（1/2）

ハケ目調整される。胎土には砂粒・角閃石ともに多めに含み，明黄褐色ないし明茶褐色を呈している。

土製模造鏡（13・14）　カマド内から出土した。背面は指先でつまみ出した凹みと突出部ができ，突出部に小孔があけられて，鏡の鈕を表し，表面は膨れて鏡面を表現している。砂粒・金雲母を胎土に含み淡褐色に焼成されている。13は長径3.8cm，短径3.1cm，厚み1.8cmで，14は長径3.6cm，短径3.2cm，厚み1.7cmの大きさ。



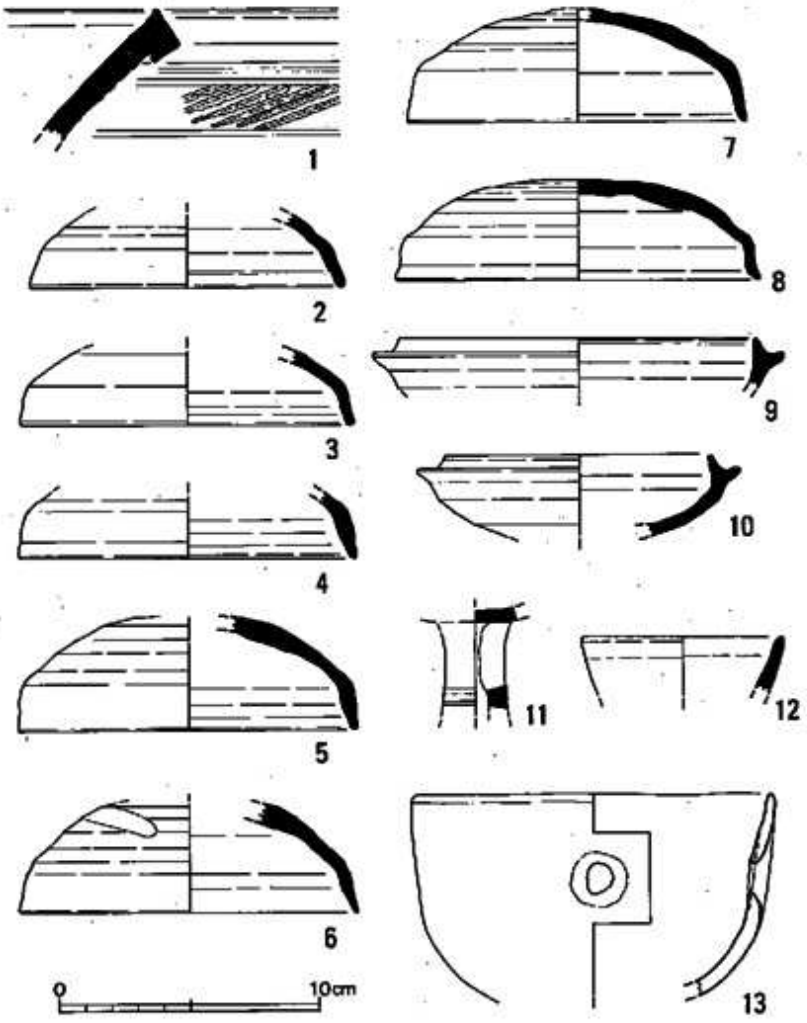
第198図　17・18号住居跡実測図（1/60）



第199図　17号住居跡カマド実測図（1/30）

17号住居跡（図版79－1，第198図）

調査区中央部西寄りのK13・K14区を中心に検出された住居跡で，重複した18号住居跡を切っている。一辺約3.8mの不整方形プランを呈して，南西辺にカマドが付設される。主軸方向は略N34°Eである。検出面から床面までの深さ0.2m強，やや堅緻な床面は約13.1m²の広さをもち，カマド部分が約0.8m²を占める。やや堅緻な床面では，柱穴状



第200図　17号住居跡出土土器実測図（1/3）

第201図
17号住居跡出土鉄器
実測図（1/2）

ピットが7穴あり，四隅に相当するP1～4が主柱穴であろう。径約30～50cm，深さ40～55cmで，P5は浅い。

住居跡内から数点の土器片が出土したものの，いずれも床面からやや浮いた状態であった。

カマド（図版79－2，第199図）　は床面を少し掘り込んで，縁に厚み20～30cmの壁を築き，長さ60cm，最大幅65cm程の広さの燃焼室を造っているが，壁・天井などに使用されて崩れたと思われる黄色粘土は広い範囲にわたっていた。燃焼室の部分には，焼土塊・木炭が混在した堆積土があり，床面・側壁部は堅く焼けている。中央部に，支脚に使用されたものか，高杯柱状部破片と土師器片がみられた。なお，煙道施設は検出されなかった。

出土遺物（図版79－3，第200図）

重複する18号住居跡の遺物が，調査中に誤って混入されて，17号住居跡出土の遺物と確実に区別できるものが限られる。

須恵器甕（1）　外反する口縁部破片で，コ字形に折り返したように肥厚して，上方につまみあげている。口縁下に2条の沈線と板小口の連続圧痕がみられる。細砂粒・角閃石を胎土に含み，暗灰色に焼成されている。

須恵器杯蓋（2～8）　身受けのかえりをもたない杯蓋。1～7は口縁部が直線的に開き，外天井は回転ヘラケズリされている。復原口径12.5cm～12.9cm，器高4.4cm程の大きさ。8は口縁端部で外反し，外天井は回転ヘラケズリされ，やや平坦気味である。復原口径13.9cm，器高3.8cmの大きさ。いずれも胎土に細砂粒を含み，灰色ないし暗灰色に焼成される。

須恵器杯身（9・10）　蓋受けのかえりをもつ杯身片で，復原したかえり部も径は9が13.7cm，10が10.2cm。胎土に細砂粒をわずかに含み，灰色に焼成される。

須恵器高杯（11）　柱状部破片で，2条の沈線を挟んだ上下にヘラ切りの透かし窓が2箇所開けられている。

須恵器破片（12）　口縁部破片で平瓶類か壺の口縁部であろう。わずかに内彎気味に立ち上がる。胎土に細砂粒をわずかに含み，灰色に焼成される。

土師器椀（13）　復原口径14.0cm，残存器高7.8cmの大きさ。口縁部は直に立ち上がる。器面の風化が激しく調整手法は不明で，口縁部下に1箇所みられる穴は，穿孔されたものか，把手の剝落によるものか判断し難い。細砂粒・褐色粒を胎土に含み赤褐色に焼成されている。

鉄　鏃（第201図14）　P4の近くで出土した。細根の鏃で，先端・基部端を欠き現存長7.9cm，幅5mm，厚さ3mmの棒状で，先端側で幅が広くなる。

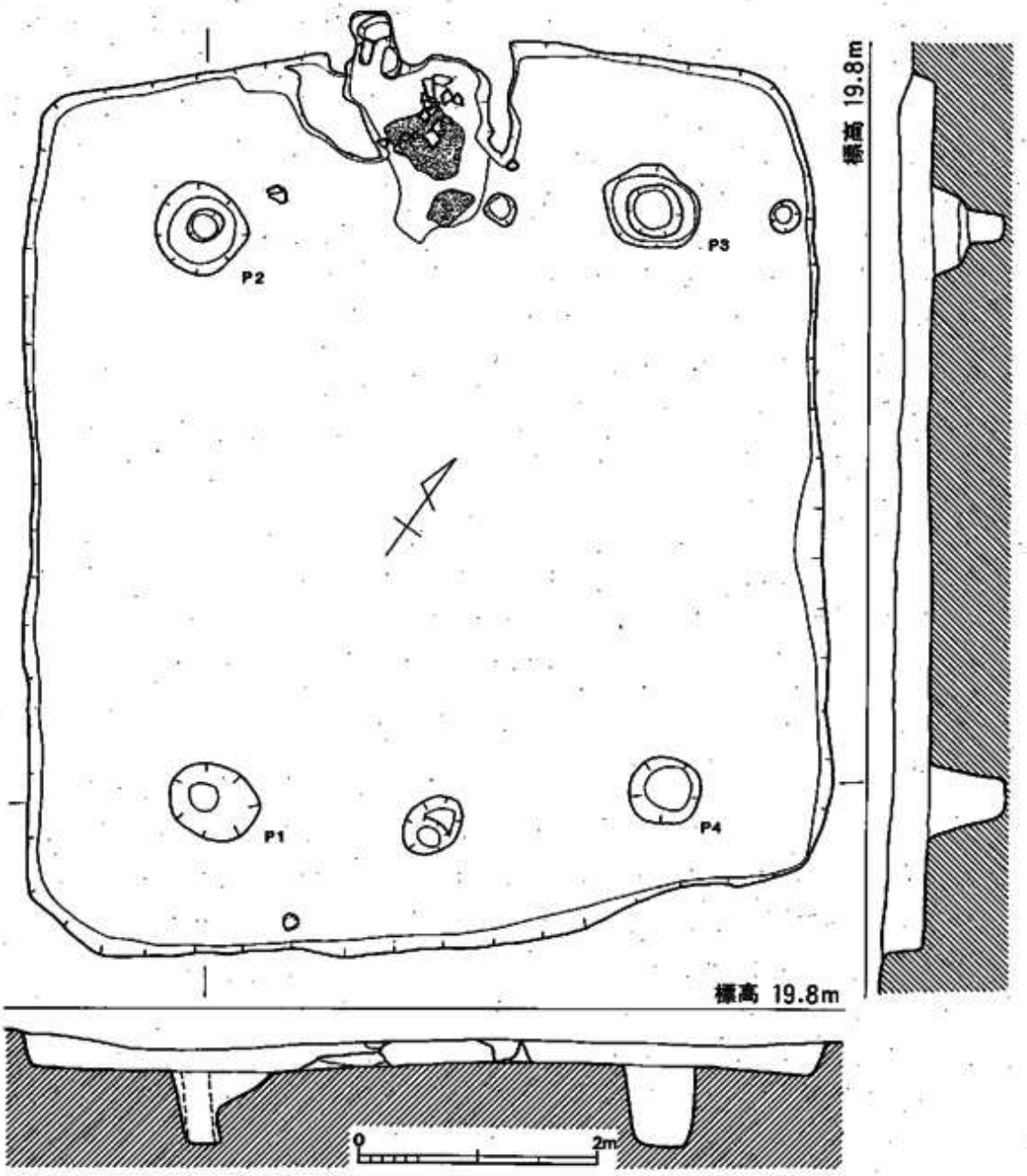
18号住居跡（図版78－2，第198図）

調査区中央部西寄りのJ13・K13区を中心に検出された住居跡で，重複した17号住居跡によって西側が切られ，東隅の一部を試掘トレンチによって失う。短辺約3.7m，長辺約5.0mの不整長方形プランを呈し，主軸方向は略N58°Wである。検出面から床面までの深さ0.2m弱で，やや堅緻な床面は約10.0m²残るが本来は18m²程の広さであったろう。やや堅緻な床面は，17号住居跡の床面より5～10cm高く，柱穴状ピットは4穴あるが，四隅に相当するP9・10と，17号住居跡内のP1・2が重複するものの主柱穴であろう。径約40～50cm，深さ約55cmで，P8・11は浅い。

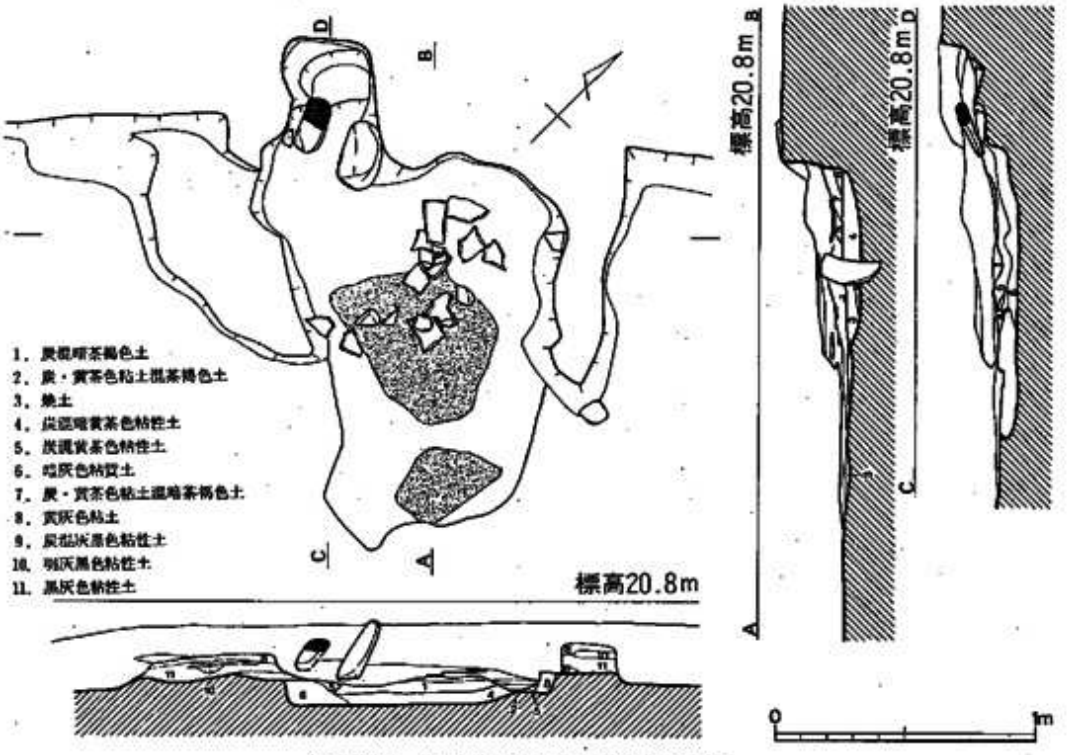
住居跡内から数点の土器片が出土したものの，いずれも床面からやや浮いた状態であった。また，調査中に，誤って17号住居跡の出土遺物に混入させたので，区別を確実にし得る遺物は少なくなり，図示しえない。

19号住居跡（図版80－1，第202図）

調査区北部のJ21・J22区を中心に検出された住居跡で，16号住居跡に，東隅の壁を一部切ら



第202図　19号住居跡実測図（1/60）



第203図　19号住居跡カマド実測図（1/30）

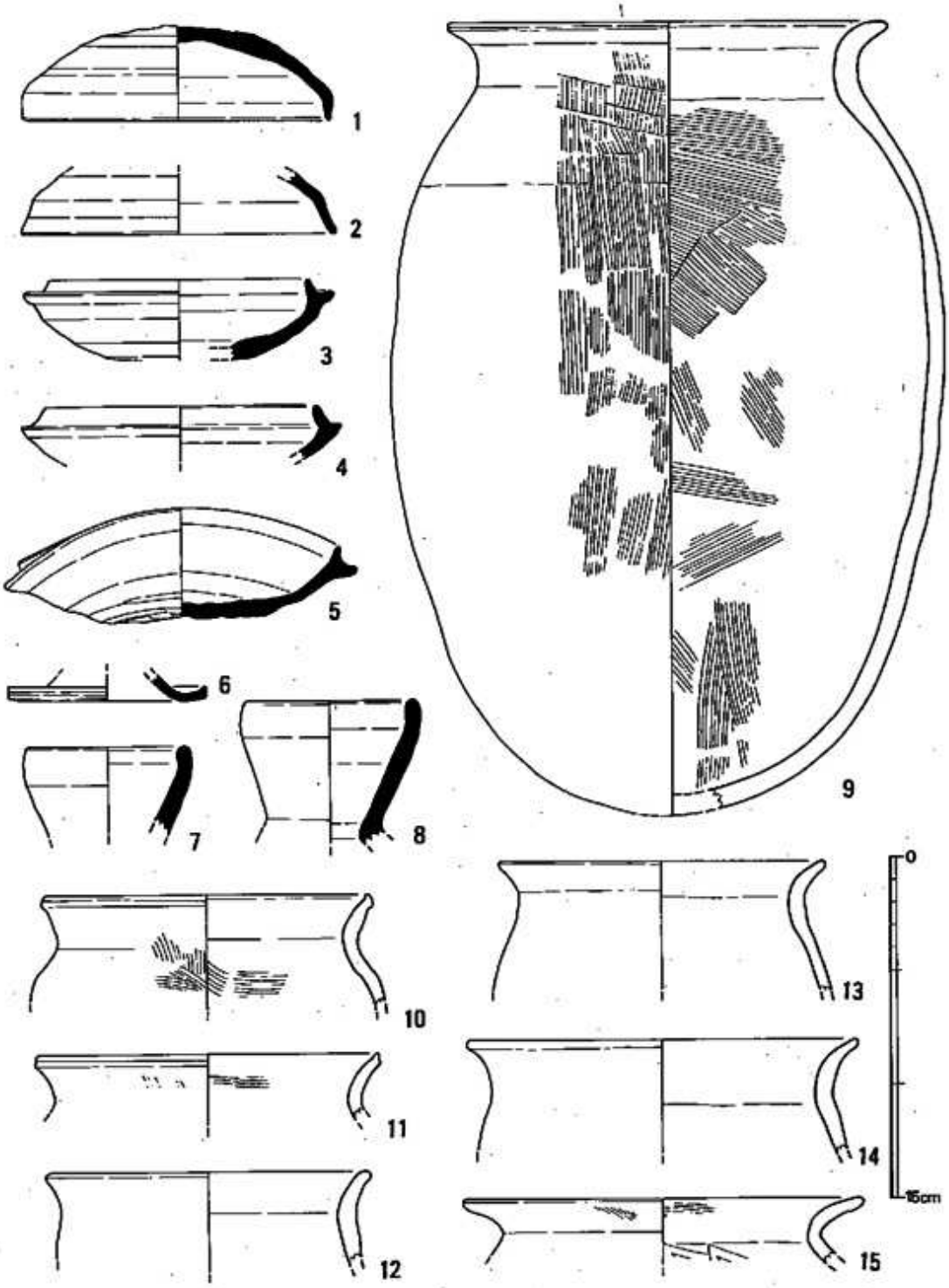
れる。上縁では短辺6.0～6.6m，長辺6.6～7.0mの不整長方形プランを呈して，短辺の北西辺にカマドが付設される。主軸方向は略N39°Wである。検出面から床面までの深さ約0.3m，やや堅緻な床面は約46.0m²の広さをもち，カマド部分が約2.1m²を占める。やや堅緻な床面では，柱穴状ピットが７穴あり，うち四隅のP１～４が主柱穴であろう。径40～70cm，深さ60～70cmで，他のピットは浅い。

住居跡内から土器片と鉄器が出土し，いずれもほぼ床面に近い位置からであった。

カマド（図版80－２，第203図）　は床面を少し掘り込んで，縁に厚み20～50cmの壁を築き，長さ・最大幅80cm程の広さの燃焼室を造っている。燃焼室の部分には，天井や壁の崩壊した焼土塊や焼土片と木炭の混じる暗灰色土が堆積し，土師器甕破片もみられた。中央には，径10cm程で，長さ約23cmの石を立て据えた支脚があり，支脚の手前側の床は堅く焼けた焼土が広がる。また，燃焼室は，支脚の西側すなわち左奥側に広がり，細長い河原石に挟まれるようにして，住居跡掘り方から30cm程飛び出す形に煙道が確認できたが，斜め上方に上がるようである。

出土遺物（図版81，第204～206図）

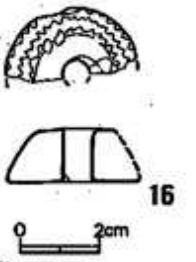
須恵器杯蓋（１・２）　身受けのかえりをもたない杯蓋で，１は復原口径13.6cm，器高4.2cmの大きさ。外天井はヘラ切り離しの後未調整で，ヨコナデ調整の口縁部は内彎する。胎土に細



第 204 図　19号住居跡出土土器実測図（1/3）

砂粒を含み，灰色に焼成される。2は復原口径13.8cmの大きさで，口縁部はわずかに外反する。

須恵器杯身（3～5）　蓋受けのかえりをもつ杯身で，3・4は底部を欠き，5は大きく歪む。口径は3が11.4cm，蓋受けの部分はやや外に折れて復原外径13.5cmを測る。4は口径12.0cm，5は口径13.0cm前後であろう。5の外底面はヘラ切り離しの後未調整のままである。



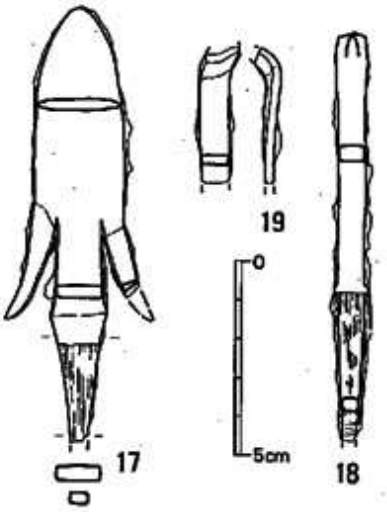
第205図
19号住居跡出土
土製品実測図（1/2）

須恵器高杯（6）　脚台裾の破片で，裾端は反って跳ねる。復原裾外径8.7cmを測る。

須恵器平瓶（7・8）　口縁部破片で，体部の破片は確認できない。口縁部は開くが端部で内彎する。7は復原口径7.0cm，8は口径7.4cm，残存高6.4cmを測る。

土師器甕（9～15）　9は長胴に膨らむ胴部をもち，口縁部が肥厚して強めに外反する。復原口径19.3cm，器高35.0cmの大きさ。内外面ともにハケ目調整されて，外面の下半はナデ消される。胎土に，細砂粒・金雲母・角閃石・褐色粒を含み，明褐色に焼成されている。

10・11は口縁部が外反し，口唇端部はつまみ上げたように尖り，あたかも浅い沈線を巡らせたかのようになる。胴部内外面ともにハケ目調整される。12～14は口縁部がやや緩やかに外反する。器面が風化しているもののナデ調整とヘラケズリされるようである。15は口縁部が強く外反する。口縁部にハケ目が残り，胴部内面はヘラケズリされている。

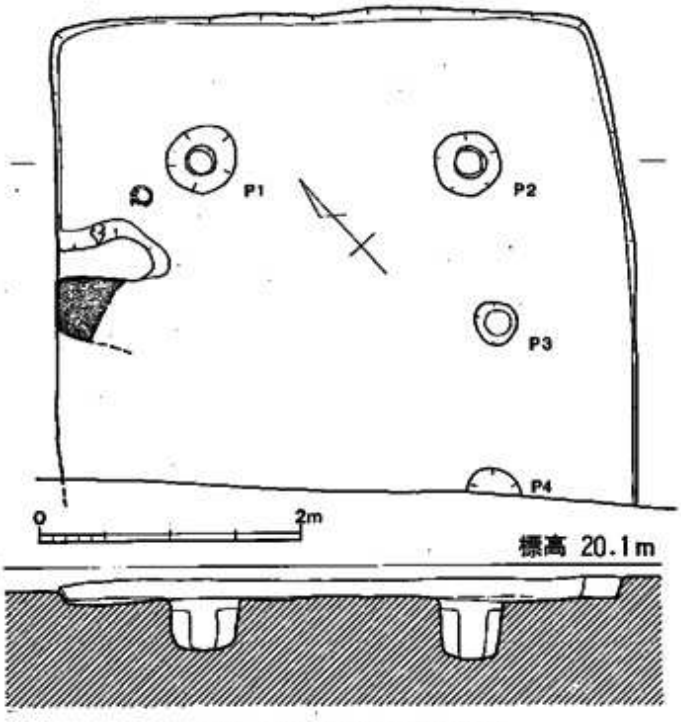


第206図　19号住居跡出土鉄器実測図（1/2）

石製紡錘車（16）　滑石製紡錘車の半欠資料である。直径3.3～3.4cmの円錐形を輪切りしたような形で，狭い方の面は直径1.9cm，高さ1.4cm，孔径6.5mm，重さ11.4gを測る。上下両面は平滑で，外面に線刻された3段の鋸歯文が巡っている。

鉄　鏃（17・18）　17は広根の両丸造りの三角式の鏃，一方の逆刺端と基部端を欠くが現存値で長さ11.2cm，幅3.4cm，身の厚さ3mm。逆刺の切れ込みは長めで，箆被部は短く，12mmと幅広である。基部の木質は2.5cmの長さに残る。18は先端部の錆び膨れが著しく，基部端も欠くが，細根の平造り長頸の類と思われる。現存長10.5cmで，箆被部は幅7mm，厚さ4mm。棘の下端から基部側に残る木質は3.8cmの長さ。

用途不明鉄器（19）　両端を欠き，幅7.5mm，厚さ2.3mmの板状破片で，4.1cmの長さ残るが一部折れ曲がっている。



第207図　20号住居跡実測図（1/60）

20号住居跡

（図版82－1，第207図）

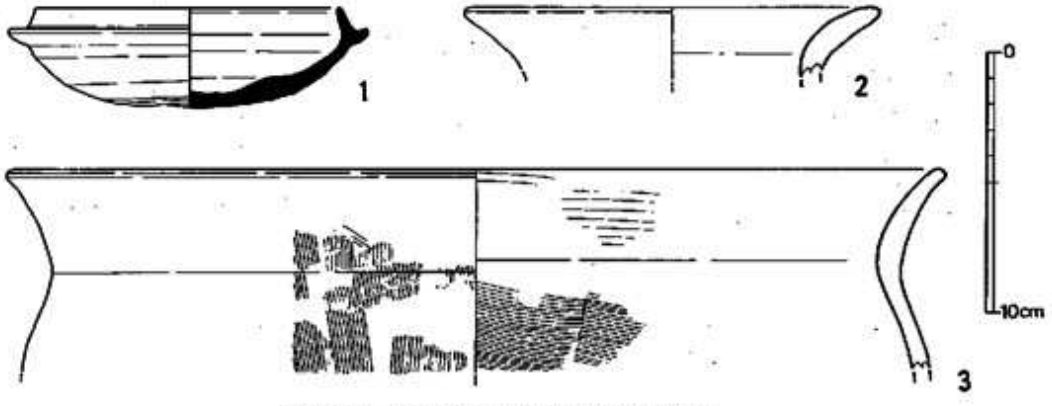
調査区西端部のQ17・Q18区を中心に検出された住居跡で，南西側は調査区域外に及ぶ。上縁では北東辺4.1m，南東辺3.7＋αmを測り，調査区域端の状況からみて4.4m四方のほぼ方形プランの住居跡であろう。北西辺にカマドが付設される。主軸方向は略N48°Wである。検出面から床面までの深さ約0.15m，やや堅緻な床面は約14.7＋αm²の広さをもち，カマド部分が約1.0m²を占める。やや堅緻な床面では，柱穴状ピットが4穴あり，うち北・東・南隅の孔が主柱穴であろう。径40～50cm，深さ40～50cmで，カマドの反対側にあるピットは浅い。

カマドは床面を少し掘り込んで，縁に厚み30～40cmの壁を築き，長さ60cm・最大幅50cm程の広さの燃焼室を造っており，燃焼室床面には，堅く焼けた焼土が検出されたものの，支脚，煙道などの施設は検出されなかった。

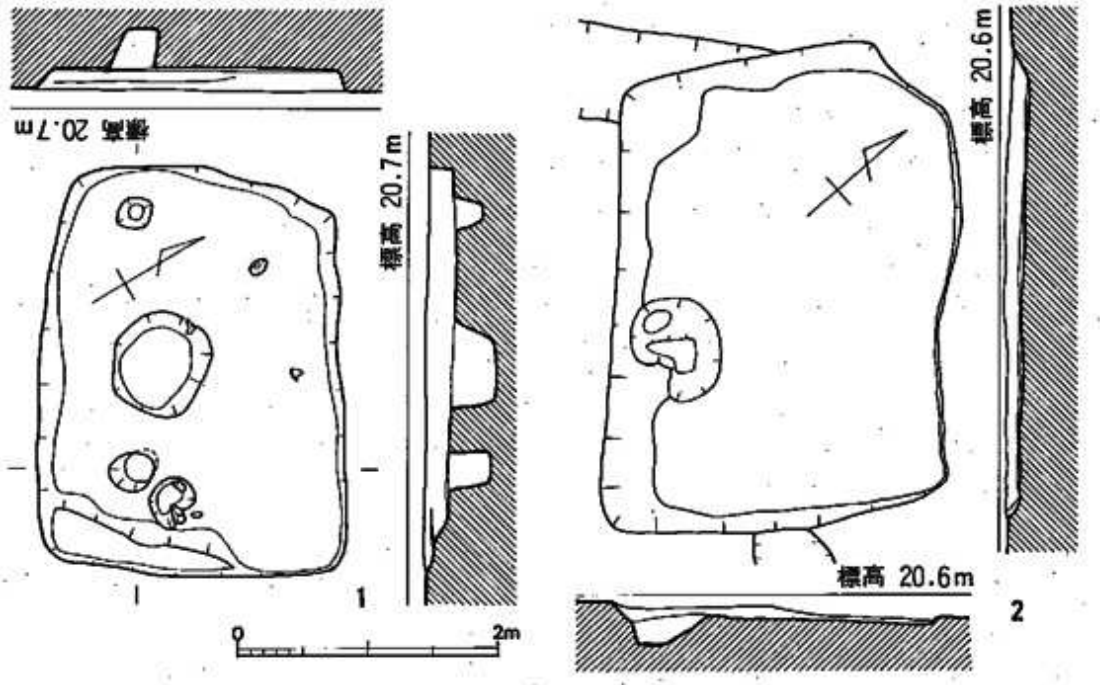
住居跡内からは，カマド袖や床面にほぼ接して土器片が出土した。

出土遺物（図版82－3，第208図）

須恵器杯身（1）　蓋受けのかえりをもつ杯身で，端部はわずかに反る。外底部は回転ヘラ



第208図　20号住居跡出土土器実測図（1/3）



第209図　1・2号竪穴実測図（1/60）

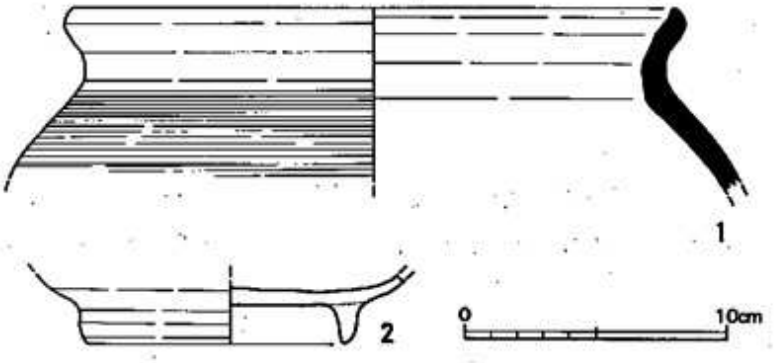
ケズリされ円い。口径11.8cm，器高3.9cmの大きさ。胎土に砂粒をわずかに含み，茶灰色に焼成される。カマドとピットの間から出土した。

土師器甕（2・3）　いずれも口縁部破片で，2は復原口径16cmで，口縁部は肥厚して強く外反する。3は復原口径36cmの大きさで，口縁部はやや緩やかに外反する。胴部内外面ともにハケ目調整されている。

2　竪　穴

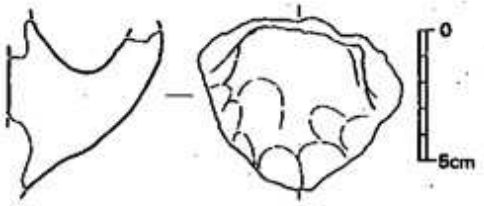
1号竪穴（図版82－2，第209図）

10号住居跡の北東方に検出された。長辺約3.0m，短辺約2.3mの竪穴で，主軸方位はN60°W。



第210図
1号竪穴出土土器実測図（1/3）

検出面から床面までの深さは0.2mを測る。南側端には長さ1.4m，幅0.1～0.4mの，床面より0.1m高く，平坦なテラス部分がある。床面には柱穴状のピットが4穴あり，中央部の穴が径80cm，深さ35cmと他の穴よりも大きい。



第211図　2号竪穴出土土器実測図（1/3）

出土遺物（図版82－3，第210図）

須恵器甕（1）　口縁部が外反し，端部はつまみ上げて内彎気味。復原口径24.0cmの大きさで，胴部外面は平行タタキの後カキ目調整され，内面に同心円当具痕がみられる。砂粒・角閃石を胎土に含み，灰黄褐色に焼成されている。

土師器椀（2）　高台部の破片で，高めで直に立つ高台は径10.4cmを測る。胎土に細砂粒・褐色粒を含み明茶褐色に焼成されている。

2号竪穴（第209図）

1号竪穴の北東方に検出された。北東側の削平が著しい。長辺約3.4m，短辺約2.6mの竪穴で，主軸方位はN49°W。検出面から床面までの深さは0.1m強で，壁は傾斜をもつ。床面はやや堅緻で，南西壁に接した床面に，径60cm，深さ20cm程の柱穴状のピットがある。

出土遺物（図版82－3，第211図）

土師器把手　床面から出土したが，やや扁平な牛角状把手の破片で，甕ないし甑の胴部に挿入されていたものであろう。ナデ調整されるが，指圧痕が残る。細砂粒を胎土に含み，明褐色に焼成されている。

3　掘立柱建物

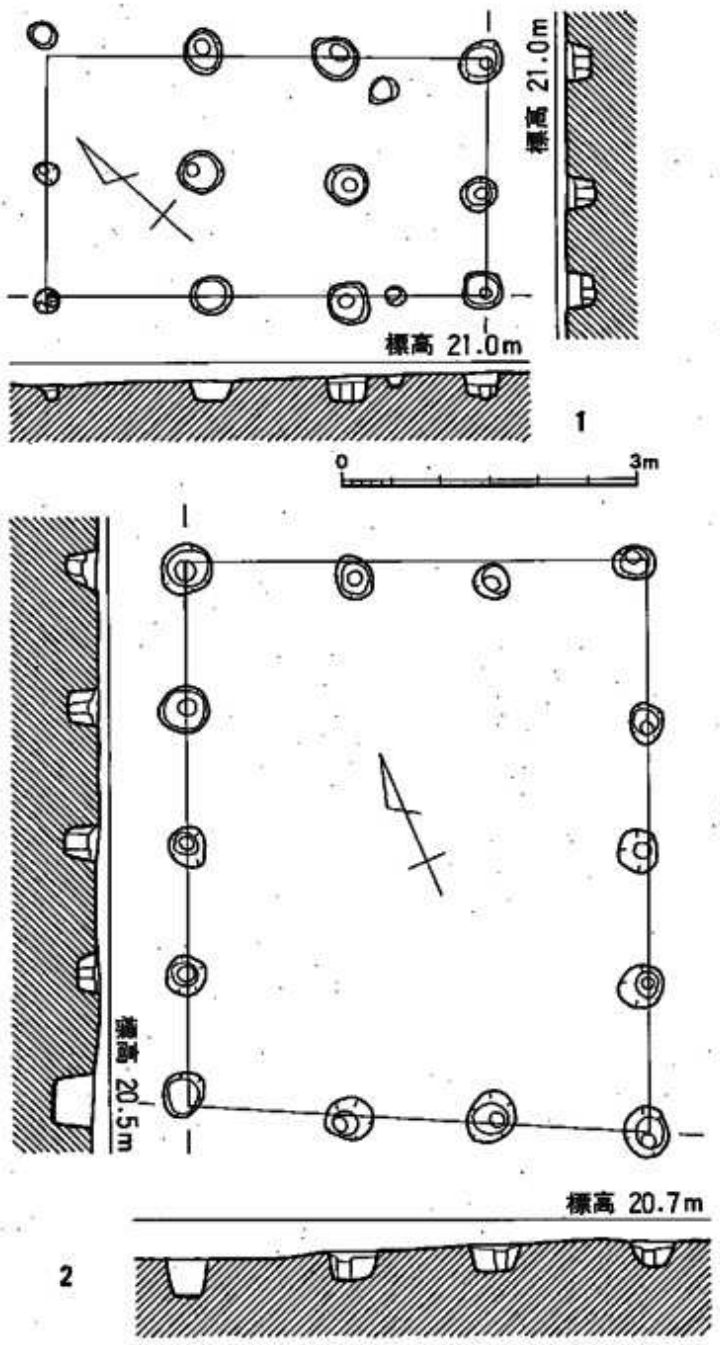
遺構配置図にみるように，山崎遺跡では多数の柱穴状ピットが検出されたが，河原石を多く含む堆積土での遺構検出作業は難航し，検出し得なかったピットも無いとは言えない。したがって，この項で触れる14軒の掘立柱建物以外にも建物の存在した可能性は高い。

なお，一覧表の柱間距離は図の方向に対応し，梁行きは表の左側＝図の北西若しくは南西側での距離，桁行は上が北東若しくは北西側での距離を表し，（　）は中間の柱間距離を，－は計測不能を示している。

1号掘立柱建物（図版83－1，第212図）

8号住居跡の西方で検出された。2×3間の建物か，若しくは北西側に庇をもつ2×2間の建物であろう。2×2間の場合は総柱の梁行2.4m，桁行2.9mだが，2×3間の場合は総柱の梁行2.4m，桁行4.5mの規模で，主軸方位はN41°30′Wである。ほとんどの柱穴で直径15cm前後の柱痕を検出したが，柱穴は直径15～40cm，深さ15～30cm前後である。

2号掘立柱建物（図版83－2，第212図）



第212図　1・2号建物跡実測図（1/80）

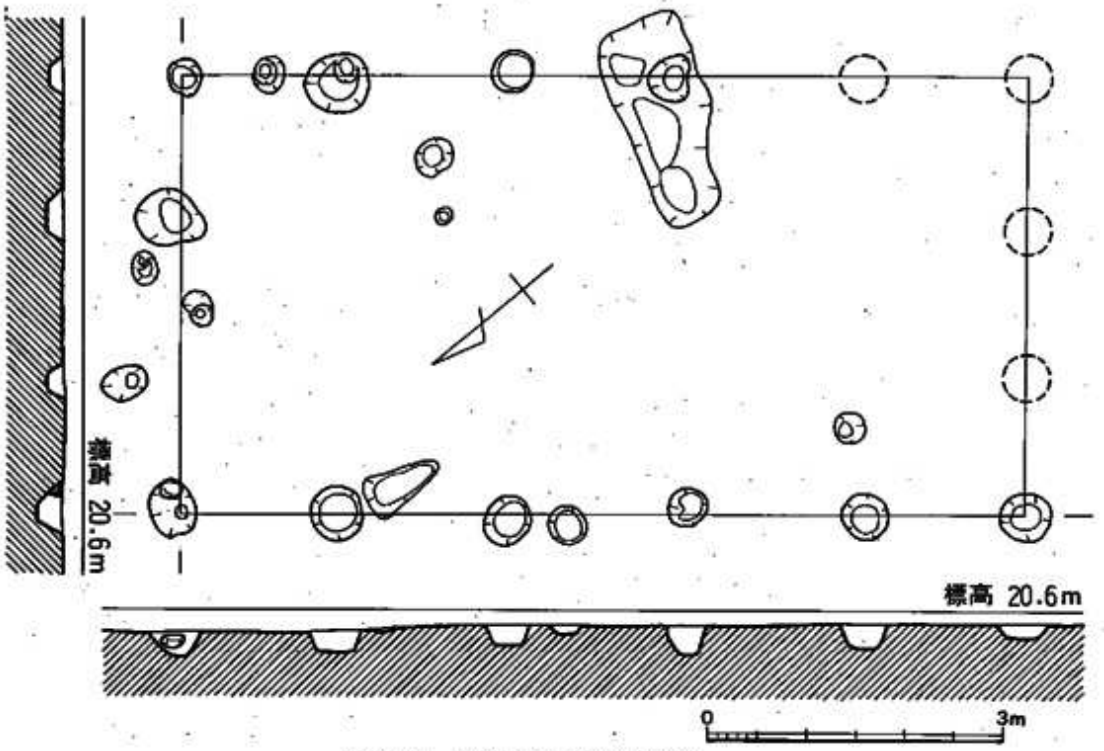
5号住居跡の約10m西方で検出された。3×4間の建物で，梁行4.7m，桁行5.4～6.0mの規模で，主軸方位はN23°30′Eである。ほとんどの柱穴で直径15cm前後の柱痕を検出したが，柱痕の芯間での桁行では5.6mが中庸の距離となる。柱穴は直径35～50cm，深さ20～40cm前後である。西隅の柱穴から土師器小片が若干出土したものの，図示しえない。

3号掘立柱建物（図版84－1，第213図）

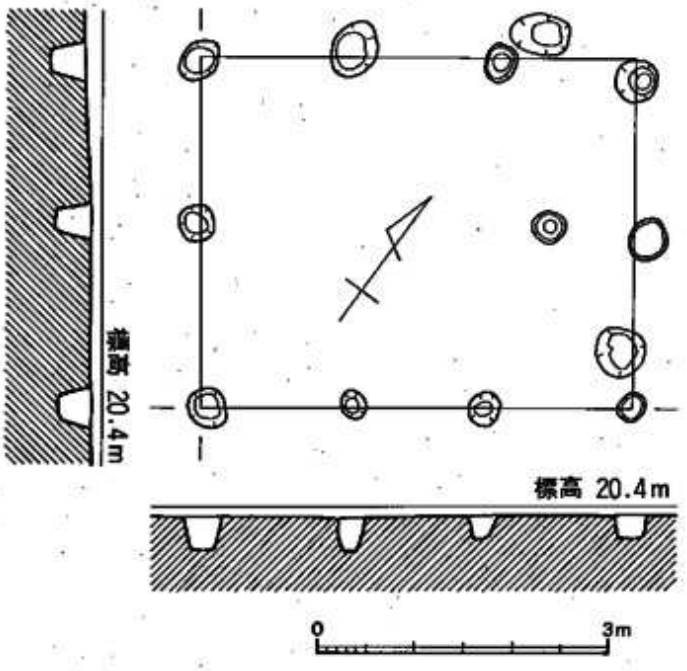
調査区中央部にあり，2号建物の約18m北東方で検出された。3×5間の建物で，梁行4.5m，桁行約8.6mの規模で，主軸方位はN40°Eである。柱穴は直径35～50cm，深さ20～30cm前後である。北側の幾つかの柱穴から縄文土器片や土師器小片が出土したものの，図示しうる資料はない。

4号掘立柱建物（第214図）

2号建物の約8m北方で検出された。2×3間の建



第213図　3号建物跡実測図（1/80）



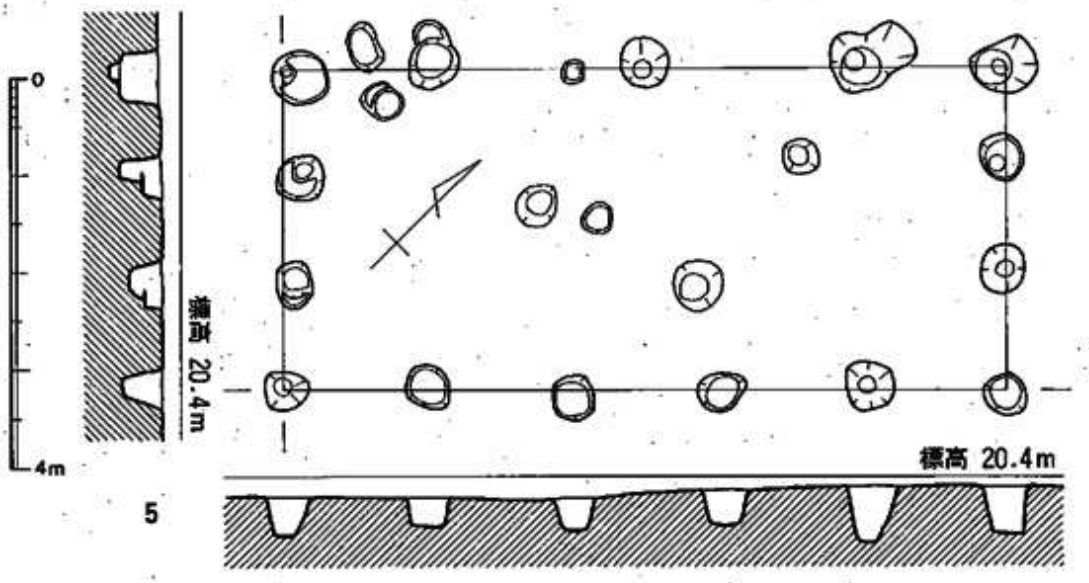
第214図　4号建物跡実測図（1/80）

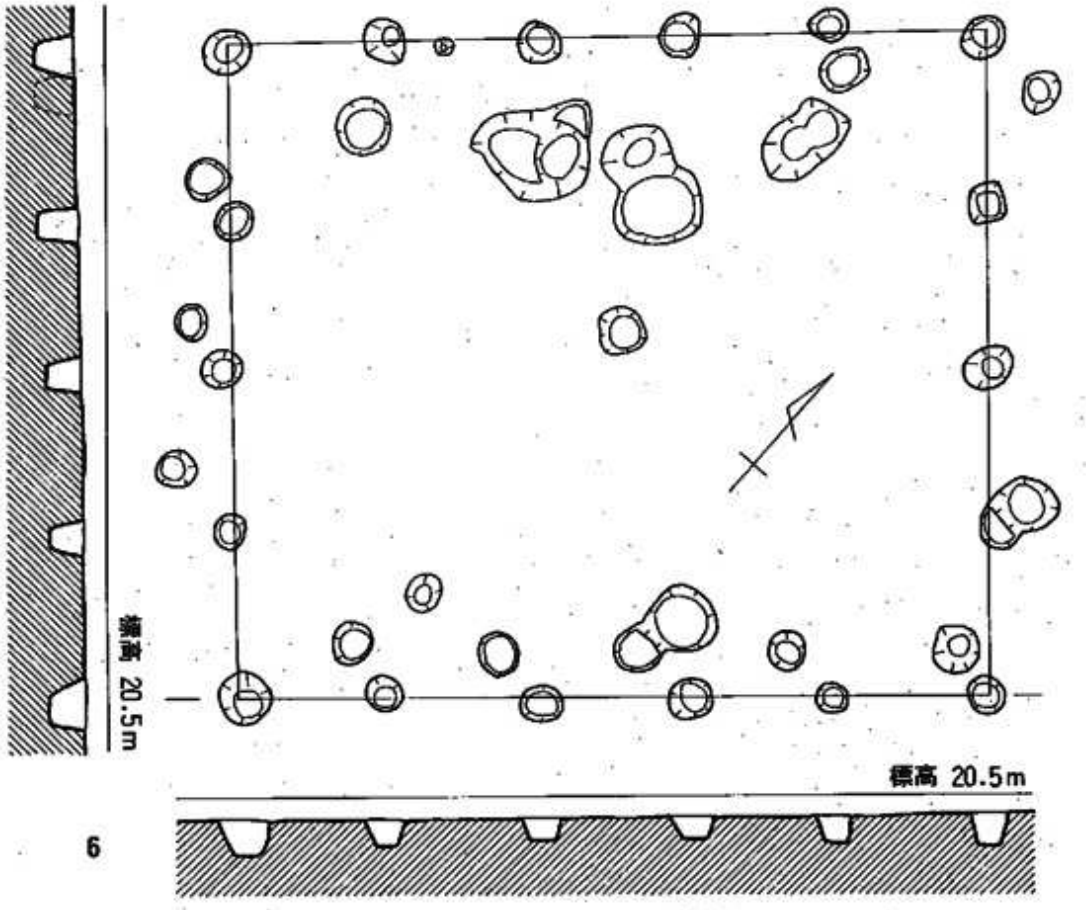
物で，梁行3.6m，桁行4.5mの規模で，主軸方位はN53°Eである。いくつかの柱穴で直径15cm前後の柱痕を検出したが，柱穴は25～50cm，深さ25～40cmである。

南辺の柱穴から縄文土器片や土師器小片が出土したものの，図示しうる資料はない。

5号掘立柱建物（図版84－2，第215図）

4号建物の約5m北西方で検出された。3×5間の建物で，梁行3.3m，桁行7.4mの規模で，主軸方位はN44°30′Eである。いくつかの柱穴で直径15cm前後の柱痕



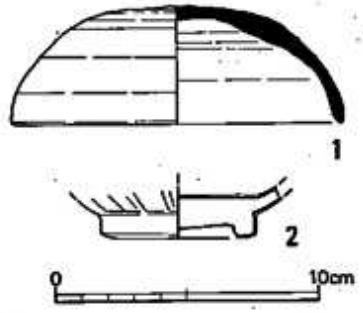


第215図　5・6号建物跡実測図（1/80）

を検出したが，柱穴は40～60cm，深さ30～55cmである。ほとんどの柱穴から縄文土器片が出土し，いくつかの柱穴では土師器や須恵器などの破片も出土した。

出土遺物（図版93，第216図）

須恵器杯蓋（1）　南西辺のP1・P2から出土した破片が接合した。身受けのかえりをもたない杯蓋で，回転ヘラケズりされる天井部は丸くやや高めである。復原口径12.6cm，器高4.5cmの大きさで，胎土に砂粒を多めに含む。



第216図　5号建物跡出土土器実測図（1/3）

青磁椀（2）　南西辺のP3から出土した。削り出しの高台部破片で高台径は6cm。釉は高台底までかかり，暗灰色の色調を呈している。

6号掘立柱建物（図版85－1，第215図）

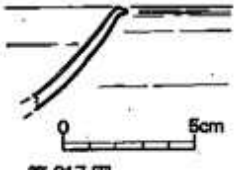
5号建物の約3m北東方で検出された。4×5間の建物で，梁行6.8m，桁行7.8mの規模で，主軸方位はN49°Eである。幾つかの柱穴で直径15cm前後の柱痕を検出したが，柱痕の芯間での桁行では7.8mが中庸の距離となる。柱穴は直径30～40cm，深さ20～40cm前後である。

なお南東辺の内側に柱間距離を等しくする，4間の柱列がある。柱痕の芯間距離は60～70cm，柱列間の距離は50cmを測る。対応する柱列は確実でないが，北西辺の内側約1mにある3間分の柱列を想定しうるものの，梁行の柱穴を検出し得なかった。さらに南西辺にたいして，西隅の柱穴を共有すれば，南側に約8°開く4間の柱列がある。この柱間距離は6号建物の桁行柱間の距離にほぼ相当し，柱穴の規模も同様だが，これに対する柱列は検出できなかった。
ほとんどの柱穴から縄文土器片が出土し，なかには土師器小片も出土したが，図示し得ない程度の破片である。

7号掘立柱建物（図版85－1，第218図）

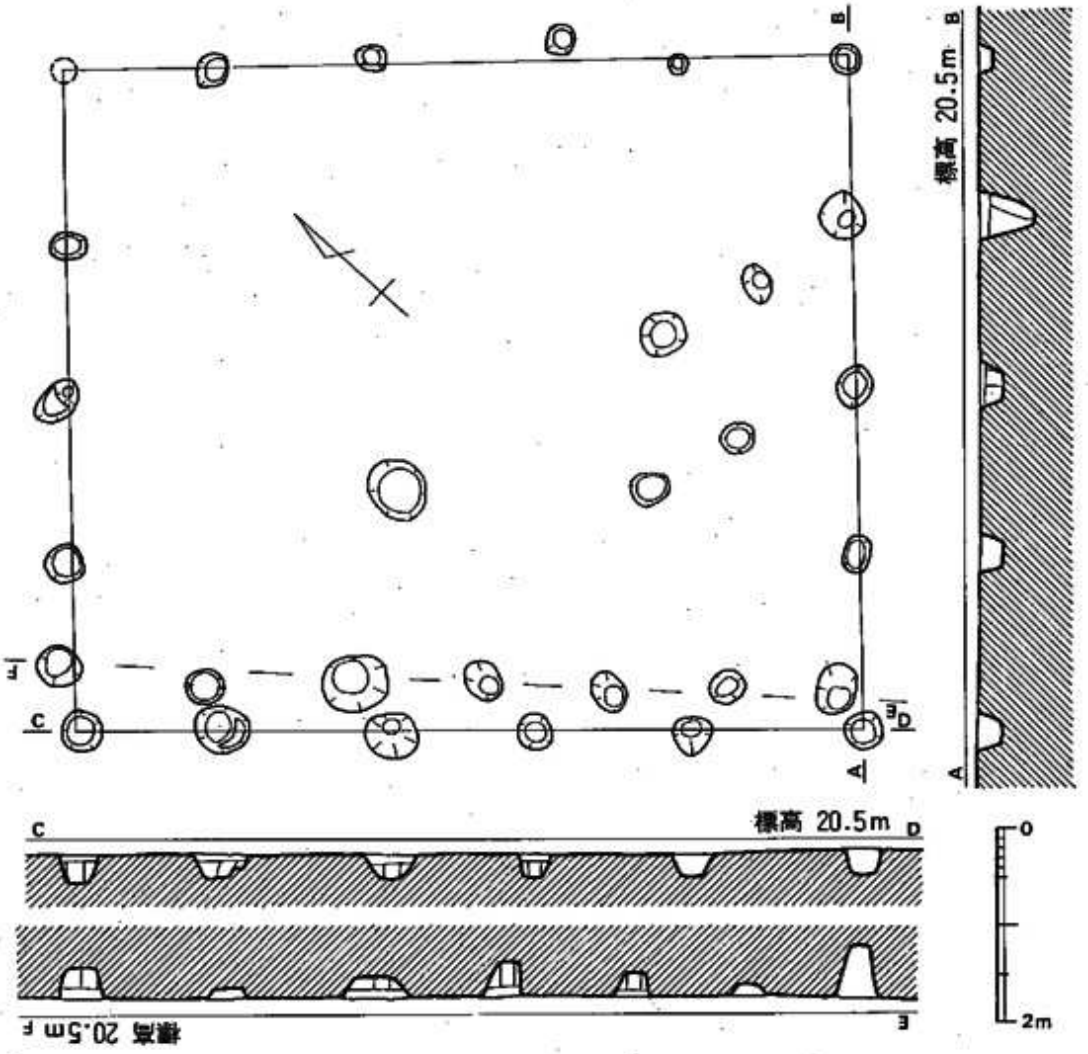
6号建物の約5m北東方で検出された。4×5間の建物で，梁行6.9m，桁行8.1mの規模で，北隅の柱穴は検出し得なかった。主軸方位はN41°30′Wであるが，梁行方向は6号建物の桁行方向とほぼ同じである。幾つかの柱穴で直径15cm前後の柱痕を検出したが，柱痕の芯間での梁行・桁行は6.9m・8.1mが中庸の距離となる。削平を受けていることもあり，柱穴は直径20～50cm，深さ10～55mとばらつきがある。

なお南西辺の内側に6間の柱列がある。柱間距離が1.2～1.5mで，7号建物の辺とは北側に約4°振れる方向だが，付近に対応する柱列は確認できなかった。



第217図
7号建物跡出土土器
実測図（1/3）

北側の柱穴を中心に縄文土器片・土師器・磁器の小片が出土したが，図



第218図　7号建物跡実測図（1/80）

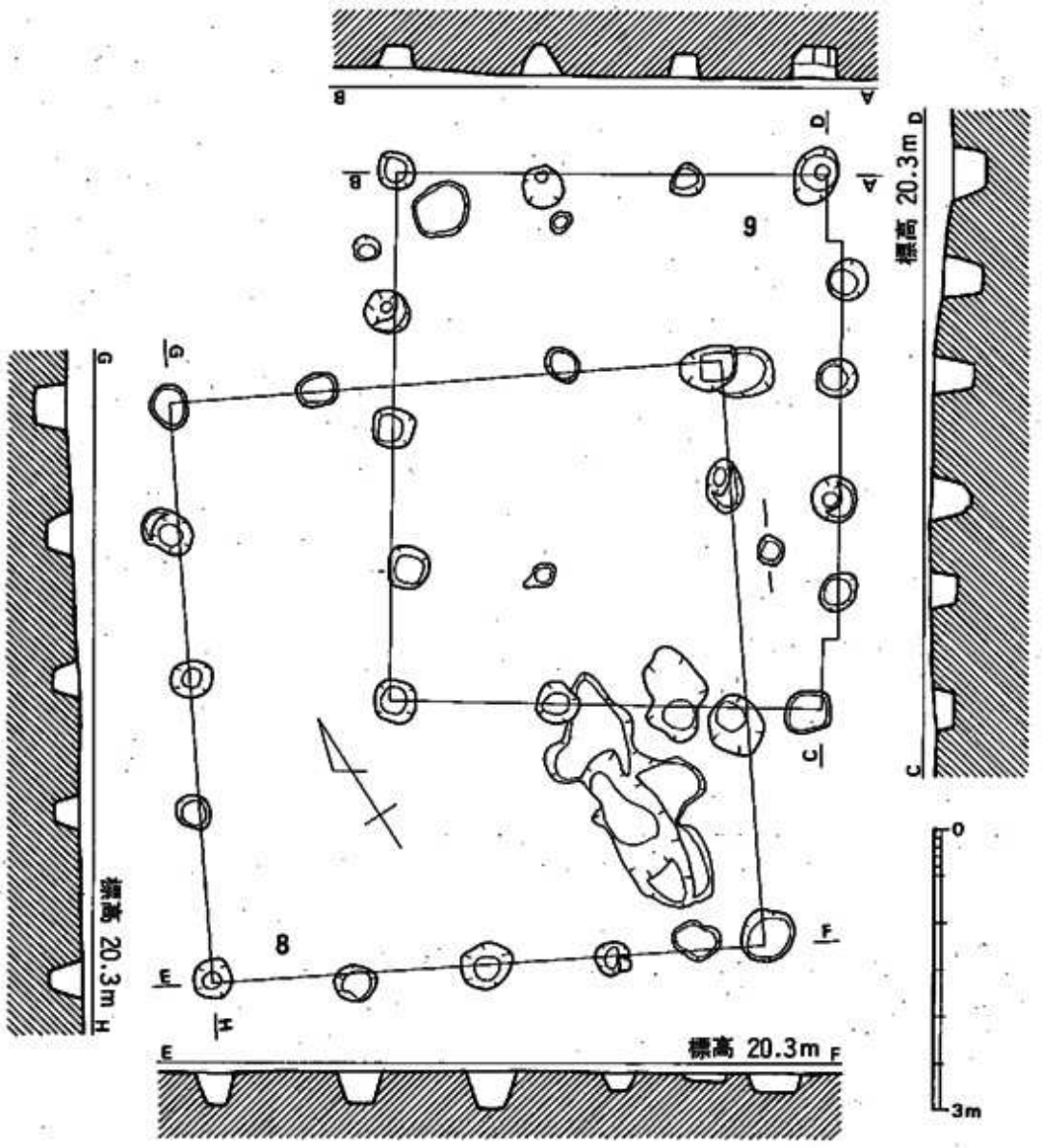
示しうる資料は少ない。

出土遺物（図版93，第217図）

白磁椀　直線的に開きく字形に外反する口縁部破片で，口唇端部は平らな面をなしている。精良な胎土で，やや黄色味を帯びた灰白色を呈している。北東辺の北隅側柱穴から出土した。

8号掘立柱建物（第219図）

17号住居跡の約2m北方，5号建物の約5m西方で検出された。4×4間の建物だが，北東辺では同じ梁行距離ながら3間に検出された。梁行5.9m，桁行6.2mの規模で，主軸方位はN29°Eである。9号建物と重複するが，先後関係は不明。幾つかの柱穴では径15cm前後の柱痕を検出



第219図　8・9号建物跡実測図（1/80）

したが，柱穴は直径40～60cm，深さ20～40cmの大きさである。

柱穴からは縄文土器片が出土した。

9号掘立柱建物（図版84－2，第219図）

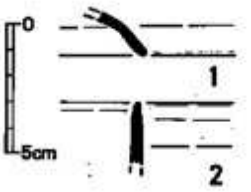
17号住居跡の約5m北方，5号建物の約5m北西方で検出された。3×4間の建物だが，南東辺では同じ梁行距離ながら5間に検出された。梁行4.5m，桁行5.7mの規模で，主軸方向はN33°

Eである。8号建物と重複するが，先後関係は不明。柱穴は直径40～50cm，深さ20～40cmの大きさである。

いくつかの柱穴からは，縄文土器片と若干の須恵器や土師器の小片が出土した。

出土遺物（第220図）

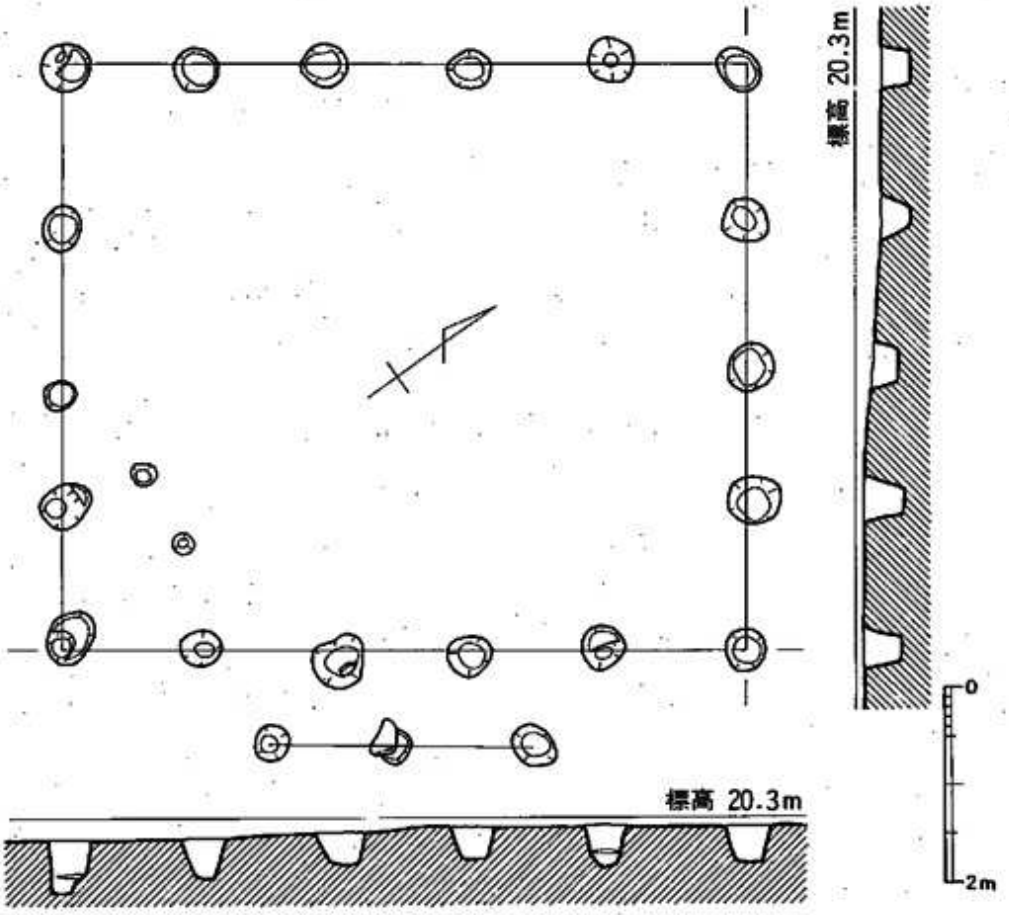
須恵器　東隅の柱穴とその南側の柱穴から出土した口縁部破片。1・2ともヨコナデ調整されている。



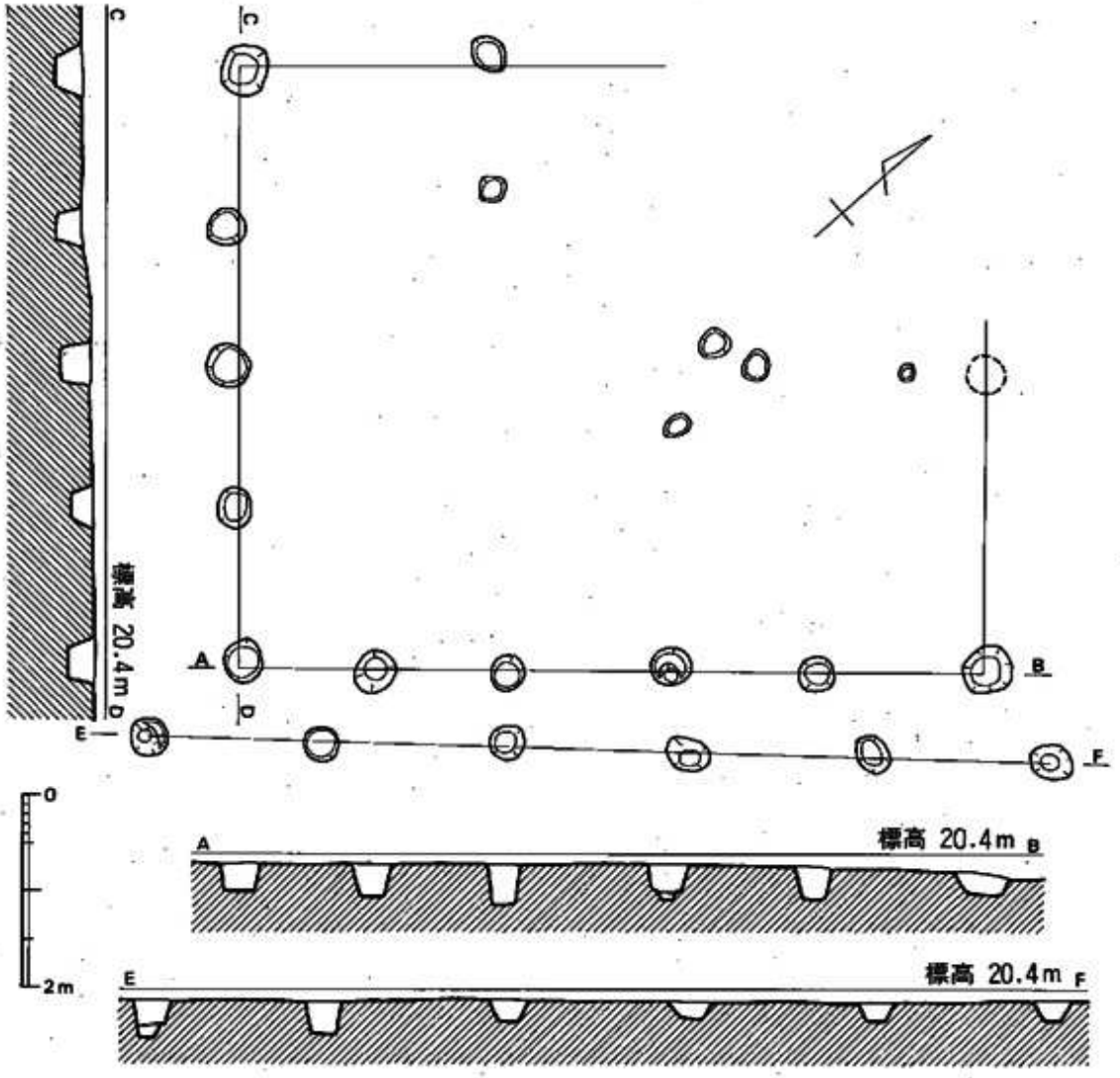
第220図
9号建物跡出土土器
実測図（1/3）

10号掘立柱建物（図版85－1，第221図）

6号建物の約5m北西方，9号建物の約5m北東方で検出された。4×5間の建物で，梁行6.0m，桁行7.0mの規模で，主軸方位はN34°30′Eであるが，桁行方向は9号建物の桁行方向に近く，延長線上に相当する。柱穴は直径30～50cm，深さ25～55cmとばらつきがある。



第221図　10号建物跡実測図（1/80）



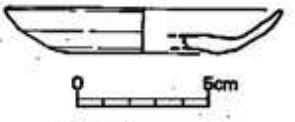
第222図　11号建物跡実測図（1/80）

なお南東辺の外側に２間の柱列がある。柱間距離が約1.35mで，10号建物の辺と平行して，約１mの距離があり，柱間に柱穴がはさまる形に配置する。

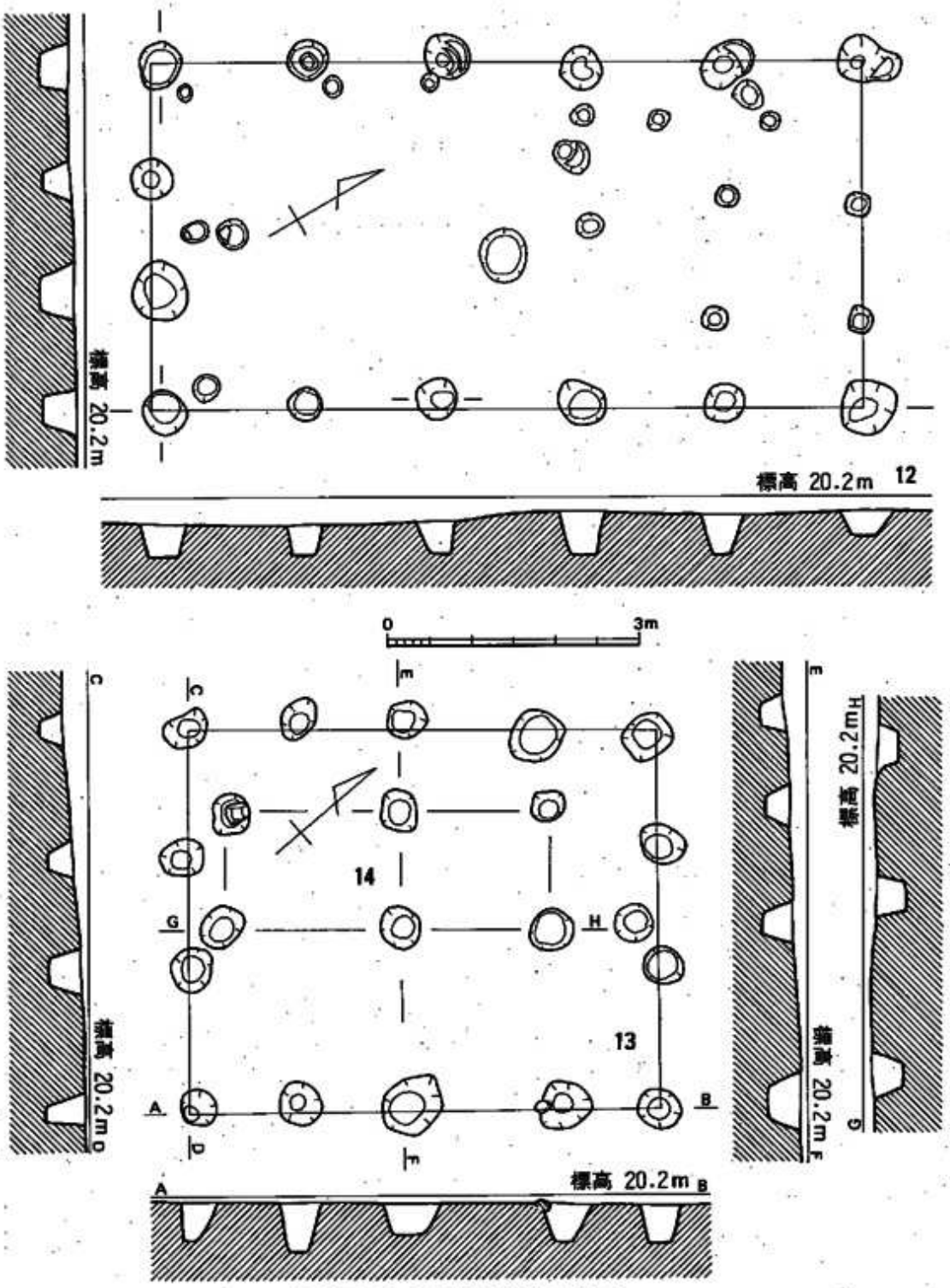
北側の柱穴を中心に縄文土器片・土師器小片が出土したが，図示しうる資料はない。

11号掘立柱建物（図版85－１，第222図）

７号建物の約12m北西方，10号建物の約７m北東方にある。北側で15号住居跡と重複していて，対応する柱穴を検出し得なかったが，一応４×５間の建物とした。梁行6.2m，桁行7.7mの規模で，主軸方



第223図
11号建物跡出土土器
実測図（1/3）



第224図　12～14号建物跡実測図（1/80）

位はN43°30′Eである。柱穴は直径30～40cm，深さ20～40cmの大きさ。

なお南東辺の外側に5間の柱列がある。柱間距離が約1.8mで，10号建物の辺とはわずかに東側が開く方向である。

ほとんどの柱穴から縄文土器片・土師器小片が出土したが，図示しうる資料は極めて少ない。

出土遺物（第223図）

土師器小皿　器面の風化が著しいが，復原口径10.6cm，器高1.7cmの大きさで，やや中凹みの外底面はヘラ切り離しのようである。胎土に細砂粒・金雲母を含み，黄褐色を呈している。

12号掘立柱建物（図版85－1，第224図）

10号建物の約3m北西方に検出された，3×5間の建物。梁行4.1m，桁行8.4mの規模で，主軸方位はN30°Eである。柱穴は直径30～65cm，深さ20～50cmの大きさ。北東辺の間の柱穴が小さめで，その内側にある柱穴も小さく，間仕切りであろうか。

南側の柱穴から縄文土器片・土師器小片が出土したが，図示しうる資料はない。

13号掘立柱建物（図版85－2，第224図）

8号建物の約5m西方に検出された，3×4間の建物。梁行4.6m，桁行5.6mの規模で，主軸方位はN40°30′Eである。柱穴は直径40～70cm，深さ30～60cmの大きさ。内側にある柱穴は間仕切りの可能性を残すものの，別の建物として取り扱いたい。

柱穴からはなんらの遺物も出土しなかった。

14号掘立柱建物（図版85－2，第224図）

13号建物の内側に検出された，1×2間の建物。梁行1.4m，桁行3.8mの規模で，主軸方位はN39°30′Eで，14号建物の主軸方向と平行する。柱間距離では桁行間に片寄りがみられる。柱穴は直径40～60cm，深さ25～40cmの大きさ。

東側の柱穴から土師器小片が出土したが，図示し得ない破片である。

表34　掘立柱建物計測表1

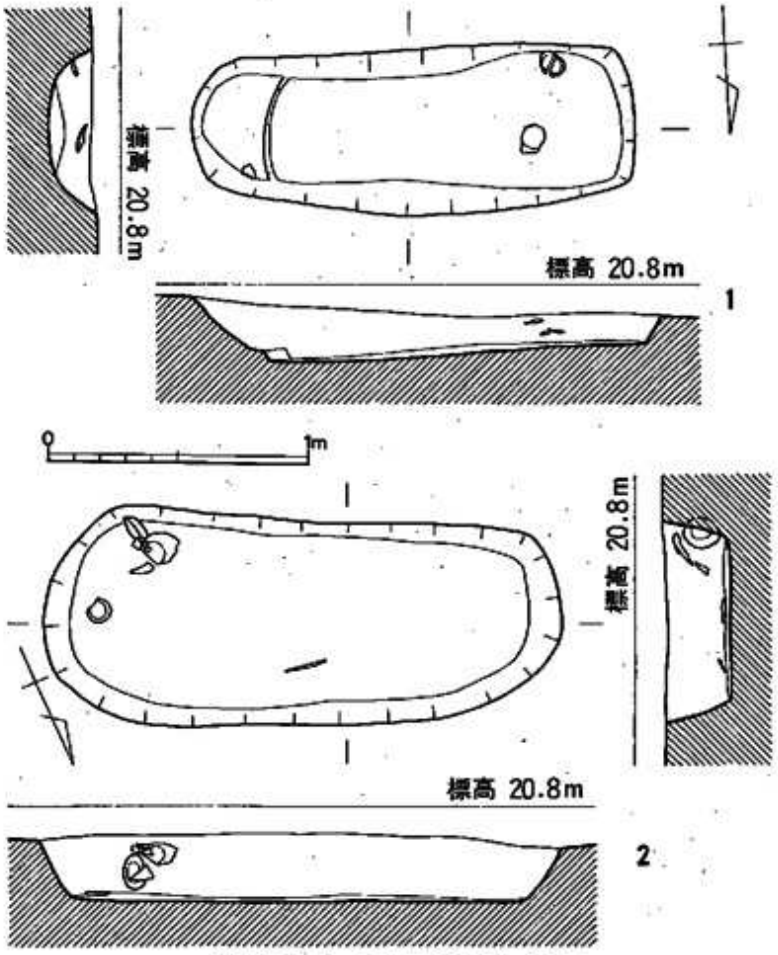
（単位 cm）

	主軸方位	梁	行	桁行	梁行柱間				桁行柱間	
1号建物	N41°30′W	254	236	450	135	128	130	132	162 140 154	2×3間？
				445	130	128	122	104	150 164 135	
									162 142 144	
2号建物	N23°30′E	480	460	540	164	(472)	(468)	(472) 174	128 136 138 142	3×4間
				600	158			140	－ (560) －	
					150			146	－ (554) －	
									160 138 125 178	
3号建物	N40°E	－	450	865	－	(－)	(440)	(460) 144	162 182 182 178 162	3×5間
					－			170	－	
					－			148	－	
					－				－ － 166 170 168	

表35　掘立建物計測表2

(単位 cm)

	主軸方位	梁	行	桁行	梁行柱間	桁行柱間	
4号建物	N53°E	358	336	456 442	164 192 (364) (356) 162 174	158 152 148 (464) 158 134 152	2×3間
5号建物	N44°30′E	326	326	740 740	104 112 (334) (——) (336) 110 114 108 124	152 212 216 156 (710) (730) 144 146 154 154 142	3×5間
6号建物	N49°E	670	680	780 770	180 154 (680) (680) (680) (690) 172 170 170 172 150 196	170 156 140 160 158 (778) (788) (816) 152 164 158 144 154	4×5間
7号建物	N41°30′E	—	690	— 810	— 150 (680) (690) (710) (685) 160 170 170 174 175 180	— 164 200 118 178 (802) (810) (810) 150 176 150 162 178	4×5間
8号建物	N29°E	590	590	618 618	158 130 (580) (630) (585) 138 160 262 166 166	180 144 154 140 (630) (630) 230 190 80 138	4×4間 (3×3間？)
9号建物	N33°E	450	455	564 570	175 135 (455) ——— 153 140 155 150	140 150 130 145 (560) (570) 130 98 130 100 114	3×4間 (3×5間？)
10号建物	N34°30′E	600	595	700 720	175 120 (600) (600) (600) (600) 172 150 144 145 150 150	145 125 150 145 135 (700) (700) (720) 146 140 135 136 146	4×5間
11号建物	N43°30′E	620	—	— 768	166 142 150 162	140 138 168 150 170	
12号建物	N30°E	415	416	840 840	140 138 (416) (408) (408) (410) 170 138 142 104	180 160 168 168 164 850 845 175 160 170 165 170	3×5間
13号建物	N40°30′E	460	455	560 560	158 130 (455) (465) (450) 140 172 140 175	130 130 162 138 565 560 130 130 186 114	3×4間
14号建物	N39°30′E	140	145	380 390	140 (140) 145	200 180 215 175	1×2間



第225図　1・2号土壙実測図（1/30）

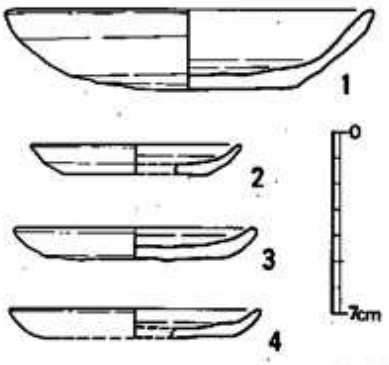
4　土　壙

土壙が4基，集石を伴う土壙が5基検出された。

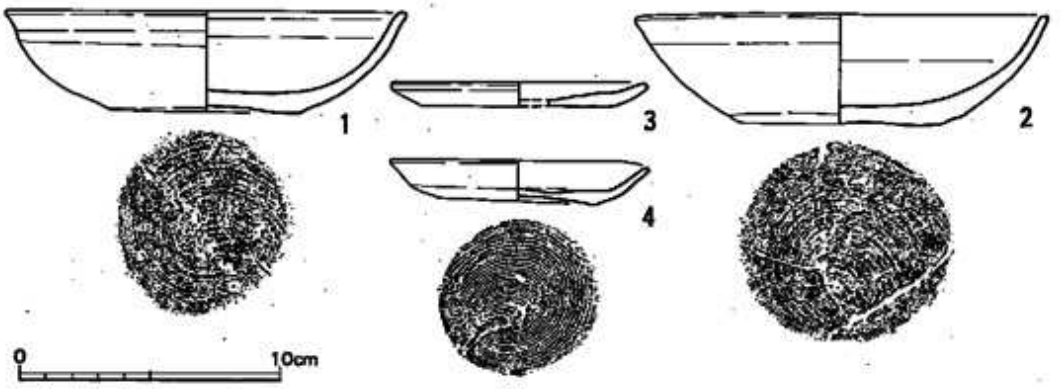
1号土壙（図版86－1，第225図）

調査区中央部のG11区南西側に検出された。上縁で長さ1.7m，幅0.6mの隅丸長方形プランを呈し，主軸方向はN86°20′Wの東西に近い。検出面から床面までの深さ10～20cmを有する。床面は，長さ1.6m，西側の幅50cm，中ほどから東側の幅40cmの広さで，やや西側に高い。床面の狭くて低い東側の壁はやや緩やかになっている。西側の床面より5～10cm浮いた位置に土師器杯と小皿が出土し，東側では須恵器片が出土した。

出土遺物（図版87－1，第226図）

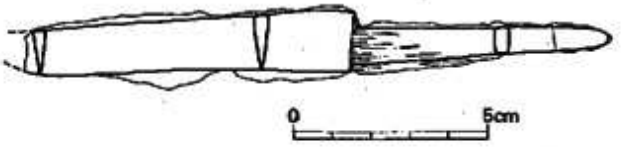


第226図　1号土壙出土土器実測図（1/3）



第227図　2号土壙出土土器実測図（1/3）

土師器杯（1）　口径14.1cm，器高3.1cmの大きさ。磨滅が進み調整手法を観察し難いが，底径7.7cmの外底面に板状圧痕が残る。胎土に細砂粒・金雲母・角閃石・褐色粒を含み，明茶褐色に焼成されている。



第228図　2号土壙出土鉄器実測図（1/2）

土師器小皿（2～4）　2・4は復原口径8.0～9.6cm，器高1.1cmの大きさで，3は口径9.3cm，器高1.2cmの大きさ。いずれも外底面に板状圧痕が残り，胎土に細砂粒・金雲母・角閃石を含み，明茶褐色に焼成される。

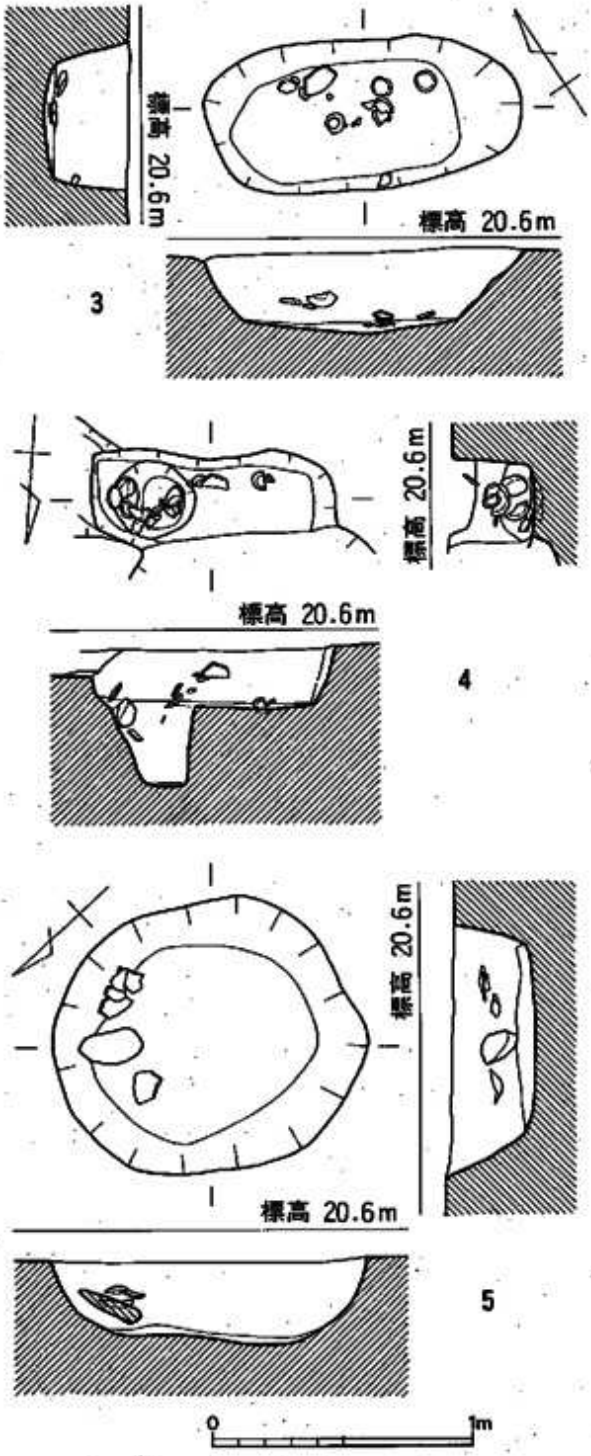
2号土壙（図版86－2，第225図）

調査区中央部のG11区北東側，1号土壙の北方に検出された。上縁で長さ2.0m，最大幅0.85mの長楕円形のプランを呈し，主軸方向はN35°Wの北西－南東方向に近い。検出面から床面までの深さ25cmを有する。床面は，長さ1.75m，南東側の幅0.7m，中ほどから北西側の幅0.4～0.6cmの広さで，ほぼ平らである。南東側の床面より5～15cm浮いた位置に土師器杯と小皿が出土し，中ほど北側で鉄刀子が出土した。

出土遺物（図版87－1，第226図）

土師器杯（1・2）　1は口径15.4cm，器高3.9cmの大きさ。磨滅が進み調整手法を観察し難いが，底径7.3cmの外底面に糸切り痕が残る。2は口径15.9cm，器高4.2cmの大きさ。磨滅が進み調整手法を観察し難いが，底径7.8cmの外底面に糸切り痕が残る。胎土に細砂粒・褐色粒・金雲母・角閃石を含み，淡茶褐色に焼成されている。

土師器小皿（3・4）　3は復原口径9.8cm，器高1.0cmの大きさで，外底面には板状圧痕が残る。4は口径9.9cm，器高1.5cmの大きさで，外底面に糸切り痕がある。胎土に細砂粒・金雲



第229図　3～5号土壙実測図（1/30）

母・角閃石を含み，淡明茶褐色に焼成されている。

鉄刀子（5）　先端部を欠くが，現存長15cmのうち基部が6.6cmを占める。刃部は1.1～1.6cm，背の厚み4mmを測る。基部は幅6～9mm，厚み4mmで，関部側には木質が残る。

3号土壙（図版88－1，第229図）

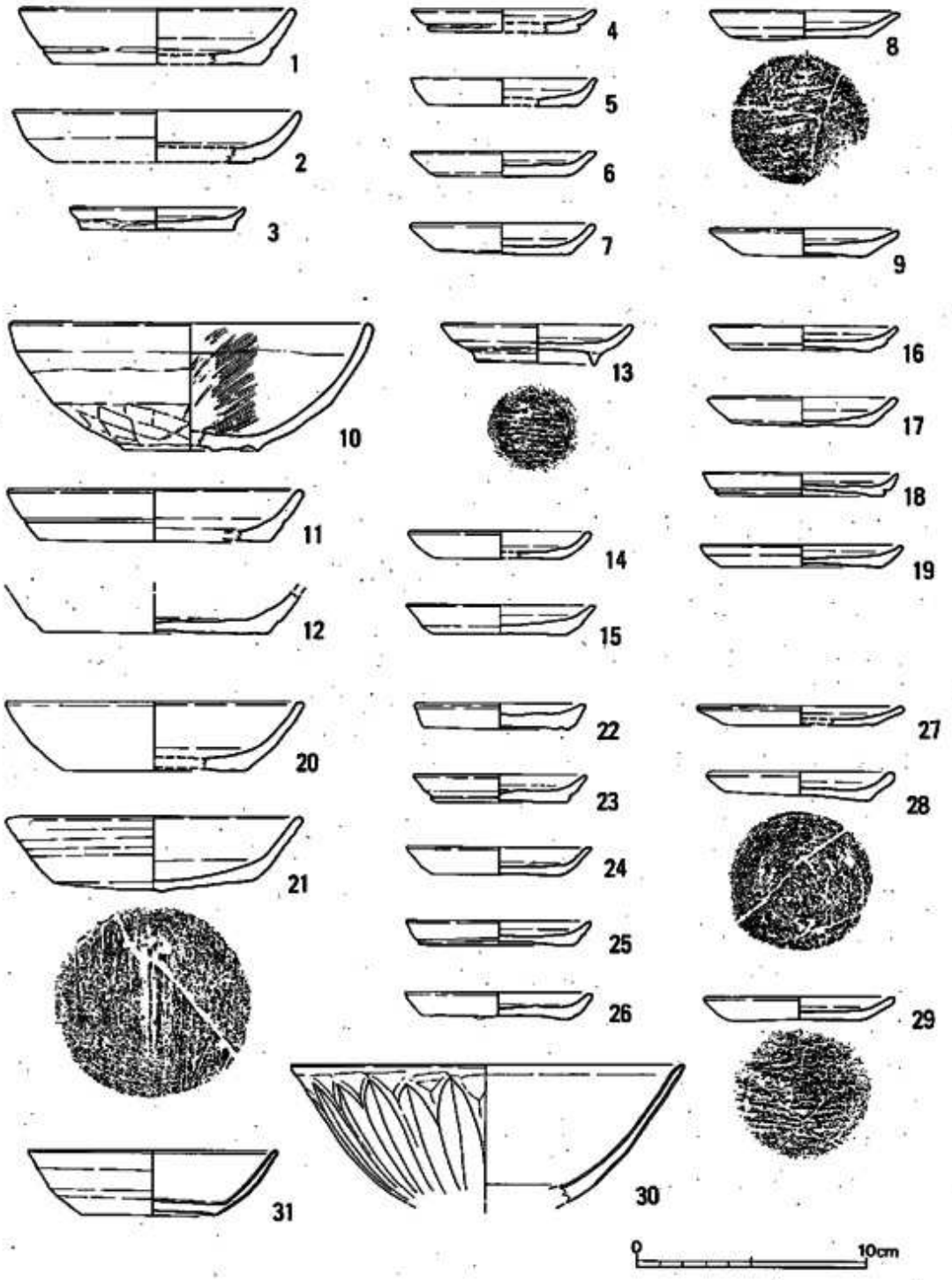
調査区東寄りのW12区北西側に検出された。上縁で長さ1.2m，最大幅0.65mの長楕円形のプランを呈し，主軸方向はN56°Wの北西－南東方向に近い。検出面から床面までの深さ0.3mを有する。床面は，長さ0.85m，幅0.43mの広さで，ほぼ平らである。北東側の床面より5～10cm浮いた位置に瓦器椀・土師器杯・小皿が出土した。西側にある4号土壙との間の浅い落ち込みに両者からの土器が混って出土した。

出土遺物（図版89，第230図）

1～9は4号土壙との間の落ち込みから出土した上層の土器，10～19が3号土壙内出土の土器である。

土師器杯（1・2）　1は口径12.0cm，器高2.5cmの大きさ。2は口径12.4cm，器高2.3cmの大きさ。磨滅が進み調整手法を観察し難いが，外底面に糸切り痕が残る。胎土に細砂粒・褐色粒・角閃石を含み，淡茶褐色に焼成されている。

土師器小皿（3～9）　3～6は復原口径7.5～8.0cm，器高1.0～1.2cmの大きさ，7～9は口径8.0～8.2cm，器



第230図　3・4号土壙出土土器実測図（1/3）

高1.2～1.3cmの大きさ。5の外底面には糸切り痕，6～8には板状圧痕が残る。胎土に細砂粒・金雲母・角閃石・褐色粒などを含み，淡明茶褐色に焼成されている。

瓦器椀（10）　復原口径15.5cm，底径5.9cm，器高5.6cmの大きさ。体部下半はヘラケズリ，外底面は切り離し後未調整で凹凸がある。内面はヘラミガキされる。胎土に細砂粒・角閃石を多く含み，灰色に焼成されるが，口縁部内外面に乳白色の帯を生じている。

土師器杯（11・12）　11は復原口径12.5cm，器高2.3cmの大きさ。12は口縁部を欠くがほぼ同じ大きさであろう。磨滅が進み調整手法を観察し難いが，外底面に糸切り痕らしい痕跡が残る。胎土に細砂粒・褐色粒・角閃石を含み，淡明褐色に焼成されている。

土師器小皿（13～19）　13は高台のつく小皿で，口径8.3cm，高台径5.1cm，器高1.7cmの大きさ。外底面に板状圧痕がみられる。14～19は復原口径7.7～8.6cm，底径5.6～7.4cm，器高1.0～1.3cmの大きさ。18の外底面には糸切り痕，14～17には板状圧痕が残る。胎土に細砂粒・金雲母・角閃石・褐色粒などを含み，淡明茶褐色に焼成されている。

4号土壙（図版88－2，第229図）

調査区東寄りのX12区北東側に検出された。上縁で長さ0.9m，最大幅0.4mの不整長方形のプランを呈し，主軸方向はN86°30′Eと東西に近い。検出面から床面までの深さ0.2mを有する。床面は，長さ0.82m，幅0.30mの広さで，ほぼ平らだが，東側に径・深さとも30cmの柱穴状ピットが掘り込まれている。東側の床面より5～10cm浮いた位置に土師器杯・小皿などが出土したが，半ばピット内に落ち込む。柱の抜き穴に流れ込んだような状況である。

出土遺物（図版89，第230図）

土師器杯（20・21）　20は復原口径13.0cm，器高3.0cmの大きさ。21は口径12.9cm，底径8.6cm，器高3.3cmの大きさ。磨滅が進み調整手法を観察し難いが，外底面に板状圧痕と糸切り痕らしい痕跡が残る。胎土に細砂粒・褐色粒・角閃石を含み，明茶褐色に焼成されている。

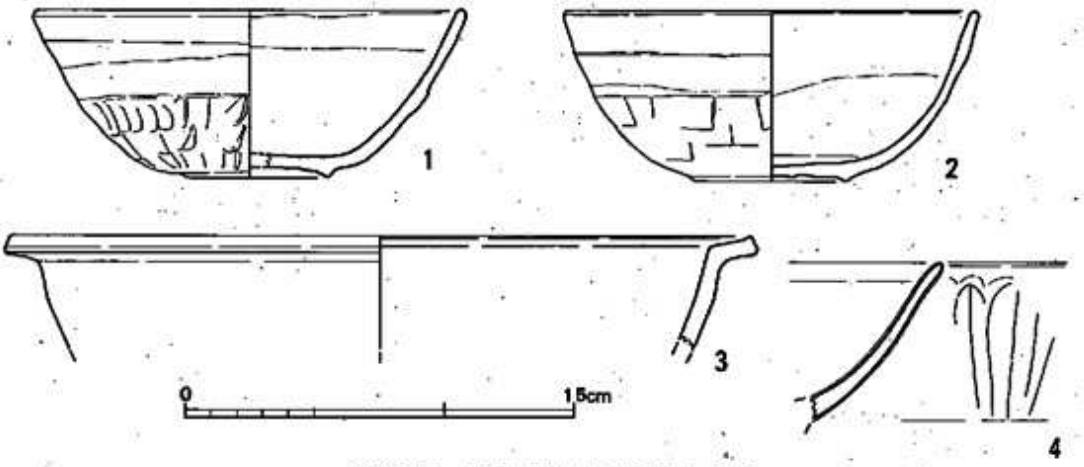
土師器小皿（22～29）　復原口径7.5～9.0cm，底径5.6～6.7cm，器高0.9～1.2cmの大きさ。ほとんどの外底面には糸切り痕，24～27・29には板状圧痕が残る。胎土に細砂粒・金雲母・角閃石・褐色粒などを含み，明茶褐色などに焼成されている。

青磁椀（30）　復原口径17.0cmの大きさの竜泉窯系青磁椀で，外面に蓮弁文がある。灰色がかった青緑色を呈している。

白磁皿（31）　復原口径10.8cm，底径6.0cm，器高2.8cmの大きさの皿。外底面の一部にまで，黄緑味のある灰色の釉がかかり，口唇部は削られている。

5号土壙（第229図）

調査区東寄りのW11区南東側に検出された。上縁で長さ1.2m，最大幅1.05mの不整円形のプ



第231図　5号土壙出土土器実測図（1/3）

ランを呈し，主軸方向はN43°E。検出面から床面までの深さ0.3mを有する。床面は，長さ0.85m，幅0.75mの広さで，北東側がわずかに高い。北東側の床面より5～15cm浮いた位置にやや細長い河原石と，瓦器椀・青磁椀などが出土した。

出土遺物（図版91，第231図）

瓦器椀（1・2）　1は口径16.3cm，底径5.5cm，器高6.5cmの，2は口径15.8cm，底径6.0cm，器高6.6cmの大きさ。体部下半はヘラケズリ，外底面はナデ調整，内面はヘラミガキもしくは丁寧なナデであろう。胎土に細砂粒・角閃石を多く含み，よう黒色に焼成されるが，口縁部内面と体部外面に乳白色の帯を生じている。

土師器鉢（3）　体部から直線的に立ち上がる口縁部が，外方に折れて平坦面をつくる。復原口径29.0cmの大きさ。ナデ調整されたと思われるが，外面には煤が厚くこびり着いている。

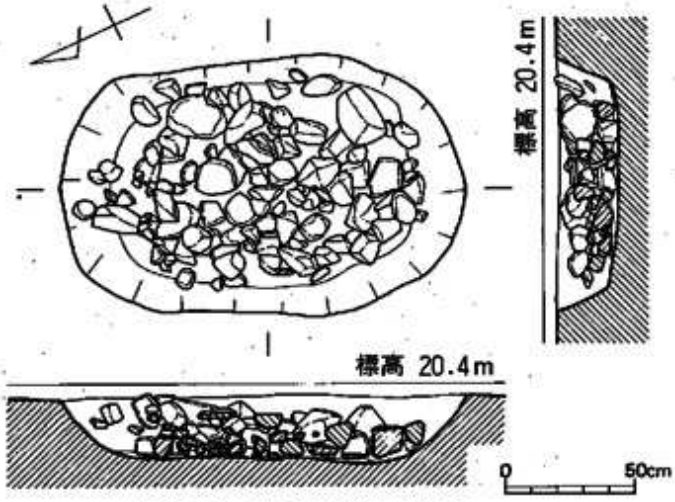
青磁椀（4）　竜泉窯系青磁椀の口縁部破片で，外面に蓮弁文がある。灰色がかった黄緑色を呈している。

6号土壙（図版88－3，第232図）

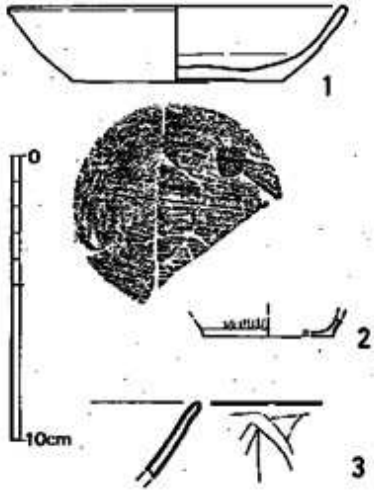
調査区東寄りのV10区北端に検出された。上縁で長さ1.55m，最大幅1.0mの楕円形のプランを呈し，主軸方向はN25°E。検出面から床面までの深さ0.25mを有する。土壙内では，安山岩質の河原石や角礫などが床面を完全に覆い，北東側にやや厚めだが，特に規格をもった配置を感じさせない。床面は長さ1.15m，幅0.78cmの広さで，平坦だが北東側がわずかに高い。石に混じって土師器杯・青磁椀の破片などが出土した。

出土遺物（図版91，第233図）

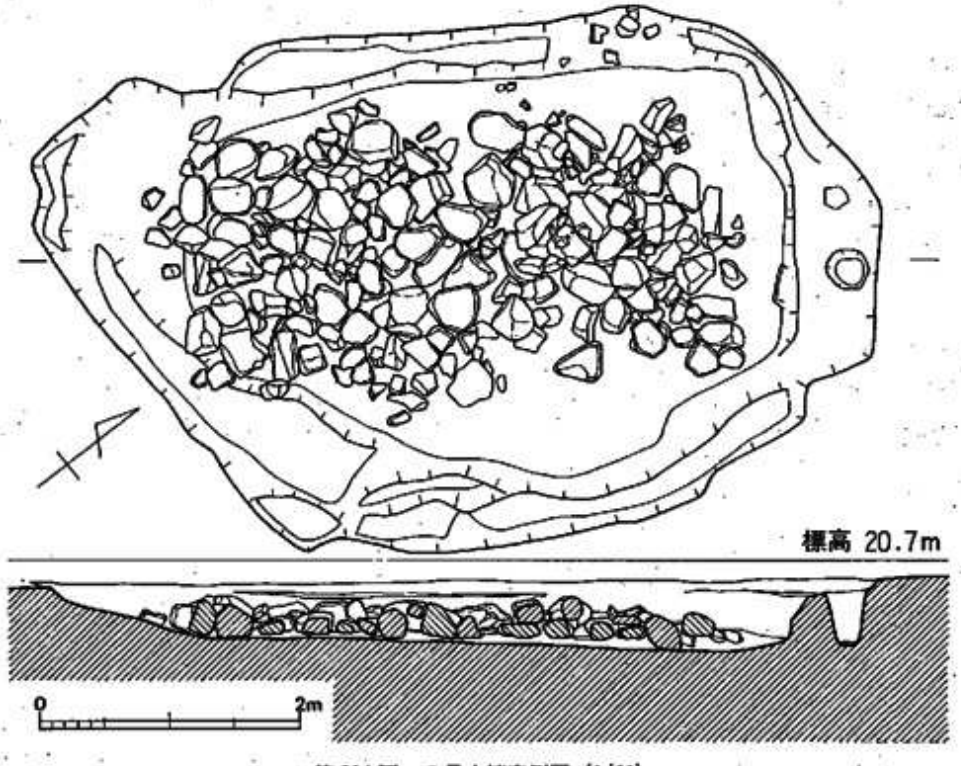
土師器杯（1）　復原口径13.0cm，底径8.0cm，器高2.9cmの大きさ。磨滅が進み調整手法を



第232図　6号土壙実測図（1/30）



第233図　6号土壙出土土器実測図（1/3）



第234図　7号土壙実測図（1/60）

観察し難いが，外底面に板状圧痕が残る。胎土に細砂粒・褐色粒・角閃石を含み，明茶褐色に焼成されている。

青白磁合子（2）　底部破片で復原底径5.0cmの大きさ。縦沈線が並ぶ。精良な胎土で，焼成良好，釉は淡い緑灰色を呈している。

青磁椀（3）　竜泉窯系青磁椀の口縁部破片で，外面に蓮弁文がある。灰色がかった黄緑色をしている。

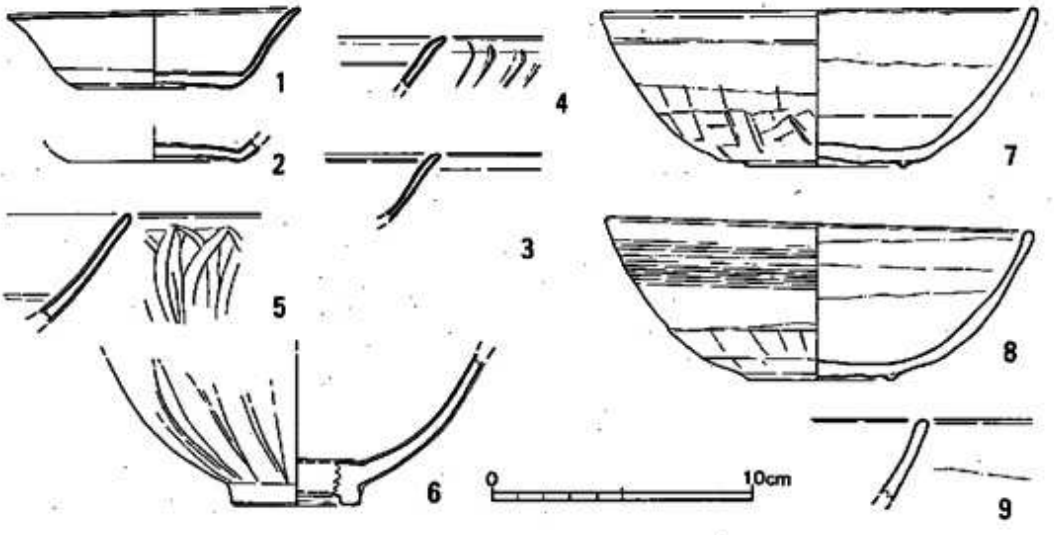
7号土壙（図版90，第234図）

調査区東寄りのW11・W12区に検出された。3・4号土壙と5号土壙の間に位置する。上縁で長さ6.45m，最大幅3.95mの不整形な楕円形プランを呈し，主軸方向はN38°30′E。検出面から床面までの深さ0.40～0.55m。土壙内では，安山岩質の河原石や角礫などが床面を覆うように，長さ，4.20m，幅2.00mの範囲に，10～20cmの高さをもって集積されている。集積された石では，やや乱れた状態ではあるが，長さを二分する位置に集積の抜ける部分がある。すなわち2m四方に集積された部分が2基並ぶようにも観察される。床面は長さ4.50m，最大幅3.05m，南東部の幅2m弱，北西部の幅2.30m程の広さで，平坦だが南西側が少し高い。土壙北端から瓦器椀が，北東側の集積石の中央から白磁皿が，床面から土師質土鍋や土師器杯が出土したが，石に混じって土師器杯・小皿や青磁椀の破片なども出土した。

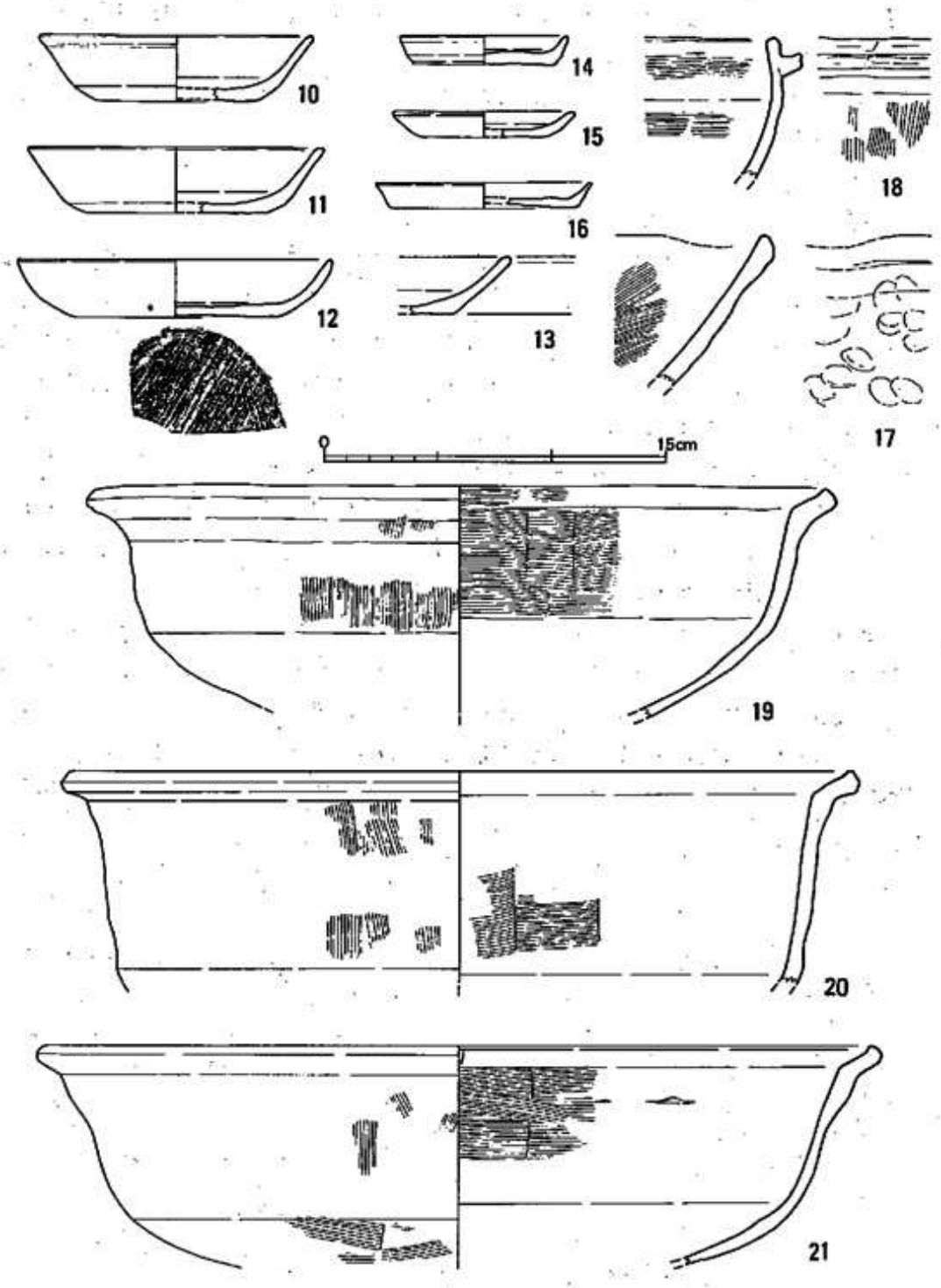
出土遺物（図版91，第235・236図）

白磁皿（1～3）　1は口径11.2cm，底径5.9cm，器高3.0cmの大きさの，口縁部が外反する皿で，黄色味を帯びた灰色の釉が全体にかかるが，口唇部は削られている。2・3もほぼ同じ特徴をもつ皿だが，釉の色調が微妙に異なり，3の口縁部は反り具合がわずかに違う。

白磁椀（4）　外面に縦のヘラ片切彫文のある口縁部破片で，内面に横沈線がみられる。



第235図　7号土壙出土土器実測図1（1/3）



第236図　7号土壙出土土器実測図2 (1/3)

青磁椀（5・6）　5は口縁部破片，6は小椀の胴部下半から底部の破片。竜泉窯青磁で外面に蓮弁文がある。灰色がかった黄緑色を呈している。

瓦器椀（7～9）　7は口径16.8cm，底径6.0cm，器高6.0cm，8は復原口径16.5cm，底径6.0cm，器高5.4cmの大きさ，体部は内彎気味に立ち上がり，小さな高台のある底部付近でやや屈曲する。体部外面の下半はケズリ状の調整で，他の部分はナデられるが，8の口縁部下にはカキ目状の条線がみられる。胎土に細砂粒・角閃石を含み暗灰色を呈すが，乳白色の帯を生じている。

土師器杯（10～13）　10は復原口径12.0cm，底径7.0cm，器高2.9cmの大きさで，11は復原口径13.0cm，底径8.1cm，器高2.9cm，12は復原口径13.7cm，底径9.2cm，器高2.5cm。磨滅が進み調整手法を観察し難いが，12の外底面に板状圧痕と糸切り痕が残る。胎土に細砂粒・褐色粒・角閃石を含み，明茶褐色に焼成されている。

土師器小皿（14～16）　復原口径7.4～9.5cm，底径5.7～8.1cm，器高1.1～1.3cmの大きさ。外底面には14で糸切りらしい痕跡，15に板状圧痕が残る。胎土に細砂粒・角閃石・褐色粒などを含み，明茶褐色・明褐色に焼成されている。

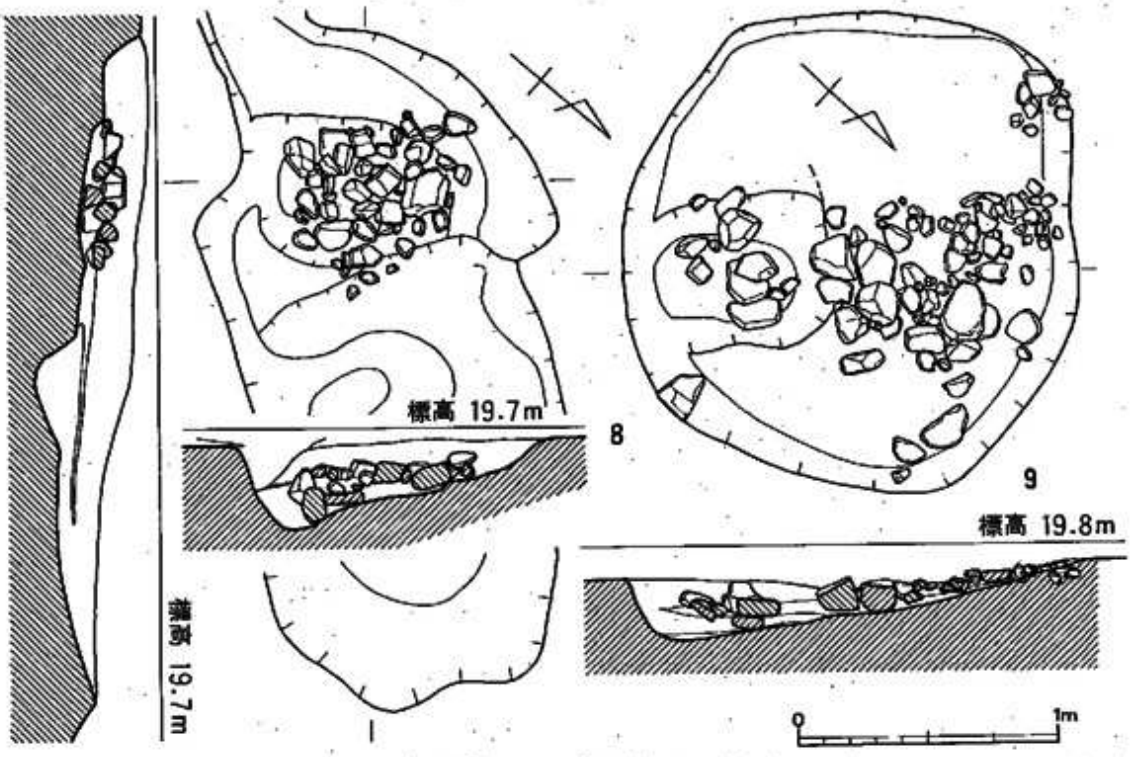
瓦質鉢（17）　体部が直線的に開く擂鉢状のもので，口縁部はわずかに肥厚して端部は丸い。内面に細かなハケ目，外面に指頭圧痕がみられる。胎土に角閃石を含み，黄褐色味のある灰色を呈している。

土師器鉢（18～21）　18は内彎気味に立ち上がる口縁部破片で，口縁下に鍔状の凸帯が巡るもの，内外面にハケ目がみられ，凸帯以下に煤が付着している。胎土に角閃石・褐色粒を含み，茶褐色に焼成されている。

19～21は，体部から直線的に立ち上がる口縁部が，端部で外方に屈折して，内彎気味に肥厚する器形。19は口径32.9cm，20は復原口径35.0cm，21は復原口径37.0cmの大きさ。内外面ともにハケ目調整されるが，内底面はナデられるなど，ナデ調整の加わるものがある。外面全体に煤が厚くこびり着いている。

8号土壙（図版92－1，第237図）

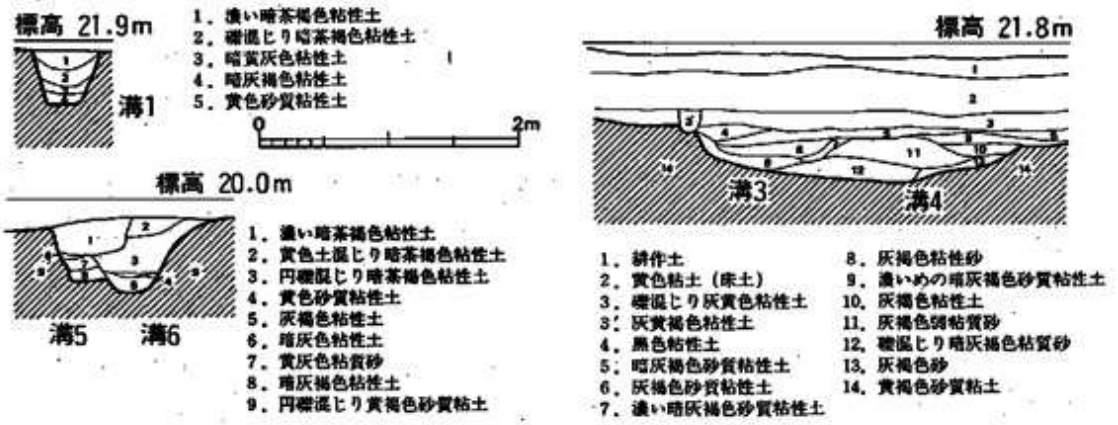
調査区北部のH22区北東隅に検出された。水田開削時に受けたものか，攪乱されて本来のプランは詳らかでない。攪乱坑によって北側を，攪乱溝によって南西側を失うが，土壙の上縁は，長さ約1.20m，幅1m程の不整楕円形プランであったと思われる。主軸方向はN40°W。検出面から床面までの深さ0.15～0.33m。土壙内には，安山岩質の河原石や角礫などが床面を覆うように，長さ0.70m，幅0.55mの範囲に，10～20cmの高さをもって集積されている。集積された石では，特に規格をもった配置を感じさせない。床面は南東側が低い傾斜をもつ。縄文土器片と土師器らしい小破片が出土したが，図示し得ない。



第237図　8・9号土壙実測図（1/30）

9号土壙（図版92－2，第237図）

調査区北部のH22区北西隅に検出された。8号土壙に続く撹乱溝と削平のために上部を失う。土壙の上縁は，径1.75～1.90mの不整円形プランで，土壙内には，安山岩質の河原石や角礫などが床面の北東側を覆うように，長さ0.95m，幅0.65mの範囲に，5～10cmの高さをもって集積されている。本来は1.10m程の長さに集積していたのが，撹乱坑で南東側は崩れている。集積され



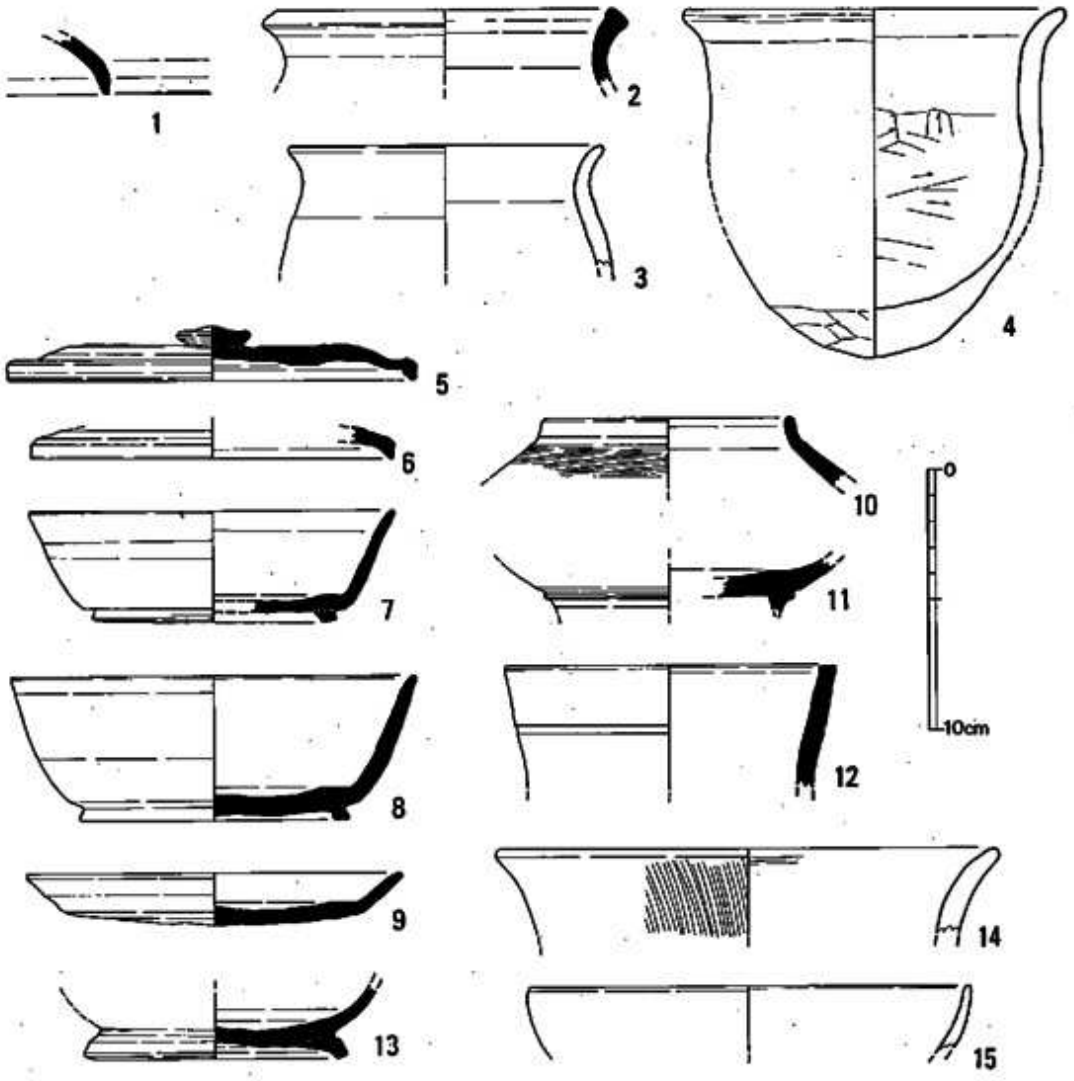
第238図　1・3～6号溝断面土層図（1/30）

た石では，特に規格をもった配置を感じさせない。主軸方向はN53°W。検出面から床面までの深さ0.03～0.10m。土壙内では縄文土器片と土師器らしい小破片が出土したが，図示し得ない。

5　溝状遺構

1号溝（第238図）

調査区を横断する溝で，D3区からW11区にかけて検出されたが，1号住居跡・2号住居跡・7号土壙と重複し，これらの遺構より先行する溝である。1号住居跡の西方で流路がカーブす



第239図　1・2号溝出土土器実測図（1/3）

るが全体的には北北東方向に流下する。規模は幅50～80cm，深さ30～50cmで，両側の壁は直に近く掘られている。

出土遺物（図版93，第239図）

須恵器杯蓋（1）　身受けのかえりをもたない杯蓋，細砂粒を胎土に含み，焼成はやや甘い。

須恵器甕（2）　復原口径13.8cmの口縁部破片で，外反する口縁部は端部で肥厚する。

土師器甕（3・4）　外反する口縁部をもつ甕で，4は器壁が厚い。4は口径14.8cm，器高13.4cmの大きさで，細砂粒・角閃石・褐色粒を胎土に含み，茶褐色に焼成される。

2号溝

調査区を横断する溝で，G6区からY14区にかけて検出された。12号住居跡の東方で流路を東に振りカーブするが全体的には北東方向に流下する。検出した長さは約57mにわたり，上流側での1号溝との距離が約20mで下流側では約15mに接近している。規模は幅50～70cm，深さ30～50cmである。

出土遺物（図版93，第239図）

須恵器杯蓋（5・6）　鳥嘴状の口縁部をもつ杯蓋で，5の天井部に扁平な宝珠形つまみが付く。復原口径15.8cm，器高2.1cm，つまみの径2.8cmの大きさ。平坦な外天井は回転ヘラケズリされる。角閃石を胎土に含み，暗灰色に焼成される。

須恵器杯身（7・8）　高台をもつ杯身で，高台はやや外方に開く。7は復原口径14.1cm，高台径9.4cm，器高4.3cm，8は復原口径15.6cm，高台径10.4cm，器高5.5cmの大きさ。

須恵器皿（9）　口縁部は外方に開き底部はやや膨れる。復原口径14.5cm，底径11.5cm，器高2.0cmの大きさ。

須恵器壺（10～13）　10は短頸壺の口縁部で，復原口径9.7cmの大きさ。体部外面にカキ目調整がみられる。12は直口壺の口縁部で，口唇部上面が凹み，外面に沈線が巡る。11・13は台付壺の底部であろう。

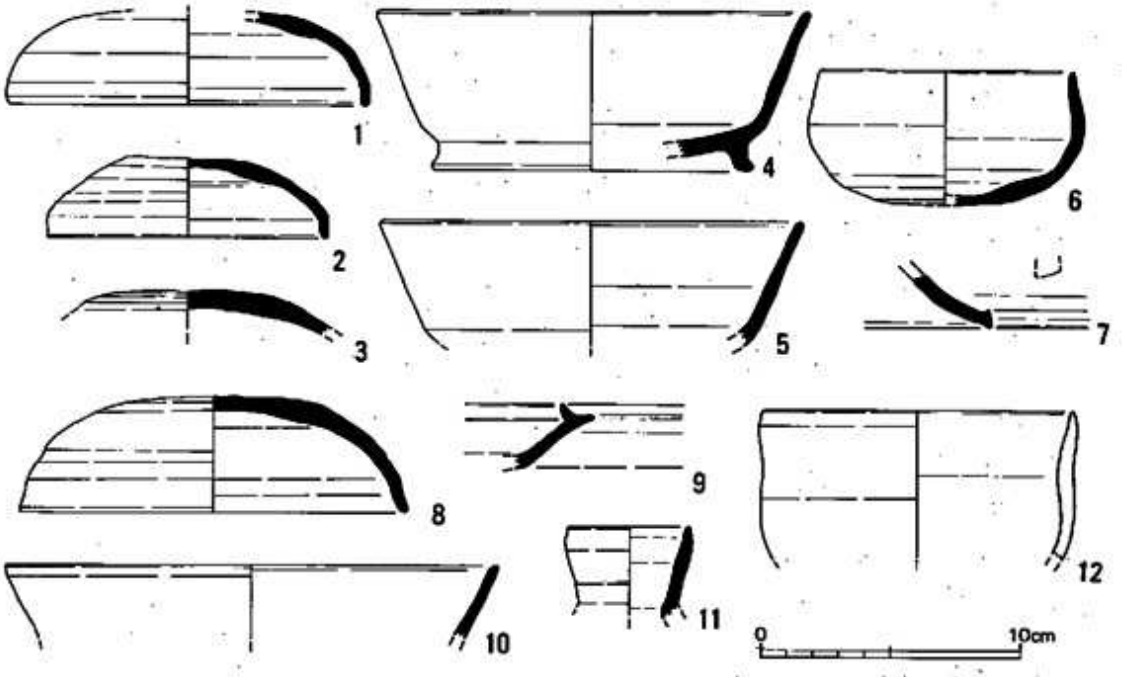
土師器甕（14）　外反する口縁部破片で，外面にハケ目がみられる。

土師器椀（15）　内彎する，やや径の大きな椀で内外面ともにナデ調整されている。

3・4号溝（第238図）

調査区を横断する溝で，南端の調査区からT9区にかけて約60mの長さにわたって検出された。3・4号溝は重複し，3号溝が，南部では4号溝の流路の上部を流れるものの，北部で3号溝が東寄り，4号溝が西寄りの流路をとって分かれる。全体的には北北東方向に流下するが，上流側での1号溝との距離が約30cmで下流側では約20mに接近している。

3号溝の規模は幅50～140cm，深さ10～30cmで北東方向では浅い。4号溝の規模は幅50～270



第240図　3～6号溝出土土器実測図（1/3）

cm，深さ20～40cmである。南端での堆積土の観察では，4号溝が砂礫で半ば埋没した後に幅を挟めて流下した状況が窺える。

出土遺物（図版93，第240図）

1・4・6・7は3号溝，2・3・5は4号溝から出土したが，破片で厳密に区別し得なかったものも多い。

須恵器杯蓋（1～3）　1・2は身受けのかえりをもたない杯蓋。2の口縁端部はわずかに反り，天井部は回転ヘラケズリされるものの未調整の部分がある。口径10.8cm，器高3.1cmの大きさ。

須恵器杯身（4・5）　高台をもつ杯身で，高台は外方に開く。緻密な胎土を用いるが土師器のような焼成である。

須恵器椀（6）　内彎する体部で口縁部は直に立つ。底部は回転ヘラケズリされている。

須恵器高杯（7）　脚裾部破片で，柱状部に長方形透かしがある。

5・6号溝（第238図）

調査区北西端を横断する溝で，5号溝はR19区からM25区にかけて約43mの長さにわたって検出された。6号溝は，南部では5号溝の流路の中に消えるが，P22区から現れて，北部では5号溝の側に流路をとって分かれる。5・6号溝ともに北東端は水田の開削によつて削平されて，

北端の調査区では検出できない。全体的には北東方向に流下するが，５号溝は，１号溝との距離は約107mでほぼ平行している。５号溝の規模は幅50～120cm，深さ20～50cmで，両側の壁は直に近く，底面が平なコ字を倒した断面形である。６号溝の規模は幅50～100cm，深さ20～60cmで，U字形の断面形である。堆積土の観察では，５号溝が埋没した後に６号溝が掘削され，６号溝が埋没した後に30cm程浅くはなるものの，改修された５号溝の存在が窺われる。

出土遺物（図版93，第240図）

８・９・11・12は６号溝，10は５号溝から出土したが，厳密に区別し得なかったものも多い。

須恵器杯蓋（８）　身受けのかえりをもたない杯蓋。口径14.8cm，器高4.4cmの大きさで，口縁端部はわずかに反り，天井部は回転ヘラケズリされるが，焼成は甘い。

須恵器杯身（９）　蓋受けのかえりをもつ杯身で，かえりは低い。

須恵器鉢（10）　直線的に開く口縁部破片で，口径を19cmに復原した。

須恵器平瓶（11）　口縁部のみの破片で，内彎気味だが，頸部の上に段状の沈線が巡る。

土師器椀（12）　復原口径12.0cmのわずかにくびれる器形。角閃石を若干胎土に含み，淡褐色に焼成されている。

６　その他の遺構と遺物

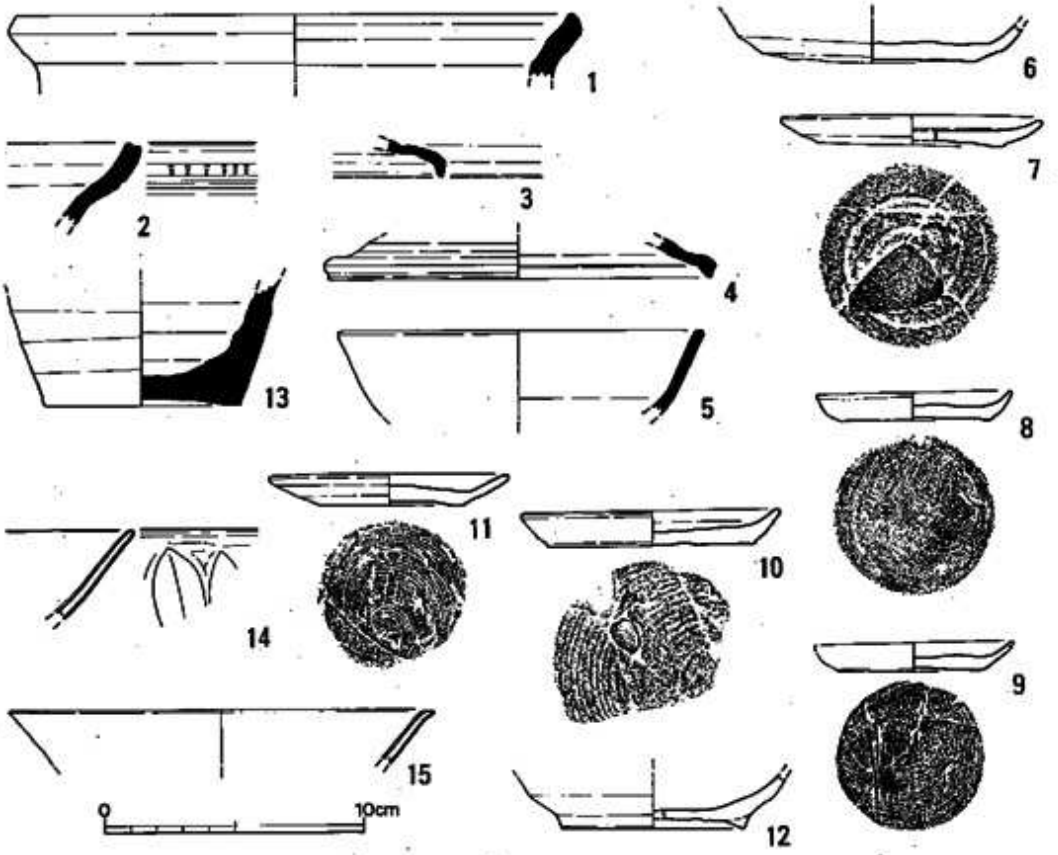
第３項でも触れたように，山崎遺跡では柱穴状ピットが多数検出されたものの，掘立柱建物を確認できたのは14軒に留まる。これらの建物を構成する柱穴以外のピットが，確認できないものの建物の柱穴の可能性は高い。また柱穴状ピットの外にも２号竪穴の付近にまとまりの無い不整形な落ち込みなどがあり，調査区全体に広がる遺物包含層もある。ここでは，これから出土した遺物を取り扱う。

柱穴状ピット出土遺物（図版93，第241図）

須恵器（１～５）　１・２は甕でP68・P41出土。外反する口縁部が端部で内彎する。２の口唇下には板小口圧痕が並ぶ。３・４は鳥嘴状の口縁部をもつ杯蓋でP73・P29出土。５は高台が付くと思われる杯身でP７のピットから出土した。

土師器（６～12）　それぞれP386・P34・P390・P389・P128・P116・P３から出土した。P128は７号建物の南方にある。６は復原底径8.4cmの杯で糸切り痕がある。７～11は７は糸切り痕のある小皿。口径10.0cm，底径7.0cm，器高1.2cmの大きさで，板状圧痕がある。８・９は口径7.5cm，器高1.1cm程の大きさ，10は復原口径9.9cm，器高1.3cm，11は口径9.3cm，器高1.1cmの大きさ。12は復原高台径7.0cmの高台付椀である。

陶　器（13）　９の土師器小皿とともにP389から出土した。復原底径7.6cmの底部破片で，外面は回転ヘラケズリでナデが加わる。紫褐色を呈している。



第241図　柱穴状ピット出土土器実測図（1/3）

青　磁（14）　P41から出土した，蓮弁文をもつ竜泉窯系青磁椀の口縁部破片である。

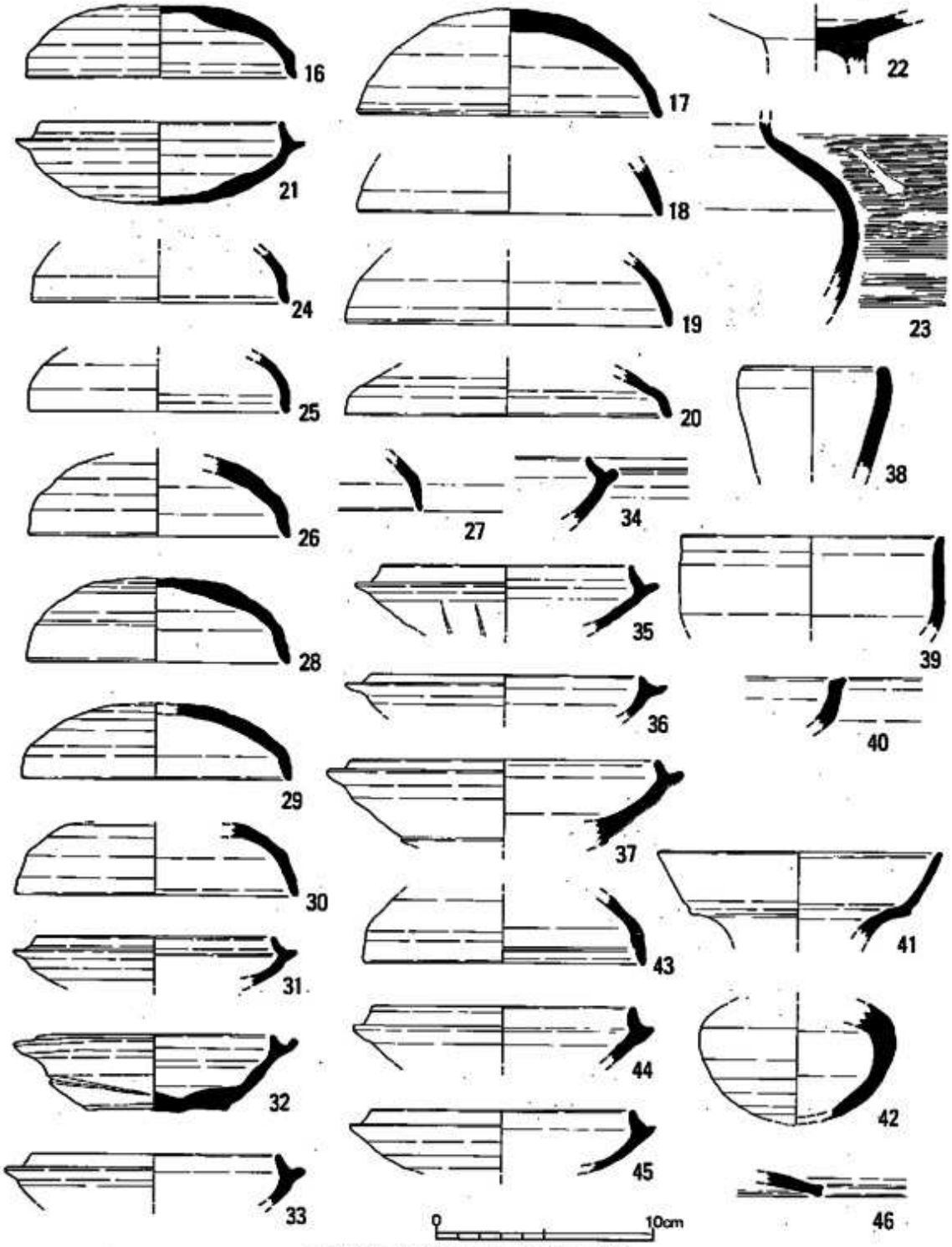
白　磁（15）　2号住居跡の南端部上面のピット出土。直線的に開いて端部が外反する白磁椀の口縁部破片である。

土製品（第245図1）　P200出土の，土玉で径13.0～13.5㎜の大きさの玉に，径2㎜程の穿孔がある。細砂粒を含み茶褐色に焼成されている。

鉄　器（第245図2・3）　2はP74出土の細い角棒状のもの。3はP317出土の細い角棒をまげたもので，破片がうまく接合しないが端部は曲がり，一方はやや太めになっている。

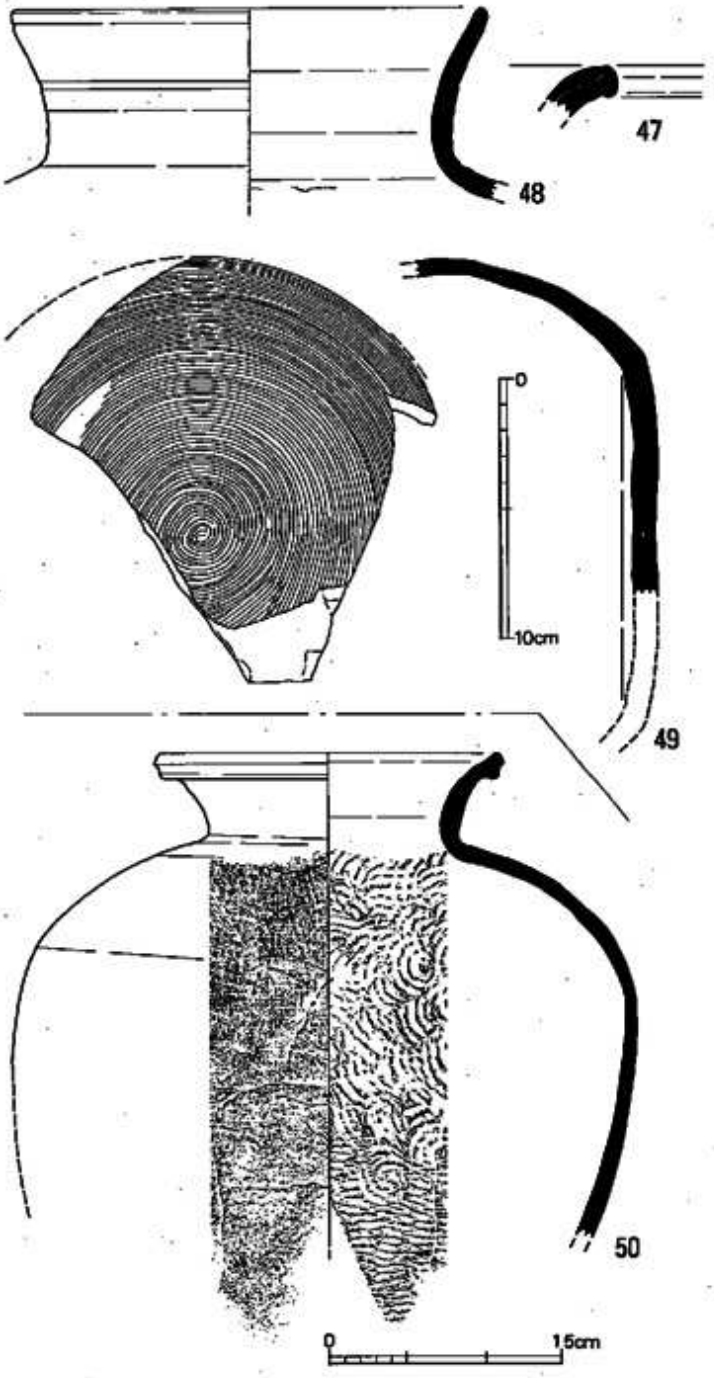
包含層出土遺物（図版94，第242～246図）

須恵器（16～50）　16～23・46は2号溝周辺，24～42・48は5・6・8・9号建物周辺，50はE12区（図版92－4），43～45・47は19号住居跡検出前の黒色土から出土した。16～20・24～30・43は天井部につまみをもたずに口縁部へ内彎する杯蓋，21・31～37・44・45は蓋受けのかえりをもつ杯身，46は烏嘴状の退化した口縁部をもつ杯蓋である。22は高杯の杯底部破片，23は壺



第242図　包含層出土土器実測図（1/3）

の体部上半でカキ目と自然釉がみられる。38は平瓶の口縁部，39・40は椀の口縁部，41・42は甕の口縁部と体部，47・50は甕，48は壺，49は提瓶の破片であろう。



第243図　包含層出土土器実測図（1/3・1/5）

土師器（51～70）　51・54～57は5・6・8・9号建物周辺，52は9号土壙の北側，53・59～61・65・66は2号溝周辺，62～64・70は19号住居跡検出前の黒色土，67～69は12号住居跡の東側外から出土した（図版92－3）。

51～53は外反する口縁部破片で弥生後期ないし古墳時代前期の土器かも知れない。54～57は緩やかに外反する甕口縁部破片，58は甑の裾部，59・60は甕底部，61・62は浅い椀，63は浅く器壁の厚い甕，64は口縁下が肥厚する椀である。

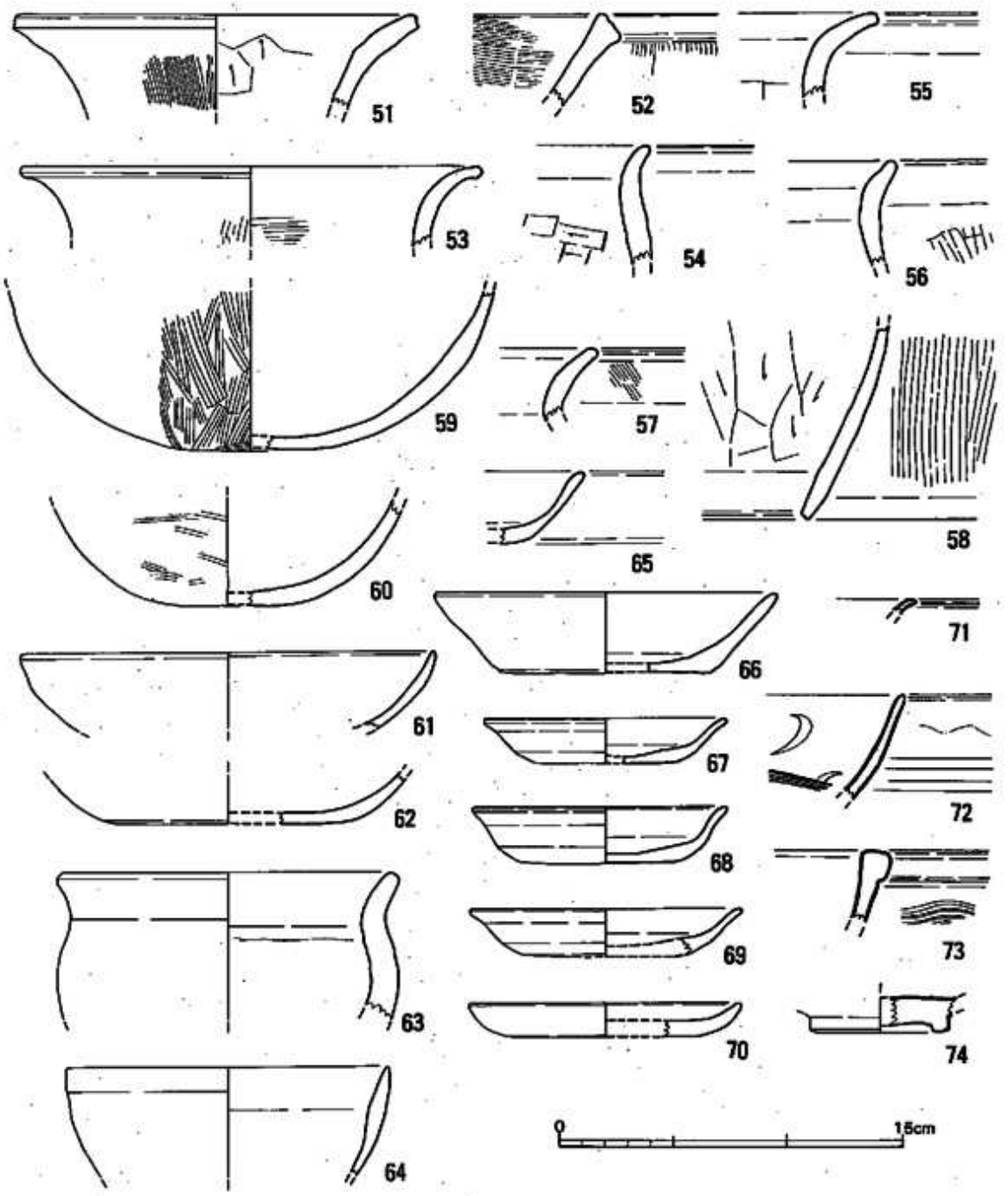
65・66は糸切り底の杯で66の復原口径15.0cm，底径9.2cm，器高5.6cmの大きさ。

67～69は一括出土の皿で，摩滅が進み調整手法は観察できない。復原口径10.7～11.9cm，底径6.2～7.2cm，器高2.0～2.5cmの大きさ。

70も調整手法を観察できないが，復原口径12.0cm，底径8.6cm，器高1.5cmの大きさ。

白磁（71）　椀の口縁部

破片である。3・4号住居跡の間で出土した。



第244図　包含層出土土器実測図（1/3）

青　磁（72・74）　72は19号住居跡の上層から出土した龍泉窯青磁椀の口縁部破片で，74は13号建物の南側から出土した龍泉窯系青磁椀の底部破片である。

陶　器（73）　調査区北端の黒色土から出土した口縁部破片で，玉縁状の口縁下に波状文が描かれている。釉は焦げ茶色を呈している。

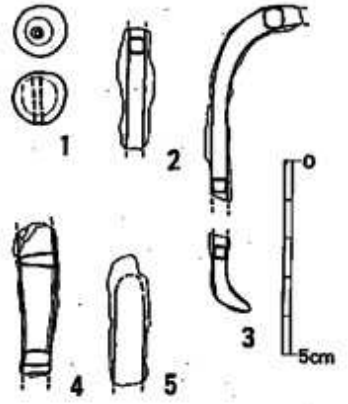
鉄　器（第245図4・5）　4はB8区から出土した。刀子の基部破片もしくは細根片刃の鎌身部の破片であろう現存長4.0cm，幅0.8～0.9cm，厚みは4mmを測る。5は12号住居跡の北側外から出土した。錆膨れで先端部は不明だが，破損面では，幅7mmの角棒状を呈している。

石　器（第246図）　調査区北端の黒色土の下面から出土した。頁岩製の扁平片刃石斧の頭部破片であろう。現存長8.2cm，幅4.5cm，厚さ1.6cm，重さ95gを測る。

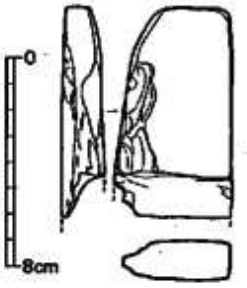
表採遺物（図版94，第247図）

土師器甕（75・76）　75は復原口径13.0cmの小形甕で，器壁は厚い。体部外面は板状工具によるナデ，内面はヘラケズリされるが，粘土帯の継ぎ目の隙間がめだつ。76は台付の甕であろう。体部外面にハケ目がみられる。

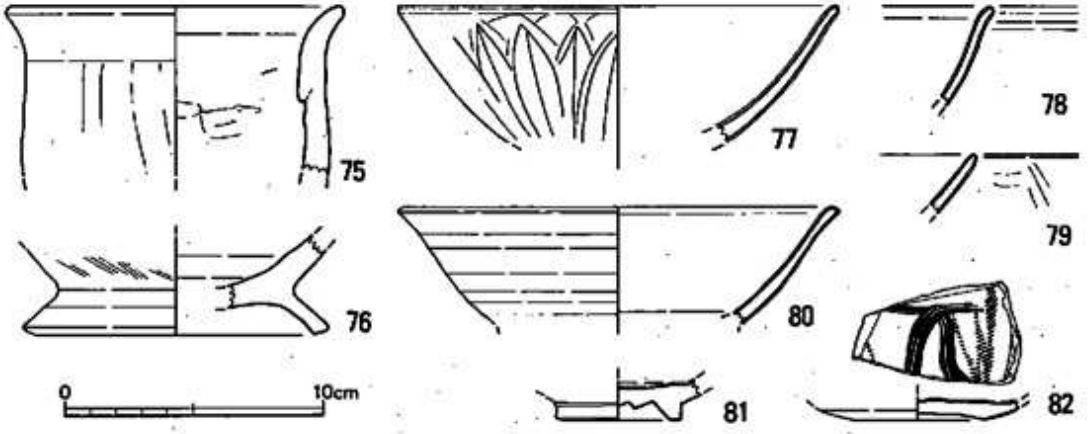
青　磁（77～79・82）　77・78は龍泉窯系の青磁椀で，77に蓮弁文がみられる。79・82は同安窯系椀の口縁部と皿底部破片で，82の皿内底部に櫛描き文がある。



第245図　包含層出土土器実測図（1/3）



第246図　包含層出土石器実測図（1/3）



第247図　表採土器実測図（1/3）

白　磁（80・81）　椀の口縁部と高台のある底部破片である。

7　石町遺跡の遺構と遺物

山崎遺跡の調査区に隣接して，調査された石町遺跡の調査区では，古墳時代以降の遺構として，竪穴住居跡が6軒，土壙4基，掘立柱穴建物2軒と多数の柱穴状ピットである。住居跡および掘立柱建物に関わる遺物は極めて少なく，図示し得る資料はないが，発掘調査の概略報告段階で遺物が未調整であった土壙などに付いて補足することにする。

1号土壙（図版95－2，第248図）

北東側発掘区の中央部で検出された。長さ2.2m，幅1.5mの長方形プランを呈し，主軸方向はN39°30′E。検出面から床面までの深さ0.18～0.26m。土壙内には若干礫を含む暗褐色土が単純層で堆積していた。床面は長さ2.00m，最大幅1.25mの広さで平坦だが，東側がわずかに高い。土師器が若干出土した。

出土遺物（図版97，第249図）

土師器（1・2）　1は口径26.6cm，残存器高9.8cmの大きさ。11cm程の高さの，口縁端部が外反して，底部が膨らむ土鍋であろう。体部外面は縦方向，内面は横方向の粗いハケと言うより櫛目状の調整で，外面全体に煤が付着している。胎土に砂粒を含み，やや軟質な焼成で黄茶褐色を呈している。

2は口径21.4cm，残存器高9.8cmの大きさ。11cm程の高さの，口縁端部が外反して把手寄りに注ぎ口が付き，底部が膨らむ，把手付き片口鍋であろう。中空の把手は長さ約6.5cm，幅3.9cm，厚さ3.1cmの大きさ。体部外面は縦方向，内面は横方向のハケ目状の調整で，外面に煤が付着している。胎土に砂粒を含み，やや軟質な焼成で灰色を呈している。

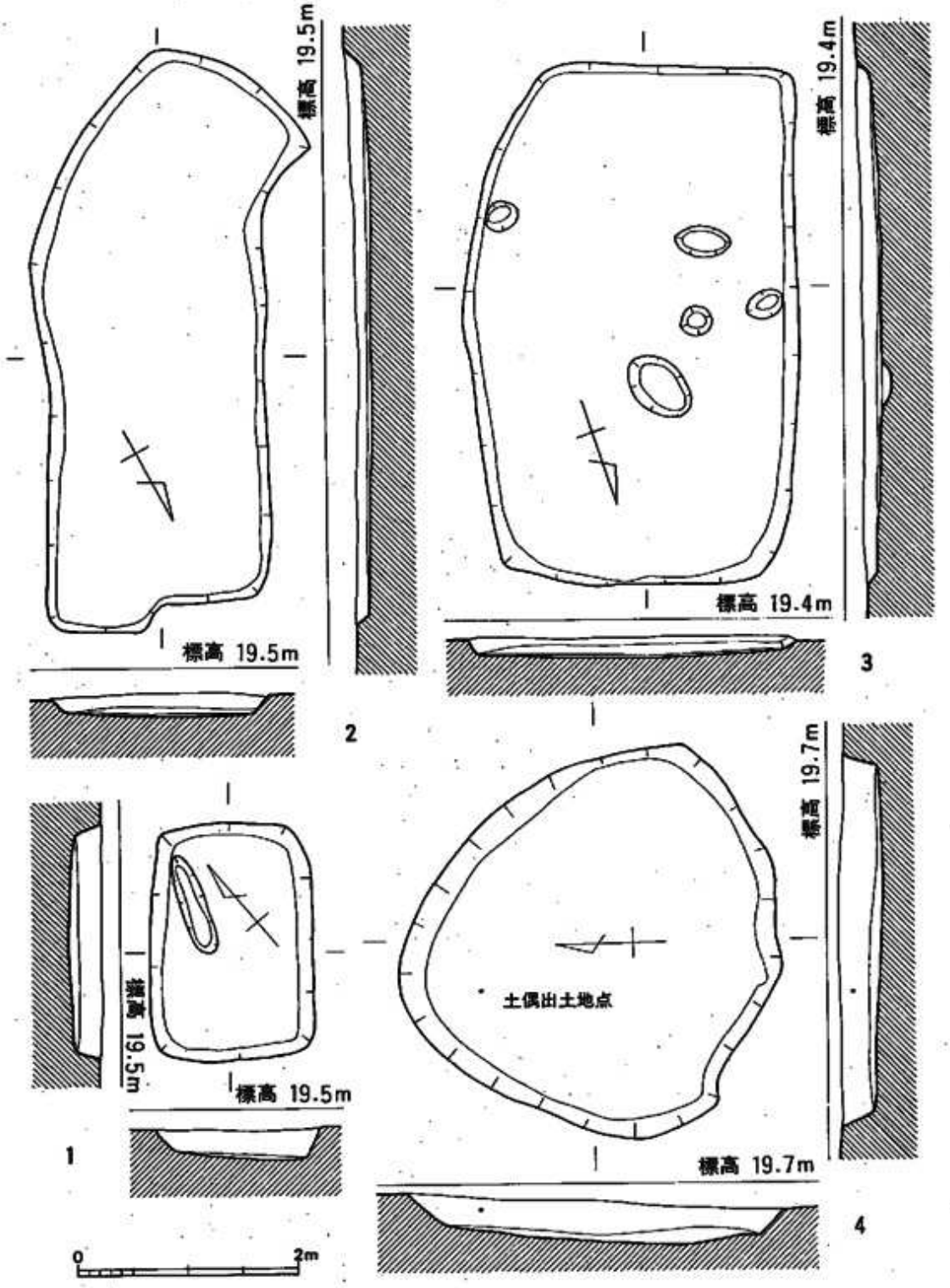
青　磁（3）　蓮弁文のある，龍泉窯系青磁椀の口縁部破片である。

2号土壙（図版95－2，第248図）

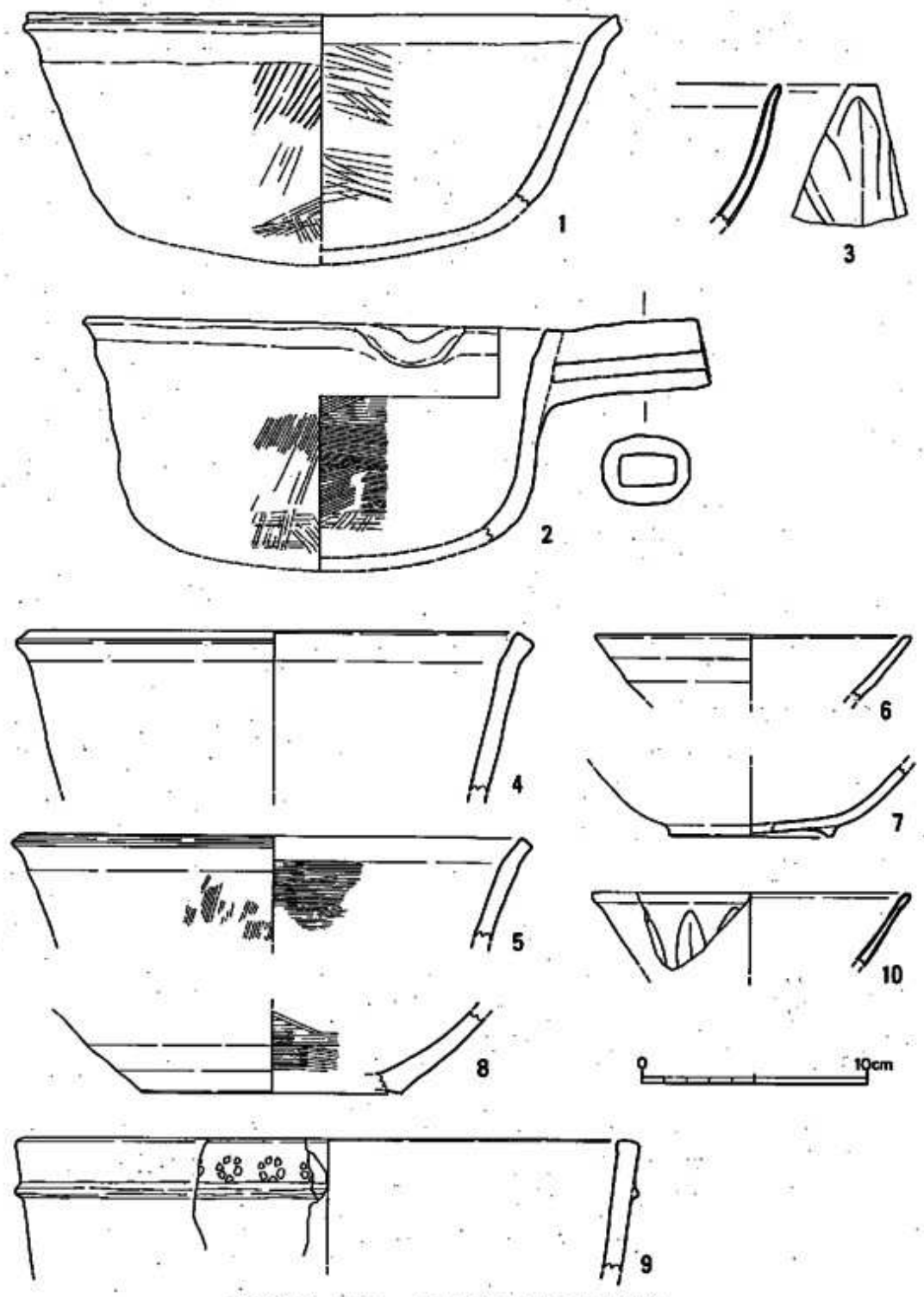
1号土壙の北東側で検出された。長さ5.3m，幅2.0mの不整長方形プランを呈し，主軸方向はN28°50′E。検出面から床面までの深さ0.11～0.16m。土壙内には若干礫を含む暗褐色土が単純層で堆積していた。床面は長さ4.95m，最大幅1.93mの広さでほぼ平坦である。土師器・瓦器・磁器などの破片が若干出土した。

出土遺物（図版97，第249図）

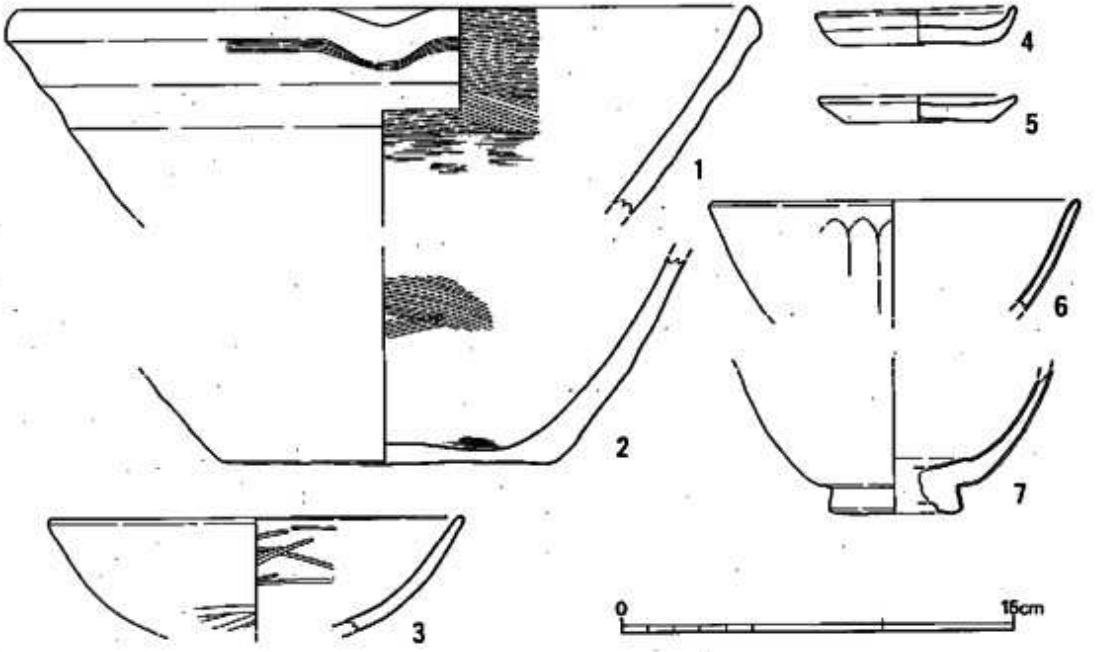
土師器（4～7）　4・5は復原口径23.0cmの鉢で，口縁部が外反する。5の体部内外面はハケ目調整され，外面に煤が付着する。4・5ともに胎土に砂粒・角閃石・金雲母を含み，灰色に硬く焼成されている。



第248図　石町1～4号土壙実測図（1/60）



第249図　石町1・2号土壙出土土器実測図（1/3）



第250図　石町3号土壙出土土器実測図（1/3）

6・7は椀の破片で，6の口縁部は直線的に開く。内面は研磨される。細砂粒を含み黄褐色に焼成されている。7は復原径7.3cmの高台をもつ。内外面ともに風化が著しいが，内面は黒色，外面は黄褐色を呈している。

瓦質土器（8）　擂鉢の底部破片で，内面はハケ目調整される。

土師土器（9）　火鉢の口縁部破片であろう。復原口径27.8cmの大きさで，直に立つ口縁部外面に低い三角凸帯が巡り，口唇部と凸帯の間に花弁状の刺突文様が並ぶ。胎土に細砂粒・角閃石・褐色粒を含み，黄褐色に焼成されている。

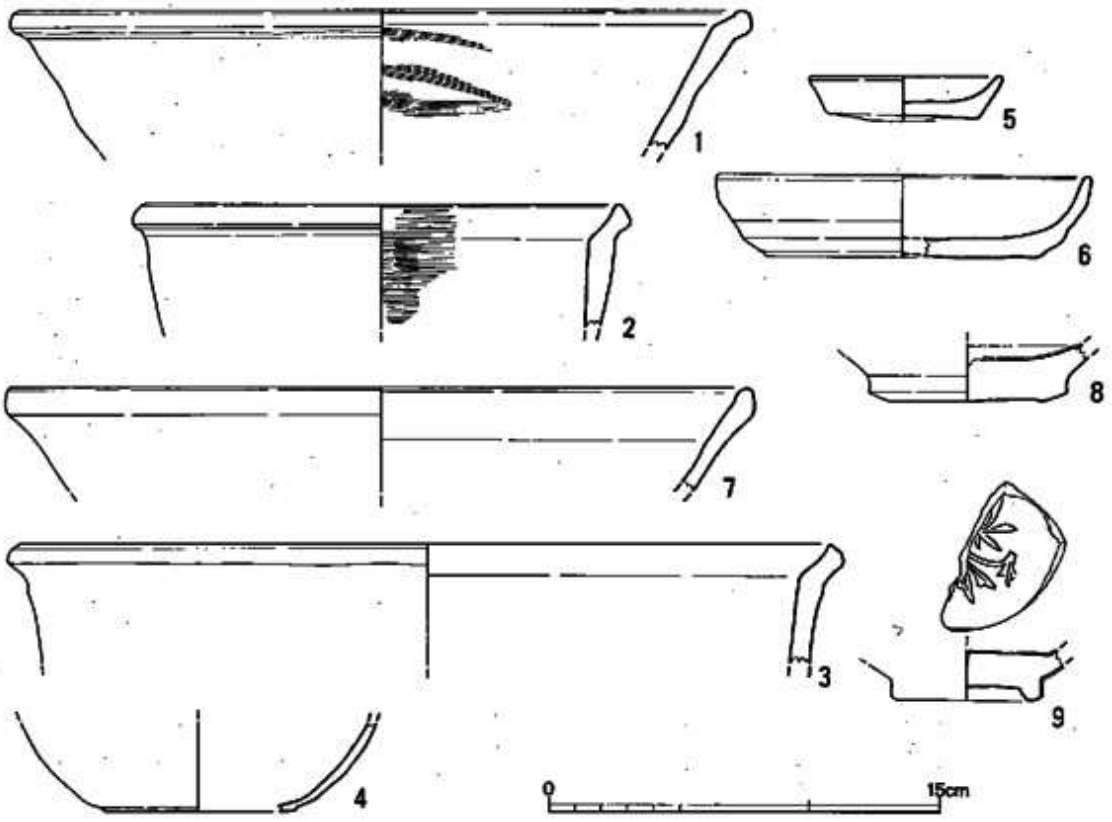
青　磁（10）　蓮弁文のある，龍泉窯系青磁椀の口縁部破片である。

3号土壙（第248図）

2号土壙の西側で検出された。長さ4.8m，幅3.0mのやや隅の丸い不整長方形プランを呈し，主軸方向はN18°30′E。検出面から床面までの深さ0.03～0.14m。土壙内には若干礫を含む暗褐色土が単純層で堆積していた。床面は長さ4.70m，最大幅2.85mの広さで，ほぼ平坦だが中央が低く，小さく浅いピットが数穴ある。土師器・瓦器・磁器などの破片が若干出土した。

出土遺物（図版97，第250図）

瓦質土器（1・2）　接合しないが，同一個体の擂鉢の可能性がある。復原口径29.0cmの口縁部は直線的に開き，端部が肥厚して丸い。注ぎ口がある。底部は平らで復原底径12.8cmの大きさ。



第251図　石町4号土壙出土土器実測図（1/3）

外面はナデ調整されるが，内面にはハケ目がみられる。

瓦　器（3）　椀の口縁部で，復原口径16.0cmの大きさ。内外面に研磨痕がみられる。

土師器（4・5）　小皿で，復原口径7.6～7.7cm，底径5.6～6.2cm，器高1.0～1.4cmの大きさ。外底面には4に糸切り痕，5に板状圧痕が残る。胎土に細砂粒・角閃石・褐色粒などを含み，黄褐色に焼成されている。

青　磁（6・7）　緑灰色の釉がかかる，龍泉窯青磁椀であろう。6はやや狭い蓮弁文がみられる。復原口径14.2cmの大きさ。7は復原高台径5.1cmの大きさで，高台底は露胎である。

4号土壙（図版96，第248図）

南西側の調査区の東部で検出された。1号土壙の南南西約21mの位置にある。東西3.42m，南北3.42mの不整円形プランを呈する。検出面から床面までの深さ0.25～0.40m。土壙内には，暗褐色土が堆積していて，人頭大の河原石が廃棄された状況で多く混じっていた。床面は3.00～3.20mの径をもつ広さで，ほぼ平坦だが中央南寄りがやや低い。土師器・瓦器・磁器などの破片が若干と，縄文時代の土偶片が出土した。

出土遺物（図版98，第251図）

土師器（1～6）　1～3は鉢の外反する口縁部小破片で，不確実だが1は少し口縁部が立つ傾きに，2は口径が大きくなるかも知れない。復原口径28.4cm，2は復原口径19.2cmの大きさ。外面はナデ調整，内面はハケ目調整される。3は復原口径32.2cmの大きさで，内外面ともにナデ調整され，外面に煤が付着している。土鍋であろう。

4は椀の底部破片で低い高台が付くようだ。器面が風化して調整手法は不明だが，底部側は黒色を呈していて瓦器椀の可能性もある。胎土に角閃石を含む。

5は糸切り底の小皿で，口径7.3cm，底径5.8cm，器高1.5cmの大きさ。細砂粒・角閃石・褐色粒を胎土に含み，淡褐色に焼成されている。

6は糸切り底の杯で，板状圧痕がついている。復原口径14.3cm，底径10.4cm，器高3.1cmの大きさ。細砂粒・角閃石・褐色粒を胎土に含み，黄褐色に焼成されている。

瓦質土器（7）　復原口径28.8cmの口縁端部が肥厚して丸みをもつ鉢で，内外面ともにナデ調整されている。

白磁？（8）　底部破片で高台底はほぼ平ら。外面は露胎で，内面に灰白色の釉がかかる。

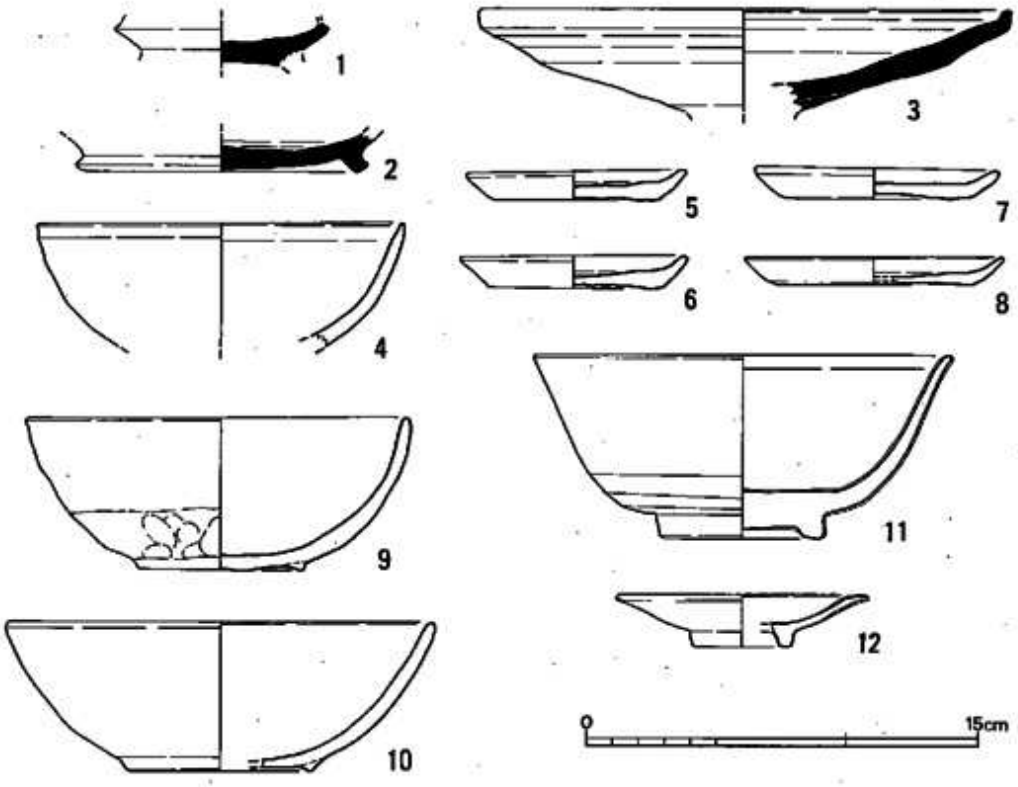
青　磁（9）　高台外面まで濃いめの緑灰色の釉がかかる破片で，見込みに草花の文様がある。なお，土偶は第2節4で記述した。

その他の遺物（図版98，第252図）

須恵器（1～3）　1はP50，2はP54，3は調査区南端から出土した。1は底部のみで器形が分からないが，小さな台付皿であろうか。口縁部側に内傾する。2は杯身の底部で，高台は裾が外開きになる。3は中央部を欠き，杯蓋の可能性もあるが，一応高杯としておく。浅めで直線的に開く杯部は口縁端部が上方に屈曲する。復原口径20.4cm，現存器高3.9cmの大きさ。外底部は回転ヘラケズリされ，柱状部側に胎土を重ねた痕跡がある。細砂粒を含むが緻密な胎土で，焼成があまく暗黄褐色を呈している。

土師器（4～8）　4はP135，5～7はP67，8は遺構検出面から出土した。4は復原口径14.0cmの椀で，風化が進み調整手法不明だが，緻密な胎土で明褐色に焼成されている。5～7は一括出土の小皿で，口径8.4～9.3cm，底径6.4～6.7cm，器高1.2cmの大きさ。糸切り底で，5・6に板状圧痕がみられる。8も糸切り底の小皿で，復原口径9.8cm，底径7.4cm，器高1.1cmの大きさ。

瓦器（9・10）　9は遺構検出面，10はP146から出土した。9は口径14.8cm，高台径6.3cm，器高5.9cmの椀で，体部下半に指圧痕かめだつものの，器面が磨滅して調整手法は不明。高台は低い三角形状に貼り付けられている。10は復原口径16.4cm，高台径7.2cm，器高5.7cmの椀で，内外面ともに研磨の痕跡がみられる。やや軟質な焼成である。



第252図　石町遺跡その他の土器実測図（1/3）

青　磁（11）　遺構検出面で出土した。口径16.0cm，高台径6.4cm，器高7.0cmの椀で，口縁部はやや外反し，高台は断面四角形に近い。釉は濁った緑色で，高台の一部まで施釉されている。

白　磁（12）　4号土壙の東に隣接するP161から出土した。復原口径9.6cm，高台径3.8cm，器高2.0cmの皿で，口縁部は外反する。淡い緑がかった灰色の釉がかかるが，外面の下半と内面の見込み縁を露胎にしている。

6　おわりに

山崎・石町遺跡では，縄文時代早期から生活の痕跡をみることができる。しかし，早期では，押型文土器がわずかに出土しただけで，その生活環境を知る手がかりはほとんど無いに等しい。

縄文時代では，むしろ多量の後期土器出土と，後期の住居跡群が発見されたことの方が注目される。放射性炭素C^{14}による年代測定は未実施だが，他遺跡のデーターからは3200～3500年前頃の絶対年代といわれている。この中でも，古い段階は石囲炉を施設した方形ないし隅丸方形の住居跡で，4軒発見されているが5軒の可能性がある。次の段階はこれまで九州地方で発見されたことのなかった複式炉を施設した円形の住居跡などで，2軒が確実だが別の円形住居跡4軒もこの時期であろう。新しい段階は炉が不明瞭ながら楕円形の住居跡である。

さらに一部晩期にかかるが，甕棺墓が3基あり，遺物包含層からも晩期の遺物が発見された。

縄文時代の遺構・遺物については上巻に譲るが，弥生時代の遺構・遺物はわずかに後期土器片が散片出土したのみで，弥生時代の生活の痕跡は皆無に近い状況であった。

古墳時代以降の遺構では，まとまった遺物を含まない遺構も多く，出土土器でも細かな時期の判断が難しい資料もある。このような制約があるものの，一応古いものから挙げれば，まず6世紀後半代の土器を含む住居跡がある。14号住居跡，15号住居跡，16号住居跡，17号住居跡，19号住居跡，20号住居跡である。

須恵器杯蓋・身をみると，17号住居跡・20号住居跡の中にやや径の小さな例があり，若干時期が下降する可能性がある。ただ17号住居跡は18号住居跡を切る住居跡であることから，17号住居跡の資料中の古い要素を18号住居跡の段階とみることもできよう。重複する住居跡では，16号住居跡と，15号住居跡，19号住居跡がある。それぞれの土器では，外面の切り離しの後調整しないものが19号住居跡にみられるものの，顕著な差をみいだせない。

7世紀以降の土器を含む住居跡は，9号住居跡，10号住居跡，13号住居跡がある。6世紀後半の住居跡よりも面積が小さい。この中では，9号住居跡の鳥嘴状口縁をもつ杯蓋より，10号住居跡の杯蓋がやや古いであろう。9号住居跡の杯蓋・杯身はその特徴から7世紀後半ないし末頃に考えられる。

ここで問題になるのは，埋没した後に8号住居跡・9号住居跡が造られている，1号溝である。7世紀後半以降の土器片が含まれない。近くの2号溝には7紀末から8世紀前半頃の杯蓋・杯身が含まれ，3号溝には6世紀のものが含まれるものの7世紀後半ないし末頃の杯身がある。1号溝は幅が狭いものの側壁が垂直に近い角度に掘り込まれる溝で，比較的短期間に埋没した

溝であろう。一方調査区北西端にある5・6号溝では，掘削改修の痕跡がみとめられ，6号溝に7世紀後半以降の土器が含まれない。さらに1号溝と6号溝がほぼ平行するので，7世紀後半以前に規格をもった溝開削が実施されたものの，比較的短期間の間に埋没し，6号溝は改修されたが1号溝は顧みられることなく，2号溝なり3・4号溝にその役割が移行したのであろう。

住居跡・溝は，概ね北東ないし北北東方向かそれに直行する方向に構築されている。掘立柱建物もこの方向に構築された例が多い。掘立柱建物は，柱穴出土遺物に6世紀後半頃の須恵器と13世紀頃の青磁・白磁片が含まれること，15号住居跡と重複することから，6世紀末頃から13・14世紀頃までの時期幅の中で考える必要があろう。柱抜き取り時の混入よりも，柱穴施設時などの混入の確率が高いであろうし，後述する中世の土壙などとも重複していないので，いまのところ13・14世紀頃を考えておきたい。

土壙は，山崎遺跡・石町遺跡併せて13基検出された。出土土師器杯・小皿の形態や法量による大宰府での編年研究にあてはめれば(註1)，1号土壙は12世紀末から13世紀初頭頃，2号土壙は杯の口径が最も大きな12世紀後半頃に相当する。

3号土壙・4号土壙は時期的に大差がなく，13世紀後半から14世紀頃，6号土壙・7号土壙も13世紀後半ないし14世紀頃に相当する。5号土壙は13世紀中頃に近く，3号土壙・4号土壙・7号土壙より若干遡る様相を呈する。石町3号土壙・4号土壙は13世紀末から14世紀初頭頃であろう。北九州市出土の中世雑器による編年(註2)にあてはめてもほぼ妥当な年代で，石町1号土壙～4号土壙出土の鍋や鉢は山崎7号土壙出土例などより新しい様相がある。なお共伴出土の瓦器椀をみれば5号土壙出土椀に比して7号土壙出土椀のほうが浅く広めの器形をなしている。8号土壙・9号土壙は時期の決定が困難である。

土壙の分布からみれば，山崎1・2号土壙は近接し，山崎3～7号土壙はそれぞれ近い位置にある。また石町1～3号土壙も近接していて，時期的にもややまとまる。山崎3～7号土壙は出土土器に若干時期幅をもつが，遺構自体の時期に大きな差をもたないのかも知れない。

(小池)

註1　前川威洋ほか　1980　福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第8集下　福岡県教育委員会
森田勉　1978　大宰府出土の輸入中国陶磁器について　九州歴史資料館研究論集4
太宰府市教育委員会　1983　大宰府条坊跡II　太宰府市の文化財第7集
2　谷口俊治　1989　豊前地域の中世雑器―山陽道西部地域の設定に向けて―　研究紀要　第3号　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

図　　版

山崎遺跡全景空中写真

1

2

1

2

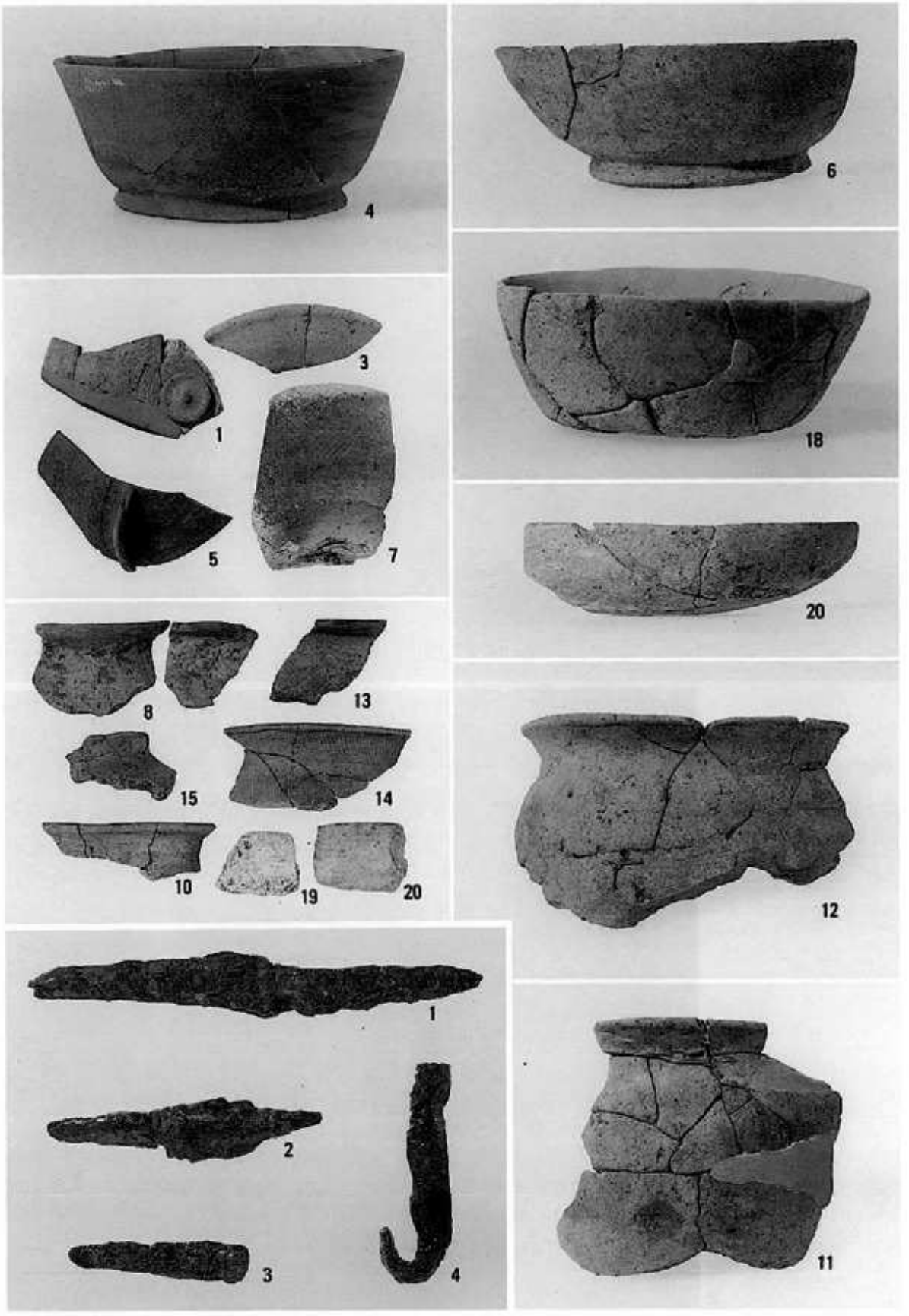
3

1　8号住居跡（南東から）
2　8号住居跡カマド
3　8号住居跡出土土器

1

2

1　9号住居跡（南東から）　　2　9号住居跡カマド

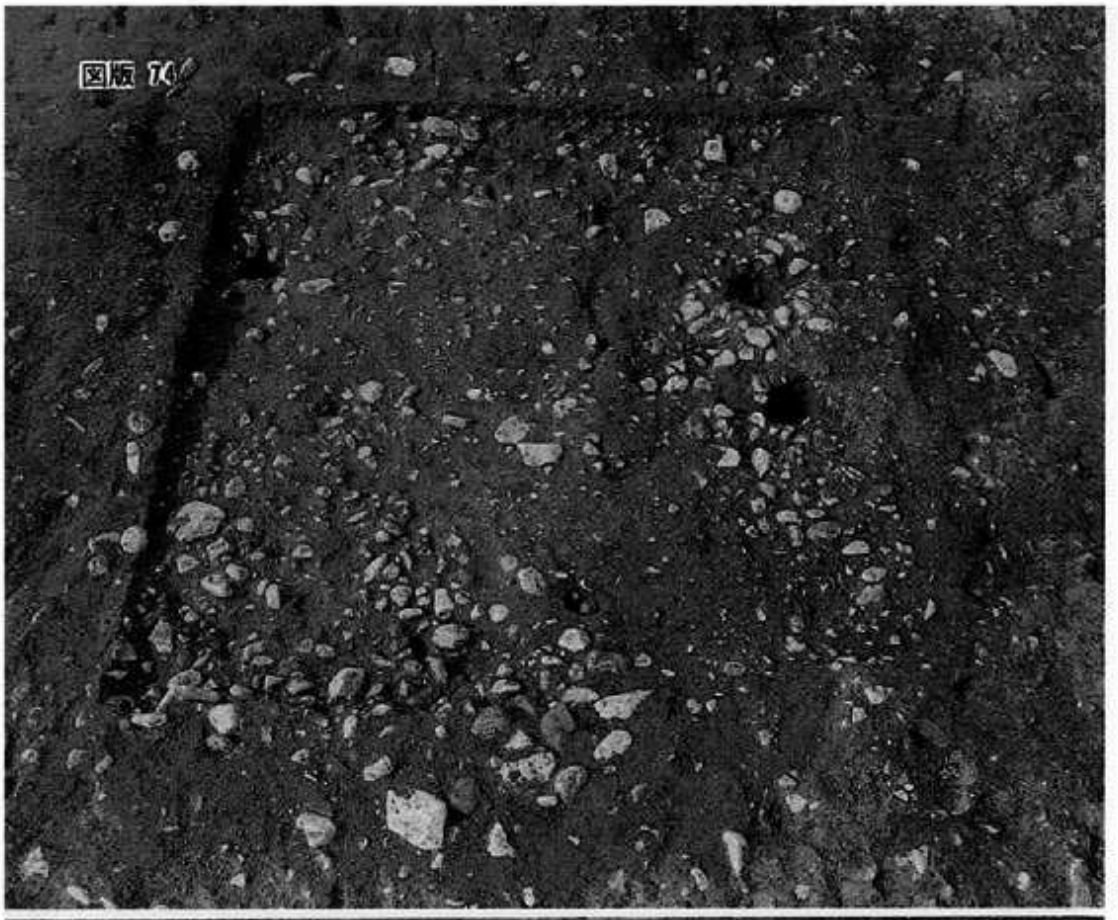


9号住居跡出土土器・鉄器

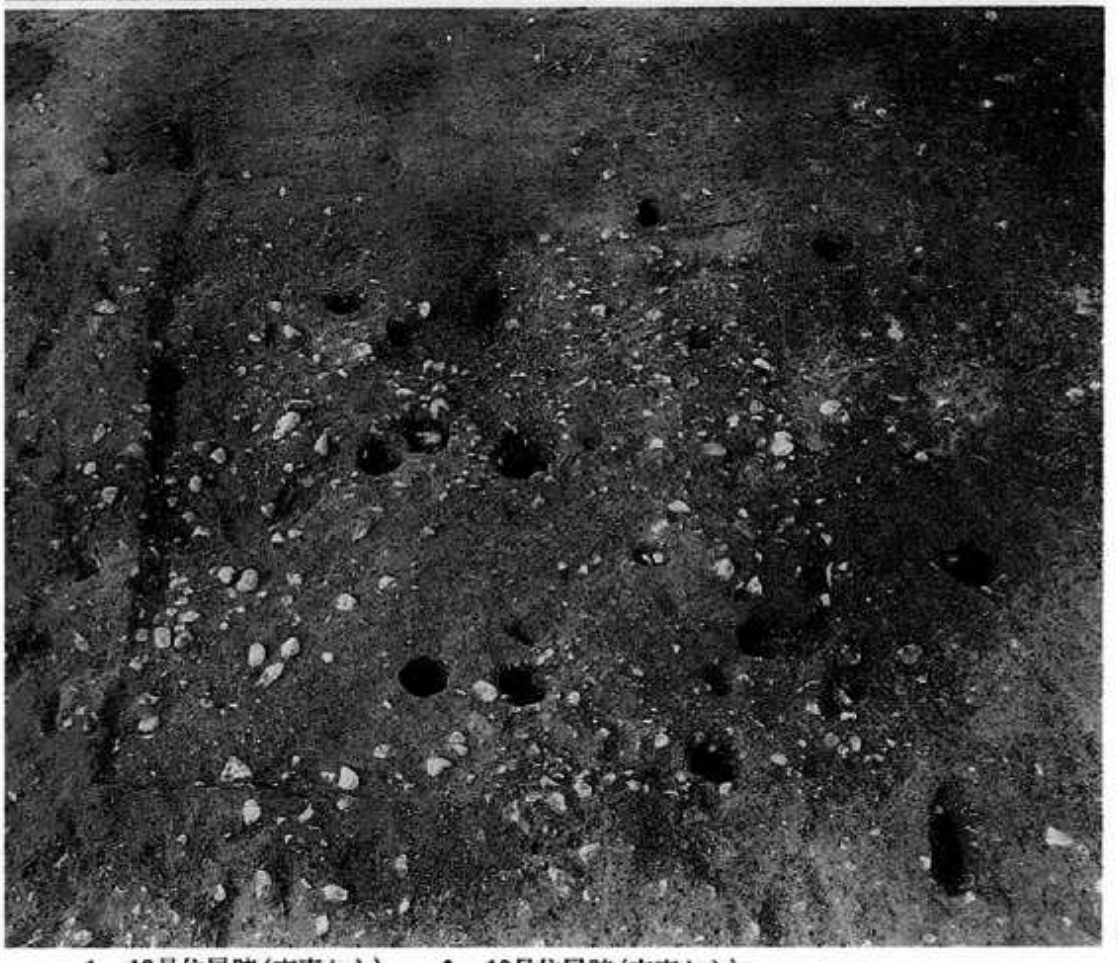
1

2

1　10号住居跡（南東から）　2　10号住居跡カマド



1



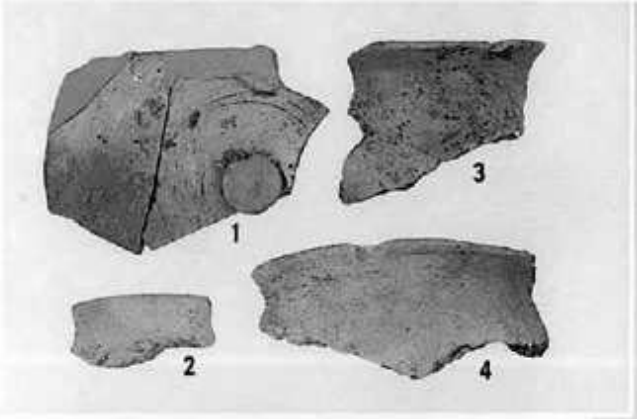
2

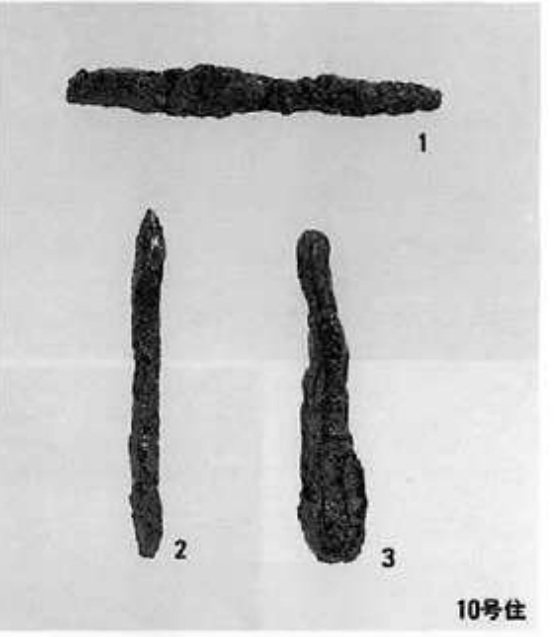
1　12号住居跡（南東から）　　2　13号住居跡（南東から）

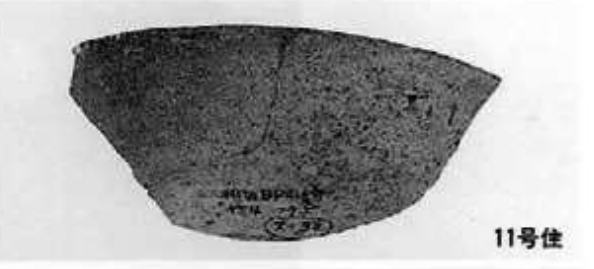
1

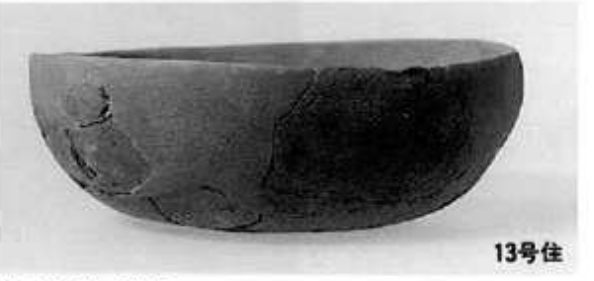
2

1　14号住居跡（南東から）　2　14号住居跡カマド







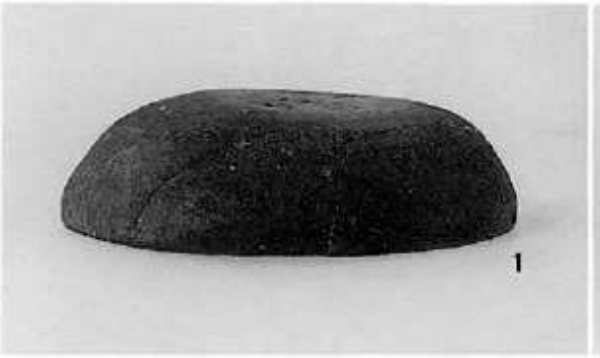


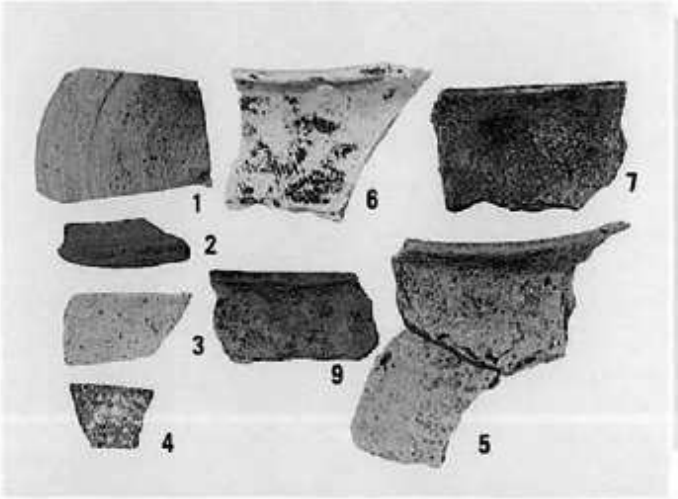
1　14号住居跡遺物出土状況　　2　10～14号住居跡出土土器・鉄器

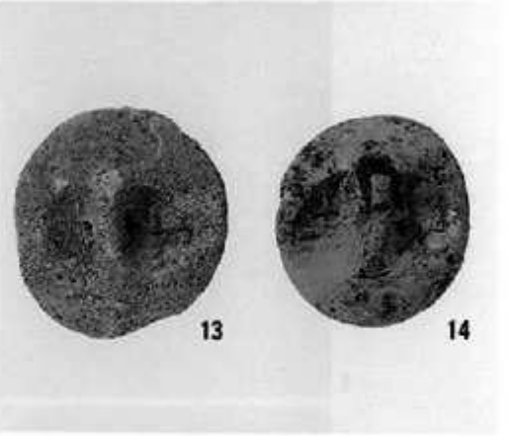
1

2

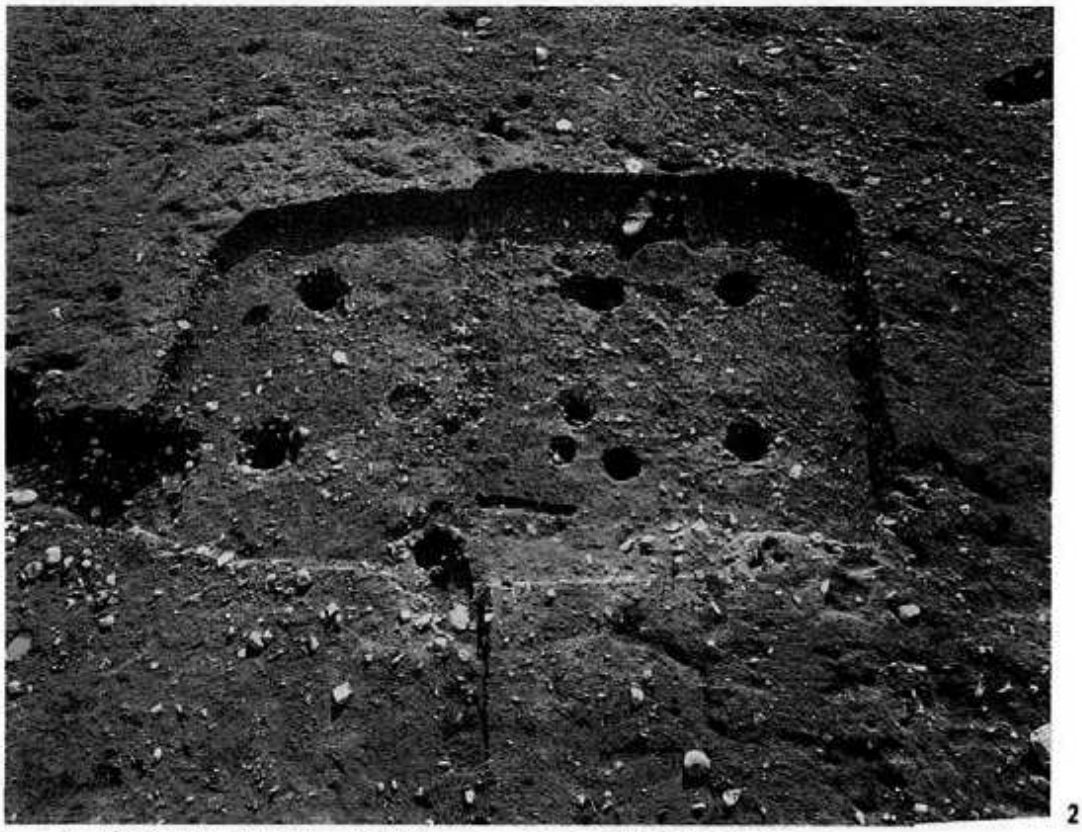
1　15号住居跡（南東から）　　2　16号住居跡（南西から）







1

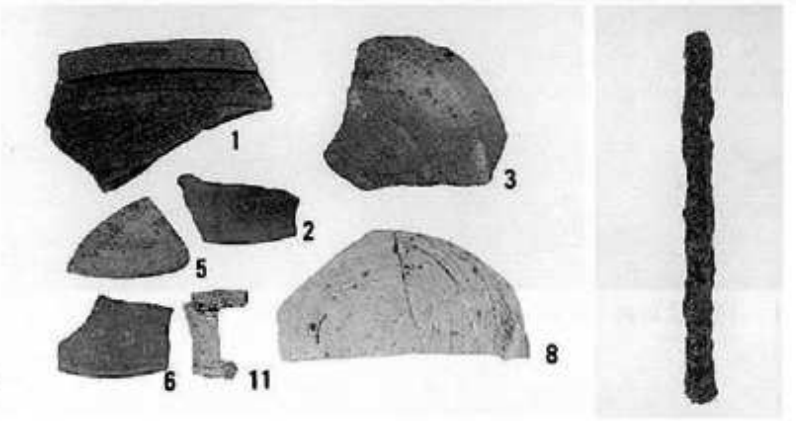


2

1　15・16号住居跡出土土器・土製品　　2　17・18号住居跡(北東から)

1

2



3

1　17号住居跡（北東から）

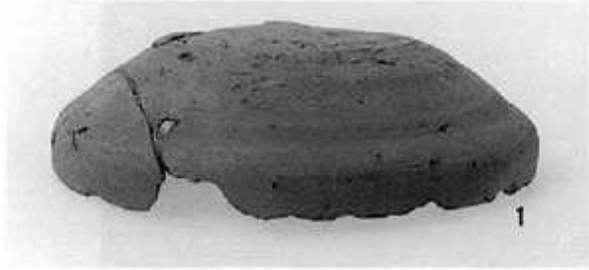
2　17号住居跡カマド

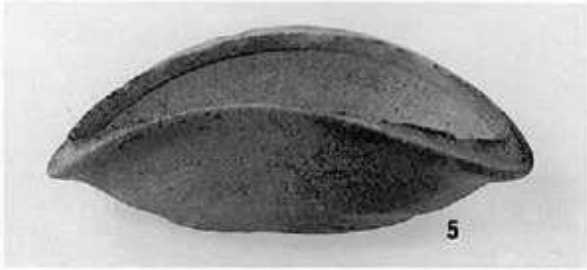
3　17号住居跡出土土器・鉄器

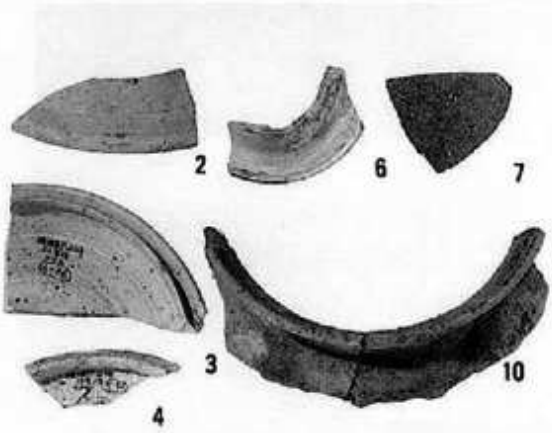
1

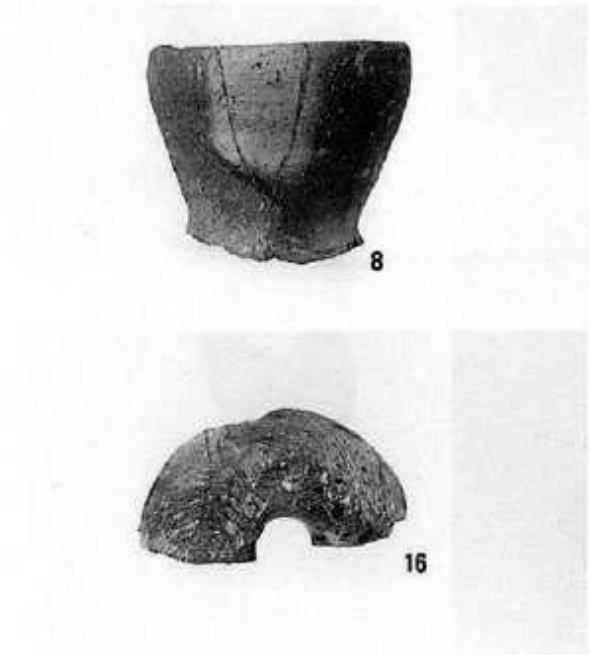
2

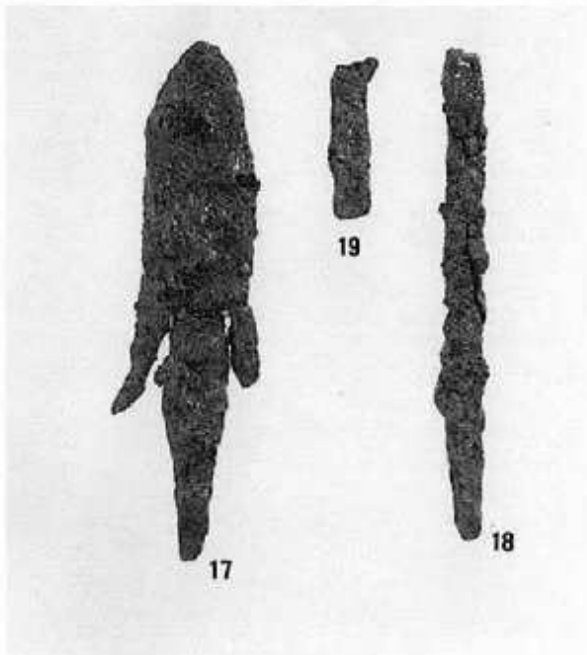
1　19号住居跡（南西から）　　2　19号住居跡カマド



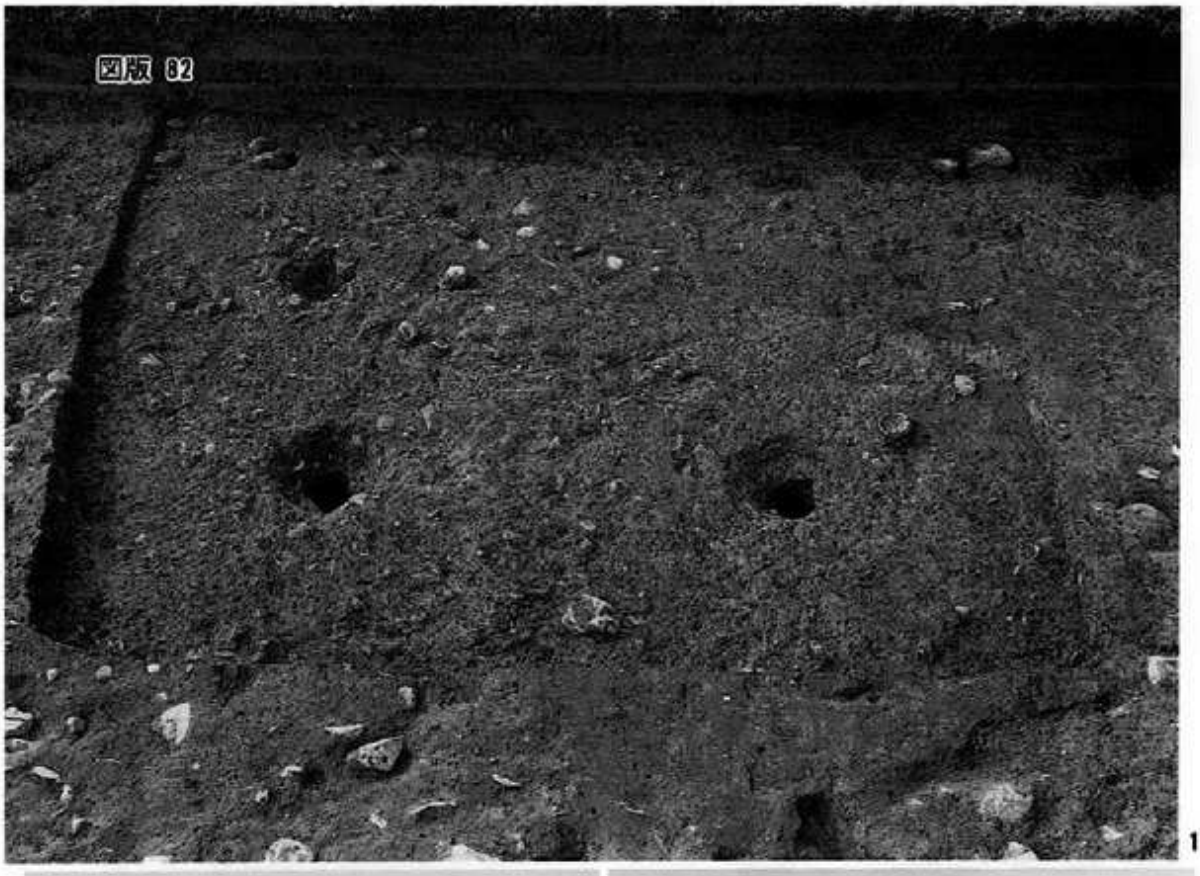






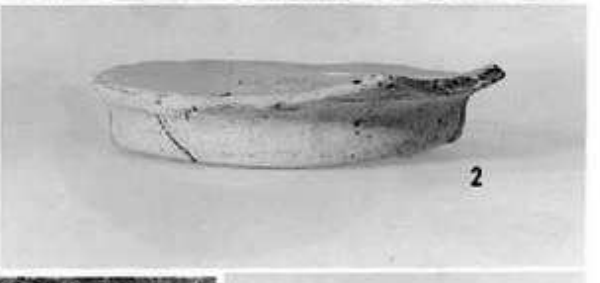


1　19号住居跡遺物出土状況　　2　19号住居跡出土土器・石製品・鉄器

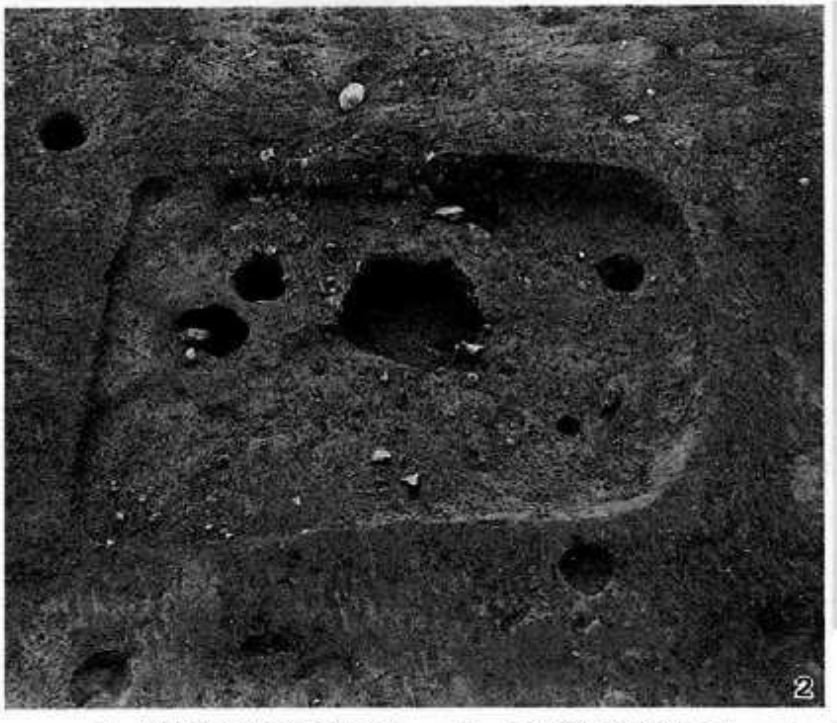


1

1



2



2

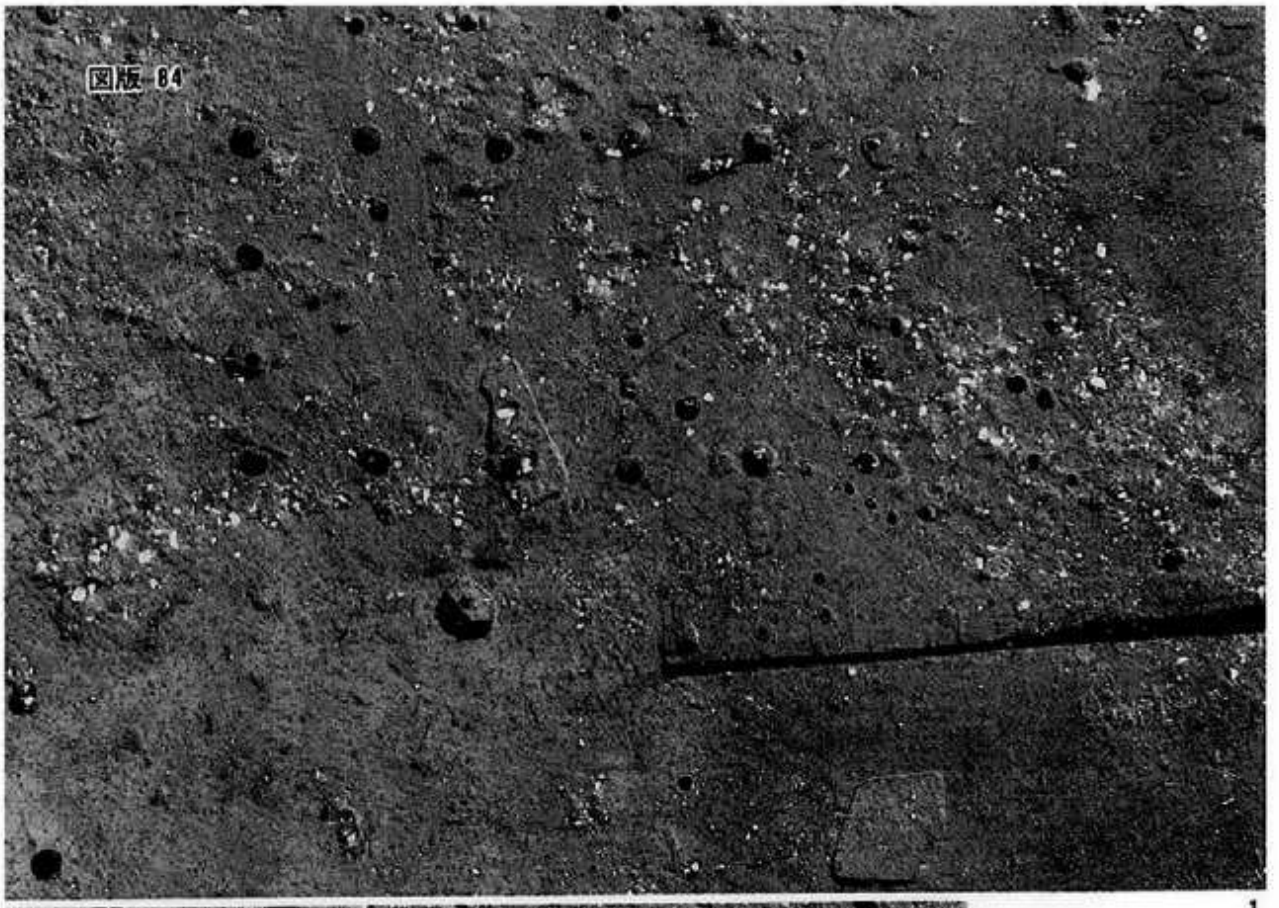
3

1　20号住居跡（北東から）　2　1号竪穴（南東から）　3　20号住居跡・1号竪穴出土土器

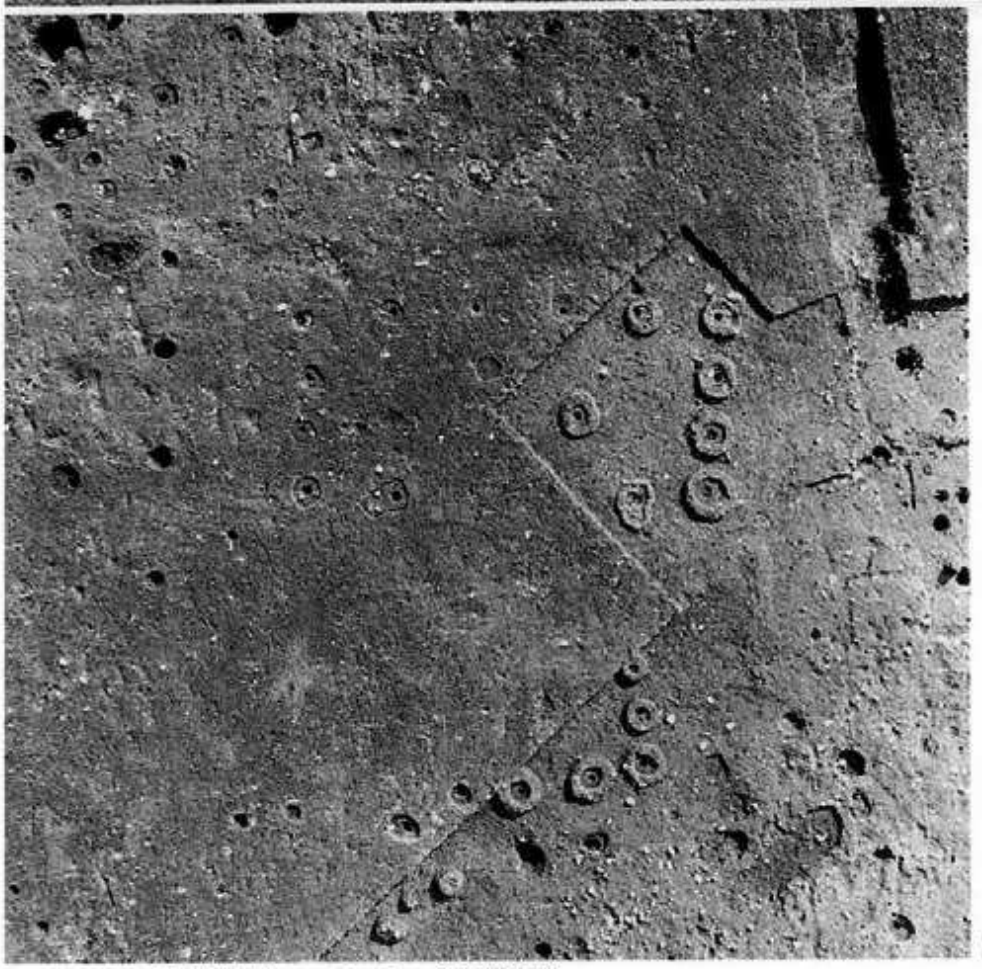
1

2

1　1号建物跡(北東から)　　2　2号建物跡(北東から)



1



2

1　3号建物跡　　2　5・9号建物跡

1

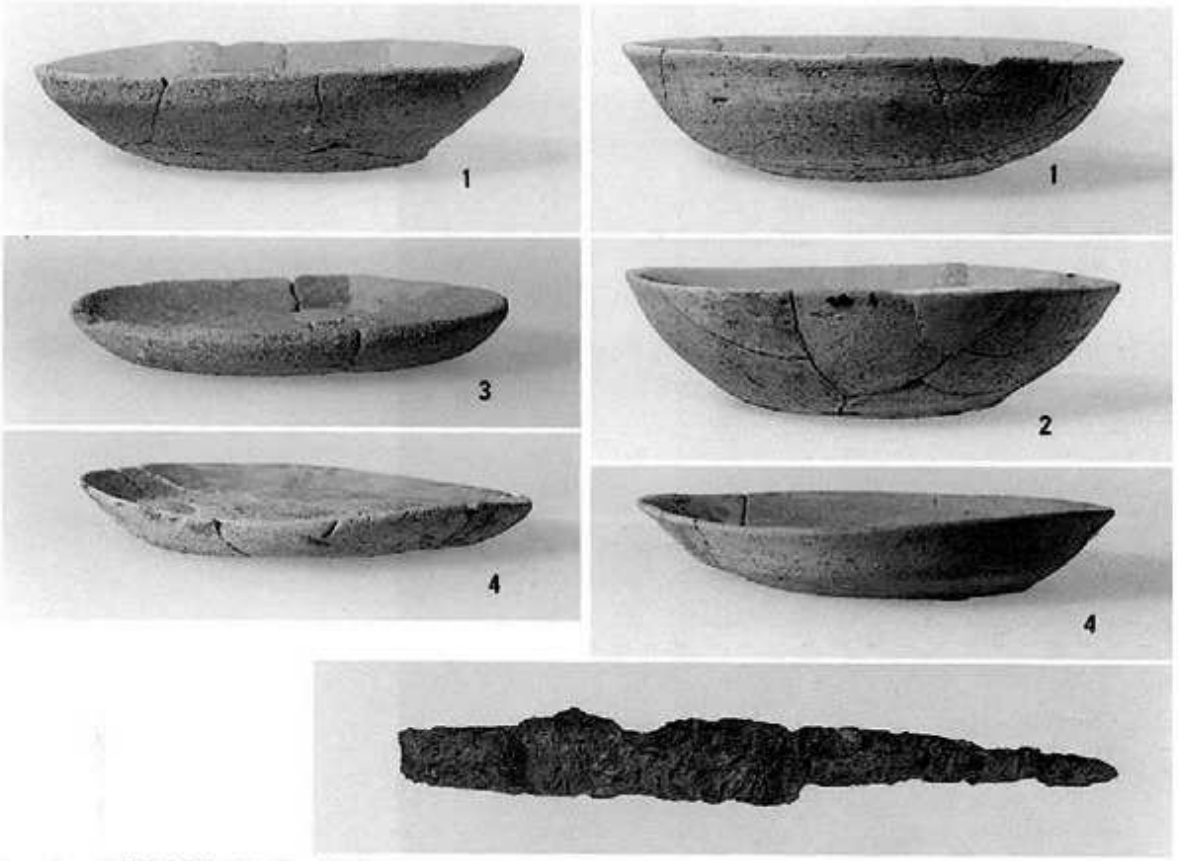
2

1　6・7・10～12号建物跡　　2　13・14号建物跡(北西から)

1

2

1　1号土壙（北から）　2　2号土壙（北から）



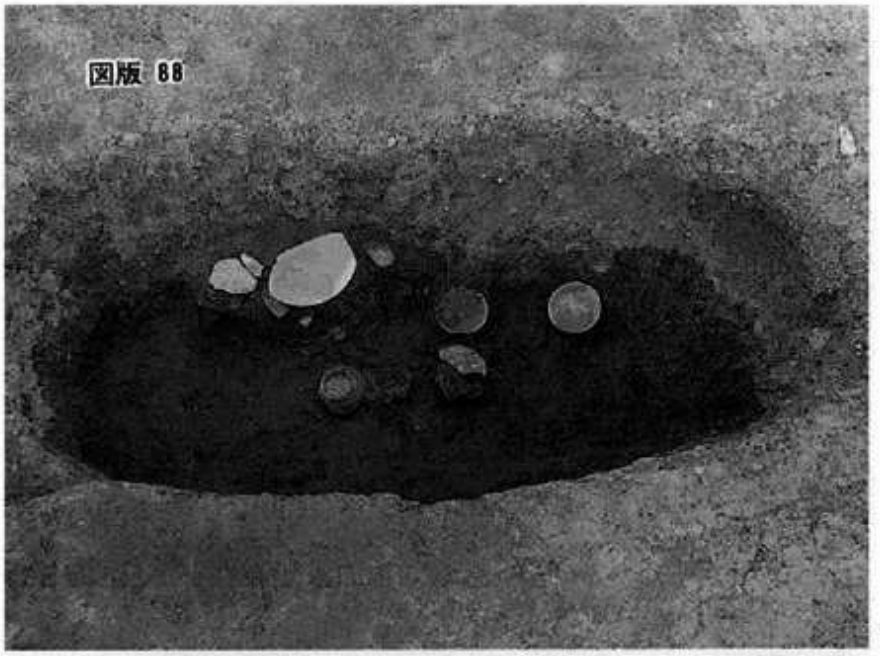
1　1・2号土壙出土土器・鉄器

2　調査風景

a　視察中の小田富士雄教授

b　遺構平面実測作業

c　排土の移動

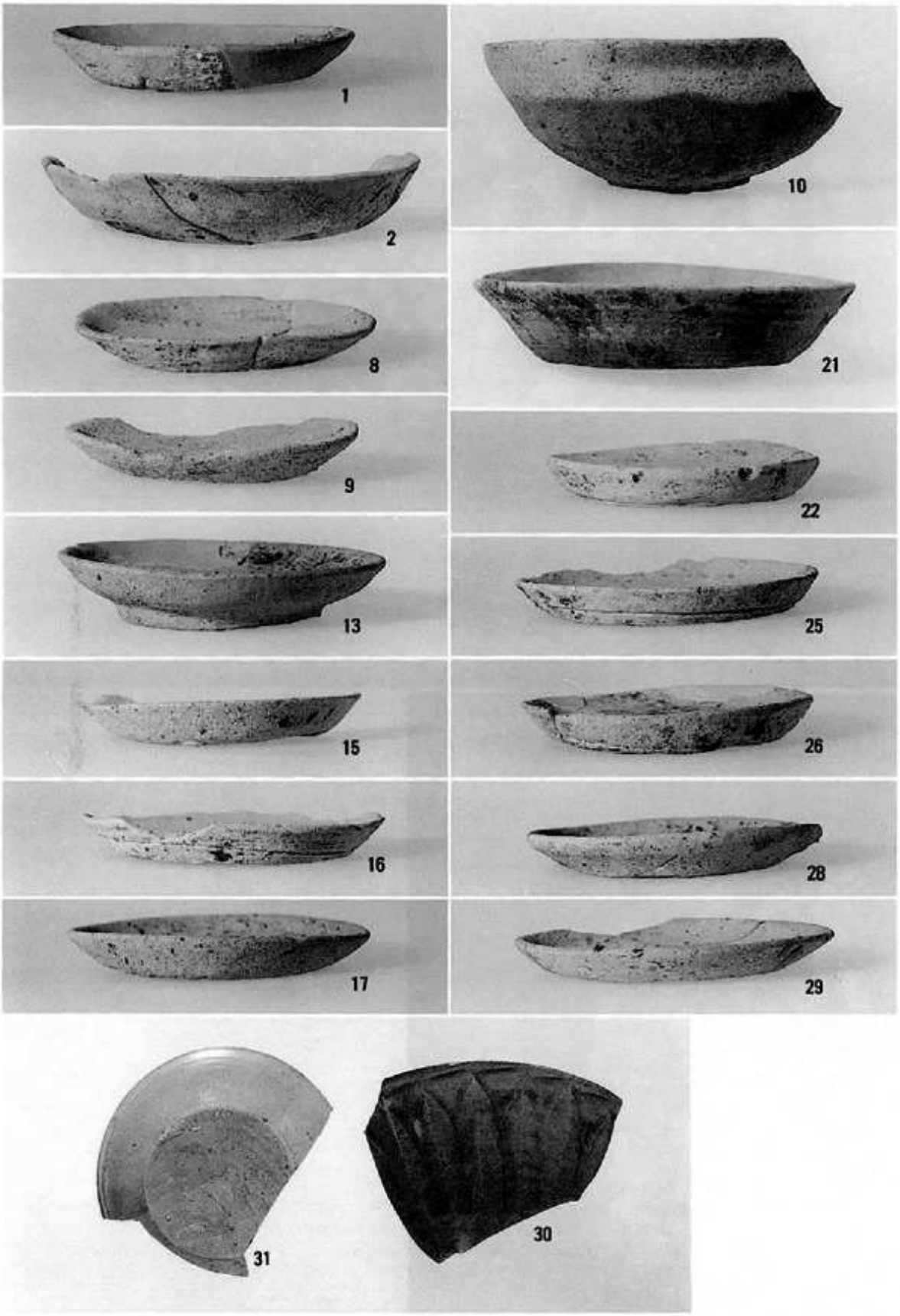


1

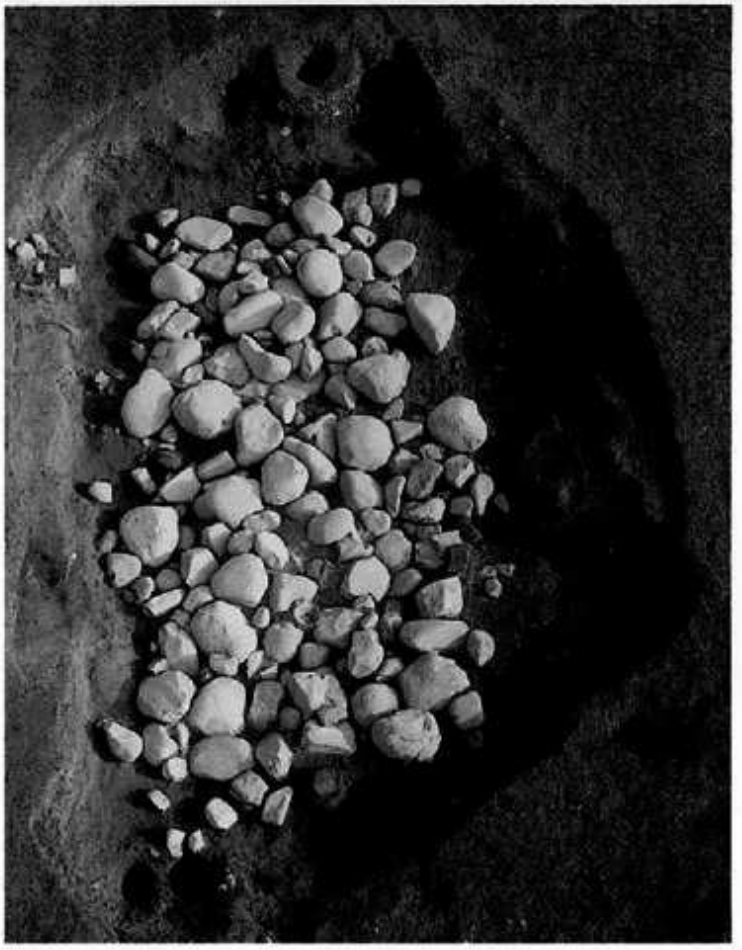
2

3

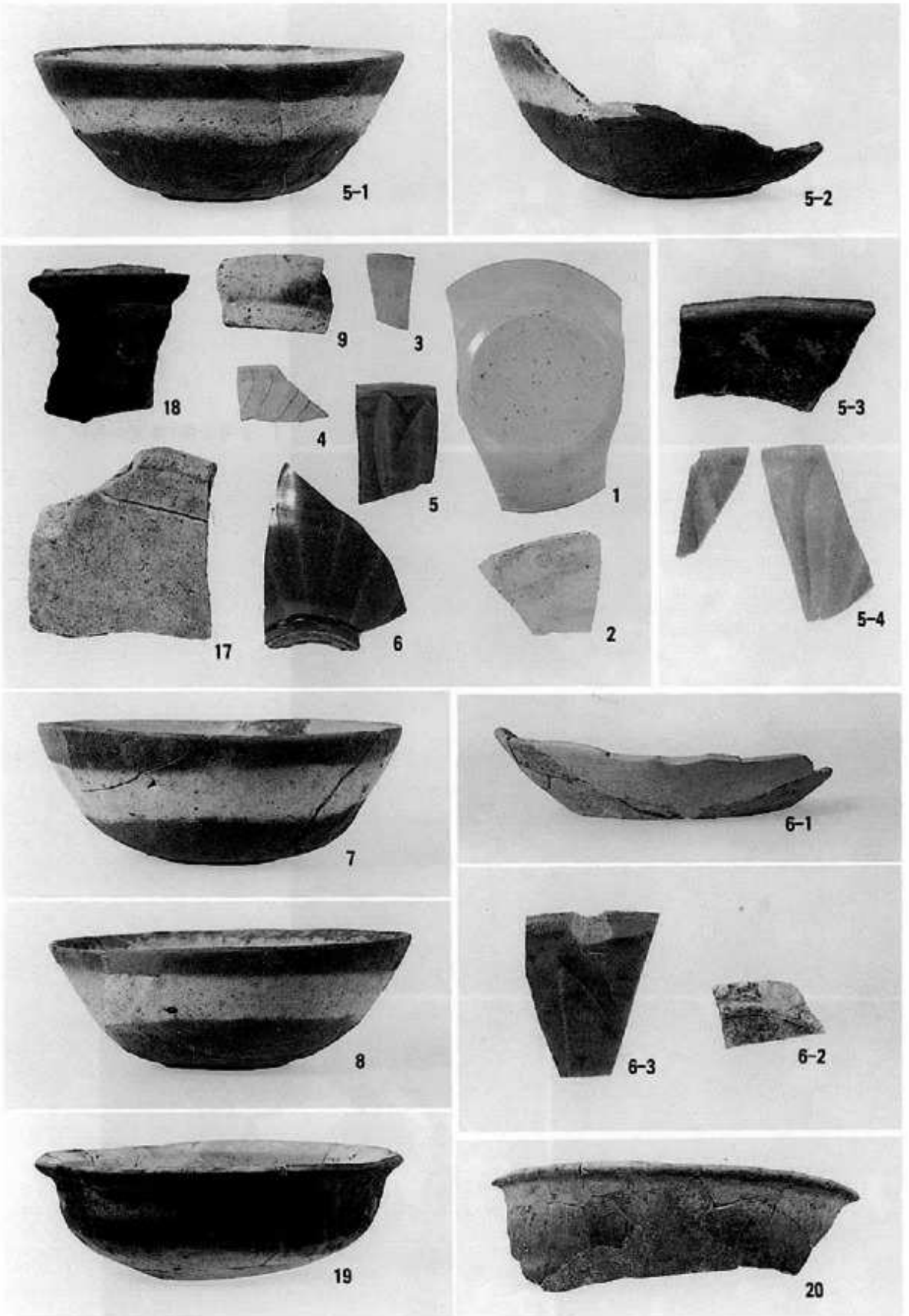
1　3号土壙（南西から）
2　4号土壙（北から）
3　6号土壙（西から）



3・4号土壙出土土器



1　7号土壙（北西から）
2　7号土壙（南西から）



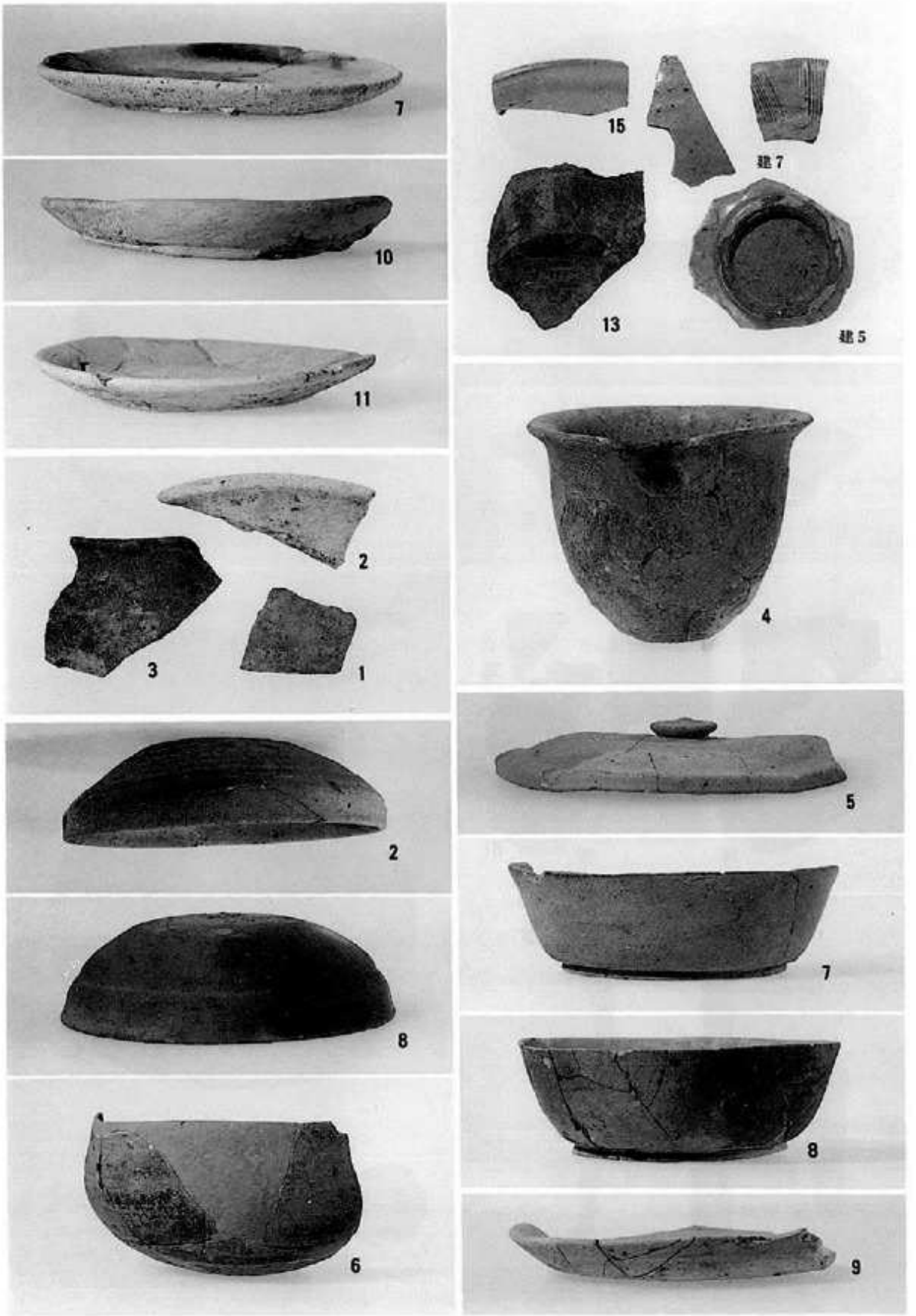
5～7号土壙出土土器

1　8号土壙(南東から)

2　9号土壙(北西から)

3　F10区遺物出土状況

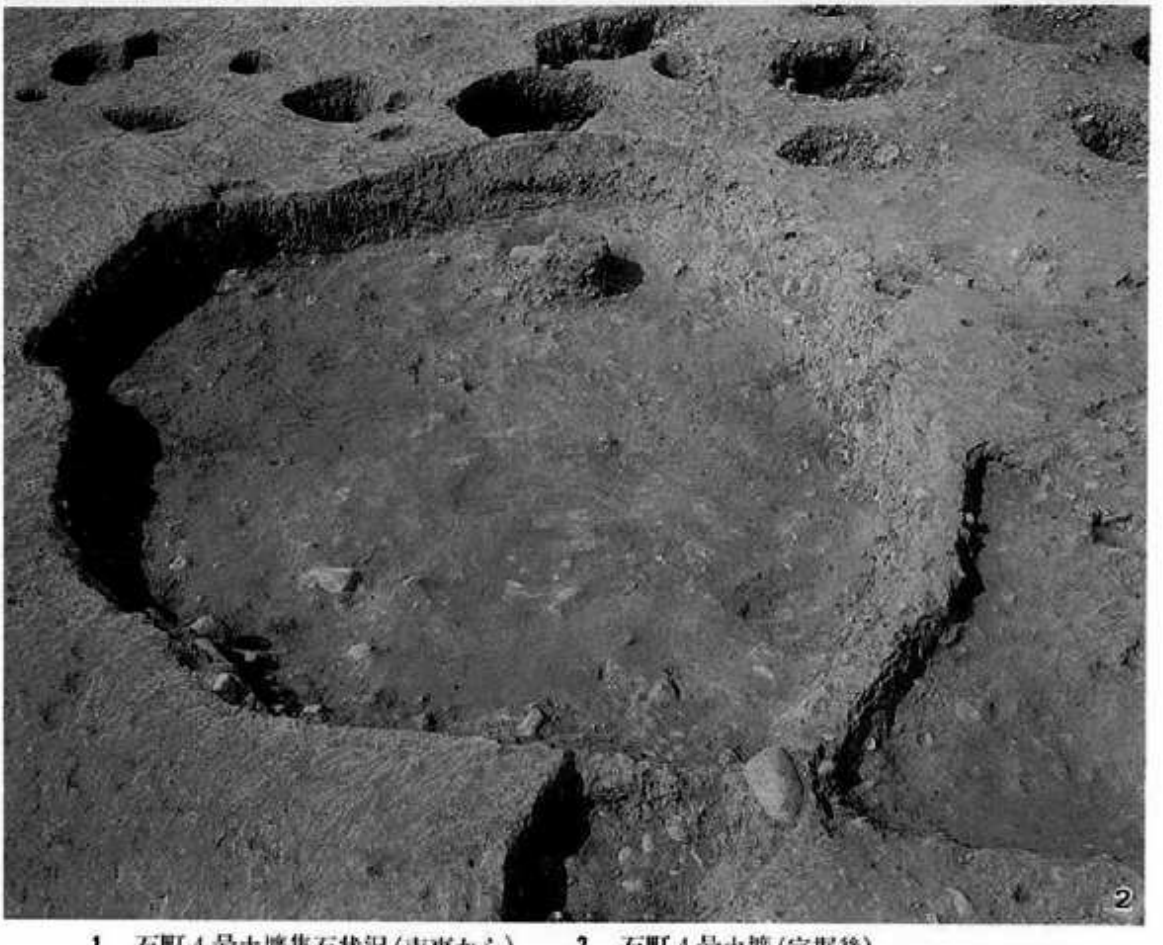
4　E12区遺物出土状況



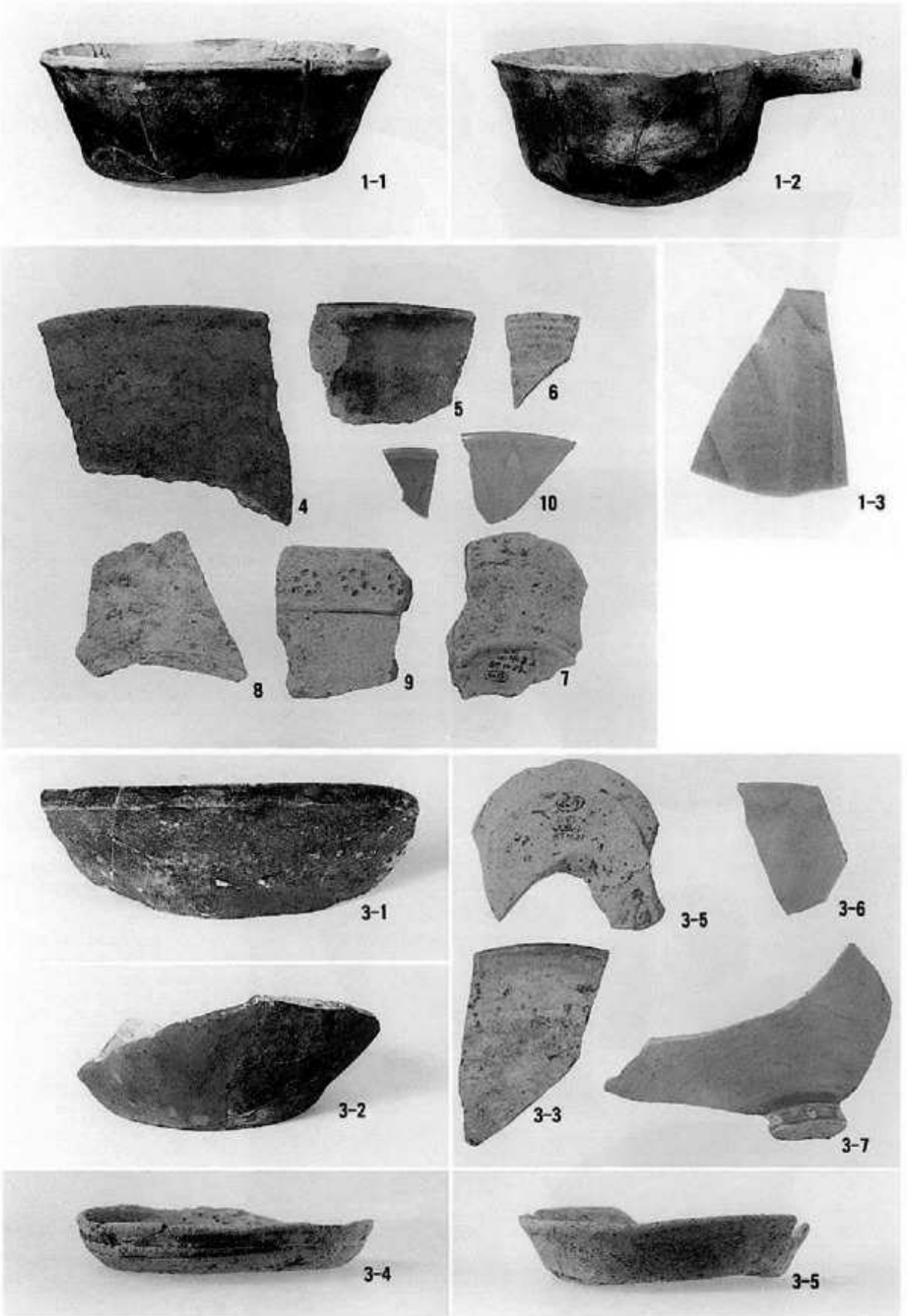
ピット・溝1～6出土土器

包含層等出土土器・石器・土製品・鉄器

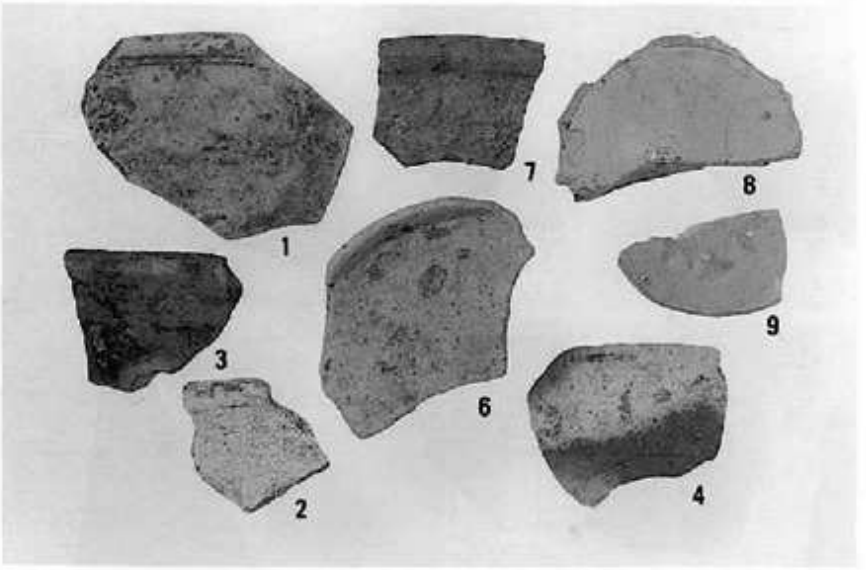
1　石町遺跡建物跡と土壙（北東から）　　2　石町１・２号土壙（北東から）



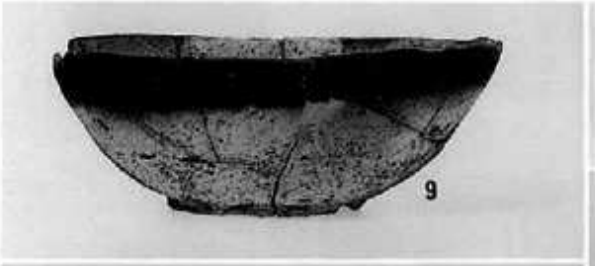
1　石町4号土壙集石状況(南東から)　　2　石町4号土壙(完掘後)

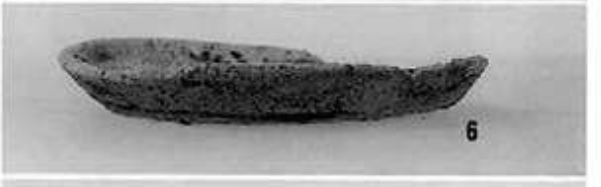


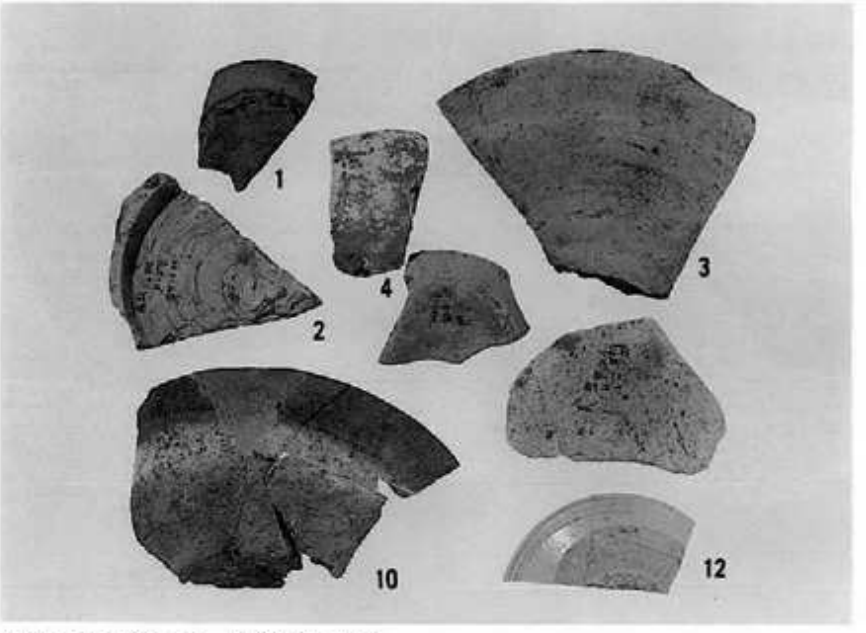
石町1～3号土壙出土土器



4号土壙







ピット

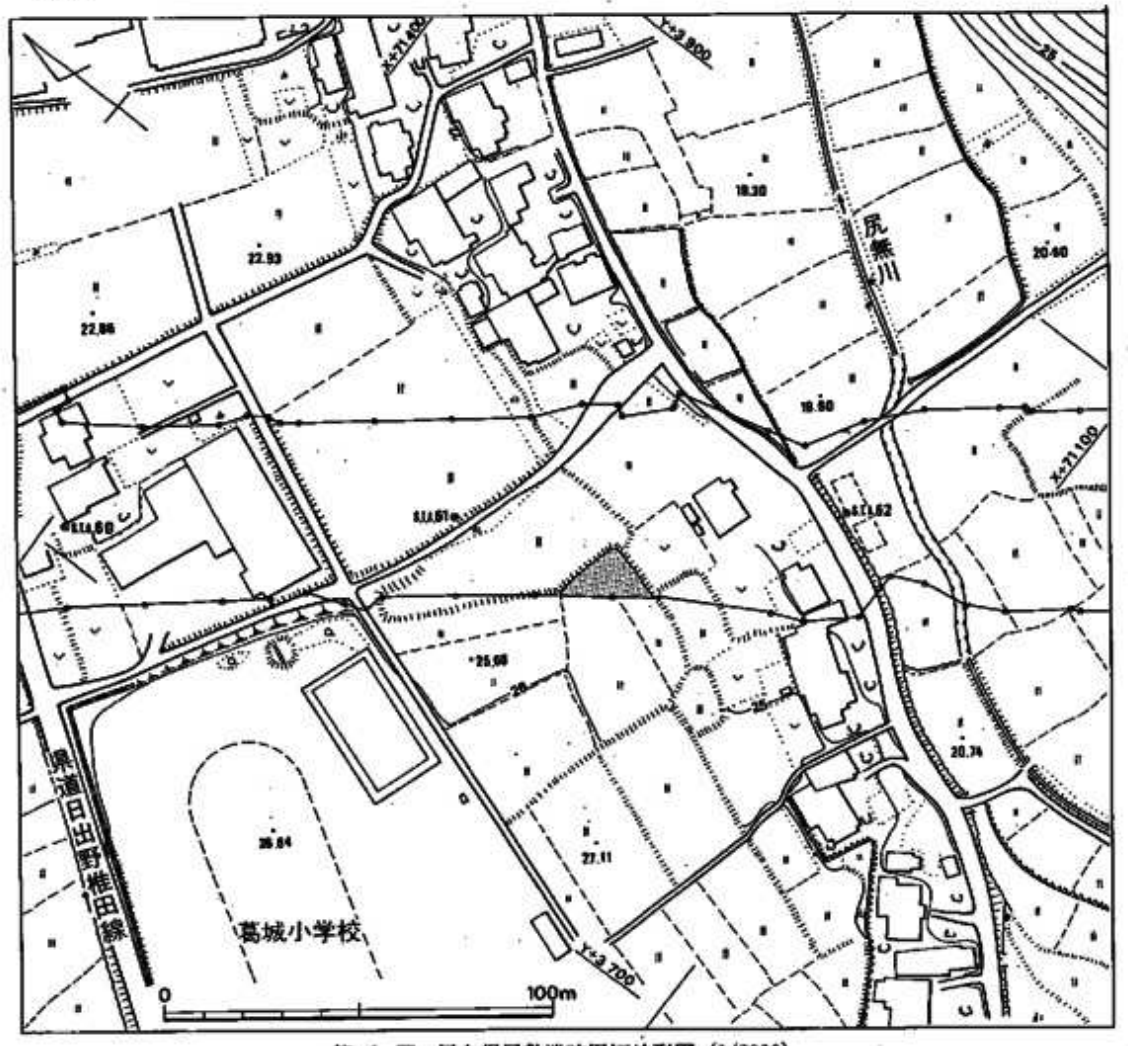
石町4号土壙・ピット等出土土器

Ⅳ　尾久保屋敷遺跡

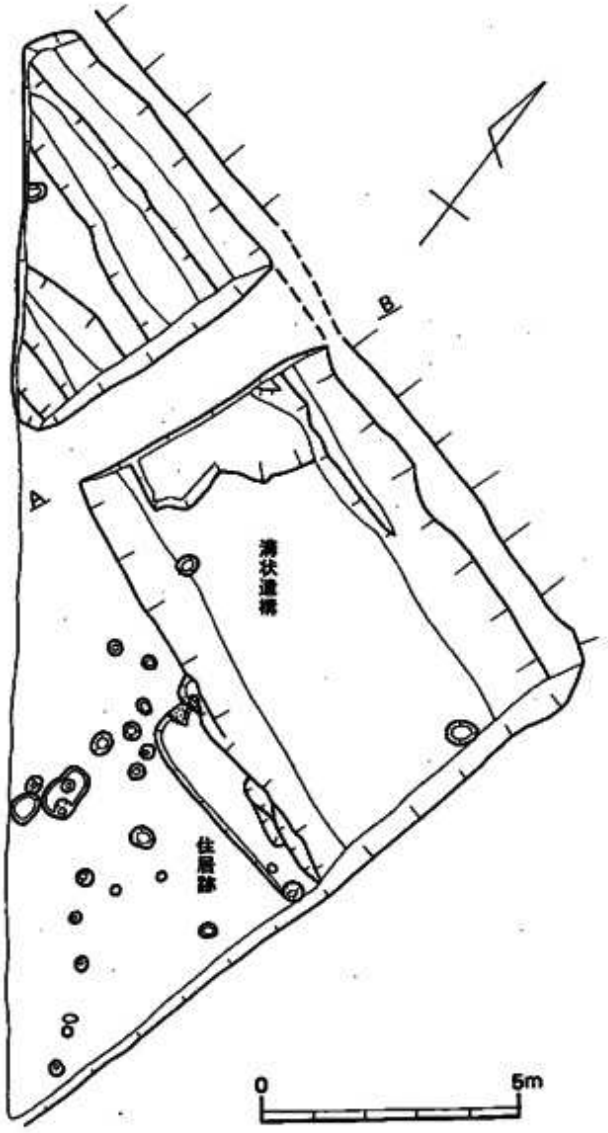
IV　尾久保屋敷遺跡（おくぼやしき）

1　はじめに

尾久保屋敷遺跡は，福岡県築上郡椎田町大字水原字尾久保屋敷66番地に所在する。この位置は東経131°2′27″，北緯33°38′35″付近に相当し，椎田バイパス路線のSTANo.61＋20～50の南側である。調査対象面積は160㎡で，用地境などに若干余裕を残した実質調査面積は約120㎡であった。



第 1 図　尾久保屋敷遺跡周辺地形図（1/2000）



第 2 図　尾久保屋敷遺跡遺構配置図（1/150）

遺跡は，国見山塊から派生した丘陵の先端部にある。東方を流れる尻無川は，この丘陵を刻む小さな谷である置石・糀ケ迫の谷からの水を集めて，坂本の先で岩丸川に合流する。また西方の平坦地は，山崎・石町遺跡の占地する岩丸川の扇状地である。現況では，葛城小学校校庭の東にある，標高25.6mの水田であった。東側から北側にかけては標高23.8～24.4mの水田と畑に段差をもって下がっている。

この遺跡の調査は，1986年10月18日から11月12日の期間に実施した。

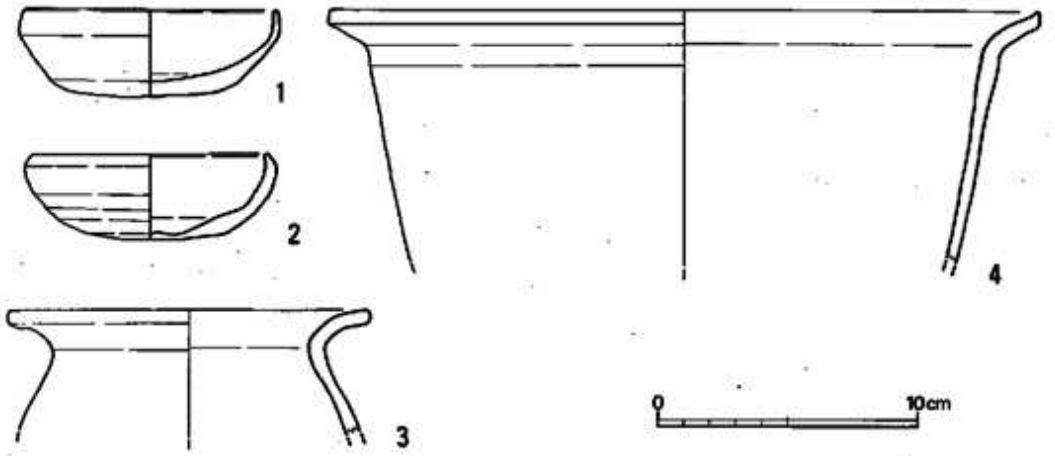
約30cmの耕作土とその下の水田床土を除去して検出された遺構は，溝状の溝1条と，竪穴住居跡1軒，20余の柱穴状ピットであった。

2　遺構と遺物

住居跡

（図版1－2，第2図）

調査区の東部で検出されたが，後述する溝状遺構によって，その大半を失う。残された部分は長さ4.4m，幅0.7～1.1mの範囲で，N79°Wの方向に南側の壁があり，西側壁はほぼ直角方向であることから，方形ないし長方形プランの竪穴住居跡であることが知れる。検出面から床面までの深さは2～12cmと浅く，東端は柱穴状ピットと重なって不明瞭になる。



第 3 図　住居跡出土土器実測図（1/3）

西壁は南壁と接する隅から50cm程北側に，30×40cm範囲の焼土が検出されたがあまり検級な焼け方でなく，その北側にある木根の穴によって切られることもあって，カマドか否かの検出はなし得なかった。

床面はやや堅緻で平坦である。床面を掘り込む柱穴状ピットは，前述した東端の住居跡壁を切る穴以外に，南東部にある直径・深さともに15cm強の大きさの１穴のみで，この住居跡の主柱穴は残らない。

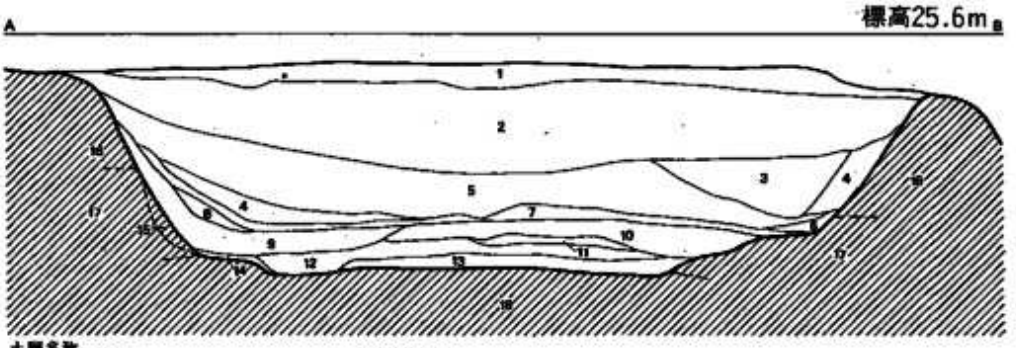
住居跡内では南側壁沿いに掌大の河原石と須恵器杯・土師器甕などが出土した。

出土土器（図版２－２，第３図）

須恵器杯（１・２）ともに焼成があまく軟質になっている。１は復原口径10.0cm，器高3.4cmの大きさで，口縁部は内彎して立ち上がる。内外面ともに風化して器面調整は不明，胎土に細砂粒を含み灰黄褐色に焼成されている。２は口径9.8cm，器高3.3cmの大きさで，口縁部は内彎して立ち上がり，端部が内傾する。外底部は回転ヘラケズりされる。胎土に細砂粒を含み灰色に焼成されている。

土師器甕（３・４）３は復原口径14.0cmの大きさで，口縁部は大きく外反する。内外面ともに風化して器面調整は不明，胎土に砂粒を含み明褐色に焼成されている。４は復原口径27.8cmの大きさで，胴部は直線的で胴があまり張らない。口縁部は大きく外反し，端部はつまみ出される。

住居跡出土土器のうち，須恵器杯は形態と法量から７世紀中頃に考えるもので，土師器では時期を明確にし難いが，古墳時代後期以降であることは間違いないであろう。現段階では須恵器の示す時期の住居跡としておきたい。



土層名称
1．赤褐色粘土
2．暗黄褐色・暗褐色土混土層
3．2＋赤褐色粘土をやや多く含む
4．暗茶褐色土
5．灰茶褐色土
6．赤褐色粘性土
7．青灰色粘土
8．青灰色粘土混り暗茶褐色土
9．黄褐色粘土混り暗茶褐色土
10．暗黄褐色粘性土
11．黄褐色粘土
12．やや暗い褐色粘性土
13．明褐色粘性土
14．褐色粘性土
15．明褐色粘土（地山の崩れか？）
16．地山、赤褐色粘土
17．明褐色粘土
18．黄褐色岩盤

第 4 図　溝状遺構断面土層図（1/50）

溝状遺構（図版1－1・2－1，第2・4図）

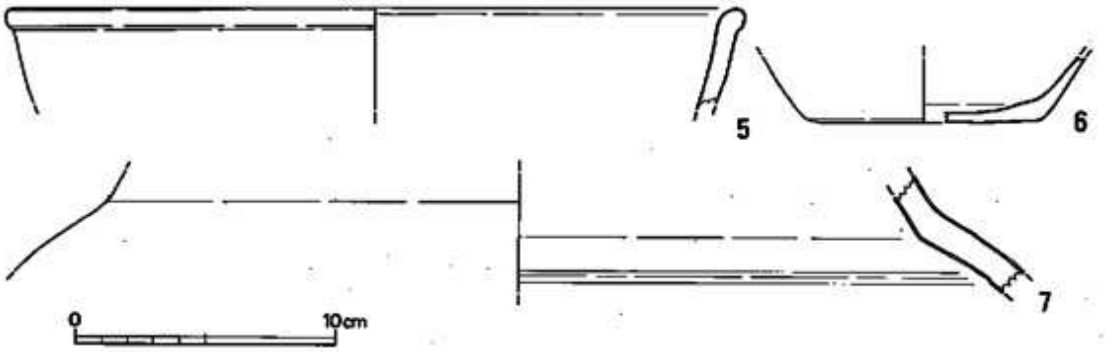
調査区の北半を占める。検出面で幅5.5～5.9mの規模で，長さ15.5mにわたり，調査区北側の水田区画畦に平行するN70°Wの方向に検出された。

溝状遺構内には，第4図に示すように上部には暗黄褐色土・暗褐色土が，中位には灰茶褐色土などが堆積し，上から約1mの高さに青灰色の粘土が広がって，さらに下層には暗茶褐色・黄褐色・褐色土などが堆積している。

溝状遺構は，赤褐色から明褐色に漸次上から下に色調の淡くなる地山を掘り込み，底面は黄色の岩盤に達している。底面は幅3.50～4.00mの広さをもち，南側壁は60°以上の傾斜があり，北側壁は約50°の傾斜である。検出面からの深さは，南端で1.20m，北端で1.0m，中央部で1.30mを測る。底面は西端で標高24.3m，東端で標高24.0mを測り，西側から東側に流れる施設であろう。西側では南北両側で深く間が一段高い底面だが，東側ではほとんど平らとなる。中間での底面でみると中央の深い部分は幅2.60m前後で，両側壁から一段下った，犬走り状の段を成すなどは，流路の移動によるものであろうか。

堆積状況からみると，当初は上から1.3mの深さの部分まで掘削され，底で流路を移動させながら自然埋没したようである。しかし，青灰色粘土が堆積する部分は底面が平らで，やや北側に移動したような形跡があることから，一度は底を整える作業を受け，流れの遅い溝としての時期が存在したように窺える。さらに灰茶褐色土で埋没した後には，北端部のみが溝の機能を果たしていたようだが，溝機能を必要としなくなって一気に埋立てられたようである。この一気に埋められた堆積土の上には水田床土が被るので，水田化が溝埋立の契機であろう。

出土遺物（図版2－2，第5図）



第 5 図　溝状遺構出土土器実測図（1/3）

溝状遺構内からの出土遺物は，須恵器片・土師器片などと，陶器片，瓦片などで，小量である。このうち須恵器片などは混入したものと思われる。いずれにしても図示しうる資料は極めて少ないが，主に下層のものを図示する。上層の暗茶褐色土から出土した遺物の中には，陶器擂鉢片も含まれていたが，図示しえなかった。

土師器鉢（5）復原口径28.4cmの大きさの鉢で，口縁端部は玉縁状に肥厚する。内外面ともに風化が進み器面調整は不明。胎土に細砂粒・褐色粒を含み，黄褐色に焼成されている。

土師器杯？（6）口縁部を欠く。復原底径9.0cmの大きさで，底面は平坦。内外面ともに風化が進み器面調整は不明，胎土に細砂粒を含み淡黄灰色にあまく焼成されている。

陶器甕（7）水甕の肩部破片で，くびれ気味になる部分の復原径が約30cmの大きさ。胎土は精良で堅固に焼成される。釉は内外面ともにかかり色調は暗茶褐色を呈する。

溝状遺構出土土器では，陶器片が最も新しい時期を示すものと思われる。いまのところ，この陶器の年代を知らないが，近世の遺物であろう。

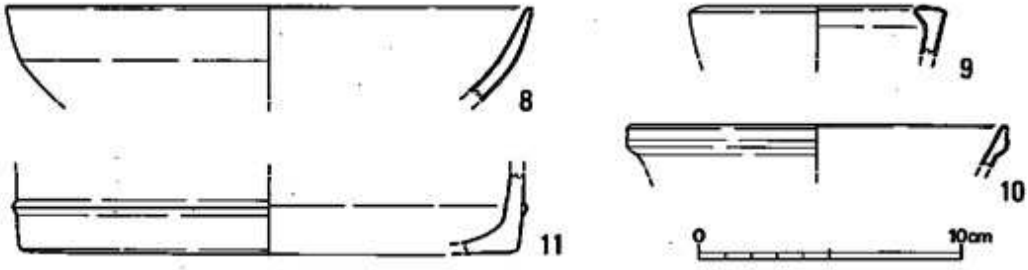
柱穴状ピット（図版１－２，第２図）

調査区の南部で，柱区状ピットが20穴余り検出された。直径20～50cm，深さ15～30cmの大きさのもので，建物を構成する柱穴もあろうが，まとまり方は不明である。調査区南隅から６m北西方の調査区端に検出されたピットには，人頭大よりやや小さい角礫が３個詰まっていたが，柱の根固めに用いられた可能性もあろう。調査区域外に展開するものであろうか。土師器小片を含んでいたピットは住居跡の周辺に限られる。出土土器片はいずれも小さく図示しえない。

その他の遺物（図版２－２，第６図）

床土内および遺構検出時に出土した遺物で，主なものを図示する。

陶磁器（８～10）８は復原口径約20cmの大きさの，内彎気味に開く器形の鉢。精良な胎土で堅固に焼成され，内外面にかかる釉は濃いめの緑黄色を呈する。９は復原外径9.8cmの大きさ



第 6 図　その他の土器実測図（1/3）

の，青磁片。口縁部が体部から直線的に立ち上がり端部で内に折れて上に平坦面をつくる。香炉にも似た器形である。精良な胎土で堅固に焼成され，内外面にかかる釉は淡緑灰色を呈する。10は復原口径14.5cmの大きさの白磁椀。口縁端部は玉縁状をなす。精良な胎土で堅固に焼成され，内外面にかかる釉は淡灰色を呈する。

土師質土器（11）復原底径19.2cmの大きさで，平らな底部から直に立ち上がる体部に続くが外面に低い三角凸帯が巡る。内外面ともに風化して器面調整は不明だが，胎土に細砂粒・角閃石を含み，明褐色に焼成される。火鉢のようなものであろうか。

3　おわりに

尾久保屋敷遺跡では，古墳時代末の竪穴住居跡１軒と，近世の可能性がある溝状遺構１条，時期を明確にしえない柱穴状ピット群が検出された。

古墳時代末の住居跡は，山崎遺跡でも調査されたが，尾久保屋敷遺跡のようにN80°Wに近い方向に向く住居跡はない。おそらく遺跡の立地する地形に左右されるのであろう。

近世の溝状遺構は，幅５m規模の濠と言うべきものである。古老の話によれば，第二次大戦以前まで，濠部分が窪地として名残をとどめていて，周囲は桑畑が広がり西側に貴船神社が奉られていたという。戦後にこの丘陵上が耕地整理されて水田化され，その後葛城小学校校庭も整備されて，往時の姿を残していないという。いまは椎田道路が完成して，さらに変貌しつつあるが，字尾久保屋敷の屋敷，あるいはいまは無いが貴船神社の存在が，この濠の施設に関連していたものと考えておきたい。

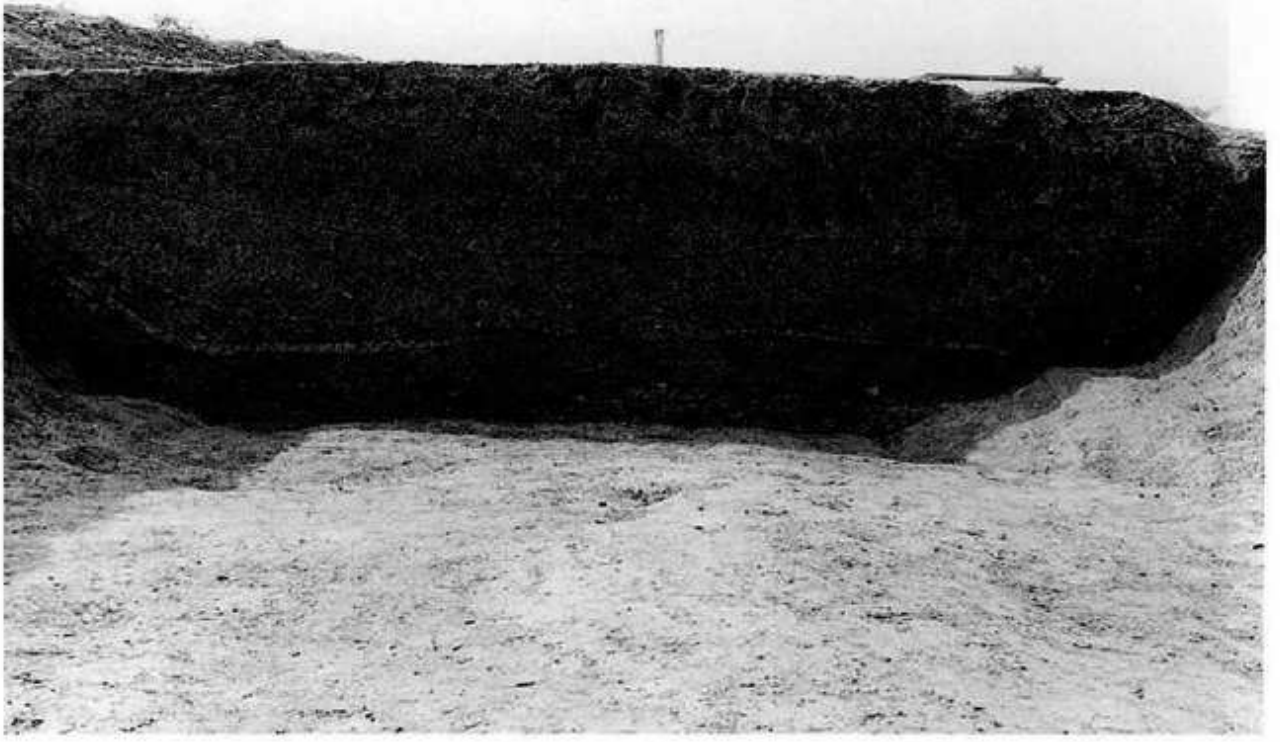
遺構検出面で出土した遺物のなかには，13世紀頃の青磁・白磁片も含まれている。中世頃の遺構は検出されなかったが，付近に中世の遺構が存在していた可能性があろう。　（小池）

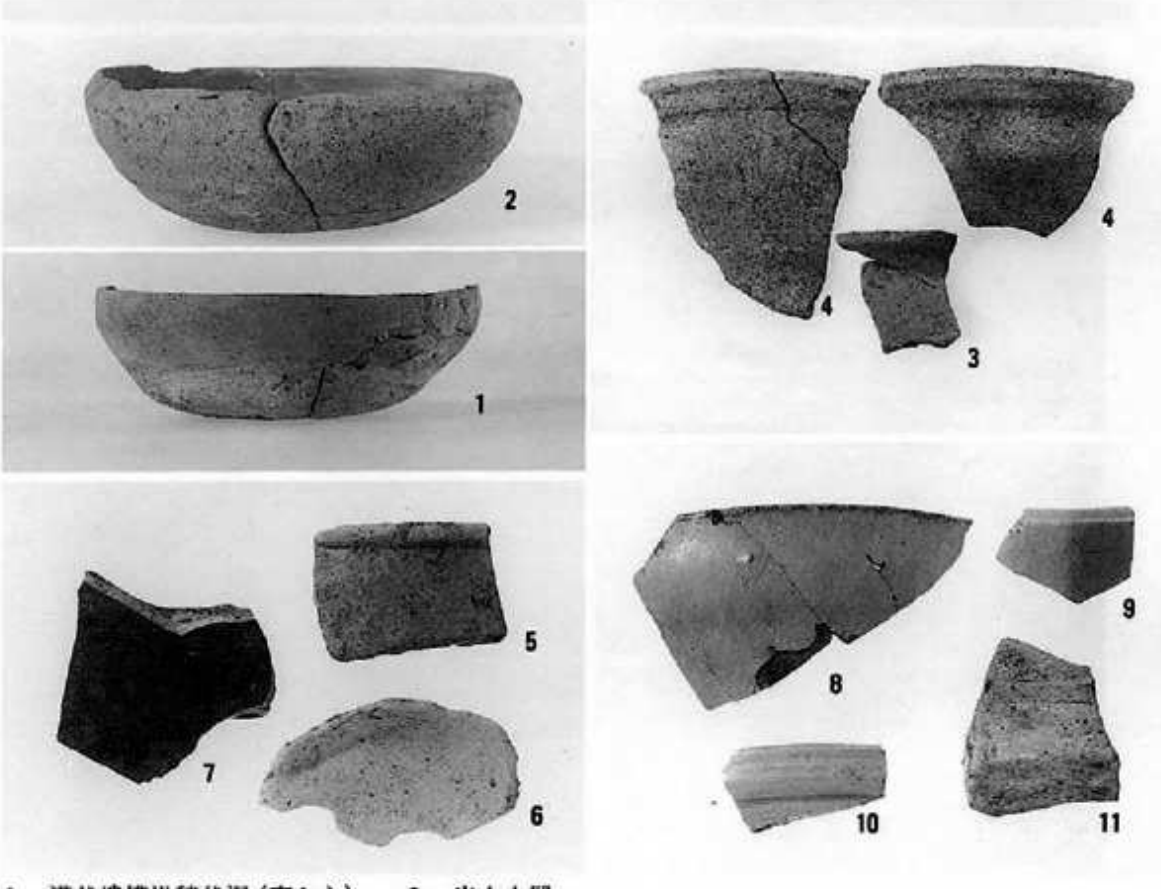
図　　版

1

2

1　尾久保屋敷遺跡調査区全景（北東から）　　2　住居跡と柱穴状ピット群（北東から）





2

1　溝状遺構堆積状況（東から）　2　出土土器

V　日奈古・寺尾遺跡

V　日奈古(ひなご)・寺尾(てらお)遺跡

1．調査の経過

福岡県教育委員会は，一般国道10号線椎田バイパスの行橋市～椎田町間のうち，豊津町～椎田町間10.3kmを日本道路公団より委嘱され，埋蔵文化財の発掘調査を実施することになった。昭和61年度からの本調査に先だち，昭和61年３月３日から３月25日までの間に，埋蔵文化財が存在する可能性のある地点としてリストアップされた23地点のうち，第10～13・17・21～23地点を試掘調査して，埋蔵文化財の有無を確認した。その結果，第12・17地点以外は，集落跡や古墳群などが確認された。

日奈古・寺尾遺跡は第13地点としてリストアップされていた。試掘調査の結果，遺跡はかなり削平されており，すでに遺構が消滅した部分が多く，遺構が残在している地区が5.800㎡であったので，これが発掘対象面積となった。

発掘調査は，昭和61年９月16日から10月28日までの期間に実施し，柳田康雄が担当した。

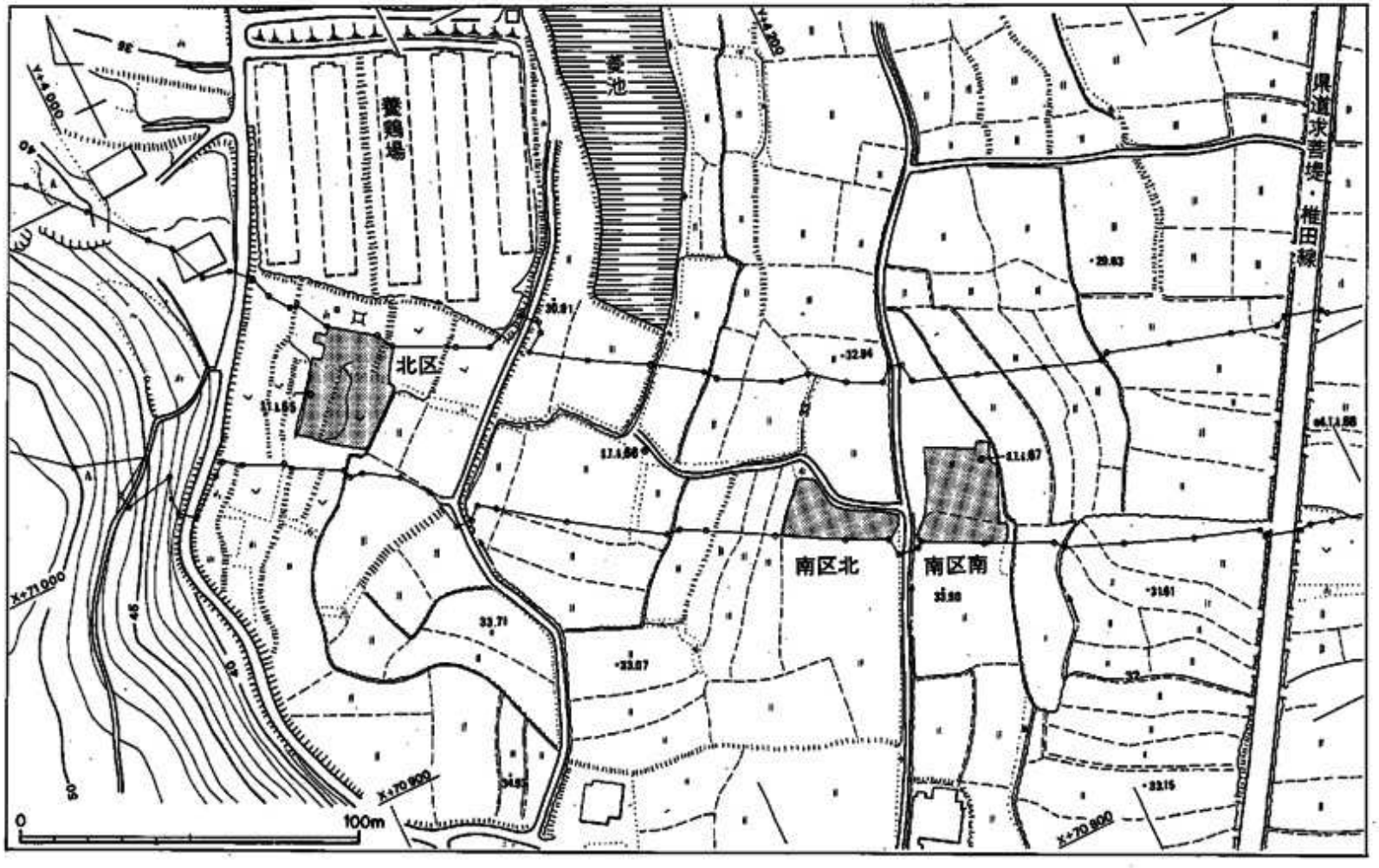
2．遺跡の位置と環境

日奈古・寺尾遺跡は，福岡県築上郡椎田町大字日奈古字寺尾に所在する。英彦山山系から周防灘へ向って拡がる丘陵群は，椎田町南部付近で海岸に達し，その先端近くに遺跡が位置する。丘陵群は，無数の小河川によって浸食された狭長な谷部を形成し，その谷部の入口付近に若干の平地を残している。

日奈古・寺尾遺跡は，極楽寺川によって浸食された谷の左岸の扇状地と丘陵東斜面裾部にある。さらに，扇状地上にも小さな谷があり，遺跡もバイパス建設地区内では分断されている。

日奈古・寺尾遺跡は，南側に展開する日奈古集落に重複して営まれ，調査地点が北側の先端付近にあたるものと思われる。日奈古集落やその周辺には，宝篋印塔や五輪塔の残骸があり，少なくとも中世以後続いている集落と思われる。

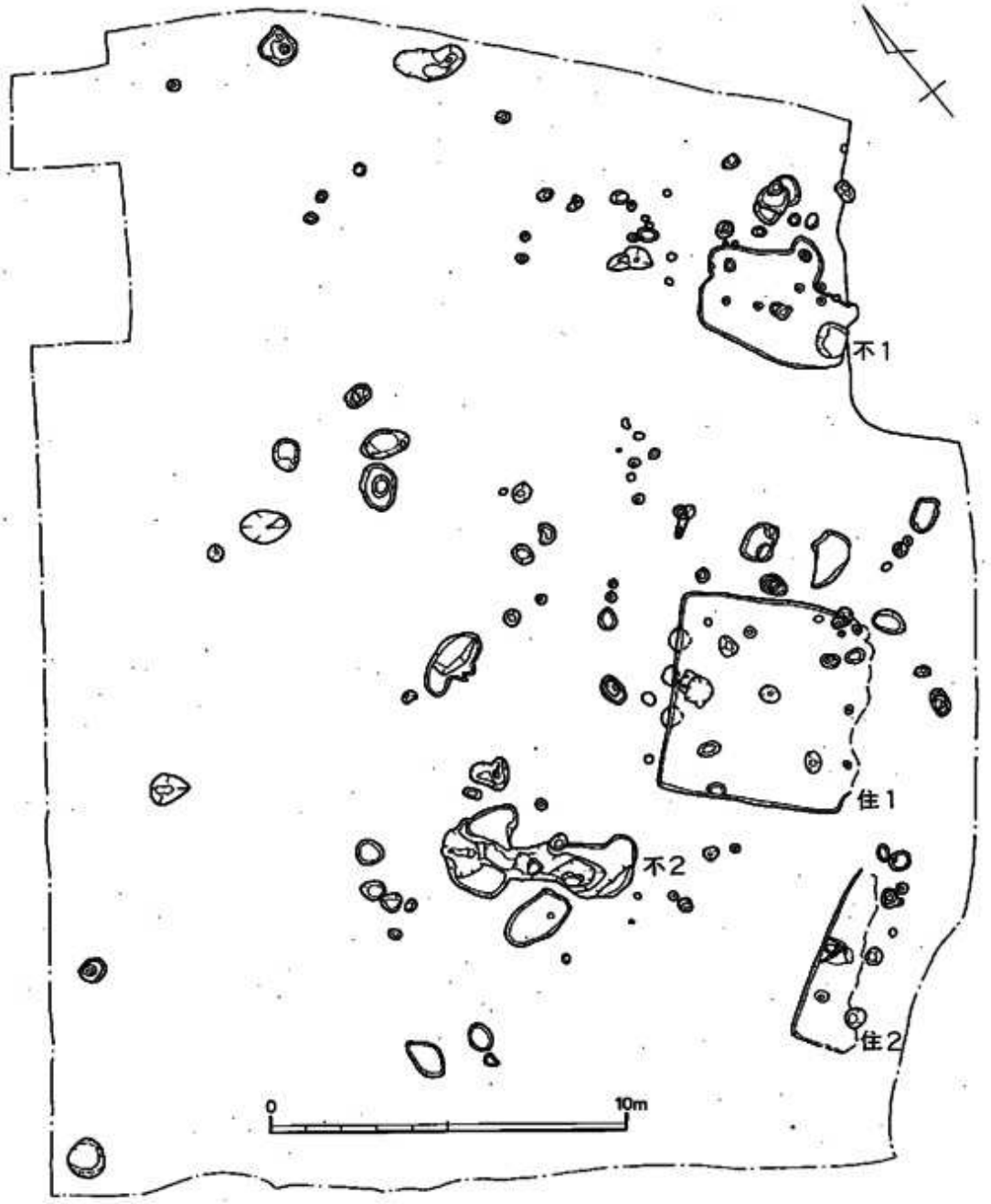
極楽寺川が形成した扇状地には，古墳時以前の遺跡が知られていないが，西側の岩丸川右岸の扇状地に本報告書に掲載されている縄文後・晩期，古墳後期，７～８世紀，13～14世紀の複合遺跡の石町・山崎遺跡がある。また，極楽寺川東側に伸びる低丘陵の先端付近には，合木横穴群・合木集落遺跡・小原横穴群などがある。なお，椎田町東端の周防灘に面した舌状丘陵の先端付近には，椎田バイパス建設に伴って発掘調査し，『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』２（1990）として報告書を刊行した石堂中後ケ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群もある。



第 1 図　日奈古・寺尾遺跡周辺地形図 (1/2000)

3．北区の遺構と遺物

日奈古・寺尾遺跡は，前述したように極楽寺川西側丘陵東斜面裾部と左岸扇状地に分断されて



第 2 図　日奈古・寺尾遺跡北区遺構配置図（1/200）

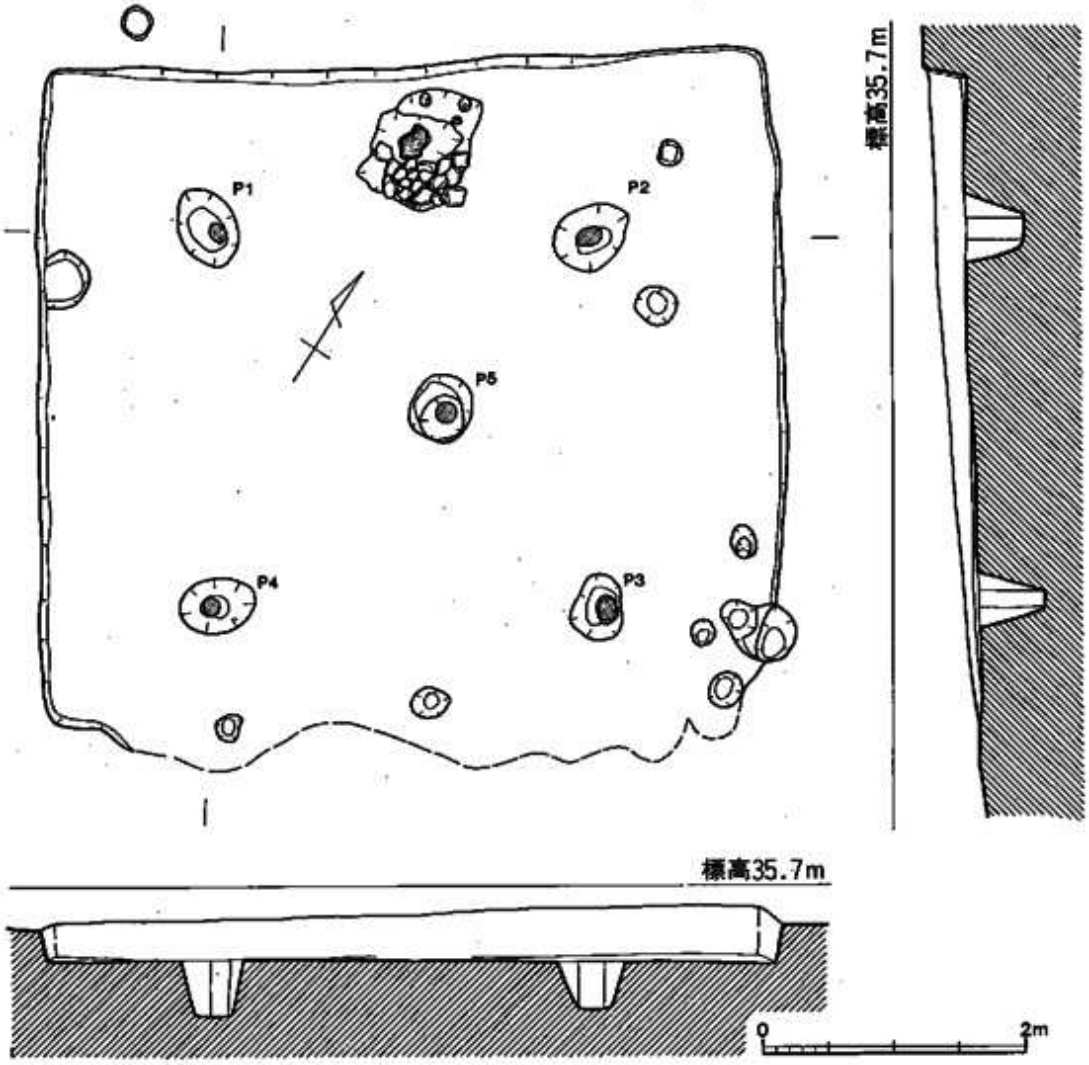
所在するところから，丘陵東斜面裾部を北区，扇状地上を南区とした。北区と南区の間は，小さな谷があり，涌き水があるらしく東側に灌漑用の菱池がある。

北区は，近世に削平をうけているが，標高35～36mの地点の現状で5°前後南傾に傾斜した地形に，竪穴住居跡2軒と不整形土壙2基及び柱穴状遺構が若干検出された。

(1) 住居跡

1号住居跡（図版1－3・2，第3・4図）

1号住居跡は，調査区南側の中央付近に検出された，全景がほゞ判明する唯一の方形竪穴住居跡である。竪穴の大きさは，中心部で南西―北東側幅が5.7m，壁面の残りがよい北西側辺で



第 3 図　1号住居跡実測図（1/60）

床面まで深さ約40cmが残っていた。北西—南東側の幅は，南東側壁が残っていないことから正確な数値を出せないが，床面が最大5.3mまで残っている。

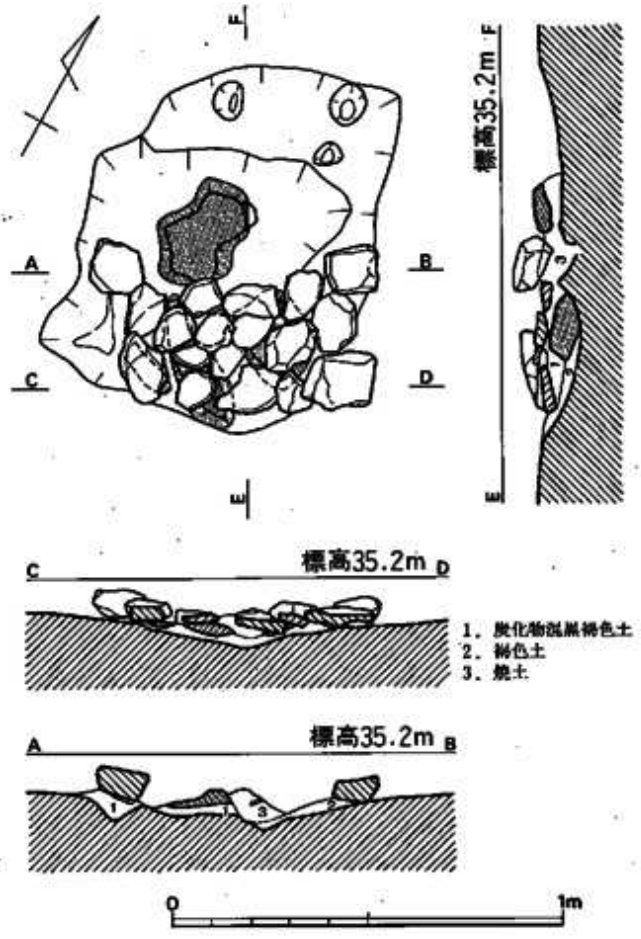
住居跡の全床面積は約29.4m²で，4主柱間内の面積が8.4m²の広さとなる。主柱穴の大きさや柱間は，表1のとおりである。床面のほゞ中央に位置するP5は，他のP1～P4と同じ状態で検出されたので，本住居跡に関連する柱穴と思われる。P1～P4に囲まれた範囲は，土間のように床が硬くなっていたが，特別に貼床したものでないようだ。床面や外部の周辺にあるピットは，住居跡との関連など不明。たゞ，P30～P32は，1号住居跡より古い柱穴である。

表1　1号住居跡柱穴関係計測表　単位cm

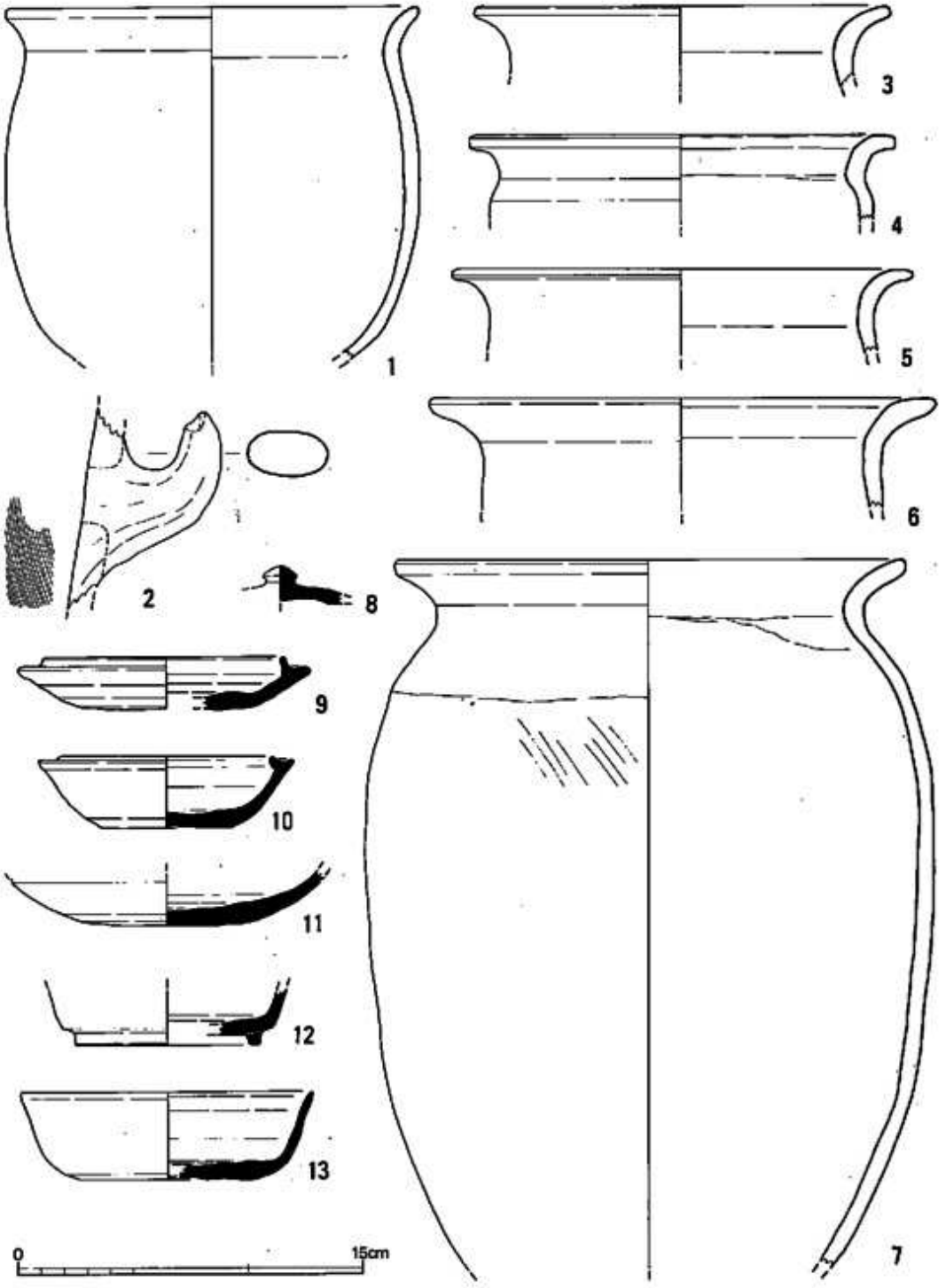
柱穴	P1	P2	P3	P4	P5
穴径	66×44	62×47	50×40	59×43	52×46
穴深	44.9	43.4	32.8	58.3	46.8
柱径	16×13	20×15	20×15	15	16
柱間距離	P1－P2 286	P3－P4 306	P1－P4 288	P2－P3 288	P1－P3 416
柱間距離	P2－P4 410	P1－P5 225	P2－P5 175	P3－P5 195	P4－P5 237

カマド状遺構は，住居跡の北西壁の中央にある。遺構は，壁に近接して主軸をほゞ南北に掘られた舟底状の不整長方形プランを呈し，中に径10cm前後の大きさの板石が並ぶ。板石は現状で敷石状に並ぶが，土壙中央付近で浮いた状態となり，敷石の上下に硬く焼き締った焼土が不規則に存在する。敷石の全面が若干火を受けた痕跡があるが，土壙の床面は焼けていない。住居跡の位置関係からカマドの役目を持つと思われるが，支脚や煙道は検出できなかった。舟底状土壙の大きさは，径95×75cm，深さ10cm前後である。

1号住居跡出土土器（図版4－2－12，第5図）　1号住居跡からは，若干の須恵器・土師器・土錘の破片が出土した。



第4図　1号住居跡カマド実測図（1/20）



第 5 図　1号住居跡出土土器実測図（1/3）

土師器（1～7）　土師器のうち1はカマド内，2～6が住居跡内埋土，7が住居跡外だが北東壁に接して表土直下から出土した。

1は小型甕で，胎土に石英粒などの粗砂粒を多く含み，外面が2次的に焼けて茶褐色，内面が黒褐色を呈する。外面は荒れて調整不明だが，内面はナデ調整されている。2は甑の把手と思われ，器体に挿入されている。内外面共に黄褐色であるが，内部が黒色となっている。胎土に粗砂粒や赤褐色粒を含み，内面に位置部ハケ目調整痕が残っている。3～6は中型長胴甕の口縁部の細片である。4点共に多少なり粗砂粒を含むが6が他より多く，5に赤褐色粒，6に金雲母が若干含まれている。全て調整不明。

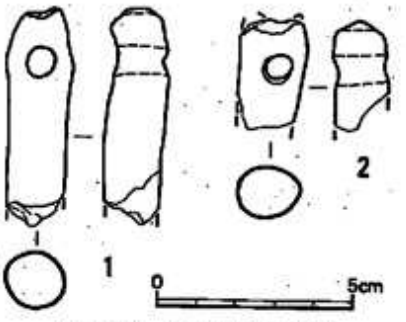
7は中型長胴甕で，外面に荒いハケ目，内面にケズリ痕が一部で見られる。外面は黄褐色，内面が橙褐色で，胎土に粗砂粒と赤褐色粒を含む。

須恵器（8～13）　10は床面出土で，他が住居跡内埋土に含まれていた破片。8は宝珠摘み蓋で，外面がヨコナデ，内面にナデ調整がある。胎土には，粗砂粒と黒色粒を多く含む。9は直径10.3cmで蓋の可能性が強い。口縁部周辺はヨコナデ，底外面に回転ヘラケズリ，内面ナデ調整がある。10は，内面と外面の上半がヨコナデ，外面の底部付近が回転ヘラケズリ。底部外面は，ヘラ切り離しのままであるが，一部にヘラ記号らしき直線が残る。胎土には細砂しか含まず，手触り滑らかである。11も蓋の可能性があるが，直径が大きくなりそうであることと，破片端部に沈線らしきものがあることから一応底部とした。底部内外面にナデ，体部内外面にヨコナデが残っている。胎土に粗砂を若干含むが，器面は滑らか。

12は，底部内外面にナデ，他がヨコナデ調整。胎土は，細砂と細黒色粒を多く含むが，焼成も堅固で，表面も滑らか。外面のみ灰黒色で他は灰色を呈する。13は杯身で，底部外面がヘラ切り離し，その外廻りのみヘラ削り，内面中央付近がナデ，他がヨコナデ調整。胎土に黒色粒を含み，全体に灰褐色を呈する。

以上の須恵器の年代は，床面の出土である10が6世紀末頃，8・9・11が7世紀前半代，12・13が8世紀後半代となることから，住居跡の年代が8世紀後半以前で，8～11の須恵器片は混入品となろう。

土　錘（第6図）　破片が2個あるが接合できない。粘土棒の両端に各1個の円孔を貫通させる型式。円孔は，製作時に直径6.5mmの棒を貫通させて製作したらしく，棒を引き抜く際に粘土棒先端が反対方向に曲ったらしい。1の現状の長さ5.6cm，体部径1.5cmの大きさで，重さ12.6g。端部は意識的に窄めてあり，1は沈線状，2が丸味をもっており，錘として使用する際に紐を掛けるものと思われる。胎土に角閃石や粗砂を含み，

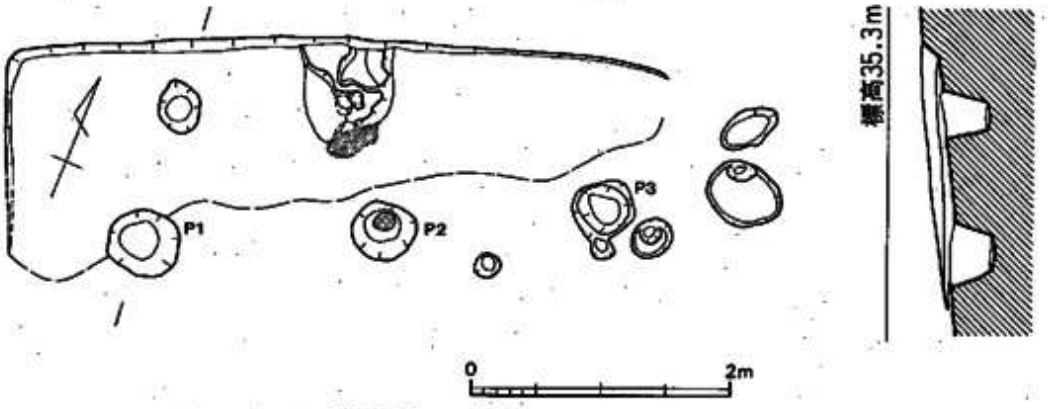


第 6 図　土錘実測図（1/2）

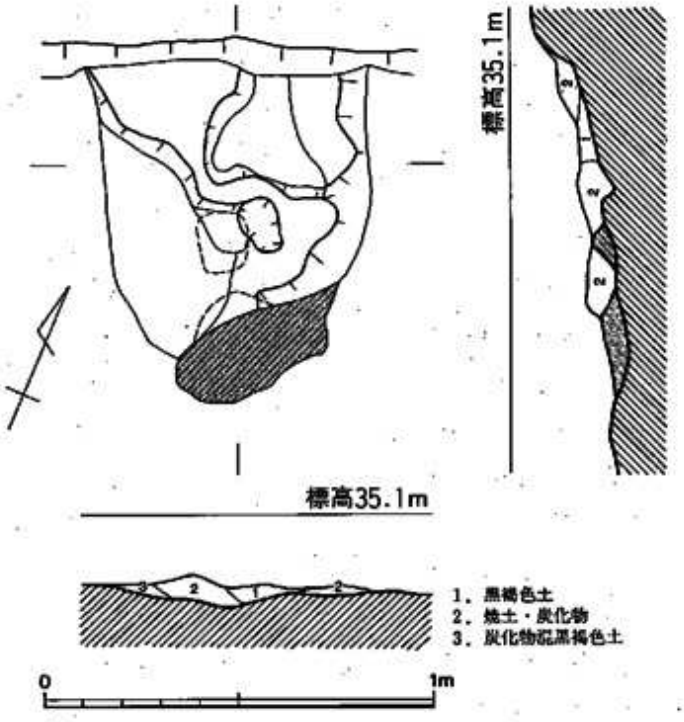
器面に多数の小さな亀列を生じている。

2号住居跡（図版3－1，第7・8図）

2号住居跡は，調査区の南端で検出されたが，大半がすでに削平されていた。住居跡は，北側壁と西側壁の一部及びカマドを残していた。住居跡の大きさは，北壁から東西幅が径5.1mとなるが，他は不明。柱穴もP1～P3は検出されたが，深さはP1が36.6cm，P2が23.4cm，P3



第7図　2号住居跡実測図（1/60）



第8図　2号住居跡カマド実測図（1/20）

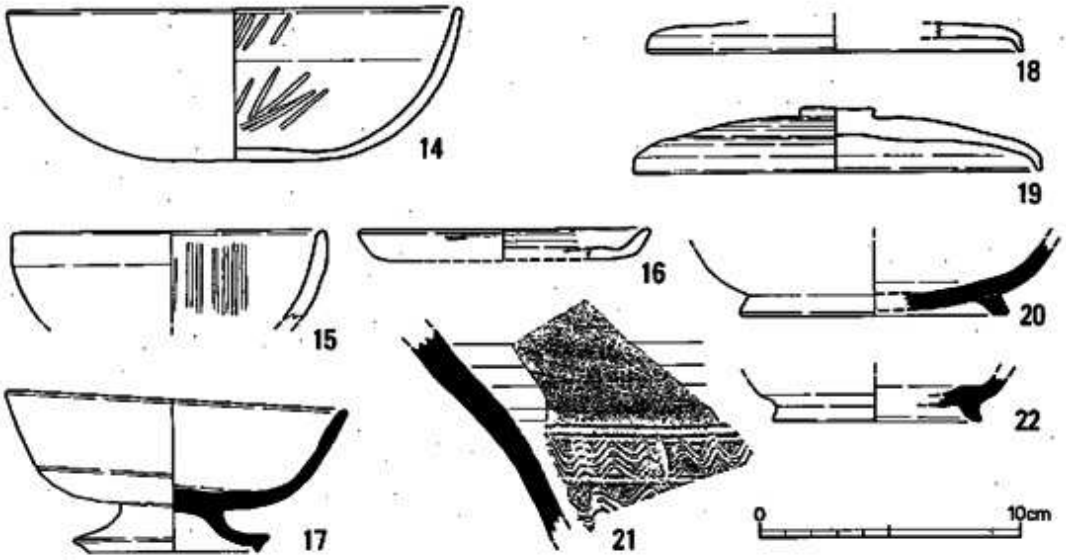
が37.1cmと浅い柱穴であるが，P1とP3が主柱穴となろう。

カマドは北壁の中央部にあるが，破壊され旧状が不明である。支脚穴らしきものの痕跡が中央に残っていたが，北壁にも煙道は検出できなかった。

2号住居跡出土土器（図版4－2－14・17，第9図14～16）

2号住居跡からは，土師器椀・須恵器高杯及び後の混入品の土師皿が出土した。14はカマド，17が床面，15・16が埋土から出土した。

1は内面にヘラ描き暗文を施こす，橙褐色の土師器椀。



第 9 図　北区出土土器実測図（1/3）

直径約17.5cm，高さ5.9cmの大きさで，割合薄手の作り。胎土に粗砂粒・赤褐色粒・金雲母を含む。15は細片であるため，直径12cm以上となり，内側に暗文を施こすことが判明するのみ。器壁は割合厚手で，胎土に赤褐色粒・金雲母を含む。

17は短脚の須恵器高杯で，脚部が台状に低い。杯部径13.2cm，器高6.4cm，脚裾径7.5cm，脚高1.9cmの大きさ。杯部底内面はナデ，底外面付近に回転ヘラケズリ，その他の部分がヨコナデ調整となっている。この高杯の特徴は，短脚であること意外に杯部外面の沈線状の段と脚端部の摘み出しにある。胎土に細気胞が目立ち，全体に青灰色を呈する。本遺跡唯一の完形に近い土器である。16は直径11.2cm，器高1.2cmの黒色土師皿。内外面にヨコ方向のミガキあり。

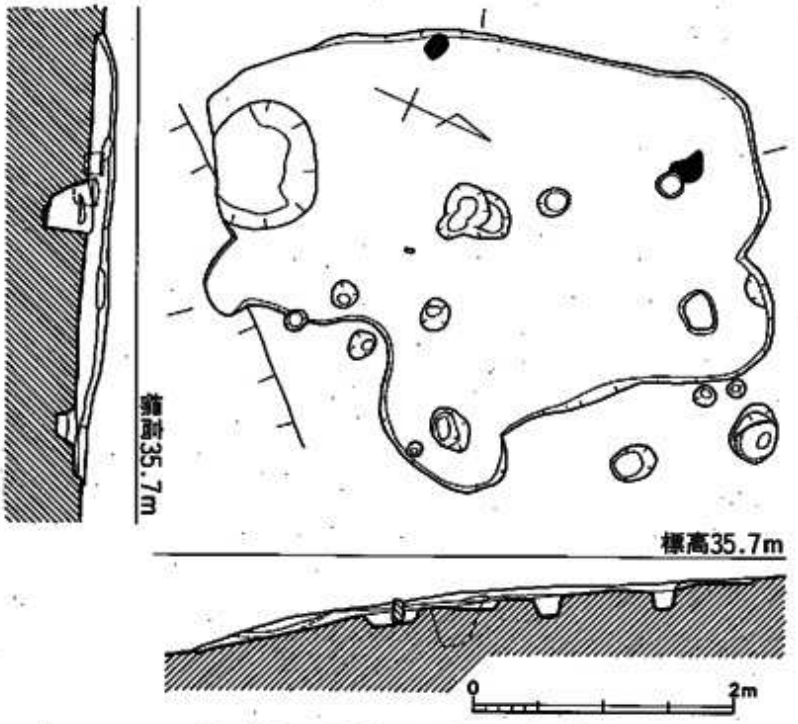
2号住居跡は14・15・17の土器から7世紀後半頃と思われ，16が10世紀頃の混入品である。

(2) 不整形土壙

北区では土壙状遺構が多数あるが，出土品のあるもののうち，大型の遺構を1・2号不整形土壙として説明する。

1号不整形土壙（図版3－3，第10図）

調査区の南東端で検出され，当初3号住居跡として調査を始めたが，床面が平坦でないことと，主柱穴やカマドがないことから1号不整形土壙に変更した。南北幅約4.4m，東西幅約2.4mの大きさの不整長方形を呈する。床面の北半では，住居跡の床面らしく硬く締った部分もあり，焼土や炭化物も検出された。床面の中央付近にピットが集中し，長さ15cm程の立石もあること



第 10 図　1号不整形土壙実測図（1/60）

から，住居跡に近い作業場状の遺構と思われるが，土器以外の出土品がなく性格は不明。

1号不整形土壙出土土器（図版4－19，第9図18・19）　土器は細片ばかりで，図示できたのは須恵器を模倣した土師器蓋2点である。他に土師器中型甕・甑・椀・須恵器杯身・大甕の細片が若干ある。

18は調整不明であるが，同心円状の痕跡があるところからロクロで製作したことは確実。胎土に石英の粗粒を含み，全体に灰黄色を呈する。19は，摘みと口唇部がヨコナデ，他の外面が回転ケズリ，内面が不明。胎土に，大粒の石英や角閃石を多く含み，外面が黄褐色，内面が灰黄色を呈する。

1号不整形土壙は，出土土器から8世紀前半頃に破棄されたものと思われる。

2号不整形土壙（図版4－1，第11図）

遺構は，調査区西側中央の1号住居跡西側近くで検出された。遺構の形態は，主軸をほゞ南北に向けた細長い舟底状の両側に，耳状の平坦部を設けたもので，中心部のピットと南側が深くなっている。遺構内からは，土器片など年代の判明する出土品がないが，北端でカマドの袖ぶらしき焼けた粘土塊と中央部上層から焼土が出土した。焼けた粘土塊は，カマドの焚口の裾らしく，僅かにアーチ状を呈し，表面に整形痕を残している。大きさは，南北全長5m，北側幅

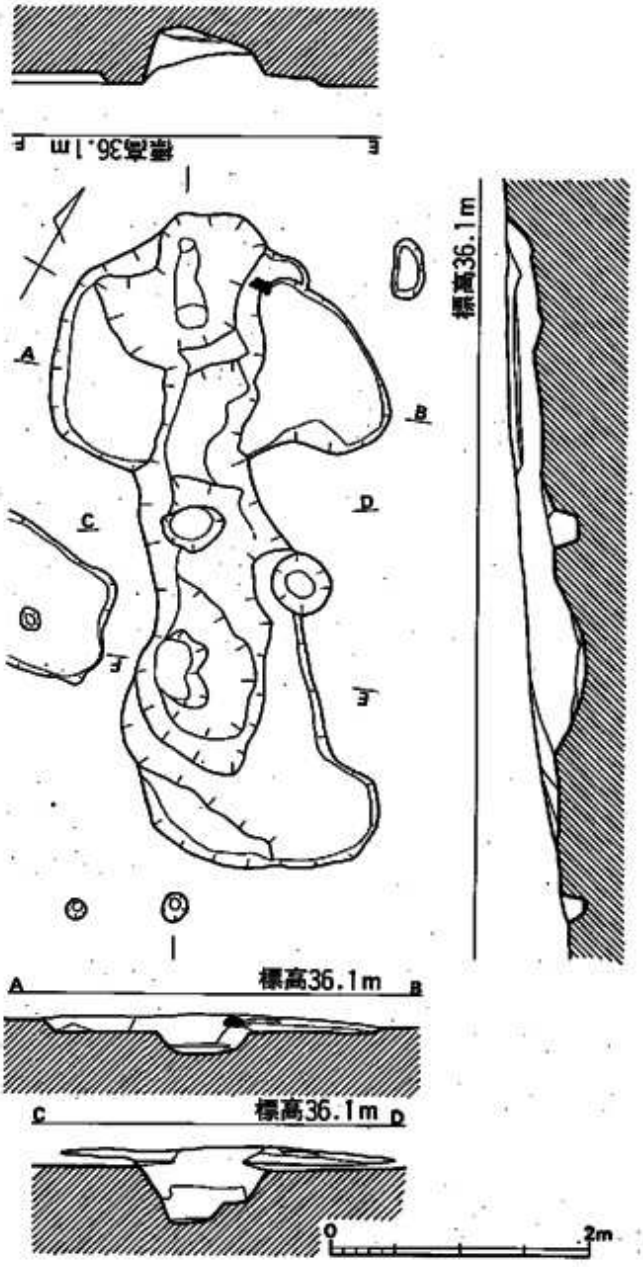
2.6m，中央幅0.9m，南側最大幅1.8m。深さは，北側中心部27cm，耳部約5～8cm，中央部ピット45cm，南側中心部42cmとなっている。遺構は，何らかの工房の可能性もあるが，カマドらしき残骸と焼土しかなく，壁面も焼けていないので不明遺構とせざるを得ない。

(3) その他の遺構と遺物
(第9図20～22)

北区には，竪穴住居跡と不整形土壙として説明した以外に，小型の不整形土壙やピットが若干ある。これらからは若干の土器細片が出土しているが，実測可能な土器が僅かにP15とP32から出土しているだけである。

P15は，1号不整形土壙の東側にあり，4つのピットが重複している可能性があるが，ピット群中で最も多く土器片が出土した。

P15からは，土師器中型甕・須恵器杯身・大甕などの破片が出土している。20は高台付杯身で底部内面にナデ，外面が回転ヘラケズリ，高台と体部にヨコナデ調整。胎土には黒色粒を多く含み，全体に灰色を呈する。21は須恵器大甕の肩部片である。外面には，沈線の後に櫛描波状文を2段に施こす。外面上部はヨコナデ，内面にナデの上に指紋を残す。胎土に含まれる砂粒は小さく，全体に灰色を呈する。P15の土器の年代は，8世紀前半頃か。



第11図　2号不整形土壙実測図 (1/60)

P30～P32は，1号住居跡の北西壁と重複して検出された割合大きな柱穴である。これら3個

の柱穴は1号住居跡より古く掘込まれているが，他に関連する柱穴を検出できなかった。柱穴の大きさは，P30～P32の順に径60cm・52cm・52cm，深さ77cm・78cm・80cm，柱径22cm・不明・18cmの規模である。P32から実測可能な須恵高台付杯身細片が出土した（21）。胎土に黒色粒を含む。P32出土の土器の年代は，8世紀前半頃か。

以上北区の住居跡は7世紀後半と8世紀後半と時期差がある。不整形土壙とピットが8世紀前半であるから，7世紀後半から8世紀後半まで継続して遺構が存在することになる。さらに1号住居跡内の混入土器として，6世紀末と7世紀前半の時期のものがあるところから，この時期の遺構の存在の可能性がある。

4　南区の遺構と遺物（図版5～8，第12～19図）

南区は，標高33.5m前後の地点に位置し，周辺や遺構の残り具合から見ても，全体に削平されているようだ。南区の北東側の半分以上が完全に削平され，遺構が検出できなかったことから，遺構は田の上段に当る南西側のさらに南東側に集中している。なお，調査区を横断して耕作用道路があり，これを境に遺構の性格と残存状況が違うことから，南区をさらに南北に区分して，南区北と南区南とよぶことにする。

(1)不整形土壙と長方形土壙（図版6・7，第13～17図）

南区北では，不整形土壙が5基検出されたが，調査時に長方形ぎみの土壙を長方形土壙として区別して土器を取上げたところから，そのまゝの呼び名をする。

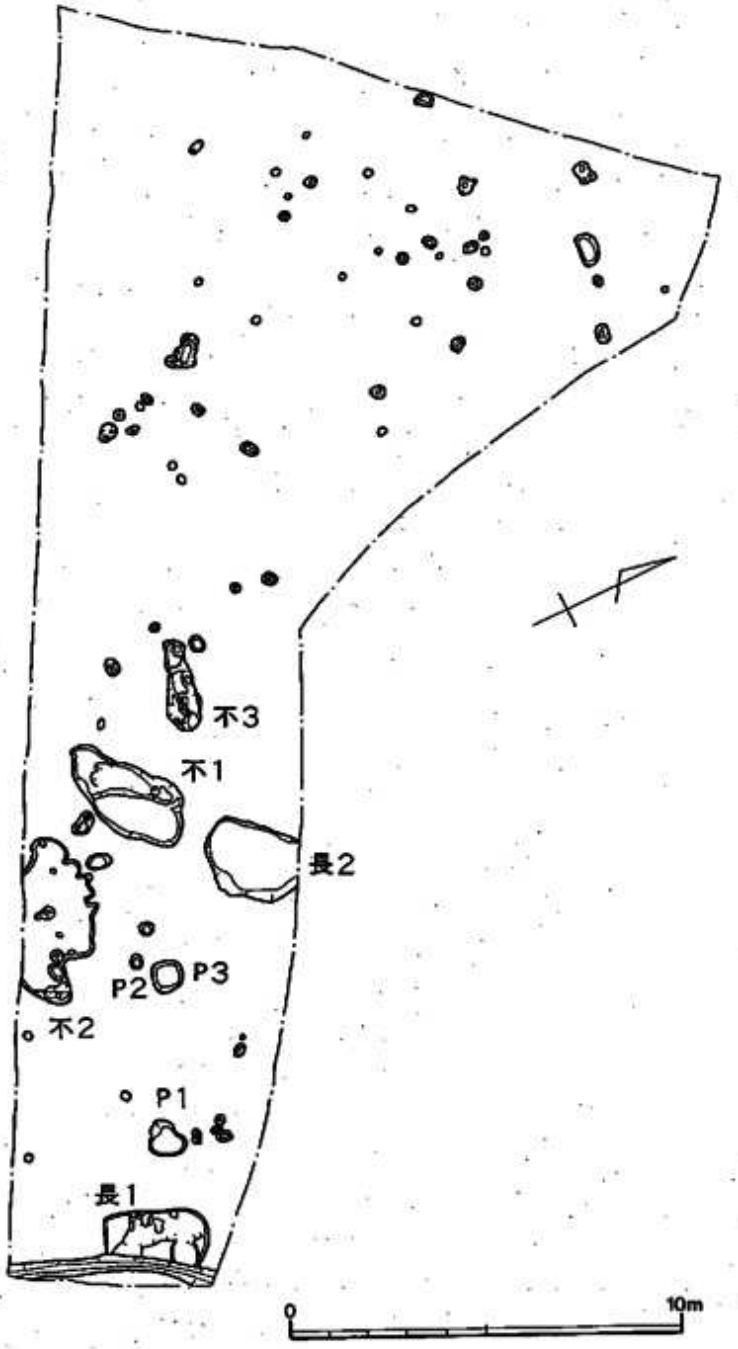
1号不整形土壙（図版6－1，第13図）

南区北調査区の中央よりやゝ南で検出された舟底状土壙。長径3.5m，最大幅1.64m，深さが東側で10cm前後，西側で15～22cmの規模。土壙内から土器や自然石と共に焼土や炭化物が多く出土することから，廃棄物を焼却した穴と思われる。

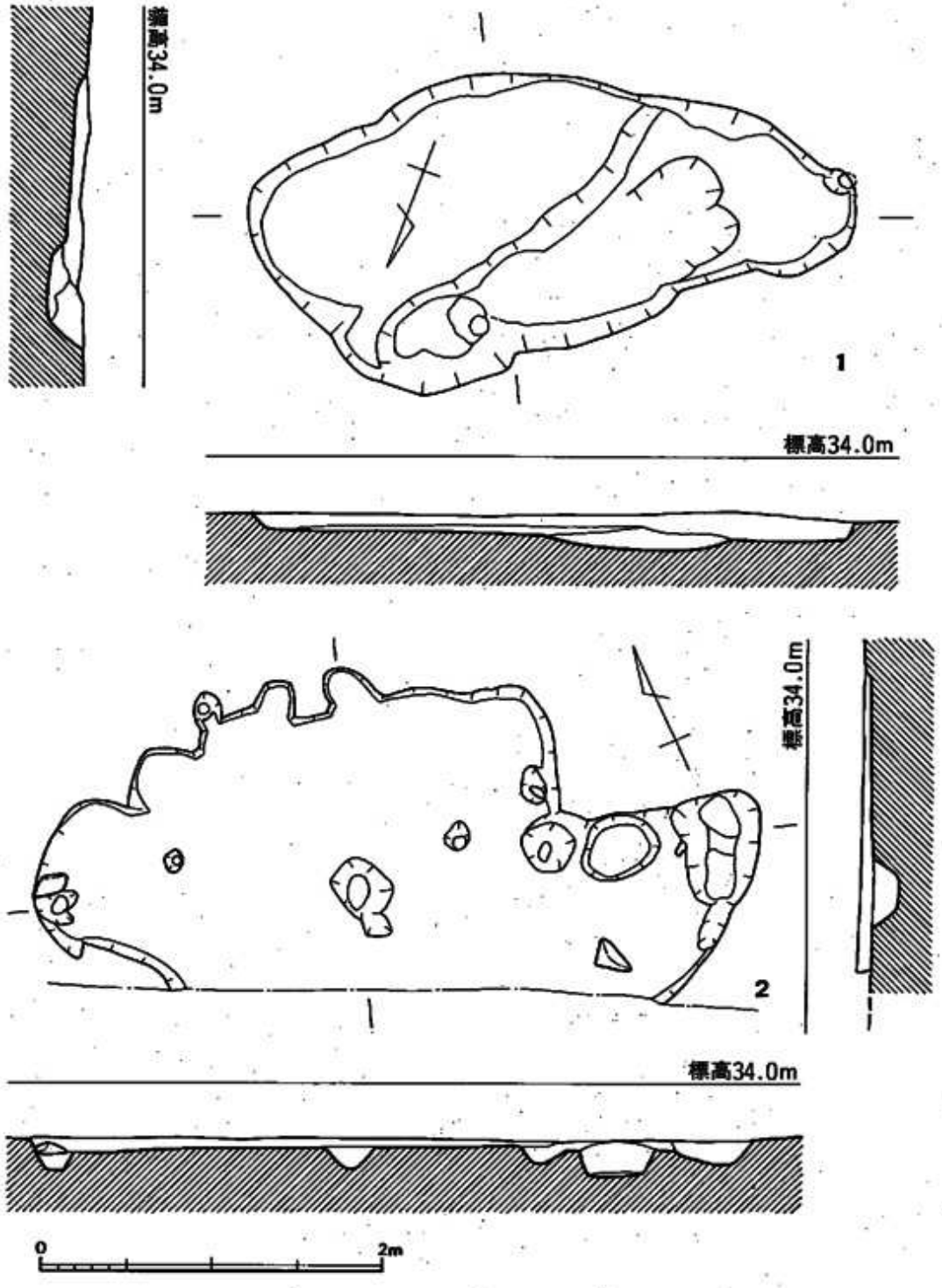
1号不整形土壙出土土器（図版8－1－12・13，第14図）

1号不整形土壙は，調査区内の遺構の中で最も多く土器片が出土した。出土土器は，土師椀・土師杯・土師中型甕・須恵杯蓋・須恵杯身・須恵甕がある。

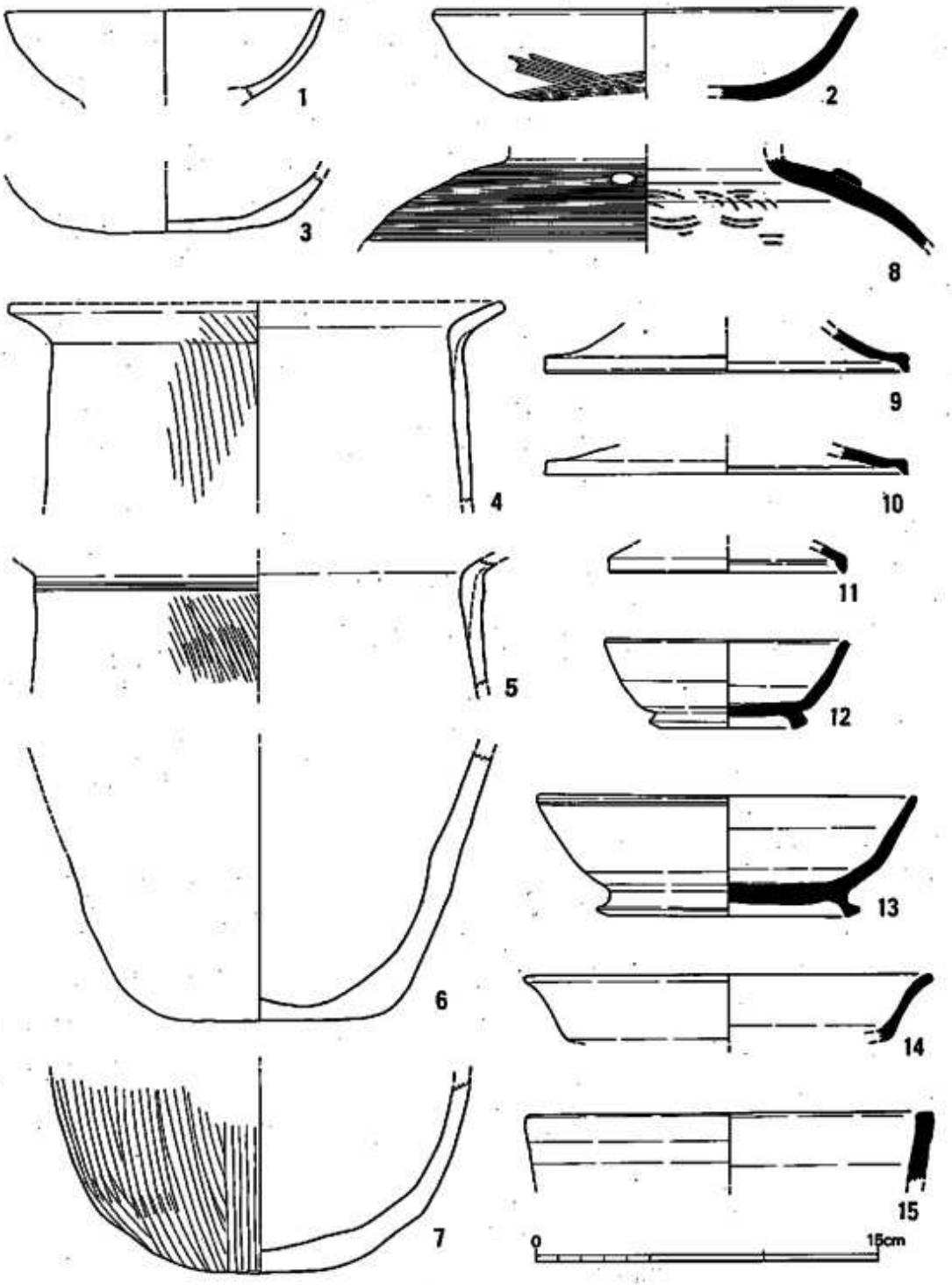
1は高台が付くと思われる土師椀。調整不明で，胎土に黒色粒を含み，灰黄色と灰褐色を呈する。口径14cmの大きさ。2は口径18.6cmの大型杯身。外面の一部にヘラミガキ痕が残る外は調整法不明。3は壺の底部と思われ，外面に沈線状の段を有する。調整法は不明で，胎土に赤褐色粒や角閃石を含む。全体に2次的な火を受けている。4・5は中型甕で，口縁部が割合直



第 12 図　日奈古・寺尾遺跡南区北遺構配置図（1/200）



第 13 図　1・2号不整形土壙実測図（1/40）



第 14 図　1号不整形土壙出土土器実測図 (1/3)

線的に屈曲する。外面胴部に粗ハケ目が残るが，他は不明。両方共に胎土に赤褐色粒と角閃石を含む。6と7は中型甕の底部で，6が平底で7が丸底。6は風化が著しく調整不明で，胎土に大粒の砂を多く含む。7は外面の底部近くまで粗ハケ目調整，胎土に大粒の砂を多く含む。

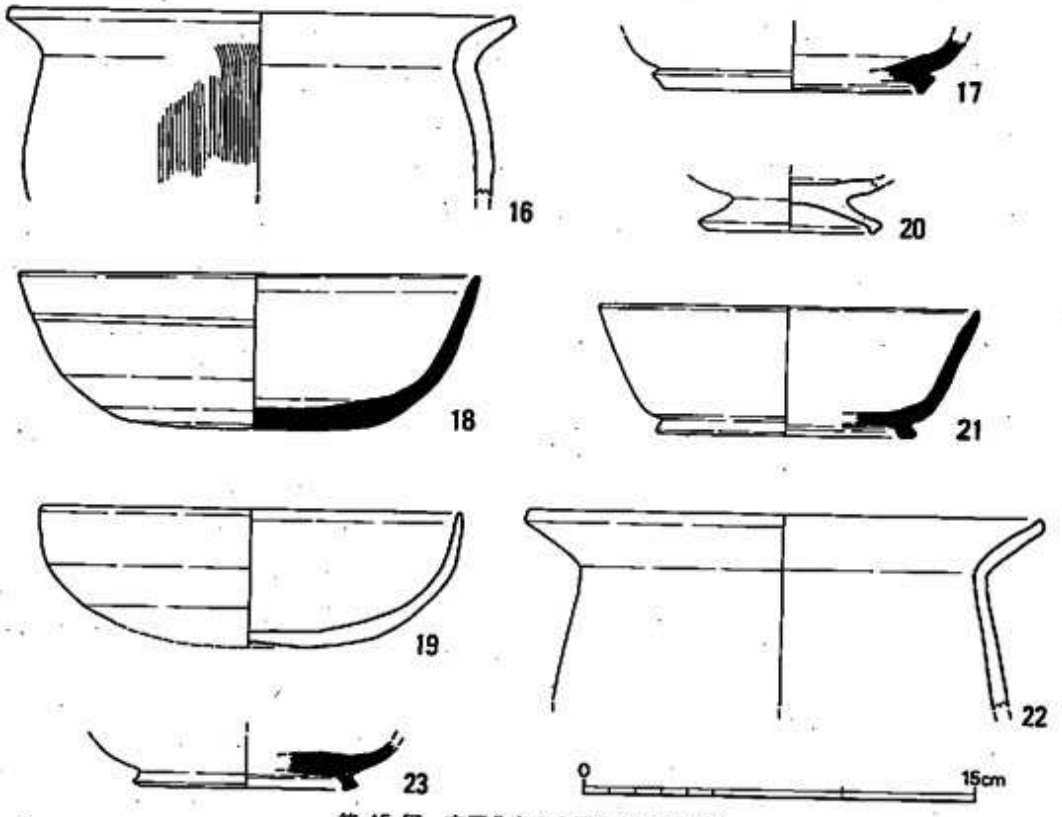
8～15は須恵器である。8は大甕の肩部で，外面がカキ目調整の後に，円形付文を貼付けている。内面は同心円文タタキの後にヨコナデ調整されている。胎土に黒色粒を多く含み，外面が自然釉で灰黒色，内面が灰色である。

9～11は杯蓋で，9・10が16cm，11が10.4cmの大きさ。胎土には3点共に黒色粒を僅かに含む。口唇部の特徴も3点共通している。

12・13は杯身で，12が10.7cm，13が16.7cmの口径をしている。口径の大きな13は，口縁端外側に沈線をめぐらし，高台も12より多少高い。両方共胎土に黒色粒を若干含み，灰色を呈するが，12の外面に一部灰黒色の部分がある。

14は口径18cmで，外反する口縁と皿が屈曲することから高杯と思われる。内外共にヨコナデ調整で，胎土に黒色粒を含み灰色を呈する。

15は直口壺の破片と思われるが，細片であることから確証でない。全面ヨコナデ調整で，先端がわずかに窪む。胎土に黒色粒を含み，灰色から灰黒色を呈する。



第15図　南区北出土土器実測図（1/3）

1号不整形土甕出土の土器の年代は，須恵器から7世紀後半頃と思われる。

2号不整形土壙（図版6－2，第13図）

調査区の南東側南端で検出され，一部が調査区外にのびる。遺構の大きさは，長径4.25m，最大幅1.8m，深さ5cm前後の割合平坦なもので，集落周辺にある窪みといったところである。中からは，若干の自然石と土器細片が出土した。土器細片も窪みに流入して，窪みにたまたま残っていたというところであろう。

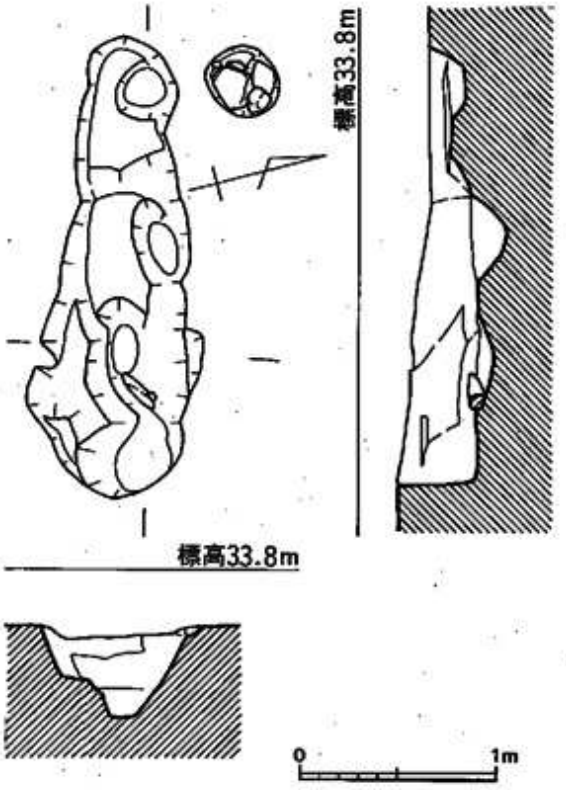
2号不整形土壙出土土器（第15図16・17）

2号不整形土壙からは，土師器中型甕・須恵器杯蓋・杯身・大甕の細片が出土しているが，図示できるのが16・17である。16の中型甕は，ゆるやかに外反する口縁先端に沈線状の窪みをもち，内面ケズり，外面ハケ目調整されている。胎土に赤褐色粒・黒色粒・角閃石・金雲母を少量含み，内外面が灰褐色，胎土内部が黒褐色と橙褐色を呈する。17の高台付杯身は，黒色粒を若干含む，灰色の軟質焼の須恵器。時期は，須恵器から7世紀後半頃か。

3号不整形土壙（第16図）

調査区のほぼ中央付近で検出された，南区北調査区の中では深く残っていた遺構。遺構は，ピットが縦列して重複した形態の土壙である。大きさは，長2.36m，最大幅0.85mで，中央付近の深いピットで47cm，平坦部で32cm，西端で9cm，東端で42cmの深さがある。出土遺物なく，時期不明。

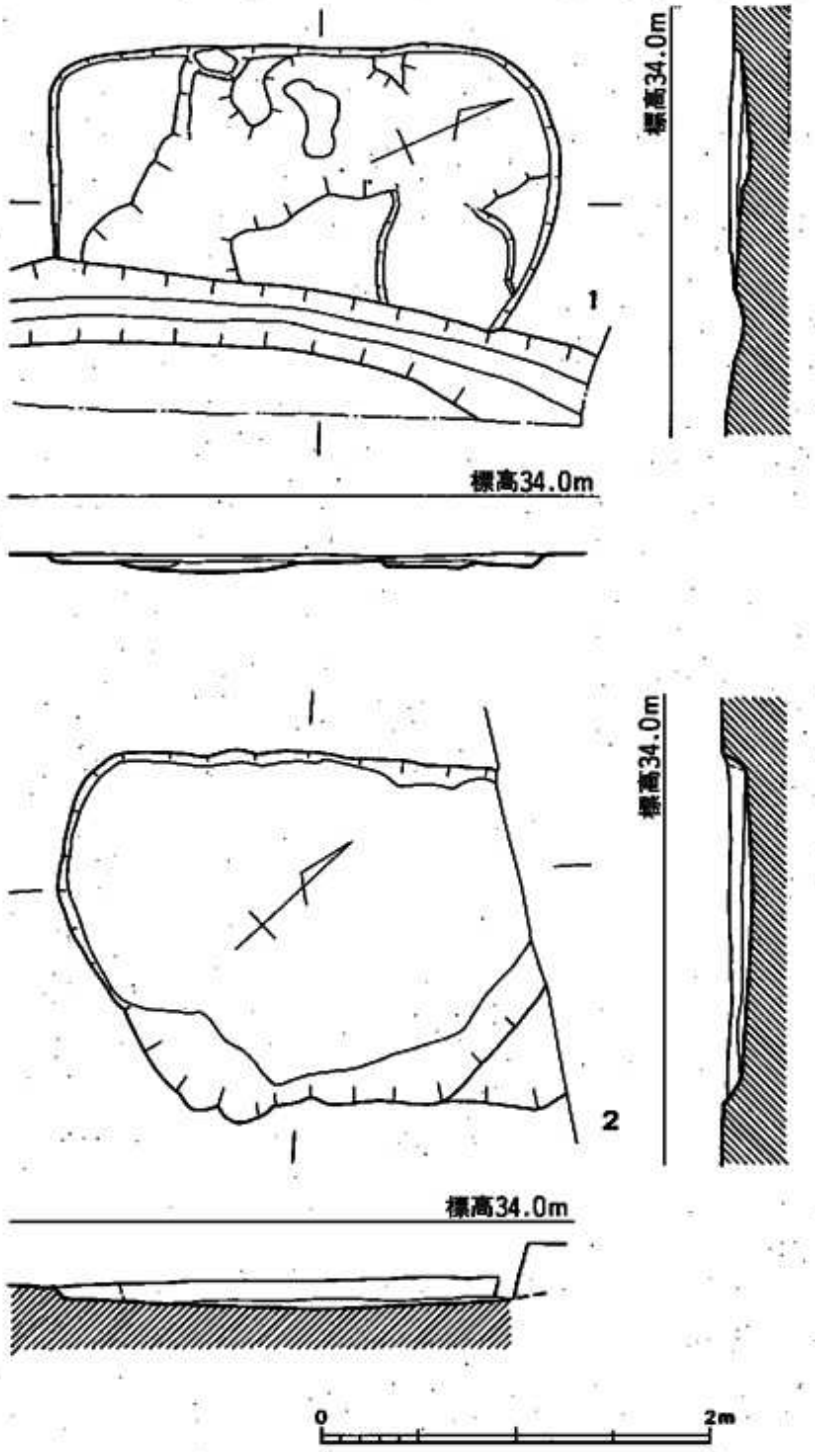
遺構の北西側に，直径39×34cm，深さ8cmの浅いピットに自然石が詰ったものがあるが，関連は不明。



第16図　3号不整形土壙実測図（1/40）

1号長方形土壙（図版7－1，第17図1）

調査区の南東端で検出され，南東側を現代の小溝によって破壊されている。長方形土壙としたが，北東辺が丸く弧を描く。大きさは，長径2.6m，最大幅1.45m，深さ



第 17 図　1・2号長方形土壙実測図 (1/40)

3～10cmの土壙。土壙は，中央付近が多少深くなり，床面が不規則であり，中から土器片や焼土と若干の自然石が出土した。

1号長方形土壙出土土器（図版8－1－18・19・21，第15図18～21）

1号不整形土壙からは，土師器中型甕・高台付椀・須恵器高台付杯身・杯蓋・椀・高杯などが出土しているが，図示できるのが18～21である。18は須恵器椀で，口径17.7cm，器高6cmの大きさ。外面に沈線1条をめぐらし，底部外面回転ヘラケズリ，内面がナデ調整。胎土に角閃石と白色混合物あり，全体に灰色を呈する軟質の焼上がり。

19は土師器椀で，口径16.1cm，器高5.3cmの大きさ。全体に風化し，胎土に大粒の砂と赤褐色粒を含み，橙褐色を呈する。20は須恵器模倣の土師器台付杯の台部片。全体に調整が不明で，胎土に角閃石と褐色粒を少量含み，表面が黄褐色，内部が橙褐色を呈する。

21は須恵器高台は付杯で，口径14.6cm，器高5cmの大きさ。胎土師器に黒色粒を多く含み，全体に灰色を呈する。

1号長方形土壙出土土器は，7世紀後半から8世紀前半の時期が含まれている。

2号長方形土壙（図版7－2，第17図2）

調査区の北東端で，1号不整形土壙と縦列する位置から検出された。土壙は，北東側が調査区外に残り，北西辺と南東辺に直線部があるが，不整長方形とでもしておく。土壙の大きさは，最大長約2.7m，幅1.7m，深さ7～14cmの規模。土壙は床面が平坦で，中から若干の土器片や自然石と焼土が床面から浮いて出土した。

2号長方形土壙出土土器（第15図22）　2号長方形土壙からは，土師器甕・須恵器甕・壺などの細片が出土した。22は唯一図示できる土師器甕であるが，全面風化し調整法不明。胎土に角閃石と赤褐色粒を若干含み，橙褐色を呈するが，この土器片のみ古い可能性がある。

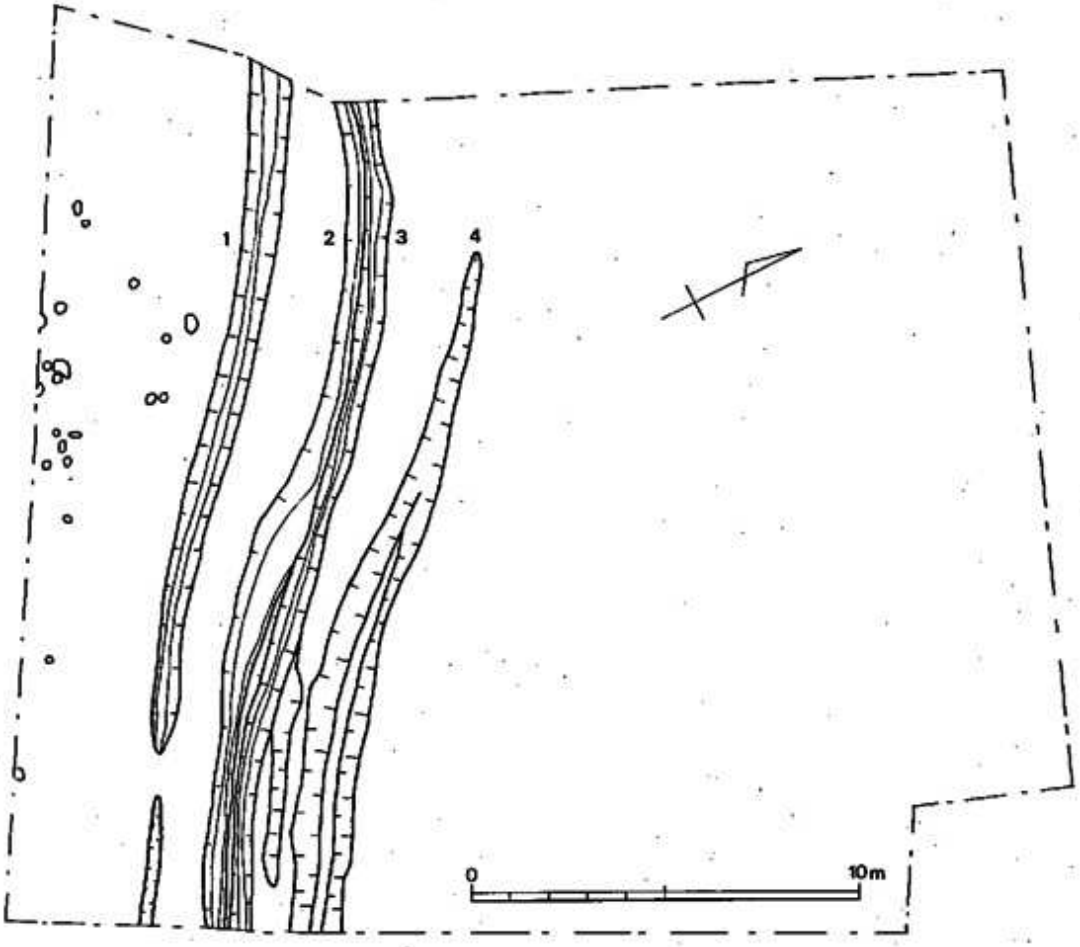
南区北調査区では，不整形土壙や長方形土壙以外に若干のピットがあり，少量の土器細片が出土している。P1（第12図）は，1号長方形土壙の北西側で検出され，直径92×95cm，深さ9cmの浅い穴で，土師器甕・椀・須恵器甕・高台付杯の細片が若干出土した。23は須恵器高台付杯身で，胎土に少量の赤褐色粒を含み，全体に灰色を呈する。

P2は，2号不整形土壙の北東側にある，径35×25cm，深さ36cmの小さなピットであるが，須恵器大甕片が出土している。

P3は，P2の北東側にある78×75cm，深さ12cmの隅丸方形の浅い穴であるが，床面に炭化層があり，炉的な役目があったろう。中から焼土塊と土器極細片が出土しただけ。

(2)　溝状遺構（図版8－2，第18・19図）

南区南調査区では，北西から南東に流れる小溝4条と溝の南西側の1段高い地区に若干のピ



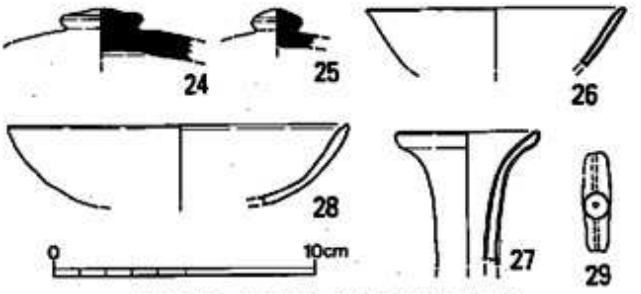
第 18 図　日奈古・寺尾遺跡南区南遺構配置図（1/200）

ットを検出した。溝４条は，現在の田区画に沿って伸びており，田区画の時期的移動を示すものであろう。溝は，南西側から北東側へ１～４の番号を付した。

溝　1　最も西南側にある最大幅約１m，深さ17cmの小溝で，中に小石と土器細片が含まれていた。土器は土師器甕・須恵器甕・高台付杯身・杯蓋などや焼けた土粘塊があるが，若干破片が摩滅していることから，第19図24・25以後の時期としかわからない。

溝　2　この溝を境にして地山の高さが北東側が低くなり，一部に石垣状の塊石が残っていた。出土品の中には，８世紀前後の摩滅した土師器や須恵器もあるが，26の14世紀の白磁や青磁細片と共に，溝の北西側で近世の陶磁片（27）も僅かに含まれている。

溝　3　溝2に北西側で重複し，溝3の時期に溝2の北西側に石垣を築いたらしく，溝3は溝2より新しい。溝3は，溝2の北西側と同じ近世の陶器片と土錘が含まれていた。



第 19 図　南区南出土土器実測図（1/3）

溝　4　溝4は，最も北東側にかろうじて検出された溝である。出土品はなし。

第19図28は，表土直下で出土した土師皿で風化して調整不明。

溝は，1・2・3の順に掘り直されて，田の区画が移動したことになる。

5．小　結

日奈古・寺尾遺跡の調査は，遺構の保存状態の悪い地区であることから，遺跡の性格を述べることがむずかしい。遺構としては，竪穴住居跡と廃棄物の焼却場と思われる不整形土壙であり，集落の一部であることが確実である。遺構の時期は，7世紀後半から8世紀後半であったが，北調査区の住居跡などに混入していた土器に6世紀末や7世紀前半の時期があり，この時期から集落が形成されていたであろう。

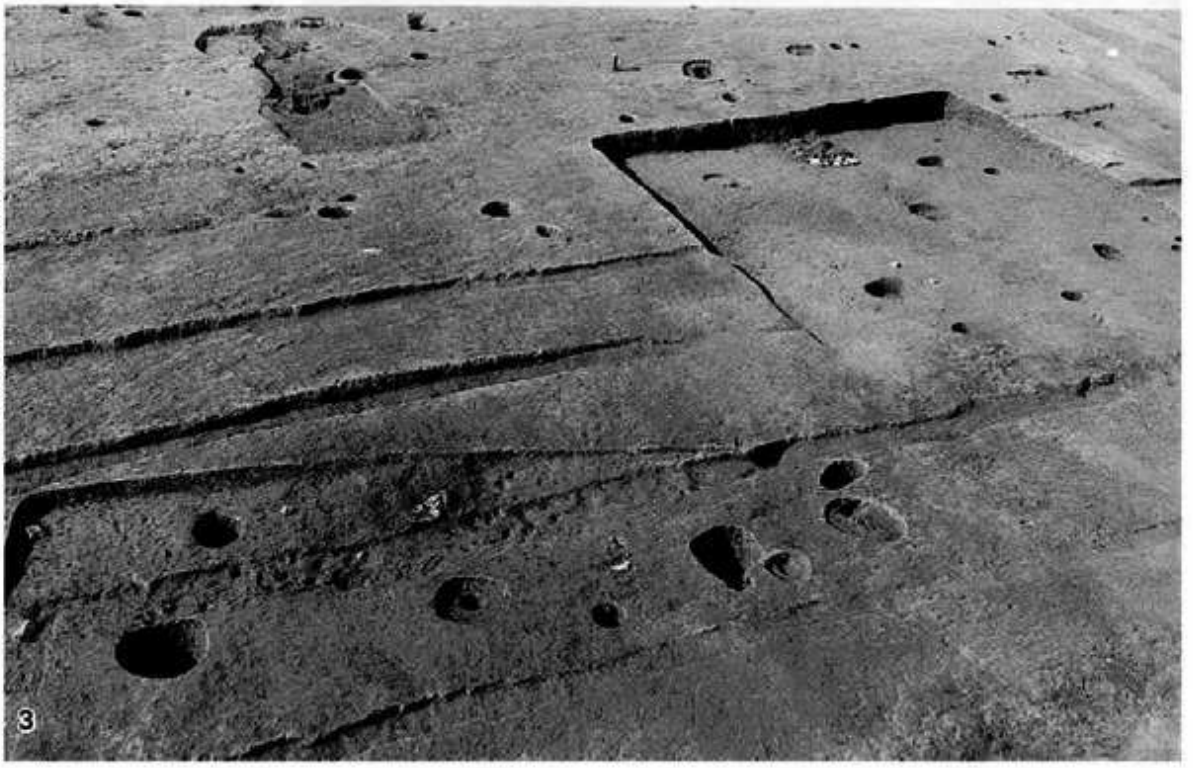
さらに，南区南調査区で14世紀の青白磁もあることや，現在の集落に残る石塔からも集落の継続が予想される。（柳田）

図　版

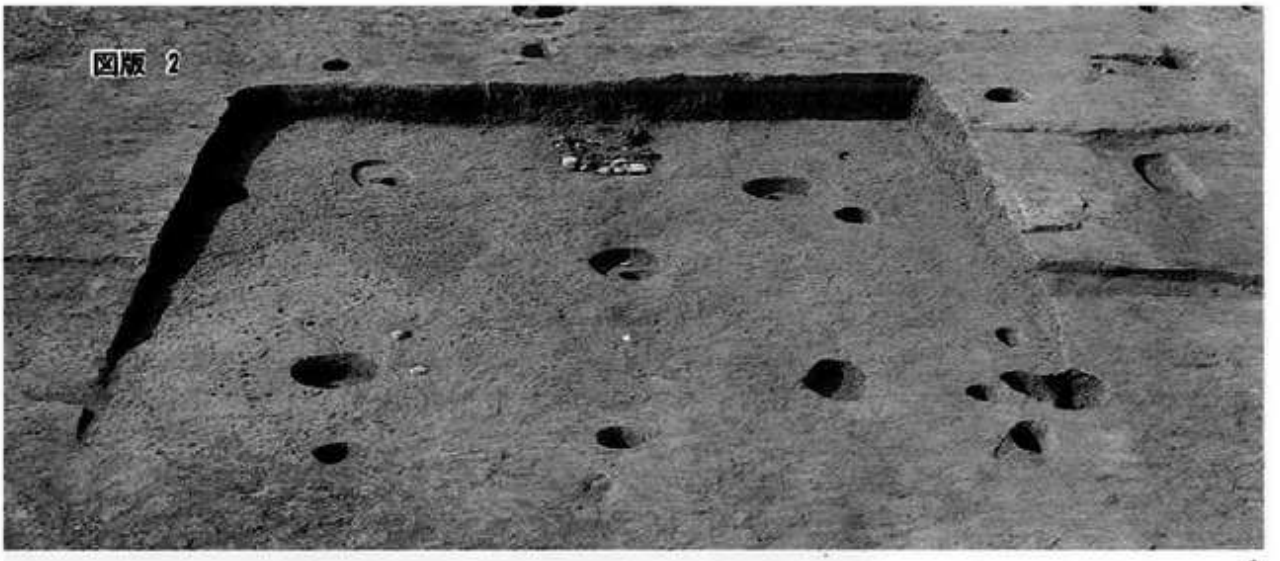
図版 1

1 日奈古・寺尾遺跡北区全景（南から）

2 北区全景（東から）



3 1・2号住居跡・2号不整形土壙



1

2

3

1　北区1号住居跡　　2　1号住居跡カマド　　3　カマド下部敷石

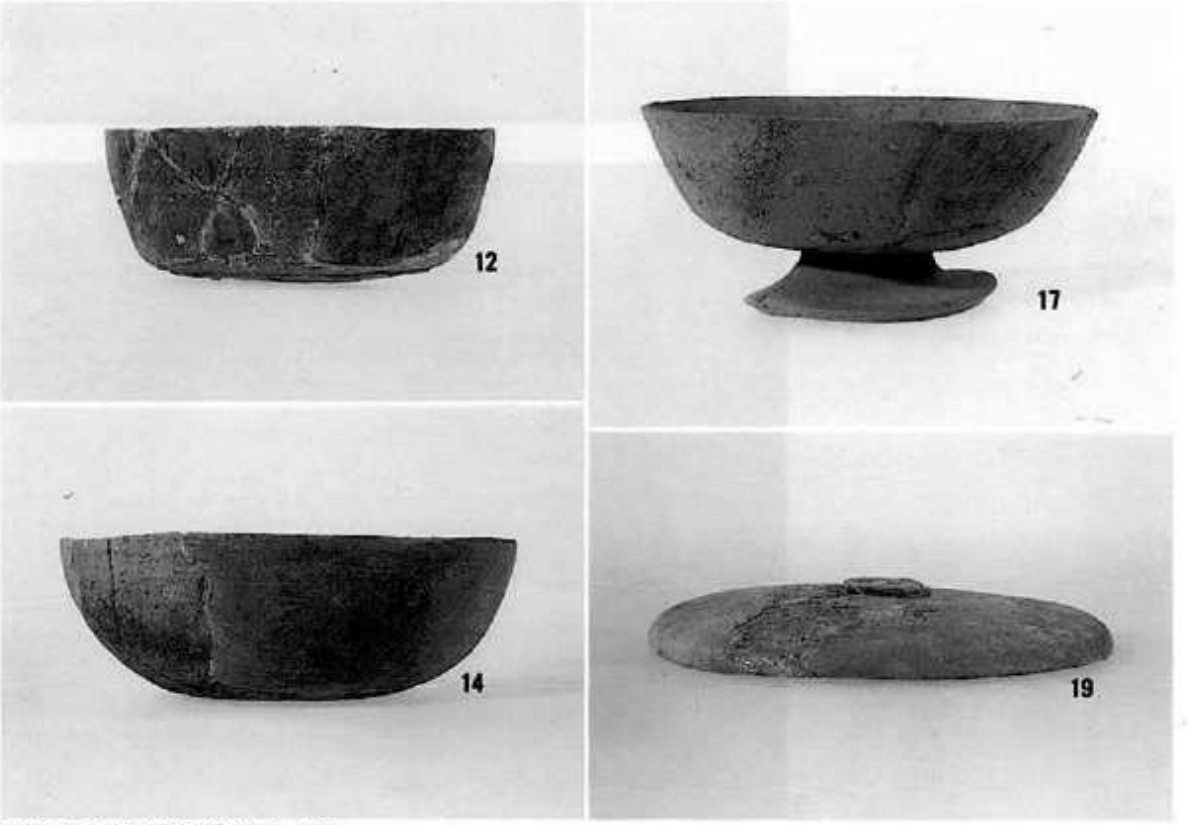
1

2

3

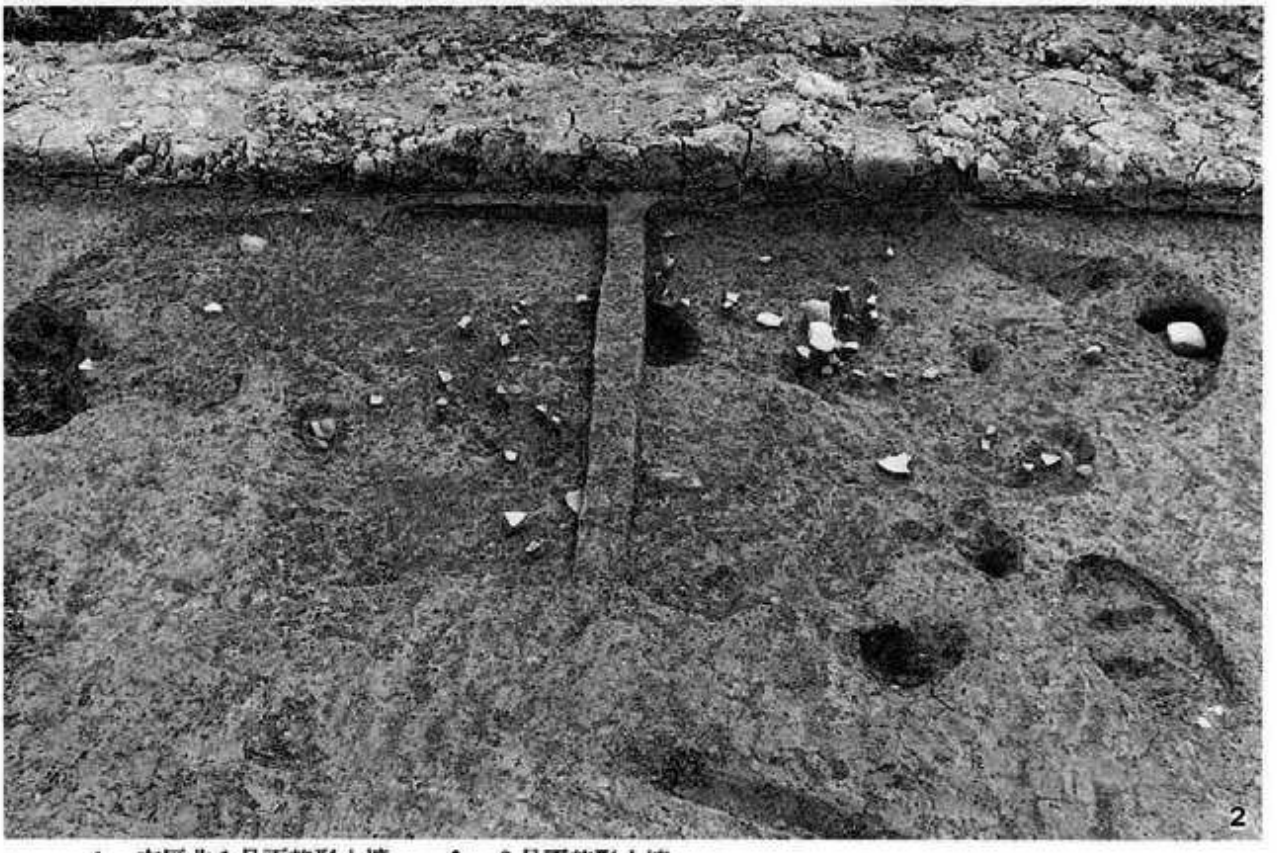
1　北区2号住居跡　　2　1号住居跡カマドと柱穴　　3　1号不整形土壙

北区2号不整形土壙



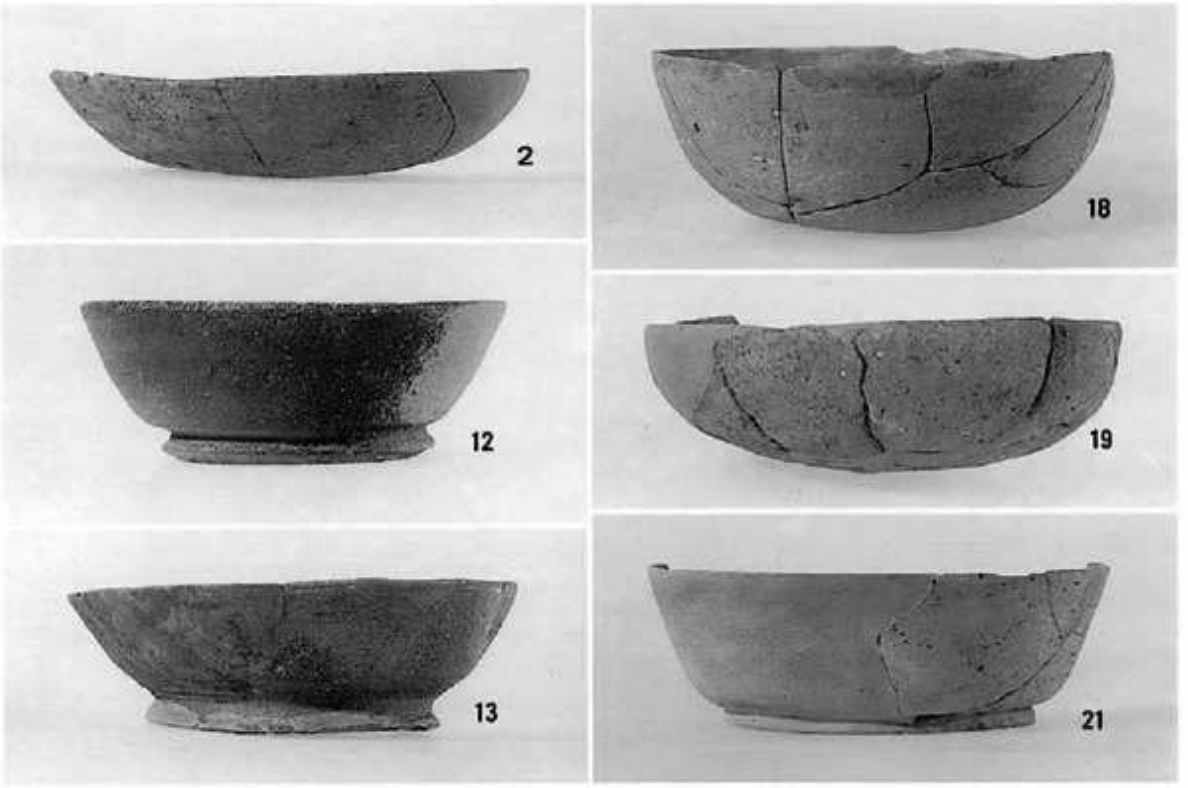
日奈古・寺尾遺跡北区出土土器

1　日奈古・寺尾遺跡南区全景　　2　南区北土壙群（東から）　　3　南区北土壙群（北から）



1　南区北1号不整形土壙　　2　2号不整形土壙

1　南区北1号長方形土壙　　2　2号長方形土壙



1　日奈古・寺尾遺跡北区出土土器　　2　南区南溝群（北から）

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 H3	登録番号 7

椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告－7－
下巻

平成4年 3 月 31 日

発行　福岡県教育委員会

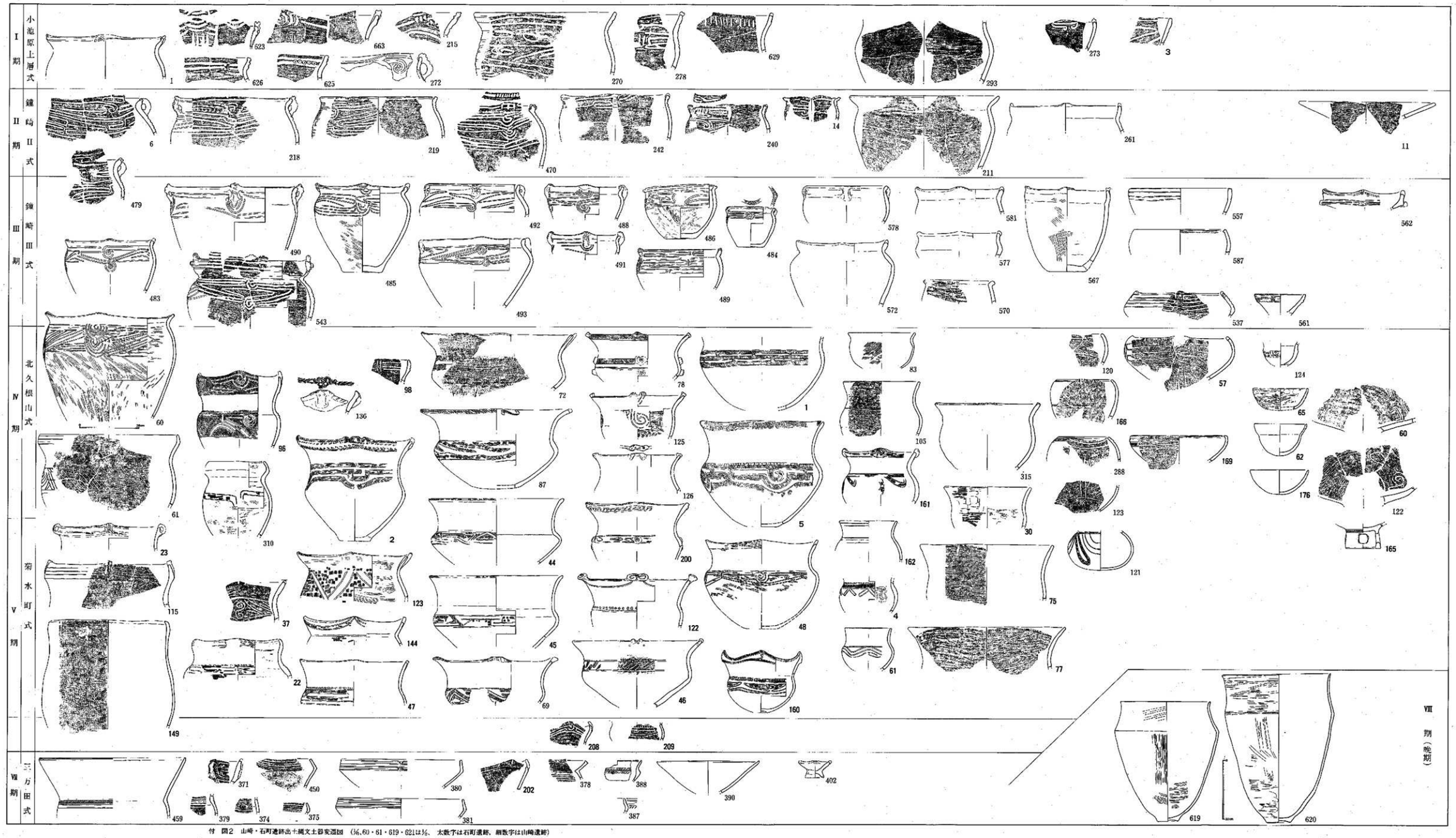
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　株式会社西日本新聞印刷

福岡市中央区天神1丁目4番1号

付図１　山崎遺跡遺構配置図(1/300)
付図２　山崎・石町遺跡出土縄文土器変遷図

付 図1 山崎遺跡遺構配置図（1/300）



付 図2 山崎・石町遺跡出土縄文土器実測図 (1/4、60・61・619・621は1/6、太数字は石町遺跡、細数字は山崎遺跡)